

博士学位論文（東京外国語大学）  
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	佐藤貴之
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 225 号
学位授与の日付	2017 年 3 月 12 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	同伴者作家 B・ピリニャーク作品の革命表象に関する研究——文明の黄昏に咲いたロシア文化の花——

Name	Satoh, Takayuki
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 225
Date	March 12, 2017
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Study of Revolutionary Presentation in the Works of B. Pilnyak, a Fellow Traveler Writer: A Blossom of Russian Culture in the Twilight of Civilization

同伴者作家 B・ピリニャーク作品の革命表象に関する研究  
——文明の黄昏に咲いたロシア文化の花——

佐藤貴之

## 目次

序論	・ ・ ・ 3 p.
1. 十月革命とピリニャーク	・ ・ ・ 13 p.
1-1. 革命前におけるピリニャークの創作	・ ・ ・ 13 p.
1-2. ソ連におけるシュペングラーの歴史哲学受容について	・ ・ ・ 29 p.
1-2-1. ソビエト文学と『西洋の没落』	・ ・ ・ 43 p.
1-2-2. トルストイのシュペングラー・テキスト：亡命をめぐる 思惑と駆け引き	・ ・ ・ 47 p.
1-2-3. 『西洋の没落』、あるいは逆行する歴史の針	・ ・ ・ 64 p.
2. ロシア文化の源流を求める「スキタイ人」の芸術運動	・ ・ ・ 83 p.
2-1. 「スキタイ人」としてのピリニャーク	・ ・ ・ 89 p.
2-2-1. スキタイ主義と十月革命	・ ・ ・ 96 p.
2-2-2. 始原力とは何か	・ ・ ・ 99 p.
2-2-3. 内なる東洋をめぐる論争	・ ・ ・ 114 p.
2-3. アンチ・ペテルブルグ・テキストの誕生	・ ・ ・ 126 p.
3. ソビエト文明の夜明け前	・ ・ ・ 149 p.
3-1. 足早に訪れた創作の危機	・ ・ ・ 149 p.
3-2. 「機械」と「狼」の間で	・ ・ ・ 158 p.
3-3-1. 革命の終わりと新たな始原力の探求	・ ・ ・ 169 p.
3-3-2. 始原力の探求と『日本印象記』	・ ・ ・ 174 p.
3-4-1. 贖罪として書かれた『赤のソルモヴォ』	・ ・ ・ 189 p.
3-4-2. 「偉大なる転換」とソビエト文明の夜明け	・ ・ ・ 197 p.
結論	・ ・ ・ 222 p.
参考文献	・ ・ ・ 225 p.

## 序論

ロシアは東洋であり、同時に西洋でもある。ピョートル大帝の治世以降、ロシア社会は西欧諸国の文物を盛んに受容し、絶え間ない西欧化を経験してきた。日本にとってのロシアは紛れもなく西欧であり、明治日本の岩倉使節団が帝政ロシアをも視察したことはその証左である。それと同時に、ロシアは十三世紀にジュベ、スプタイ將軍麾下のモンゴル軍にカルカ河畔の戦いで大敗を喫して以来、アジアによる長い支配の歴史を持つ。周知のとおり、タタール・モンゴル軍は中世ロシアの町を次々と破壊し、その財産を略奪したほか、モンゴルのハンに対して年貢を納めることを封建諸侯に義務付けた。

タタール・モンゴルが中世ロシアにもたらした破壊・略奪の事実は疑うべくもないが、その支配がロシア史に与えた影響の賛否はこれまで喧々諤々と議論されてきた。この歴史を否定的に解釈した例として、C・ソロヴィヨフやB・クリュチェフスキイといった国家学派の歴史家はアジアによる支配を通して、ロシアは西欧社会の後塵を拝す形になったと考えた。この視点はやがて通説化し、ソ連時代の百科事典を開くと、「タタール・モンゴルの軛」は中世ロシアの優れた社会的・経済的基盤を破壊し、その後の発展を阻害した歴史として紹介されている。

それに対し、ロシアの専制政治はタタール・モンゴルの支配がもたらした肯定的要素という見方も根強い。<sup>1</sup> H・カラムジンの大著『ロシア史』（1816-1829）を紐解くと、タタール・モンゴルの支配時代に定着した専制政治こそが「ロシアの運命にとっては偉大な恩恵」となったとする歴史観が認められる。<sup>2</sup> こうした見方はその後も一部の歴史家たちに継承されていた。その例として、二十世紀前半の亡命ロシアで起こったユーラシア主義の思想活動では、タタール・モンゴルによる支配こそがロシアの国家的基盤を形成したと肯定的に評価されている。特に軍事、行政、財政、交通、刑法などの分野でタタール・モンゴルの国体はロシア国の形成に甚大な影響を与えたと考えられている。

タタール・モンゴルによる支配が与えた影響は議論を呼んだが、二世紀半にわたる支配の歴史が拭いがたい東洋的特徴をロシア文化に植え付けたことは確かである。結果的にロシアは多くの点で西洋と東洋を内に宿した大国となり、「狂人」の汚名を受けたH・チャアダ

---

1. 栗生沢猛夫『タタールのくびき——ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会、2007年、359頁。

2. См.: Карамзин Н.М. История Государства Российского в 12 т. СПб., 1892. Т. 5. С. 231.

ーエフがその『哲学書簡』(1836)でもって祖国の歴史的な不毛性を赤裸々に批判してからというもの、帝政ロシアの教養社会はスラヴ派と西欧派の二大派閥に分裂し、常に「ロシア性」の内実を探求する宿命を受けた。そして 1917 年の十月革命という歴史の大転換は、「西か東か」の文化的パラダイムを再考させる展望をインテリゲンツィヤに用意した。その中でも「革命の同伴者作家」と呼ばれたボリス・ピリニャークの作品世界は、革命後の文壇で生じた歴史哲学上の議論を色濃く反映しており、東西の間で揺れ動くロシアの文化的アイデンティティを探るうえで重要な視点を提示している。

今日となっては想像も難しいが、ピリニャークはロシア革命後の文壇で指導的立場にあった作家である。ピリニャークは 1915 年に小説家として活動を開始、1918 年と 1920 年にはそれぞれ作品集『最後の汽船とともに』と『草』をモスクワで出版した。その名を広く知らしめたのは十月革命を扱ったロシア文学最初の長編小説『裸の年』(執筆は 1920 年)である。ロシアの国内外で出版されたこの前衛作品はピリニャークを文壇の寵児にした。その後の代表作は実験的な手法を駆使し、文明と自然の対立を描いた難解な長編小説『機械と狼』(1925)で、本邦では川端香男里、工藤正広の名訳で知られている。しかし、1926 年に「新時代」誌から問題作『消されない月の話』(赤軍司令官 M・フルンゼの急死をスターリンによる暗殺と仄めかした作品)が発表されると、ピリニャークの作家人生は大きな岐路に立たされた。作品が掲載された「新時代」の五月号は販売禁止に追い込まれ、ピリニャークの名はその年の文壇から消失した。しかし、作家は社会的に謝罪することで活動再開が許され、次々と作品を主要な文芸誌から発表し、1929 年 4 月には全露作家同盟のモスクワ支部議長に任命された。ピリニャークは再び文壇の指導的立場に返り咲いたかと思われたが、同年にベルリンの出版社「ペトロポリス」から E・ザミャーチン<sup>3</sup>の小説『われら』とピリニャークの小説『マホガニー』が出版されると、反ソ行為との批判が文壇の左派から相次ぎ、それは全国的な追放運動に発展、両作家は作家同盟からの退陣を迫られる。ザミャーチンは亡命の道を選んだが、ピリニャークは『マホガニー』を『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』という名で書き換えて作家としての再起を図った。しかし、いずれの試みも名誉挽回には遠く、1937

---

<sup>3</sup> ザミャーチンはピリニャークと深い交流があった作家である。両作家ともスターリン時代に弾圧の対象となった。ピリニャークは粛清され、ザミャーチンは亡命ロシアを選んだ。両作家の親交については次の文献が詳しい。См.: Андроникашвили-Пильняк Б. Два изгоя, два мученика: Борис Пильняк и Евгений Замятин // Знамя. 1994. № 9. С. 123-153.

年 10 月 28 日に作家はトロツキスト、及び日本軍のスパイ容疑で逮捕、ルビャンカの地下牢に投獄された。そして肅清の嵐が吹き荒れる 1938 年、ピリニャークは軍法会議で極刑判決を受け、即日のうちに刑は執行された（4 月 21 日）。

ピリニャークはロシア・アヴァンギャルドの芸術家たちが新世界建設の熱狂に沸いているさなか、ロシア文化の源流を求めて近代化以前のユーラシア大陸を探索した作家である。本論で検証する通り、ピリニャークは欧米諸国に始まり、中東、中央アジア、東アジアを訪れたほか、調査隊の一員として幾度も北極大陸に足を踏み入れた。作家が営んだ創作生活の根底には文化的アイデンティティの飽くなき探求心が見られるが、ピリニャークの越境は、他者の鏡に映る自らの文化を確認するための探求であったかもしれない。「ロシア性」の探求へと作家を駆り立てた衝動の源流はその複雑な文化的・歴史的環境にあるといえよう。ピリニャークは「木こり」を意味する村「プィリニャンカ」（現在のウクライナ、ハリコフ州）から派生した言葉で、これは作家のペンネームである。ボリスの本姓はドイツ系の<sup>ヴォガウ</sup>Wogau で、作家はヴォルガ・ドイツ人の末裔であった。

ヴォルガ・ドイツ人とは十八世紀後半に海路でペテルブルグへ到着し、ヴォルガ川沿いの都市（サラトフ、アストラハンなど）に入植したドイツ系住民のことである。1762 年に時の皇帝エカチェリーナ二世は布告「ユダヤ人を除く外国人がロシアに入国して居住する許可について、ならびに国外逃亡中のロシア人が祖国に自由に帰還することについて」に署名し、外国人を誘致するとともに、亡命していた臣民に恩赦を与えて帰国を認めた。その結果、1763 年から 1766 年の間でロシアに移住したドイツ人の数は三万人を超えるといわれている。<sup>4</sup>ヴォルガ・ドイツ人の歴史は帝政ロシアの領土拡大と密接な関係にある。周知のとおり、「タタール・モンゴルの軛」から解放されて以来、帝政ロシアは南方と東方へ領土を拡大したが、そうした辺境の地域には先住民が暮らしていた。特にロシア南部一帯は騎馬民族の襲撃を受ける地域だったため、帝政ロシアはこの一帯に要塞機能を兼ね備えた近代都市を建設する必要に迫られた。そこで皇帝は「未開」の土地を祖国の領土として確保するため、移民を活用するという手段を選んだ。領主、および国家に対する忠誠心の篤いドイツ系住民は、帝政ロシアの国家安全保障と領土の固定化を約束するうえでこの上なく適した人材であった。まさにヴォルガ・ドイツ人は、「放置されている土地を労働によって開拓して文明

---

<sup>4</sup> A・ゲルマン（鈴木健夫、半谷史郎訳）『ヴォルガ・ドイツ人：知られざるロシアの歴史』彩流社、2008 年、40 頁。

の息吹を吹き込む」開拓民だったといえる。<sup>5</sup>ヴォルガ・ドイツ人は中央アジアに跋扈した騎馬民族やプガチョフ反乱軍の襲撃を受け、時にはそうした異民族と混血し、ロシア人ではなく、ヴォルガ・ドイツ人としての文化的アイデンティティを保ちつつ生き抜いてきた。<sup>6</sup>

ヴォルガウが「ピリニャーク」のペンネームを使用し始めたのは第一次世界大戦中のことで、創作上の改姓にはドイツ系住民の苦悩に満ちた境遇が背景にはある。大戦下のロシアでは反独機運が強く、ドイツ系住民の多くは財産を没収されるほか、優先的に戦地へ送られるなど、排斥運動の対象になった。ロシアが1915年に対独戦線で大敗を喫すると、ドイツ系住民に対する反感はますます強まった。それと同時にヴォルガ・ドイツ人の国家的なロシア化政策が急速に推し進められた。<sup>7</sup>そして1915年12月には皇帝の勅令でヴォルガ・ドイツ人はシベリアに強制移住されることが告知された（ただし、二月革命の勃発によってロマノフ王朝は統治権を失い、この計画は実行に移されなかった）。<sup>8</sup> 苦難を強いられていたヴォルガ・ドイツ人が帝政ロシアの終わりを歓迎したのは歴史的必然かもしれない。ブレスト＝リトフスク条約締結後、ヴォルガ・ドイツ人は祖国ドイツへの帰国が認められ、その多くが祖国の地を踏んだ。その一方、ロシア国内に残ったドイツ系住民は急速に左翼化した。ロシア南部で内戦の嵐が吹き荒れると、ヴォルガ・ドイツ人が反革命勢力の側に転じるのを恐れ、1918年4月にモスクワの共産党幹部はヴォルガ・ドイツ人問題委員会の代表団（代表はエルンスト・レイテル）をサラトフに派遣し、ヴォルガ・ドイツ人の自治州設立を急務とした。<sup>9</sup>そして1918年10月にレーニンが「ヴォルガ・ドイツ人州設立に関するロシア・ソビエト

---

<sup>5</sup>. 前掲書、27頁。

<sup>6</sup>. ヴォルガ・ドイツ人の文化的水準はロシア系住民をはるかにしのぐものだった。国民の大半が文盲であった革命前のロシアで、ヴォルガ・ドイツ人の識字率は八割に達していたという統計も見られる（A・ゲルマン『ヴォルガ・ドイツ人』130頁）。ヴォルガ・ドイツ人はドイツ語による義務教育を行うほか、ドイツ語の新聞も出版していた。

<sup>7</sup>. その例として、エカチェリネンシュタットはエカチェリノグラード、ジーフェリベルクはセルポゴーリエ、プリュメンフェリドはツヴェートーチノエなど、ドイツ風の都市名がロシア風に改名された。そのほか、ドイツ語新聞は廃刊に追い込まれ、教育機関でドイツ語を教授することも禁止された。A・ゲルマン『ヴォルガ・ドイツ人』98頁を参照。

<sup>8</sup>. Герман А.А. Немечкая автономная на Волге: 1918-1942. Ч. 1. Саратов, 1992. С. 12.

<sup>9</sup>. Там же. С. 16. ただし、母語をドイツ語とするヴォルガ・ドイツ人にボリシェビキのプロパガ

連邦社会主義共和国人民委員会議決議」に署名し、正式にヴォルガ・ドイツ人自治州（行政の州都はエカチェリネンシュタット）が誕生した。<sup>10</sup>ピリニャークの父親アンドレイが生まれ育った町サラトフは、ヴォルガ・ドイツ人自治州の中心地であった。ドイツとの終戦を迎え、ヴォルガ・ドイツ人が次々と祖国へ舞い戻る中、ピリニャークは革命の中にロシア民族の精神的解放を感じ取り、ボリシェビキの革命を支持した。ヴォルガ・ドイツ人の末裔を父に、タタール人の血を引くロシア人女性を母に持ったピリニャークは、「ロシア性」の探求を課題とし、西洋と東洋の間で揺れ動くロシアの歴史的地平線に目を凝らした。

本論で見ていく通り、ピリニャークは「革命に対して誠実であろう」として数々の話題作を発表したが、その活動は粛清という結末で締めくくられた。そのため、ピリニャークの作品研究は政治的制約を受けることになった。ピリニャーク研究は大きく分けて(1). 同時代、(2). 「雪解け」からペレストロイカ、(3). ペレストロイカから現代の三段階に区分することができる。以下、各時期における研究の特色を俯瞰してみたい。

ピリニャーク研究の草分けといえるのがプーシキン学者B・カザンスキイとフォルマリストのЮ・トゥィニャーノフが編集した論文集『ボリス・ピリニャーク：現代文学の巨匠たち』（1928）であろう。この論集にはB・ホフマンやГ・ゴルバチョフ、H・コヴァルスキイなどの文学者が優れた論文を発表した。これらの研究はその洞察の深さにおいて今日もなおその意義を失っていない。また、同時代に執筆されたピリニャーク論の数はおびただしいが、大きく分けると左翼芸術団体とロシア・フォルマリズムの否定派、同伴者作家とA・ヴォロンスキイ率いる「峠」派の肯定派に別れる。同時代の評論はピリニャークのイデオロギー批判に終始するものが多いが、A・ヴォロンスキイ、Вяч・ポロンスキイ、B・シクロフスキイの評論は分析眼の鋭さで傑出しており、本研究でも必要に応じて参照した。

「雪解け」からペレストロイカまでに行われたピリニャーク研究は極端に少ない。スターリン時代に粛清された作家の多くと同じく、ピリニャークもまた1956年に名誉回復された

---

ンダ政策は功をなさず、ドイツ語による共産党系の新聞を発行して政治的・イデオロギー的教育を行った。

<sup>10</sup> 1922年時点の統計によれば、自治州の人口は52万7800人に達した。その民族構成はドイツ人が67.5%、ロシア人が21.1%、ウクライナ人が9.7%となっている。（A・ゲルマン『ヴォルガ・ドイツ人』120頁を参照）その後、1924年にヴォルガ・ドイツ人自治州はヴォルガ・ドイツ人自治共和国に再編され、1941年まで存続した。



が、ペレストロイカ以前はピリニャークが逮捕の直前まで書き続けた最後の長編小説『塩の蔵』が断片的に文芸誌「モスクワ」（1964、№5）から発表されたほか、わずか一冊の作品集（1976）がモスクワとレニングラードで出版されたのみである。この作品集はB・ノヴィコフの序文「ボリス・ピリニャークが辿った創作の道」<sup>11</sup>とともに発表されたが、その中でピリニャークの作家人生は「小市民的」モダニズム文学から社会主義リアリズムへの道として紹介されており、ノヴィコフに対して政治的圧力があつたことを伺わせる。加えてこの作品集には問題作の数々は含まれておらず、「雪解け」後の名誉回復は形式的なものだったというほかない。そのためか、学界の関心も低調で、K・クズネツォフ（1963）、П・パリエフスキイ（1974）、H・コジェヴニコワ（1976）、Г・ベーラヤ（1977）の研究で形式的に言及される程度で、「雪解け」以降も忘れ去られた作家という評価が適当である。その一方、欧米では盛んに研究が進められた。その例として、作家の身に降りかかった1926年と1929年の政治的背景を紹介したV・レック（1975）、『裸の年』におけるモンタージュの手法に着目したA・フラーケル（1979）などの名前が想起される。また、作家の生誕九十周年に当たる1984年にはオランダの文芸誌「ロシア文学」がピリニャーク特集号を組み、G・ブローニング、A・ホールク、A・フラーケル、P・ジェンセンの論文が発表された。ソ連の国文学研究（K・クズネツォフ、Г・ベーラヤ）でピリニャークの実験文学は「退廃的なモダニズム文学」として否定的に評価されたが、欧米ではロシア・アヴァンギャルドの中に位置づけようとする傾向が強い（A・フラーケル）。またこの時期は亡命ロシアのピリニャーク研究も盛んで、Л・クズィミチ（1970）、E・トルスタヤ＝セガル（1976）などが紹介活動を行っている。

ピリニャークの実質的な名誉回復はペレストロイカを迎えてようやく始まった。1980年代末には問題作の『消されない月の話』と『マホガニー』がソ連でも出版され、その作品世界の全貌がソ連でもようやく知られるようになった。そして2003年には主要作品を網羅した六巻立ての作品集が出版され、『日本印象記』などの重要な紀行文も広く一般読者の手に届くようになった。さらに2010年には作家の孫にあたるK・アンドロニカシヴィリ＝ピリニャークが編纂した書簡集がモスクワの世界文学研究所 ИМЛИ から出版され、作家を取り巻いた文壇の状況が拓けてきた。資料の公開と並行して作品世界の研究も盛んに進められ

---

<sup>11</sup> . См.: Новиков В. Творческий путь Бориса Пильняка // Пильняк Б. Избранные произведения. М., 1976. С. 3-28.

てきた。その最たる例として、ピリニャークゆかりの地であるコロムナ市の教育大学からは A・アウエルの主導で研究論集（1991-2011）が次々と発表され、着実に作家の再評価活動が進められてきた。また、ロシア文学の枠組みを越えた研究活動も始まっている。日本にはピリニャークが交流を深めた文化人（秋田雨雀や昇曙夢、米川正夫、宮本百合子）が多く、日露文化関係史においても重要な足跡を残したが、日本との関連で見ていくと、ピリニャーク創作と日本をテーマにした B・モロジャコフの論文「“太陽の根”を求めて」（1989）や、フランスのロシア文学者 D・サヴェリが詳細な注釈とともに発表した『ボリス・ピリニャーク：日本印象記』（2004）がある。本邦でピリニャーク作品を扱った研究は記号論を駆使した大石雅彦の「カオスモスあるいはコーラとしての“裸の年”」（1982）、日露文化交流史にピリニャークが残した足跡を照射した中村喜和の「ひびわれた友情——ピリニャークと秋田雨雀」（2001）、そして初期作品から代表作『裸の年』までを取り扱った沼野恭子の「死と誕生の物語、あるいは物語の誕生と死」（2007）が挙げられる。

このようにペレストロイカ以降はソ連国内でも積極的に評価活動が行われてきた。本研究では実質的な名誉回復以降に発表された数多くの新資料を踏まえつつ、ピリニャークの作品世界に迫っていく。具体的にはピリニャークが散文作家として本格的に活動を開始する 1915 年からスターリンの全体主義時代に突入する 1930 年の「偉大なる転換」までの時期を取り扱い、新世界のロシア文化を夢見たピリニャークの政治的・文化的・思想的背景を考察する。本論は以下の三章で構成されている。

第一章ではピリニャークが創作活動を開始する 1915 年から代表作『裸の年』が発表される 1922 年までの時期を取り扱い、「同伴者作家」と呼ばれたピリニャークの文化的・思想的・政治的背景に迫る。

第一章第一節ではピリニャークが革命前に発表した初期作品を分析し、作家の基本的な世界観を明らかにする。具体的には『一生涯』、『彼らが生のひととし』、『死なうものがいざなう』、『雪原』などの短編小説を取り上げ、これらの作品に通底するピリニャークの審美眼を明らかにするとともに、作家の革命観を考察する。作家は革命を支持したのみならず、亡命ロシアの作家たちにも帰国を勧めたが、その革命観はソ連共産党が問題視するところとなった。従ってまずは革命後に執筆した問題作『スマイレ』（1922）や、書簡集などをもとに問題視されたピリニャークの革命観に光を当てる。

第一章第二節ではピリニャークが脚光を浴びた 1920 年代前半の社会における思想的背景に迫る。中でも注目したいのがドイツの哲学者 O・シュペングラーの文明論である。西欧

社会で話題となったシュペングラーの『西洋の没落』はソ連と亡命ロシアでも少なからぬ追従者を見出し、草創期のソビエト作家に大きな影響を与えた。従って、ここではロシア思想界におけるシュペングラー論を分析し、その歴史哲学が革命後の社会で受容された過程を紐解いていく。

第一章第三節ではシュペングラーが初期ソビエト文学に与えた影響を分析する。一世を風靡したその文明論はИ・エレンブルグ、А・プラトノフ、А・Н・トルストイ、そしてピリニャークの作品に確かな足跡を残した。ソビエト作家たちは各自の問題意識をもって『西洋の没落』に反論し、あるいは同調し、その歴史哲学を援用した。さらに踏み込んでいえば、『西洋の没落』そのものが初期ソビエト文学の中で一つの文化様式を生んだといっても過言ではない。ここではそれぞれの作品におけるシュペングラー・テキストの特徴を考察した上で、ピリニャーク作品世界との連動性を検証する。

第二章では革命期のペトログラードで興ったサークル「スキタイ人」の活動がピリニャークに与えた影響を考察する。スキタイ主義はロシアの東洋的価値観によって西欧近代文明を更新しようとする思想的運動であったが、ピリニャークもそのロマン主義的革命運動に影響を受けていた。『革命後のロシア文学』（1982）を著したE・ブラウンがピリニャークをスキタイ主義の後継者として位置付けているのは偶然ではない。<sup>12</sup>実際に同時代のピリニャーク論を俯瞰すると、作家をスキタイ主義者として定義する傾向は確かに存在する（B・グーベル、Вяч・ポロンスキイ）。しかし、スキタイ主義は革命を支持したとはいえ、反共の思想運動だったことから、ソ連時代には研究が一切行われなかった。<sup>13</sup>その結果、スキタイ主義との関連でピリニャーク作品の分析が行われたことはない。近年ではB・ペロウース（2005, 2007）、Я・レオンチエフ（2007）が中心となって再評価活動を行い、革命期ペトログラードにおける文芸活動の全貌を明らかにする上で重要な業績を残している。従って、本論ではこれらの研究を土台としてスキタイ主義の運動がピリニャーク作品に与えた影響を明らかにする。

---

<sup>12</sup>. Edward J. Brown, *Russian Literature after the Revolution*, (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1982), p. 79.

<sup>13</sup>. スキタイ主義を主導したP・イワノフ＝ラズムニクが独ソ戦中に強制収容所に収監され、その後進軍してきたドイツ軍に連行、所蔵していた資料の多くがその際に失われてしまったことも研究の遅延を引き起こした理由の一つである。

第二章第一節ではピリニャークの作品や書簡、同時代の評論をもとに、スキタイ主義を牽引した作家たち（ブローク、ベールイ、レーミゾフ、ザミャーチン）との関係を明らかにする。

第二章第二節ではスキタイ主義における十月革命受容の問題を取り扱う。革命後のピリニャーク作品では「始原力」という概念が重要な役割を担っているが、その概念にそもそも着目したのはスキタイ主義の作家たちである。そのため、まずは「始原力」の概念がロシア文化史の中で形成されてきたプロセスを俯瞰し、その象徴性を明確にするとともに、スキタイ主義の芸術運動において「始原力」が果たした役割を検証する。

第二章第三節ではスキタイ主義の影響を受けて執筆されたピリニャーク作品を分析する。具体的には反西欧思想が顕著な『酔いどれ提督ピーテル陛下』、『サンクト・ピーテル・ブルフ』、『裸の年』を取り扱い、ピリニャークの歴史哲学を明らかにする。

第三章では 1924 年から 1930 年の間に執筆されたピリニャーク作品を扱う。ピリニャークは十月革命を経て同伴者作家として注目されたが、この時期はその実験文学が創作上の危機に陥った時期である。1920 年代後半にかけて国家的文化統制が勢いを増す中で、ピリニャークは時代の流れに逆行し続けることができず、「鋼鉄のロシア」を築き上げるスターリンとの対話を試みるが、この時期の作品世界からは、革命の運命を見極めようとしたピリニャークの挑戦と葛藤が明らかになる。

第三章第一節では『裸の年』による輝かしい成功の後に訪れた創作上の危機を分析する。ピリニャークの作品世界は時を追うごとに複雑化し、難解さを極めた。その例として 1925 年に発表された長編小説『機械と狼』は数々の否定的な評価を呼び、作家の評価を著しく低下させる結果につながった。中でもロシア・フォルマリズムの文芸家による批判は激しく、その議論はピリニャーク作品に影を落とした。したがって、まずは作家の実験文学を取り巻いた議論を俯瞰し、作家に向けられた批判の特徴を明らかにする。

第三章第二節では作家の評価を著しく低下させた問題作『機械と狼』を分析し、その作品を貫く歴史哲学論争に焦点を当て、東洋と西洋の間で揺れ動くピリニャークの葛藤を明らかにする。

第三章第三節では訪日後に執筆された『日本印象記』を取り上げ、ピリニャークの歴史哲学上で占める位置付けを明らかにすると同時に、その来日が作家の歴史観に与えた影響を考察する。

第三章第四節では『消されない月の物語』発表後に作家の身に降りかかった政治的圧力を

分析し、左翼芸術への接近を記述する。具体的には『赤のソルモヴォ』、『中央黒土地帯』、『ヴォルガはカスピ海にそそぐ』を取り上げ、全体主義時代前夜のピリニャークが抱えた政治的・文化的・思想的葛藤を明らかにする。

ピリニャーク作品の引用は基本的に次の文献から行う。

*Пильняк Б.А. Собрание сочинений в 6 т. М., 2003.*

また、上記の作品集に収められていない作品の引用は以下の文献から行うこととする。

«Россия в полете» цит. по: *Пильняк Б. Россия в полете. М.-Л., 1926.*

«Отрывки из дневника» цит. по: *Пильняк Б. Собрание в 3 т. 1994. М., Т. 1. 1994.*

«Красное Сормово» цит. по: *Пильняк Бор. Красное Сормово // Новый мир. 1928. № 7.*

書簡集からの引用は次の文献から行う。

*Андроникашвили-Пильняк К.Б. (сост.) Б.А. Пильняк. Письма в 2 т. М., 2010.*

いずれも引用に際しては巻数をローマ数字、頁数を算用数字で表記する。

## 第一章 十月革命とピリニャーク

ピリニャークはその難解な文体のために「ソビエト文学の鬼才」と称されることがある。作家は実に複雑怪奇な文体と作品構成を得意としたため、その代表作の多くは翻訳行為そのものを退ける。後で見えていく通り、その難解さゆえにピリニャークの作品は読者離れを引き起こしもした。しかし、その難解さは、作家が直感的に描き出す普遍的な自然の美と共存している。作家は人間存在の原初的な要素を巧みに取り出し、それを見事な言葉のヴェールに包んで読者に提示する。まさに難解さと普遍性の絶妙なバランス感覚こそがピリニャークを「鬼才」と呼ばしめるところのものであろう。

。

### 1-1. 革命前におけるピリニャークの創作

同時代を生きた評論家はピリニャーク初期作品の中に人間存在の「物理的」（あるいは「生理的」）な志向に対する熱狂的信仰心を見出した。まさにこの原初的なものに対する信仰があらゆる時期のピリニャーク作品に通底する基本要素である。ピリニャークの初期創作にみられる「物理主義」の最たる例として、処女作『一生涯』（1915）を取り上げよう。この短編では森の奥深くで仲睦まじく暮らす二羽の鳥が描かれている。実に素朴な物語ではあるにせよ、どの言葉も有機的に紡がれており、無駄と言えるものがない。その描写を見てみよう。

オス鳥は餌をくわえて巣のある谷へ舞い戻ってきた。そしてメス鳥は餌をすぐさま平らげてしまった。鳥たちは日に一度だけ食事をするだけだったが、それで腹がくちくなるほど食べて、動くのもおっくうなほどで、胃袋は重く垂れ下がった。そしてメス鳥は残った骨を崖の下へつまみ落とした。オスは木の幹にうずくまり、身を縮めて毛を逆立て、居心地の良い姿勢を取り、食後に温かい血が腸のあたりに流れ込むのを感じては満足そうにしていた。(I:298-299)

こうして鳥たちは繁殖のための長い年月を過ごす。しかし、オス鳥はやがて年老いていく。そこにより強い鳥が訪れ、二羽が送る平穏な生活は脅かされ、オス同士の間で生を賭けた戦いが始まる。そして年老いた鳥は生存競争に敗れ、古巣を去る。この短編は年老いた鳥の死が殺伐と描かれて終わる。

オス鳥は食べるため、繁殖するためだけに生きてきた。だが今となっては死ぬ以外の道はなかった。鳥はそれを本能的に悟ったに違いない。鳥は二日間、静にずっと崖にとまって、肩に顔をうずめていた。しかし、やがて静かに、ひっそりと息絶えた。鳥は崖の下に落ちて、足を硬直させたまま横たわっていた。それは夜だった。新しい星が空に輝いた。森や繁みでは鳥が鳴いた。フクロウもまた鳴いた。鳥は五日間、草原の底に横たわっていた。鳥の体はすでに腐食が始まっていて、息が詰まるような厭らしい臭いを放っていた。

鳥は狼に見つかって、食われてしまった。(I:303)

ピリニャークの処女作は本能の賛美にささげられたが、このテーマはその後の創作活動に通底する自然賛美の原型といえるだろう。

続いてピリニャークが執筆した短編小説『彼らが生のひととし』(1916)では、狩猟を生業とする若い夫婦と熊のマカールが送る、調和に満ちた生活が描かれている。作品には四季の時間が取り入れられ、豊穡の秋にマリーナは身籠り、雪解けの春に出産する。この短編でも『一生涯』と同じく人間存在の中にある原初的なものが強調されている。ピリニャークの言葉を借りれば、作品に登場する新婦のマリーナは「感じる<sup>чув-ять</sup>」ことはできても、「考える<sup>дум-ать</sup>」ことができなかった。それは「マリーナの思考が重い巨石のようにゴロゴロと転がるばかり」(I:316)だったからである。マリーナの存在はまさしく自然のように雄大で、非合理的である。次に引く例では、マリーナが受胎した喜びが描かれているが、その喜びをまた熊のマカールも共感している。ピリニャークは読者に受胎の生理的な喜びを豊かな抒情性ととも表現している。

マリーナは自分のベッドに腰掛けた。彼女は頭がぼうっとして、吐き気を覚えた。隣には熊が横になっていた。熊はすでに目を覚まし、マリーナを眺めていた。熊の目には、かすかに緑がかった火花が宿っていた。その目を通して、春は夕暮れの、穏やかにさざなみ立つ静かな空が見える気がした。

もう一度、喉元に吐き気がこみ上げ、眩暈を覚えた——そしてマカールの目に宿った火花はマリーナの深いところで無意識に大きな耐え難い喜びに生まれ変わり、その喜びから彼女の体は強く震えだした——子供を授かったのだ。罨にかかったウズラのよう<sup>1</sup>に心臓は高鳴り、ぼんやりとさざなみ立った眩暈を覚えた。それは夏の朝を想わせた。

この通り、マリーナの受胎に熊のマカールも喜び、自らもまた繁殖すべく夫婦のもとを去る。まさにマリーナの受胎と出産は人間に限らず、あらゆる有機的存在の誕生を象徴しているかのようである。有機的なものこそ美しく、生命の息吹を感じさせないものに対して作家は一切関心を払わない。

革命前にピリニャークが執筆した作品には、生と死のテーマ、そして「力」の賛美が目立っている。評論家の A・ヴォロンスキイ<sup>14</sup>はいち早くピリニャークの才能を見出した。そして評論「ボリス・ピリニャーク」（1922）を自ら編集する文芸誌「赤い処女地」に発表、作家の初期作品を分析し、その中に人間存在の根源的な要素、あるいはロシア語でいうところの「始原力」<sup>スチヒーヤ</sup> 賛美を指摘し、ピリニャークを「生理的作家」と呼んだ。

ピリニャークは「生理的」な作家である。ピリニャークが描く人間は動物に似ており、動物は人間のようだ。動物も人間も同じ色彩、言葉、イメージ、メソッドでもって描かれることが多い。ピリニャークが類稀な知識と技術を用いて狼、熊、フクロウを描くことができるのはこうした所以である。<sup>15</sup>

ヴォロンスキイはピリニャークを「生理的」な作家と定義し、人間の中にある非合理的なものを理想化する傾向をその作品世界に見出した。文芸誌「出版と革命」を編集した評論家 Вяч・ポロンスキイもまた同じ切り口からピリニャークの創作を取り扱った。ポロンスキイは評論「キングのいないチェス」<sup>16</sup>（1927）を発表、ヴォロンスキイに賛同しつつ、その評価を次のように発展させている。

---

<sup>14</sup>. アレクサンドル・ヴォロンスキイ（1884-1937）：文芸評論家、作家。1904 年、共産党に入党。1905 年から 1907 年にかけて革命活動に従事。1921 年から 1927 年まで文芸誌「赤い処女地」の編集長を務めた。主著に『生ける水、死せる水を求めて』（1927）、『世界を見る芸術』（1928）、『文学手帳』（1928-1929）がある。

<sup>15</sup>. Цит. по: Воронский А. Искусство видеть мир. М., 1987. С. 234-235.

<sup>16</sup>. ピリニャークに関する評論は「キングのいないチェス」と題されたが、この題名はピリニャークの小説『第三の首都』（1922）から借用された。



ヴォロンスキイはある評論の中でピリニャークは生理的作家だと指摘した。これは的確だ。しかし、ピリニャークの作品には生理学よりも動物学のほうが多く認められる。そして彼の最良の作品が『谷間の上で』（『一生涯』の別名——筆者注）であるのは偶然ではない。ピリニャークは描写のあらゆる可能性を駆使し、この短編を圧縮し、力強く、原始的に描いた。この短編は自然そのものだ……

ピリニャークは人間の動物的本性を見事に感じ取る。だからこそ動物的なプロセスが彼の創作の中ではあれほど大きな場所を占めているのだ。人間の中にピリニャークは動物を見出しているが、この動物こそ彼を魅了する。動物は若く、力強く、肉食だ。

17

ヴォロンスキイやポロンスキイが指摘した通り、ピリニャークは人間存在が秘める本能的、動物的、非合理的な小宇宙を崇拝していた。ピリニャークは西欧社会の近代文明には無関心な原始的、生理的、動物的作家であり、その審美眼はなによりもまず生の賛美に根差している。作家は機械文化には一瞥もくれず、土着的なもの、有機的なものを一心不乱に信仰する。それは力や、性行為、肉体的なものの絶対化である。作家の世界観にはロシア正教を含む、キリスト教の宗教観は見られない。確かに『彼らが生のひととし』に登場するマリナは嫁いできて早々と聖母マリアのイコンを壁に掛けるが、それは後述する通り、マリアが罪を許す存在であり、ロシアの大地信仰と有機的に連動しているからである。

十月革命から間もなくピリニャークは短編『死なるものがいざなう』（1918）を執筆し、この中で人間存在の原初的な要素を再び賛美した。物語の主人公は農家に生まれたアリョーナという少女である。彼女は自然と調和のもとに生きており、その生活はピリニャーク自身の原初的な審美観を体現しているといえよう。物語のあらすじは次の通りである。

アリョーナは母親と慎ましい生活を送っている。やがてアリョーナは成長し、川向うに住む青年アレクセイと懇意になる。しかし、アリョーナの母は娘に自分の過ちを告げる。アレクセイとアリョーナは血縁関係にあったのである。アリョーナは恋人が種違いの兄だを知って嘆き悲しむと同時に、自然の中に「死をもたらず」力の存在に気付く。そしてアリョーナは神性あふれる自然に誘惑される。

---

17. Цит. по: Полонский Вяч. О литературе. М., 1988. С. 129.

そして夕暮れ時、母は娘に語った——死なるものがいざなうのだと——増水した川が手招きをしている——大地が高みから、教会の鐘楼から飛び降りろ、車輪の下へ飛び込め、列車から飛び降りろといざなう。増水した川がうなりをあげ、開いた窓から大地の新鮮な香りが舞いこんできたその晩——少女だったアリョーナに母の言葉は理解できなかった。しかし、いくつかの春を越し、増水した川の上に立って彼女は感じた。いざなっている——水が、いざなっている——目に見えない、死なるものが、いざなっている——そして彼女は腹の底から理解した。いたる所で死なるものがいざなっていて、ここにこそ——生がある。血がいざない、大地がいざない——神がいざなうのだ。(I:323)

引用が示す通り、自然はアリョーナにとって生であり、死であり、ひいては精神世界の泉である。自然にひそむ始原力の神格化がこの作品の根幹をなしている。「死なるものがいざなう」という破滅への甘い衝動は、国民詩人プーシキンの作品『ペスト流行時の酒盛り』(1830)の一節を想起させる。

死のきざしあるものは すべてみな、  
人のところに言い知れぬ、  
ひそかな愉悦を秘むるなり。  
これ、あるいは、不死のしるしならん。  
幸いなるかな、不安のときにも  
そを見いだせし人<sup>18</sup>

ピリニャークは民衆と始原力の密接なつながりを深く感じ取っていた。作家の言葉を借りれば、「大地に見初められたものは永久に大地とともにある」(I:322)。そして神性を秘める大地はアリョーナを破滅へと誘い込む。

母は罪を打ち明けた。アリョーナは土手に足を運ぶのをやめ、夜は番小屋のそばで時を

---

<sup>18</sup> アレクサンドル・プーシキン（栗原成郎訳）「ペスト流行時の酒盛り」『プーシキン全集 3』河出書房新社、1972 年、482 頁。

過ごし、夜更けはウズラの鳴き声に耳を傾け、川に立ち込める霧を見守っては再び感じ取った——死なるもの——罪がいざなっている。聖なるものと同じく、罪なるものがない、そしてすべての境界とは——死だ。(I:324)

こうしてアリョーナは母親の家で大地とともに生きることを選択する。しかし、その後、彼女の生活に転機が訪れる。地主である没落貴族ポルーニンの登場である。ポルーニンは妻とロシア各地を遍歴して財産を使い果たし、さらには離婚して古巣の領地へと戻ってくる。そして、貴族の家に育ったポルーニンは「正しく、頑強な生活を作り出そう」(I:325)としてアリョーナとの生活をはじめめる。ロシア思想史の観点からすれば、このシナリオは十九世紀後半のナロードニキ運動を想起させるものである。作品の中でピリニャークはポルーニンの民衆観を次のように提示している。

ポルーニンは真実と神を探究するロシア貴族の典型で、アリョーナを自宅に呼び寄せたのは彼の方だった。彼女を愛したのは確かだが、それと並んで、彼女の中に誠実にして自然なものを見出し、アリョーナとともに身を休め、正しく、頑強な生活を作り出そうと思ったからでもある。二人は屋敷に暮らし、自分たちで領地を管理した。ポルーニンはアリョーナに読み書きを教え、ともに聖人伝を読んだ。彼自身、聖人伝に関心を持ち、真にロシア的なものを追い求めていた。(I:325-6)

このように、ポルーニンは「民衆の中に（ヴ・ナロード）」入ろうとする教養社会の代弁者である。しかし、ピリニャークは自然（アリョーナ）と文明（ポルーニン）を相容れないものとして提示している。貴族の家に嫁いだアリョーナは自然と文明の仲介者としての役割を担っているかに見える。実際にアリョーナはポルーニンの子供を生み、その子をナターリヤと名付け、「正しく、頑強な」生活を送る。しかし、不幸にもナターリヤは不慮の死を遂げる。するとアリョーナの生活は「からっぽ」になり、彼女は「死を求めて」家を出る。

そして六月が訪れると、アリョーナは決心をした——行くのだ。死なるものが——いざなう、あふれかえる川の中に橋から飛び込めといざなうのだ——彼方へ、終りへ、行け、行けとばかりに——去る人々もまた、いるのである。

後ろを振り向けば、そこには命があった。草花の生い茂る六月、花婿のアレクセイ、

娘のナターリヤ、そしておそらくは、地主ポルーニンと母の秘密。前途には死なるものが待ち受けていた——それは神と道。(I:326)

大地の始原力とともに生まれ育ったアリョーナは自らの死期を悟り、死を求めて旅に出る。それは神性にあふれる大地に自己を還元するための旅路である。アリョーナにとっての神とは死であり、道であり、それは放浪することを強いる。それに対し、ポルーニンの神は観念的である。始原力と共生するアリョーナとは対照的に貴族のポルーニンは領地にとどまる。このようにピリニャークはアリョーナとポルーニンを通して自然と文明、民衆とインテリゲンツィヤの背反性を表現力豊かに描き出している。

短編『死なるものがいざなう』は始原力を賛美する作品であり、自然と調和に満ちた生はピリニャークの中でゆるぎない位置を占めている。自然賛美という意味では、同時期に執筆された『雪原』(1917)という短編小説も興味深い。この作品の主人公は西欧各地を転々として「子供を作らない愛」に溺れるクセーニヤという女性である。彼女はパリで「提灯ゲイシャ」さながら退廃的な暮らしで身をやつすが、あるときタンスの片隅でネズミの赤ん坊を見つける。驚いた母ネズミは逃げてしまい、子ネズミは一匹ずつ死んでいく。最後の一匹が息絶えると、クセーニヤは言い知れない不安に駆られてロシアの雪原へ、昔の恋人のもとへと舞い戻る。

パリからまっすぐこっちへ来たの。変な話よ。春になったらニースに越そうと思ってね。それで荷物をまとめていたら押し入れの隅にネズミの巣を見つけたの。母親は三匹の仔ネズミを置いて逃げちゃって。体毛も生えてなくて、這うのがやっとなの。その子たちの面倒を見ていたけど、三日目に一匹が死んで、その夜にはあとの二匹も死んじゃった……それで次の日にロシアへ行こうと決めた。あなたのもとへ。(I:331)

こうして彼女は修道僧のように生きる昔の恋人のもとへ押しかける。しかし、本能的な衝動のままに生きようとする彼女は受け入れられない。

「私は疲れたんですよ……薪を割って、暖炉を焚いて、生きるためだけに生きたい。アッシジのフランチェスコを読んで思うんです。悲しいけれど、時間は戻らない。フランチェスコは滑稽な人だったが、彼には信仰があった……」

「でもあなたは仔ネズミのにおいをご存知かしら」

「いいえ。でも、なぜそんなことを」

「赤ん坊とおんなじ匂いがするの。[中略] それって何より大事よ」(I:333)

これまで見てきた通り、ピリニャークの初期作品に登場する人物はいずれも一様に自然を歌い、始原力を崇拝する傾向が顕著である。同時代を生きた評論家 K・コーガンの言葉を借りれば、「ピリニャークの短編小説は自然、本能、根源的なものを讃える頌歌」に他ならない。<sup>19</sup>有機的なものこそがピリニャークにとってはすべてであり、それは善悪の彼岸にある。あらゆる文化的営みにもピリニャークは反抗するが、それは文化が本能と根源的なものを制限するからである。<sup>20</sup>

もちろん、ピリニャークの初期作品は極端にモノフォニックな性質を帯びており、ロシア文学史家の M・スローニムのように、「革命前に発表したものはほとんど価値をもたない」<sup>21</sup>という辛辣な評価もみられる。確かに登場人物の台詞はその殆どがピリニャーク自身の世界観を代弁しているため、登場人物の性格付けが単調になっているのは事実である。しかし、ピリニャークの世界観は十月革命の大変動を機に大きく変化を遂げる。

ピリニャークの作家人生は十月革命の歴史と密接に関連している。ピリニャークの代表作は十月革命をテーマにしたものが多く、ロシア共産党教育人民委員 A・ルナチャルスキイの言葉を借りれば、ピリニャークはまさに革命によって文壇へと「押し出された」作家であった。<sup>22</sup>この歴史的分水嶺を通してピリニャークは「革命的」作家へと変容していく。革命前のピリニャークはモスクワ南部の地方都市コロムナで活動する無名の作家に等しかったが、十月革命の波に乗って文壇の中心に舞い込み、熾烈な議論を巻き起こした。ピリニャー

---

<sup>19</sup>. Коган П. Борис Пильняк // Новый мир. 1925. №11. С. 113.

<sup>20</sup>. Там же.

<sup>21</sup>. Марк・スローニム (池田健太郎、中村喜和訳) 『ソビエト文学史』新潮社、1976 年、196 頁。

<sup>22</sup>. Цит. по: Щербина В.Р. (глав. ред.) Литературное наследство: А.В. Луначарский. Неизданные материалы. М., 1970. Т. 82. С. 226. ルナチャルスキイは 1922 年にベルリンで評論「革命的時代の文学について」(原文では Eine Skizze der russischen Literatur während der Revolutionszeit) をドイツ語で発表、マヤコフスキイ、ブロークと並んでピリニャークをソビエト文学の優れた才能として評価した。

クを新進気鋭の作家として評価する声は後を絶たなかった。ポロンスキイはピリニャークの変化を次のように評価している。

ピリニャークと、革命で足をくじいた前の世代の作家たちの間に広がる差はなによりもまず、革命によってピリニャークが絶望に陥らなかった点にある。ピリニャークは革命をまさにそれこそが足りていなかったのだとばかりに受け入れた。<sup>23</sup>

その一方、作家の「売れっぶり」を揶揄する声もまたかまびすしかった。その最たる例として、ジャーナリストの M・レヴィドフが「モスクワタ刊」紙（1926 年 3 月 24 日）に発表した記事「本屋での立ち聞き」が興味深い。この記事でレヴィドフはピリニャークの「売れっぶり」を次のように揶揄した。

ピリニャークに関する議論のかまびすしさはアプトン・シンクレアをしのぐものだ。もちろん、どれほどピリニャークの作品が読まれているかといえば、まあ、ありていに言ってもシンクレアの足元にも及ばないが。<sup>24</sup>

当時のアメリカ文学を代表するシンクレアの作品はソ連で次々と翻訳され、一般大衆に広く親しまれていた。ピリニャークは文壇で常に議論の的となる作家だったが、その作品は難解さゆえに大衆読者の支持を受けていたとはいえない。しかし、その革命観は評論家の注目を集め、文壇を賑わせた。ここからは、作家の革命観をより詳細に検討してみよう。

ピリニャークの革命観において重要な役割を担っているのは土着的な文化観といえる。革命後に亡命したロシア文学の重鎮とは異なり、ピリニャークはソビエト・ロシアと命運をともにする決意をした。しかし、ピリニャークはロシアにとどまっただけでなく、亡命ロシアに身を置いた作家たちに帰国を促した。その例としてピリニャークとレーミゾフの関係が示唆に富む。

周知の通り、ピリニャークはレーミゾフを師と仰いでいた。レーミゾフの回想によれば、

---

<sup>23</sup>. Полонский. О литературе. С. 126.

<sup>24</sup>. Леви́дов М. Простые истины: Подслушанное в книжном магазине // Вечерняя Москва. 24. 03. 1925.

1922 年の春にピリニャークがベルリンに滞在した際、レーミゾフの自宅に仮住まいし、その指導を受けていた。<sup>25</sup>そのためか、当時のピリニャークが残した手紙、作品にはレーミゾフの特徴的な文体を想起させるものが多い。そしてピリニャークは 1923 年に小説『第三の首都』を下記の献辞とともに世に送り出した。

この中編小説はリアリズムの作品とは決して呼べないが、この作品をアレクセイ・ミハイロヴィチ・レーミゾフに、私が弟子として仕えた師に捧ぐ(II: 245)。

このようにレーミゾフとピリニャークは文字通りの師弟関係を育んでいた。しかし、ピリニャークは亡命というレーミゾフの政治的決断には批判的態度をとった。レーミゾフに宛てた手紙（1922 年 8 月 10 日）のなかでピリニャークは新生ロシアへの信仰を告白している。

何はともあれ、革命が歴史の分水嶺となり、帝政期のロシア文化と世論は幕をおろし、ロシアでは新しい文化と世論が生まれつつあります。それは**生物的現象**そのもので、政党や政治とは無関係なのです。それは新しいロシアから生まれてきているのです。**ロシアこそが生みの親なのです**。[中略] 私はずいぶん前から独立して、自分の流派を作って、自分の声を社会に投げかけたいと思っていました（そして今も）。ロシアはロシアにあり、ロシアは死に瀕していないと。（書簡集 I:485、強調はピリニャーク——筆者注）

このように、ロシア作家はロシアの大地に生きるべきだとピリニャークは考えた。十月革

---

<sup>25</sup> 1920 年代前半、レーミゾフとピリニャークは文字通りの師弟関係にあった。ピリニャークはレーミゾフを師と仰いで、ベルリン滞在後に執筆した小説『第三の首都』（1922）を彼に捧げた。またレーミゾフもピリニャークを弟子として迎え、創作指導を行った。レーミゾフはピリニャークについて次のような回想を残している。「彼は私の弟子である。1922 年のベルリンで、手を休めることなく、私の監督下で作品を仕上げていた。私は彼の子供じみた文法を壊し、人工的な書き言葉を生きた言葉につくりかえ、フレーズを際立たせるやり方を仕込んだ。」Цит. по: Ремизов А.М. Огонь вещей. М., 1989. С. 396.

命によって滅んだのはあくまで帝政ロシアの国体であり、ピリニャークはロシアの大地に生きることの重要性を亡命ロシアの作家たちに説いた。まさにピリニャークの革命観は作家が創作活動の初期から抱いていた大地信仰と有機的に関連している。

ピリニャークは祖国ロシアをユーラシア大陸に広がる大地の中に認めたが、その一方で亡命ロシアの間では祖国が滅ぼされた、あるいは亡命ロシア人たちが祖国ロシアを「持ち去った」という認識が広まっていたのも事実である。その例として、ドイツに亡命した作家P・グーリ<sup>26</sup>の亡命文学史『私はロシアを持ち去った』が示唆に富む。この命名についてグーリは次のように説明している。

1918年12月、キエフにある教育学博物館の床で捕虜の身にあったとき、突然（意思に関係なく）自分の中に（まるで体を切り抜くかのように）入ってきたものがあつた。それはこの**全ロシア革命**に対する、今まで体験したことがないほどの嫌悪感だつた。それは、この**無意味**で血なまぐさい非人間的な醜悪のなかに、どつぷりと漬かってしまったロシアそのものに対する嫌悪感と憎悪だつた。そしてそのとき私は頭ではなくて魂で、心で、信じられないほどはっきり理解した。**こんなロシアに自分の居場所は無く、またあろうはずもない**。[中略] そしてその気持ちはいまだにどこか心の奥深くに生きている。それこそがこの回想録に「私はロシアを持ち去った」という名前を与えたのだ（強調はグーリ——筆者注）。<sup>27</sup>

亡命ロシアこそ本来のロシア文化の担い手であるという文化観をグーリは抱いており、レーミゾフもまたその一人であつた。その一方、ピリニャークはロシア文学を担う作家はロシアの大地とともにあるべきだと考え、幾度となく亡命ロシア人に帰国を促し続けた。その結果、次第に亡命ロシアの作家からは背を向けられるようになっていく。

ここでレーミゾフ宛の手紙に再び目を転じると、ピリニャークは十月革命、ならびに革命

---

<sup>26</sup> ロマン・グーリ（1896-1986）：作家、文学者。モスクワ大学法学部を卒業後、宗教哲学者のИ・イリインに師事。1916年に動員、戦役に就く。1919年に出国、ドイツ、フランス、アメリカで亡命生活を送る。Б・サーヴィンコフ、М・バクーニン、М・トゥハチェフスキー、К・ヴォロシーロフに関する伝記で知られる。

<sup>27</sup> Цит. по: Роман Г.Б. Я унес Россию: Апология эмиграции в 3 т. М., 2001. Т.1. С. 34.



によって生まれた新たなロシア文化と世論を「生物的现象」と認識し、十月革命における共産主義の影響を否定していることが分かる（「政党や政治とは無関係なのです」）。まさにピリニャークはЛ・トロツキイが呼んだところの「同伴者作家」であった。同伴者作家は十月革命をロシア史の歴史的必然として受け入れながらも、共産主義の理念には賛同しなかった作家を指す政治的俗語として革命後の文壇で頻繁に使われた。トロツキイは『文学と革命』の中で同伴者文学を過渡的な芸術として定義している。

復唱や沈黙のなかで自滅しつつあるブルジョア芸術と、まだ存在しない新しい芸術とのあいだには、革命とある程度有機的にむすびついてはいるがまだ革命芸術ではない過渡的な芸術が生まれてきている。[中略]かれらの文学ならびに精神一般の変貌は、革命や、革命がかれらを捉えたアングルによってつくられており、かれらはみな革命をそれぞれ自分なりに受け入れている。だが、こういった個人的受け入れのなかにはかれら全員に共通する特徴があり、それがかれらを共産主義から鋭く切りはなし、つねに共産主義に対立しかねないものとなっている。かれらは革命を全体としては把握しておらず、共産主義的な目的とは無縁である。<sup>28</sup>

同伴者作家はいずれも共産党員ではなく、政治的中立をとる作家が多かったため、左派の評論家による激しい批判にさらされた。後述する通り、スターリン時代に同伴者作家の多くは「階級の敵」として弾圧され、転向を強いられた結果、1930年代以降にこの用語が使用されることはなくなった。同伴者作家と呼ばれたのは「セラピオン兄弟」や「峠」、「レフ」、「イマジニズム」などの文芸サークルに所属した作家が中心だったが、用語の適用範囲は曖昧で、文壇の趨勢によって変化した。その例としてマヤコフスキイやゴーリキイも同伴者作家と定義されることがあった。<sup>29</sup>

ピリニャークもまた革命の同伴者作家として位置づけられたが、その歴史認識はやがて共産党幹部が問題視するところとなり、文壇の左派による激しい批判にさらされた。その例として、ピリニャークの作品は「性器文学」と呼ばれることがあった。こうした定義はピリ

---

<sup>28</sup> レフ・トロツキイ（桑野隆訳）『文学と革命（上）』岩波書店、1993年、78-79頁。

<sup>29</sup> См.: Сурков А.А. (глав. ред.) Краткая литературная энциклопедия в 9 т. М., 1968. Т. 5. С. 894.

ニャークが 1922 年に発表した小説『スマレ』の一節に由来している。以下、『スマレ』からの引用である。

カール・マルクスは間違いを犯したと思ってたわ。マルクスは肉体的な飢えしか勘定に入れていなかったんだもの。マルクスは世界を動かす別の原動力を忘れていたのよ。それは繁殖のための愛、血のような愛ね、きっと。[中略] ときどき体が痛くなるくらい腹の底から感じるのよ、見えてくるのね。世の中すべて、文化も、全人類も、どんな物も、椅子も、ロッキングチェアも、タンスも、ワンピースも、みんな性であふれているの。いえ、そうじゃない。性器であふれているの。種族とか、民族とか、国家、人類だけじゃなくて、ほら、このハンカチも、パンも、ベルトも性器でつながってるのよ。

私は孤独じゃないわ。ときどき頭がぼうっとするの。それでわかるのよ。革命が、革命のすべてが性器のにおいにあふれてるって。(I:253)

ピリニャークはこの作品で革命を「生物学的現象」として提示することに腐心した。ピリニャークの「生物主義」は十月革命のダイナミズムに刺激され、エロスに満ちた情景が顕著となり、「革命は性器のにおいを放つ」という『スマレ』の一節はピリニャーク作品を退廃文学として扱う際のレッテルとして頻繁に引用された。同時代を生きた C・エセーニン<sup>30</sup>はピリニャークと交流が深かったが、詩人はその「退廃文学」としての評価について評論「ソビ

---

<sup>30</sup>. 1921 年 12 月にエセーニンはピリニャークに自著『ブガチョフ』を贈呈しており、この頃から両作家の交流は始まったと思われる。См.: Есенин С. Полн. собр. соч. в 7 т. М., Т. 7. 1999. Кн. 1. С. 155. その後、ピリニャークとエセーニンの親交は深まった。エセーニンが文芸誌「<sup>ヴォリノドゥメツ</sup>自由思想人」を発刊しようと試みた際、ピリニャークをはじめとする盟友たちに投稿を呼びかけた。エセーニンは Д・ボゴモリスキー宛の手紙(1924 年 9 月 3 日)で次のように記している。「あとはお前が信用貸しで雑誌の出版を受け持ってくればことは終わりだ。散文家からはピリニャーク、イワノフ、ニキーチンが投稿する。」(Есенин С. Полн. собр. соч.: в 7 т. Т. 6. М., 2005. Изд. вт. С. 174.). エセーニンの死後、ピリニャークは追悼文を発表、親友の死に哀悼の意を表した。См.: Пильняк Бор. О Сергее Есенине // Журналист. 1926. №1. С. 49. 二人の関係については次の論文が詳しい。Ауэр А.П. С. Есенин и Б. Пильняк (к истории творческих взаимоотношений) // С.А.Есенин: проблемы творчества, связи. Рязань, 1995. С. 59-65.

エト作家について」(1924)の中で次のように反論している。

ロシアではピリニャークが大変な話題になった。一時は恐ろしいほど褒め殺して、それこそ天まで持ち上げるほどだった。しかし、後でどういうわけかピリニャークを罵倒するのが流行りになった。「よしていただきたい——半人前の批評家曰く——革命で性器しか目にしなかった以上、どうしてこれが作家です？」

この恐ろしく愚かで出鱈目な書き方から言えること、それはロシア批評の稚拙さか、あるいは彼らがピリニャークを読んでいないということだ。ピリニャークは驚くほど才能あふれる作家だ。ともすると、いくぶん題材的な空想を欠いているが、その代わり言葉使いの巧みな技術と感性に富んでいる。<sup>31</sup>

エセーニン「性器文学」としてのレッテルを退けようとしたが、『スミレ』はピリニャークの作家人生における政治的躓きの石となった。周知の通り、文壇の指導的立場にあったヴォロンスキイはピリニャークを高く評価し、ことあるごとに作品発表の機会を与えてきた。<sup>32</sup>それにもかかわらず、ヴォロンスキイはピリニャークの作品世界にみられる「革命性」は批判せざるを得なかった。その例として、ヴォロンスキイは『スミレ』の性的描写を徹底的に批判した。

カール・マルクスがわけもなく引き合いにだされている。歴史における飢えと愛の役割などという至極つまらない問題はマルクスの脳裏にも浮かばなかった。[中略]誰がなんのためにこんな病理的作品を読むというのだ？<sup>33</sup>

---

<sup>31</sup>. Цит. по: *Есенин С.* Собр. соч. в 3 т. М., 1983. Т. 3. С. 174.

<sup>32</sup>. ピリニャークとヴォロンスキイは親交を深めた。二人は文芸誌「<sup>クルーク</sup>円」をともに創刊し、共同編集者として二人の蜜月が始まった。ヴォロンスキイはピリニャークに続いて次の作家についても「文学シルエット」を発表した。Вс・イワノフ (1922/№5)、Е・ザミャチン (1922/№6)、С・エセーニン (1924/№1)、Л・レオーノフ (1924/№3)、И・パーベリ (1924/№4)、Л・セイフーリナ (1924/№5)、Д・ベードヌイ (1924/№6)、В・マヤコフスキイ (1925/№2)。

<sup>33</sup>. Цит. по: *Воронский.* Искусство видеть мир. С. 236.

小説『スマレ』は大きな話題になり、政治的レベルでも議論されるようになった。1922 年にピリニャークは作品集『死なるものがいざなう』を出版するのに際し、この作品集に『スマレ』を加えたところ、国家保安局の決定で差し押さえ処分を受けたのである。<sup>34</sup>

ピリニャークを作家として高く評価したトロツキイは差し押さえの処分を解除すべく奔走した。トロツキイは国家保安局副長官の И・エンシュリフトに抗議したが、その努力は徒労に終わった。そこでトロツキイは政治局に圧力をかけるという手段に訴えた。1922 年 8 月 4 日にトロツキイが当時の全露共産党政治局員 Л・カーメネフに宛てた手紙の中では次のように書かれている。

ピリニャークの本『死なるものがいざなう』にかけられた差し押さえ処分に関する問題を即刻、政治局の議題にかけよう提案する。内容、形式ともにこの本はピリニャークが出版したその他の本と比べて大差なく、しかし、それらは発禁処分も差し押さえ処分も受けていない（そしてその必要も一切ない）。ポルノに堕したという非難は間違っている。[中略] 革命作家としての成長を続ける作家にはより一層の注意と寛大さが求められる。差し押さえ処分は許しがたい間違いであり、即刻撤回すべきである。<sup>35</sup>

トロツキイが抗議した結果、8 月 10 日と 17 日に共産党政治局では作品集の差し押さえ処分に関する問題が審議された。そして政治局の決定により、共産党幹部の А・リュコフ、М・カリーニン、В・モロートフ、そして Л・カーメネフは『スマレ』を講読、評価することが義務づけられた。そして審議の結果、『死なるものがいざなう』の差し押さえ処分は解除され、1922 年にこの作品集は日の目を見た。しかし、その代償は高くついた。И・スターリンがトロツキイによるピリニャーク擁護に反感を覚えたのである。トロツキイが政治局に提出した差し押さえ処分撤回を求める書付にスターリンは次のようなメモを残している。

ピリニャークの『スマレ』のような本が出版市場に出回らないと保証される場合に限っ

---

<sup>34</sup> 作品集『死なるものがいざなう』の差し押さえ処分に関してピリニャークはレーミゾフ宛の手紙（1922 年 8 月 10 日）で詳細に説明している。

<sup>35</sup> Цит. по: Фрезинский Б. Литературная почта Карла Радека // Вопросы литературы. 1998. № 3. С. 292.

て賛同する。この作品はチャプーギン<sup>36</sup>のものよりもはるかに反革命的であると思う。

И・スターリン（強調はスターリン——筆者注）。<sup>37</sup>

このようにスターリンは反トロツキイ路線の標的としてピリニャークを敵視し始めた。共産党内部で指導的立場を築くには遠いスターリンにとって「革命の天才」トロツキイの存在は目障りで、その庇護下にあるピリニャークに後の独裁者は嫌悪感を抱き始めたのである。<sup>38</sup>

後で詳細に見ていく通り、この事件を契機としてピリニャークの作品は次第に反革命の代名詞として新聞の紙面に飛び交うようになる。しかし、1922年当時のピリニャークは文壇の寵児であった。同年、ピリニャークは代表作となる長編小説『裸の年』を亡命ロシア人の3・グルジェビンがベルリンで経営する出版社から刊行し、ソビエト文学を代表する「革命作家」としての名声を得た。同じく同年に発刊されたソ連初の重厚な文芸誌「赤い処女地」からはピリニャークに関する評論が矢継ぎ早に発表され、ロシア国内外でもその名は人口に膾炙した。

こうしてピリニャークはコロムナで活動する地方の作家から一転してソビエト文学を代表する作家に変容を遂げた。しかし、その「革命性」は絶えず議論的になった。

ピリニャークの作品世界は体制側の評論家から反動的なものとして批判されたが、それと同時に「スラヴ派」、「東洋派」として評価する声もまた大きかった。後述する通り、革命後のピリニャーク作品には反西洋思想が支配的となり、それは一種のアンチ・ペテルブルグ・テキストとも呼ぶべき現象を生み出した。北の都ペテルブルグは「西欧への窓」として機能し、西欧風貴族文化の中心地として十八世紀以降に栄えたが、ピリニャークは革命を契機として西欧的ではないロシア、アジア的なロシアの探求に乗り出した。つまり、ピリニャークの場合、革命は帝政ロシアと新生ロシアの交代であると同時に、西洋的ロシアと東洋的ロシアの交代としても機能していると考えられるのである。

---

<sup>36</sup> アレクセイ・チャプーギン（1870-1937）：作家。農家に育ち、農村を舞台とした作品を数多く執筆。代表作に『ラージン・ステパン』（1927）、『放浪する人々』（1937）がある。

<sup>37</sup> Цит. по: Динерштейн Е.А. А.К. Воронский: В поисках живой воды. М., 2001. С. 63.

<sup>38</sup> ピリニャークとスターリンの関係については次の文献が詳しい。ボリス・ソコロフ（齊藤紘一訳）『スターリンと芸術家たち』鳥影社、2007年、216-226頁。

こうした変容は、当時のソ連国内外における思想的運動と連動していると考えられる。帝政ロシアと新生ロシアの転換期にピリニャークが経験した変容をより明確にする上で、ドイツの「スラヴ主義者」と呼ばれた歴史哲学者 O・シュペングラーの著書『西洋の没落』がソビエト社会に与えた影響の分析は欠かせない。

## 1-2. ソ連におけるシュペングラーの歴史哲学受容について

第一次世界大戦が勃発し、西欧諸国で民族意識が高揚する頃、ドイツではシュペングラーが『西洋の没落』（1918-22）を刊行し、各文化の独自性を擁護する文明論を世に知らしめた。一般的にシュペングラーの歴史哲学は反民主主義的言説として論じられることが多いが、『西洋の没落』は戦後の西欧社会で広く普及する一方、ソビエトにおいても未曾有のセンセーションを巻き起こした。また、ペレストロイカ以降のロシアでも盛んにシュペングラーの再評価活動が進められており、その歴史哲学はロシア社会に少なからぬ影響を与えてきたといえる。

十九世紀以来、スラヴ派の思想家たちは西欧文化の終焉を唱えてきた。そして大戦後の西欧における荒廃を前に、道標派をはじめとする二十世紀初頭のインテリゲンツィヤは西欧文化の終焉に対する意識を一層強くした。ロシアのインテリゲンツィヤが共有していた西欧批判を助長したのがシュペングラーの著作といえる。西欧文化の終焉をつける思想家が西欧の中から誕生したことも、シュペングラーの著作を革命後のロシアで普及させる原動力となった。その結果、B・ピリニャーク、И・エレンブルグ、A・トルストイ、A・プラトノフらの作品に「シュペングラー・テキスト」とも呼ぶべき現象が発生している。ソビエト作家たちは各自の問題意識をもって『西洋の没落』に反論し、あるいは同調し、その歴史哲学を援用した。さらに踏み込んでいえば、『西洋の没落』そのものが初期ソビエト文学の中で一つの文化様式を生んだといっても過言ではない。

シュペングラーの歴史哲学は西欧近代社会の文脈で成立したものであるにせよ、その歴史哲学にはロシア思想家たちの足跡も認められるほか、シュペングラーはロシア文明、あるいはソ連文明誕生の可能性をも指摘していた（『プロシア体制と社会主義』）。ロシアのインテリゲンツィヤが西欧という他者の鏡に映った祖国の未来を見極めようと躍起になったのは必然といえよう。

一方、ソ連当局の公式見解でシュペングラーの著作は、帝国主義のディレッタンチズムとして敵視された。白系ロシアとの内戦に勝利したソ連政府は国内に残った反共勢力の摘発

に着手し、その一環でシュペングラーの歴史哲学にも嫌疑をかけた。その典型的な例として、レーニンは「プラウダ」紙（1922年5月5日）に掲載した記事「『プラウダ』十周年記念にむけて」の中でシュペングラーを批判した。

古臭いブルジョアと帝国主義の西欧は自分が地球の中心であるかのような勘違いをしてきたが、この西欧は最初の帝国主義戦争で臭い腫物のように腐って破裂した。シュペングラーの類いや、彼らに感動できる（あるいは、その本を読む）教養ある商人どもがどれほどすすり泣いても、古い西欧の衰退は世界にはびこるブルジョアを撲滅する歴史で最初のエピソードにすぎない。ブルジョアは帝国主義的に盗みを働くことで私腹を肥やし、地球に暮らす大半の人々を抑圧しているのだ。<sup>39</sup>

このようにレーニンは、悪しき「ブルジョア社会」の思想家としてシュペングラーを提示し、ソ連社会のシュペングラー・ブームに歯止めをかけようとした。後述する通り、革命直後の文壇では、シュペングラー論が次々と発表され、その歴史哲学を積極的に評価しようとする動きがみられたほか、その歴史哲学は簡略化された形でソ連の日常へと浸透し、大衆の間でも広く人口に膾炙した。レーニンが発行部数の最も多い共産党機関紙の「プラウダ」からシュペングラー批判を行ったことから、『西洋の没落』がソ連社会に与えた影響力の強さが理解できる。

ソ連当局は西欧社会とロシアの思想的影響関係の阻止を急務とした。レーニンは「プラウダ」からシュペングラー批判を行ったほか、ソ連刑法の法案を極めて重く設定するとともに、思想的・政治的異分子の排除に乗り出した。その例としてレーニンは1922年5月15日に政治犯の処罰強化を命令する書付けを法務人民委員のД・クールスキイに送り、最高刑の大幅な適用範囲拡大を命じると同時に、政治的・思想的異分子を「国際的ブルジョアジー」の工作員、スパイとして処罰する方針を提案した（「私の考えでは、銃殺の適用を拡大する必要がある」）。<sup>40</sup>そのほか、レーニンは5月19日に国家政治保安部長官のΦ・ジェルジンスキイに手紙を出し、「反革命」に協力する作家や大学教授の国外追放措置を命じた。異分子の特定に際してレーニンは次のような方法を提案している。

---

<sup>39</sup>. Цит. по: Ленин В.И. Полн. собр. соч. М., 1964. Т. 45. С. 174.

<sup>40</sup>. Там же. С. 189-191.

同志ジェルジンスキイ！ 反革命に加担する作家や教授の国外追放についてだ。

これは用意周到に準備しなくてはならない。しかるべき用意をせずに着手して馬鹿を見るのは我々の方だぞ。〔中略〕

政治局員に一週間当たり2～3時間を割かせて、一連の本や出版物を監督させるのだ。その際、一刻の遅れも許さずモスクワにあらゆる非共産党系の出版物を郵送させ、書評を提出させること。

一連の共産党系文学者による書評を加えること（ステクロフ、オリミンスキイ、スクヴォルツォフ、ブハーリン等）。

教授、並びに作家の政党歴、職業、文芸活動歴に関する体系的情報を集めること。

これらすべての仕事を**国家政治保安部**で教養があり、几帳面で物分かりが良い人材に一任すること（強調はレーニン——筆者注）。<sup>41</sup>

国内の政治的・思想的異分子を排除するため、レーニンは体系的な措置を国家保安局に命じた。その結果、『西洋の没落』に肯定的な評論を書いたH・ベルジャーエフ、C・フランク、Φ・ステプンをはじめとするインテリゲンツィヤは1922年8月に次々と逮捕され、同年の秋に反革命分子として国外追放処分を受けた。もちろん、彼らの中にはその処分を喜んで受けた者もいる。その例として、ステプンは国家政治局員の取り調べに際し、ボリシェビズムを民衆の「とても複雑な宗教的、道徳的病気」の結晶と批判しており（1922年9月22日）、進んで亡命の道を選んだことがわかる。<sup>42</sup>

1922年に国外追放処分を受けたインテリゲンツィヤは数多くあげられる。いずれの「反革命分子」も、ソ連当局の許可なく帰国した際には最高刑でもって処罰されることが事前に告知された。1922年の秋に国外追放処分を受けた学者、思想家、文学者の数は60名以上にも上り、追放者を乗せてペトログラードの港を出航した船は後に「哲学者の船」の名称で知られるようになった。<sup>43</sup>「哲学者の船」の出航と同時にソ連の文壇でシュペングラーの名前

---

<sup>41</sup>. Там же. Т. 54. С. 265.

<sup>42</sup>. См.: Макаров В.Г. и др. (сост.) Высылка вместо расстрела. Депортация интеллигенции в документах ВЧК - ГПУ. 1921-1923. М., 2005. С. 336.

<sup>43</sup>. 同年の秋にはモスクワ大学教授のH・ノヴィコフや、И・イリイン、B・ストラトノフのほか、



が取り上げられることはまれになった。そして後述する通り、シュペングラーに関する議論は次第に文学作品の中にサブ・テキストとして織り込まれ、内面化していく。なぜシュペングラーの歴史哲学がソ連で幅広い反響をもたらしたのかを明らかにすべく、ここからはシュペングラーの歴史哲学に焦点を当てたい。

シュペングラーの代表作『西洋の没落』は文化と文明の関係を扱った歴史哲学の記念碑的大著である。世界大戦を経験し、荒廃を極めた戦後の西欧社会において、文化と文明の問題は重要な問題意識であった。ロシアの歴史学者 C・アルタモシンは大戦下の西欧社会における文化と文明の対立を次のように分析している。

イギリスとフランスは文明を守るために蛮族とたたかっているのだと強調した。ドイツ側は、文化を守るために文明と戦っているのだと指摘した。「文化と文明」というアンチテーゼはドイツ思想にとって特徴的だった。そして第一次世界大戦におけるドイツの敗北を通してシュペングラーは政治的評論活動に身を投じる必要性に迫られた。<sup>44</sup>

西欧の知識人らは文化と文明の関係性を見直す必要に迫られていた。シュペングラーはそれぞれの文化の独自性と独立性を擁護したが、それはドイツ文化の不完全性の認識とその復権をかけた夢に起因しているとアルタモシンは考えている。<sup>45</sup>

『西洋の没落』の中でシュペングラーは世界のあらゆる文化を「優れた文化」と「劣った文化」の二つに分類し、優れた文化のみが偉大な文明を築く可能性を秘めていると主張する。シュペングラーの言う「偉大な文化」はエジプト、アラブ、古代ギリシャ（あるいはアポロンの）、バビロン、インド、古代中国、メキシコ、そして西欧（あるいはファウスト的）である。シュペングラーによれば、歴史は人類史の本質と内的形式を体現していない「日付」や「事実」の無機的な蓄積ではない。人類史の本質を理解するにはすべての「偉大な文化」

---

社会学者の П・ソローキン、宗教哲学者の C・ブルガーコフ、文学者の B・ローゼンベルク、B・クドリャーフツェフ、Ю・アイヘンワリドなど、数多くの知識人、宗教家が国を追われた。

<sup>44</sup>. Артамошин С. О. Шпенглер и «консервативная революция» в Германии // Вопросы истории. 2009. № 6. С. 149.

<sup>45</sup>. Там же. С. 150.

に共通する「始原形式」（つまり、共通の形態）を明らかにする必要がある。<sup>46</sup>シュペングラーはそれぞれの文化を形態的に論じたが、文化の本質は有機体としてとらえていた。『西洋の没落』でシュペングラーは次のように文化の概念を定義している。

**文化とは生物体である。**世界史はその全体の伝記である。巨大な中国文化史、あるいはギリシャ・ローマ文化史は、形態学的に言えば、一個の人間、動物、樹木、または花の小歴史と正確な対象となっている。これはファウスト的な眼識にとっては、要求ではなく、経験である。植物と動物との比較形態学は、至るところに繰り返されている内的形式を究めようとする者に、以前から、その方法を用意していた。つぎつぎに起り、互いに並んで成長し、触れ合い、影を落とし合い、押し合う個々の文化の運命の中に、あらゆる人間歴史の内容が尽くされている（強調はシュペングラー——筆者注）。<sup>47</sup>

『西洋の没落』で特徴的なのは文化と文明の定義である。文化は神話的世界、あるいは歴史感覚を持たない無時間性の状態に始まり、宗教的高揚、民族意識の発達という特徴で理解されるのに対し、文明は唯物史観の勃興、民族意識の消滅、世界都市への発達という特徴によって定義されている。つまり、文化は精神性（宗教性）あふれる社会の発達段階であるのに対し、文明は社会が世界都市化し、唯物史観が支配的観念になった状態といえる。そしてシュペングラーは文明を文化の宿命的にたどり着く終着点として認識している。文化が四季さながら自らの成長を成し遂げて、冬の時期にたどり着いたその形態をまさにシュペングラーは「文明」と呼んだ。

文明とは、一つの文化の不可避な**運命**である。ここで、歴史的形態学という、最後の、そうして最も重大な問題を解くことのできる頂点が究められた。文明とは高度の人間種が可能とするところの、**最も外的な、また最も人工的な状態**である。文明とは終結である。文明は成ることに続く成ったものであり、生に続く死であり、発達に続く固結であり、ドリス様式とゴシック様式とが示す通りに、田舎と精神的孩子とに続く知的老年と自ら石造であるとともに石化させる世界都市とである。文明とは取消し難くも一つ

---

<sup>46</sup> オスワルド・シュペングラー（松村正俊訳）『西洋の没落』五月書房、1971年、111頁。

<sup>47</sup> 前掲書、111頁。

の終末である。しかしいくつかの文明は、最も深い必然によって、幾度となく現れたのである（強調はシュペングラー——筆者注）。<sup>48</sup>

このように文明は文化の延長線上にあるものとして定義されている。シュペングラーによれば、文化は民族の歴史が「成る」という有機的な成長過程であるのに対し、文明は文化の行き着く結果、「成った」である。さらにシュペングラーは一つの文化が別の文化によって代替されることはないとし、文明を築き得た全ての「偉大な」文化の独自性を主張する。各文化は形態的に同様の発達をとげるが、各文化には独自の精神世界と思考様式があり、それらが別の文化によって代替されることはない。その例として、シュペングラーはアラビア世界とギリシャ・ローマ世界にみられる認識論の差を指摘しているが、それは教養や科学的認識における進歩の度合いを示すものではなく、それぞれの世界観の独自性（あるいは独立性）を証明するものとして評価している。

爛熟期のアラビア思想家は、——その中には、アルファワビやアル・カビのような一流の頭脳があった——アリストテレスの存在論に対する論争において、物体自体はその存在のために必然的に空間を前提しないと証明した。そうしてこの空間（すなわちアラビア的な広がり）の本質を、「ある位置にあること」という特徴から引き出して来た。しかしこれは、彼らがアリストテレスとカントとに反対して、誤謬に陥ったとか、あるいは——われわれが自己の頭の中に入って来ないことについて、好んで言いたがることであるが——彼らの頭脳がぼんやりとしていたとかいうことを示しはしない。ただアラビアの知性が、異った世界範疇を持っていたことを証するだけのことである（強調はシュペングラー——筆者注）。<sup>49</sup>

上記の例から明らかなとおり、シュペングラーの歴史哲学は西洋中心主義の否定につながっており、文化を相対的にとらえる視点が顕著である。シュペングラーの言葉を借りれば、「《世界史》はわれわれの世界像であって、《人類》の世界像ではない」。<sup>50</sup>

---

<sup>48</sup> 前掲書、40 頁。

<sup>49</sup> 前掲書、173-174 頁。

<sup>50</sup> 前掲書、25 頁。

以上のことから、シュペングラーの文明論は次のように要約できる。すべての「偉大な文化」は文明の状態へたどり着き、文化が内包する精神世界は滅びる。そして文明の誕生とともに、別の新たな力強い文化が生まれるが、その文化もいずれは文明の状態にたどり着く。このように、シュペングラーは人類共通の直線的な歴史観を否定し、文明の循環説を主張した。

西欧社会で話題となったシュペングラーの『西洋の没落』はソ連と亡命ロシアでも少なからぬ追従者を見出した。『西洋の没落』はドイツ本国よりもロシアでより広く読まれたと考える研究者も見られる。<sup>51</sup>周知の通り、十九世紀以降のロシアではドイツ哲学に対する関心が伝統的に強かった。モスクワ大学はその一大中心地で、H・スタンケーヴィチ主導のもとにヘーゲル学派が興っていた。そのためロシアでシュペングラーが注目されたのは当然の帰結といえる。ソ連で『西洋の没落』が出版されたのは1922年だが、知識人の間では翻訳の刊行以前からその内容は知られており、1921年にはシュペングラーに関する討論会がモスクワとペトログラードで行われている。<sup>52</sup>こうしたシュペングラー・ブームの結晶ともいえるのが、道標派の宗教哲学者らが発表した論集『オスワルド・シュペングラーと西洋の没落』（1922）である。この論集はソ連の文壇で多様な反応を呼んだ。<sup>53</sup>

論集『オスワルド・シュペングラーと西洋の没落』にはΦ・ステプン、C・フランク、H・ベルジャーエフ、Я・ブクシュパンといった道標派の知識人らが寄稿し、詳細な解説を加え

---

<sup>51</sup> エドワード・バーリィシェフ「第一次世界大戦における日露接近の背景：文明論を中心として」『スラヴ研究』52号、2005年、214頁。

<sup>52</sup> ソ連でシュペングラーの歴史哲学に対する議論は1921年の夏に始まった。7月23日と7月30日にはB・バザーロフが「西欧文化の没落」という表題でモスクワの社会主義アカデミーで報告を行った。また11月27日にはΦ・ステプンがモスクワの国立芸術学アカデミーГАХНで「西洋思想における主知主義の危機」という表題で報告を行った。См.: Кочетова Л.М. (ред.) Литературная жизнь России 1920-х годов. События. Отзывы современников. Библиография. Т. 1. Ч. 2. Москва и Петроград. 1921-1922 гг. М., 2006. С. 103, 236-237.

<sup>53</sup> その例として、道標派の論集が出版された後、「オスワルド・シュペングラーと評論家たち」（B・バザーロフ）、「道標派哲学者のシュペングラー論」（K・グラシス）、「現代の帝国主義を支える哲学：シュペングラーについてのエチュード」（Г・ピャトコフ）といった論文が矢継ぎ早に発表された。レーニンがシュペングラー批判を行ったのも、道標派が論集を出版した後である。

ながらソ連の読者にシュペングラーの歴史哲学を好意的に紹介した。その例として、ベルジャーエフの論文「死の床に伏したファウストの思惑」を取り上げよう。

ベルジャーエフはここでファウストの名を持ち出しているが、それはシュペングラーが西欧文化の象徴をゲーテのファウスト的精神、つまり、永遠の命を獲得しようとする際限のない意思に見出したためである。ベルジャーエフは『西洋の没落』を「傑作で、時に天才的でさえある」と評し、シュペングラーの洞察力を高く評価した。<sup>54</sup>ベルジャーエフは次のように書いている。

ロシアは西と東の仲介者である。そこでは世界史を貫く二つの流れ、東洋史と西洋史が衝突する。ロシアには我々でも完全に解き明かせない神秘が隠されている。しかし、この神秘は世界史にひそむ何かしらの問題を解きほぐす鍵を握っている。我々の出番はまだ訪れていない。それは西欧文化の危機のあとにやってくるだろう。であるからこそ、シュペングラーが書いた本のような著作に我々は興奮を覚えるのだ。このような本は西欧人ではなく我々が読むべきだ。これは我々の様式にかなった本だ。<sup>55</sup>

周知のとおり、ロシア思想史においてはドストエフスキイの『冬に記す夏の印象』に始まり、西欧文化の危機を論じる著作が数多く執筆されてきた。ベルジャーエフもまた西欧文化に批判的な著作を数多く執筆してきた人物の一人である。ベルジャーエフは第一次世界大戦前に『創造の意味』を執筆、その中で西欧文化の危機について警鐘を鳴らした。その後、矢継ぎ早に『ロシアの運命』を執筆し、「西欧の黄昏は始まりつつあり、文化の独占者然とした西欧は終わりを迎えつつあり、文化は別の大陸、別の人種を求めて西欧圏を飛び出した」と記した。<sup>56</sup>ベルジャーエフは『西洋の没落』を高く評価しつつも、その問題意識は決して斬新とはみなさなかった。ベルジャーエフの考えによれば、シュペングラーの歴史哲学の源流はロシアにあったのである。

---

<sup>54</sup> Бердяев Н.А. Предсмертные мысли Фауста / Освальд Шпенглер и закат Европы. М., 1922. С. 57.

<sup>55</sup> Там же. С. 72.

<sup>56</sup> Там же. С. 56.

インテリゲンツィヤは『西洋の没落』にロシア思想の遺産を認めた。その例として、ロンドン大学で教鞭を取った亡命ロシアの思想家 Д・スヴァトポルク＝ミルスキイはシュペングラーの歴史哲学に強い影響を与えた思想家として Н・ダニレフスキイの名を挙げている。<sup>57</sup>その代表作『ロシアと西欧』はロシアにおける文明論の先駆的労作で、ダニレフスキイは各文化の独立性を主張し、短絡な西欧化に異を唱えたことで有名である。スヴァトポルク＝ミルスキイは自著『ロシア文学史』でダニレフスキイの歴史観を次のように説明している。

彼は西欧文明にとって代わるべき新たな文明の萌芽をロシアとスラヴ民族の中に見ていた。彼はどんな点においてもロシアを西欧よりも偉大とみなすことはなかった。ロシアは西欧ではないのだから、ロシアは自らのあるべき姿を探すべきだと考えただけなのである。しかし、それはロシアが西欧よりも優れていて、神聖だからではない。西欧ではないにもかかわらず、西欧の真似をすることは、出来損ないの猿がやることだと考えたのである。<sup>58</sup>

スヴァトポルク＝ミルスキイは『西洋の没落』におけるダニレフスキイの影響を信じて疑わなかった。また、アメリカに亡命した社会学者 П・ソローキンも同様にシュペングラーとダニレフスキイの歴史哲学に類似性を認めている。<sup>59</sup>

シュペングラーとダニレフスキイの影響関係については賛否両論あるにせよ、その共通項は文化の有機体論に集約できるだろう。植物学者でもあったダニレフスキイは文化を有機体として捉え、ロシア文化をもまた独自の個体として論じた。文化を有機体として認識する傾向は『西洋の没落』にも顕著である。すでに見た通り、シュペングラーは文化の発達を自然さながら四季に分類して認識し、いずれの文化にも宿命的な終わりとしての文明が待ち受けていると考えた。いずれの文化も、植物さながら、みずからの風土に適した形で発達すると考えたのである。『西洋の没落』には次のような一節が認められる。

---

<sup>57</sup>. Цит. по: Святополк-Мирский Д. История русской литературы с древнейших времен по 1925 г. Новосибирск, 2009. С. 509.

<sup>58</sup>. Там же.

<sup>59</sup>. Сорокин П.А. Российская шпенглерiana: начало великой ревизии // Социология. 2007. №1. С. 218.

文化は、その本質において、植物と類が同じである。そうしてこれらの文化は、その全生涯を通じて、自己の生れ出た土に結び付けられている。そうして一文化の人間が運命を把握し、体験する方法は、たといその像が個々の人間によって非常に異なった色で染められているにしても、結局類型的である。<sup>60</sup>

このようにダニレフスキイとシュペングラーの文化論は類似していることがわかる。ピョートル大帝の改革に関する判断に関しても、その評価は酷似している。文化は種子さながら特定の大地に着地し、その大地の環境に適応した形の成長を遂げるのであって、ピョートル大帝が推し進めた人為的西欧化は不毛だとシュペングラーは考えた。『プロシア体制と社会主義』（1920）でシュペングラーはピョートル大帝の西欧化を次のように批判している。

ピョートル大帝は真にロシア的な王国を改革し、西欧国家体制の列強へ仲間入りしたが、その結果として王国の自然な発達に弊害をもたらした。インテリゲンツィヤは真にロシア的な精神を代弁するが、その精神は異国のお手本に従って作られた街によって腐敗しており、この国の根源的な思考形式を歪曲したのである。<sup>61</sup>

ピョートル大帝の西欧化はロシア民族の自然な発展を阻害した負の歴史としてシュペングラーの目に映っていた。それぞれの民族は置かれた風土の中で成長すべきであり、人為的な改革は民族の発展に害をもたらすと考えたのである。人為的な改革は功を奏するのもし早ければ、形骸化し腐敗するのもし早い。西欧のマルクス主義に感化されたボリシェビキの十月革命はシュペングラーにとって根なし草の思想的暴挙でしかなかった。その点においてシュペングラーとスラヴ主義者たちは共通の結論に至ったといえる。シュペングラーは西欧化がロシア社会に与えた影響を表面的なものとして扱っている（『プロシア体制と社会主義』）。

---

<sup>60</sup> シュペングラー『西洋の没落』145頁。

<sup>61</sup> Цит. по: Шпенглер О. Пруссачество и социализм. М., 2002. С.149.

西欧的特色を獲得したロシアの都市に暮らす人々と交流すると、その印象から騙されそうになる。仮に我々の眼前に帝政ローマ期の住人や孔子が生まれる前の中国人が現れたとしよう。真のロシア人とはその本質において我々にはそれほど異質なのである。

62

このようにシュペングラーはロシアの西欧化が部分的で表層的なものであったと考え、ロシア固有の発展の可能性と真にロシア的な文化を探求する必要性を説いた。これこそシュペングラーが「ドイツのスラヴ主義者」と言われる所以だろう。

道標派の哲学者らは『西洋の没落』を好意的に受け入れたが、そのシュペングラー論には批判的側面も見出せる。批判の理由はシュペングラーの歴史哲学に見られる精神性、宗教性の欠如に集約される。その例として論文の中でベルジャーエフはシュペングラーが宗教の問題を取り扱っていない点に批判を加えた。「死の床に伏したファウストの思惑」でベルジャーエフは次のように書いている。

シュペングラーには非宗教的な特徴がみられる。ここに彼の悲劇がある。彼の信仰心はまるで萎縮したかのようだ。〔中略〕彼自身、非宗教的であるばかりか、人類の宗教生活を理解していない。彼は西欧文化の運命におけるキリスト教の役割を見過ごしているのだ。これが彼の本で最も驚愕させる側面である。これこそが精神的不具であり、われわれをぞっとさせるのだ。キリスト教徒でなくとも、西欧文化史におけるキリスト教の意義は理解できるものだ。客観的に論じればそれは自明のことだ。だがシュペングラーはそんな客観性など、気にもかけない。<sup>63</sup>

シュペングラーはそれぞれの文明は独立したものとして認識し、人類の統一というものはない、またその必要もないと主張したが、ベルジャーエフによればキリスト教こそがその「全人」的本質において諸民族を統一できるものである以上、シュペングラーの非宗教的歴史哲学は紀元前の世界に逆行するのと同じであり、世界史における宗教の役割を重

---

<sup>62</sup> Там же. С. 147.

<sup>63</sup> Бердяев. Предсмертные мысли Фауста. С. 59-60.



要視する考えを見せた。ベルジャーエフの言葉を借りれば、「信仰を失い、没落へと傾いた文化の悲しみ」こそがシュペングラー哲学の基礎にはある。<sup>64</sup>

このように、ベルジャーエフとシュペングラーは西欧文化の衰退を認識した点で共通しているが、前者が宗教性豊かな文化を志向したのに対し、後者は「文化の死」と引き換えに文明を歓迎したといえる。ベルジャーエフは『西洋の没落』の特徴を端的に次のように評価している。

シュペングラーの特徴は次の点にある。彼はロマン主義者であることを望まず、死にゆく過去の偉大な文化を想って悲しみもしない。彼は今を生きようとするのであり、文明の興奮とともにあることを願うのだ。<sup>65</sup>

以上から明らかな通り、ベルジャーエフとシュペングラーの対立は『西洋の没落』に見られる宗教性をめぐったものであった。亡命ロシアでもまたシュペングラーの同調者は現れた。その最たる例として重要なのがユーラシア主義の思想的運動である。ユーラシア主義者たちもシュペングラーと同様にロシアの西欧化を疑問視し、ロシア文化再考の必要性を痛感していた。

ユーラシア主義は 1920 年ころに起った反共の思想活動であった。<sup>66</sup>その原点は言語学者の H・トルベツコイが 1920 年に発表した文化論『西欧と人類』にある。亡命ロシアの一大

---

<sup>64</sup>. Там же.

<sup>65</sup>. Там же. С. 67.

<sup>66</sup>. その勃興においてユーラシア主義はロシア文化の再考を課題とする反西欧中心主義の思想的運動であったが、様々な文化的・政治的要因が重なった結果、共産主義に代わる新たなイデオロギーを求める政治運動へと変容していった。その過程でユーラシア主義者たちは『ユーラシア主義：体系的記述の試み』（1926）を発表し、共産主義を批判するとともに、それに代わる新たなイデオロギーを探求する必要を訴え、政治活動にも着手する姿勢を見せた。ユーラシア主義はソ連の国家政治保安部による介入の結果、1930 年代に親ソ派と反ソ派に分裂した。そして、親ソ派の多くはソ連に帰国、いずれのユーラシア主義者たちも粛清という悲劇的な運命をたどった。一方、反ソ派のユーラシア主義は 1930 年代に自然消滅していった。ユーラシア主義者らはシュペングラーと近い問題意識を抱えていたとはいえ、その影響下にはなかった点を主張してい

拠点であるソフィアで発表されたこの文化論でトルベツコイはピョートル大帝以降のロシアで進められてきた西欧化の歴史と西欧中心主義を痛烈に批判し、多文化共生主義の重要性を訴えた。

ユーラシア主義におけるロシア文化の源流とはロマン・ゲルマン文化ではなく、ビザンティン文化に他ならない。ピョートル大帝以前のロシア文化はビザンツ帝国の影響を強く受けたものであった。しかし、西欧化の結果、ビザンツ的ロシアはロマン・ゲルマン民族の様式に倣った発展を余儀なくされた。トルベツコイはピョートル大帝の西欧化政策を次のように評価している。

この改革の瞬間からロシア人はロマン・ゲルマン文化の精神に占領され、その精神に則って活動することとなった。前述の理由から、ロシア人はこの課題を遂行するには有機的に不向きであった。そして実際に、ピョートル大帝以前のロシアがその文化的側面において、ビザンツ帝国の最も天分に恵まれ実り豊かな後継者であったとするならば、ピョートル大帝以降のロシアはロマン・ゲルマン民族の「方針」に加わり、西欧文化の尻尾に、文明の袋小路におかれたのである。<sup>67</sup>

---

る。サヴィツキーは1926年に開催された講演会の中でシュペングラーについて次のように主張している。「ドイツ（シュペングラー）で打ち出された主張とは独立して、しかしこうした思想家の登場とほぼ同時にユーラシア主義者たちは現代『ヨーロッパ』文化（つまり、一般的な用語を用いるのであれば、西欧文化）の『絶対性』を否定するテーゼを掲げた」。Цит. по: Савицкий П. Континент Евразия. М., 1997. С. 85. さらに『西洋の没落』に見られる文化の差別主義を批判（「劣った文化、優れた文化というものは存在しない」）、ユーラシア大陸を中心としたロシア文化の創造を主張した。

ユーラシア主義者らは自らの歴史哲学の独自性を守ろうとしたが、『西洋の没落』との類似性は否めない。それは、ユーラシア主義、そしてシュペングラーともにその歴史哲学の源流がダニレフスキイをはじめとする十九世紀ロシアのスラヴ主義に源流をもつものであったからである。См.: Трубецкой Н.С. История. Культура. Язык. М., 1995. С. 7. ユーラシア主義者らは、十九世紀のスラヴ主義から主な特徴を受け継いだが、その文化論は宗教性を重んじる点においてシュペングラーとは見解を異にしていた。

<sup>67</sup> Трубецкой. Н.С. Исход к Востоку. // Пути Евразии. Русская интеллигенция и судьбы

シュペングラーと同様にユーラシア主義者たちもまた西欧中心主義の否定を出発点とした。彼らは世界的な西欧型近代化を「人類の悪夢」と呼び、各文化の独自性保存を主張した。ユーラシア主義者の考えによれば、西欧文明は全人類にとって共有されるべきものではなく、ロマン・ゲルマン民族文化の土台を築いたにすぎなかった。本来的なロシア文化とロマン・ゲルマン文化の解離性は決定的である。トルベツコイは続けて次のように記している。

真の自己認識は人間（あるいは民族）に本当の位置を示すものである。それは人間が宇宙の中心でもなく、また地球のヘソでもないことを教えてくれるのだ。そしてこの自己認識があってこそ人間（あるいは民族）は自己の本質を悟り、自己認識する自分自身や、同様に自己認識に励む他の人々もまた中心や頂点に位置するのではないことが明らかになるのである。<sup>68</sup>

このようにユーラシア主義者たちもまた西欧文化の没落を認識し、西洋ではなく東洋への関心を逞しくした。トルベツコイの言葉を借りれば、「世界史の一時代とそれに続く時代を隔てる歴史的陣痛がすでに始まったことを我々は知っている。西欧世界の代替は東洋からやってくると我々は信じて疑わない」。<sup>69</sup>まさに東洋こそが没落していく西欧文化に代わる代替の文化として注目されている。

道標派の哲学者と同じく、ユーラシア主義者たちもまた没落した西欧文化にとって代わる新たな文化の光は東洋から上ると考えた。そしてその光を彼らは中世ロシアの文化に決定的影響を与えたビザンツ帝国に、中でも正教の中に探求したのである。さらにトルベツコイはドイツの出版社からパンフレット『チンギスハンの遺産：西洋ではなく東洋から見たロシア史』（И・Рのイニシャルで発表）を発表、この中で著者は「タタール・モンゴルの軛」が中世ロシアに与えた肯定的側面を指摘した。トルベツコイによればロシアは領土、政治体制、文化、そのいずれにおいてもモンゴル帝国の継承国であり、ロシアが今日の姿で発展し

---

России / Под ред. И.А. Исаева. М., 1992. С. 338.

<sup>68</sup>. Там же. С. 317-318.

<sup>69</sup>. Там же. С. 313.

ているのは「チンギスハンの遺産」を受け継いでいるからに他ならないと主張、東洋としてのロシア史をソ連の読者に提示しようと試みた。<sup>70</sup>

このように『西洋の没落』刊行を前後として、「西か東か」の問題意識はソ連と亡命ロシアの思想界で盛んに議論されていたが、ソ連の文壇にシュペングラーが与えた影響も看過してはならない。ソ連当局による文化統制の結果、シュペングラーに関する議論は次第に地下へと潜伏し、その過程で初期ソビエト文学にはシュペングラー・テキストとも呼ぶべき現象が生じた。ここからは様々な作家の作品に発生したシュペングラー・テキストに着目し、その機能的役割について分析を加えていく。

### 1-2-1. ソビエト文学と『西洋の没落』

レーニンによるシュペングラー批判の後、ソ連の文壇でその名前が公に、しかも肯定的に論じられることはなかった。しかし、『西洋の没落』は初期ソビエト文学の形成に多大な影響を与えたことは明白である。ソビエト文学を代表するИ・エレンブルグが「雪解け」後に発表した自伝『わが回想——人間・歳月・生活』では革命後のソ連社会で巻き起こったシュペングラー・ブームの様子が見いだせる。エレンブルグはシュペングラーが誇った絶大な人気を次のように回想している。

シュペングラーの著作を読んだ人は少なかったが、彼の本『西洋の没落』（ロシア語には『ヨーロッパの没落』と翻訳された）の名前は誰でも知っていた。この本の中で彼は自分が生まれ育った文化の死を嘆いたのだった。恥知らずの投機家たち、人殺し、無頼漢の新聞屋など、誰もがこぞってシュペングラーを話のネタにした。死ぬ時間がやってきたんだ、綺麗子ぶってどうなる、と。「西洋の没落」という香水まで現れる始末だった。<sup>71</sup>

---

<sup>70</sup> 『チンギスハンの遺産』は学術的性格よりも政治的意味合いをより多く含んだため、トルベツコイは本名での出版を拒び、「И・Р」というイニシャルで発表した。Подр. см.: Трубецкой. История. Культура. Язык. С. 672.

<sup>71</sup> Эренбург И.Г. Люди, годы, жизнь: Воспоминания в 3 т. М., 1990. Т. 1. С. 386.

このようにシュペングラーの著作は文壇のみならず、日常の深奥にまで入り込んだ社会現象であることがわかる。もちろん、「哲学者の船」が出航して以来、ソ連ではシュペングラーが肯定的に公に論じられることはなかったが、「誰もかれもがこぞってシュペングラーを話のネタにした」。そしてエレンブルグ自身もまたシュペングラーを「話のネタ」にした一人であった。

ロシア・フォルマリズムの代表的な論客 IO・トゥィニャーノフは、評論「文学的今日」（1924）の中で初期ソビエト文学に見られたシュペングラー・ブームを取り上げ、その最たる例としてエレンブルグの作品世界に着目した。評論の中でトゥィニャーノフはエレンブルグの作品世界で乱用される『西洋の没落』のテーマをアイロニカルに論じている。

現在、西欧的小説の大量生産にいそしんでいるのがイリヤ・エレンブルグである。彼の長編小説『フリオ・フレニトの遍歴』は大変な人気を誇っている。ありとあらゆる物語の中で信じられないほど多くの流血事件が起こったり、登場人物たちは長々と考えたり、そんな小説に読者は少し疲れたに違いない。エレンブルグは「真面目さ」を軽減し、流血事件で流すのを血ではなくて、フェリエトンのインクに替えた。そして彼は登場人物の心理を引っこ抜き、でっち上げの即席哲学で上から肉詰めする。エレンブルグ哲学にはドストエフスキイ、ニーチェ、クローデル、シュペングラー、そしてありとあらゆる哲学者が加わったのだが、いや、であればこそかもしれない、エレンブルグ作品の登場人物は綿毛よりも軽くなってしまって、登場人物は単なるお笑い種でしかない。<sup>72</sup>

エレンブルグは革命前後に西欧諸国を遍歴しており、ソ連の文壇では国際的な作家の評価を誇った。<sup>73</sup>そして西欧のテーマを巧みにちりばめた作品を矢継ぎ早に発表し、大衆読者

---

<sup>72</sup> Тынянов Ю. Поэтика. История литературы. Кино. М., 1977. С. 153-154.

<sup>73</sup> エレンブルグは作品の題材を集めるべく、ソ連のパスポートを持って西欧へ赴いた。エレンブルグが親ソ派であると知れると、亡命ロシア人の多くはエレンブルグに背を向けた。エレンブルグは『わが回想』で次のように記している。「ブーニンとはトルストイのもとで顔を合わせた、彼は私と口をきかなかった。すると、親友のアレクセイ・ニコラエヴィチは面子を失って、優しくつぶやいた。『イリヤ、お前は馬鹿な真似をしたよ……』。ソ連のパスポートを持って出国したことを告げると、亡命ロシア人たちは背を向けた。憤った人もいれば、恐る恐る私を見る人

の間で人気を誇った。こうした「世界的」作家のエレンブルグが発表した最初の長編小説が『フリオ・フレニトの遍歴』であった。この作品はベルリンの出版社「ヘリコン」から 1922 年に刊行されたが、ソ連の読者にも親しまれた。当時のソ連は戦時共産主義から新経済政策への移行期であり、ソ連社会は未曾有の混乱を経験していた。そして西欧との文化交流が盛んだったとは言えない状況下で、西欧事情に詳しいエレンブルグは人気作家の地位を獲得した。まだ駆け出しであった頃の作家 B・カヴェーリンは当時のエレンブルグを次のように回想している。

その頃のエレンブルグは私の印象の中でいくぶん霞がかっており、十三のパイプから立ちのぼる煙に彼は巻かれていた。(エレンブルグの長編小説『十三本のパイプ』を揶揄している——筆者注)

彼は何かにつけて話題になっていた。彼はボヘミアンで、朝からカフェに居座り、窓の向こうはパリ、マドリッド、コンスタンチノーポリ。書きなぐった紙が狭いテーブルに所狭しと山になり、原稿が床に落ちては大急ぎでそれをかき集め、山に積み上げて、そしてまた煙の中に消えていく。彼は口の端で笑う西欧人……<sup>74</sup>

このように、革命直後に執筆を開始した若手作家たちの間でエレンブルグは一種の権威として認識されていた。その一方、トゥィニャーノフのようにエレンブルグの権威を意に介さない評論家も見られた。エレンブルグは権威ある作家の影響をほのめかしたが、それは借用されたものにすぎず、深い重みはないと評論家は考えた。エレンブルグはシュペングラーに倣って「西洋の没落」を描いたが、トゥィニャーノフの言葉を借りれば、「作品の各章で西欧が減んで、減ばなかったのは主人公だけ」であった。<sup>75</sup>そして評論家はエレンブルグのシュペングラー依存を分析し、その不毛さを指摘している。

エレンブルグの作品で西欧が減び、そこには空洞が残る。それは鼻を失くしたコワリョフ少佐(ゴーゴリ作品の登場人物——筆者注)の顔にできた空洞のようなものだ。西欧

---

もいた。」 Цит. по: Эренбург. Люди, годы, жизнь. С. 371.

<sup>74</sup> Беляя Г. и др. (сост.) Воспоминания об Илье Эренбурге. М., 1975. С. 31.

<sup>75</sup> Тынянов. Поэтика. История литературы. Кино. С. 154.

が滅ぶ理由はクルボフ、フリオ・フレニト、イエンス・ボート（いずれもエレンブルグ作品の登場人物——筆者注）が滅ぶ理由とまったく同じである。読者はいつ、何時何分に西欧が滅ぶのかを知らんとしてエレンブルグの講義に無駄足を運ぶ。西欧はエレンブルグの文学的主人公に過ぎず、主人公らが一人残らず滅ぶのは、彼らには重みがなく、滅ぶしか能がないからである。<sup>76</sup>

トウニャーノフによれば、『西洋の没落』のテーマはエレンブルグ作品の中で表層的にしか扱われていない。シュペングラーの歴史哲学はエレンブルグの世界観と有機的に結びついておらず、作家が誇った人気は、「流行り」のテーマが組み込まれたからにすぎないとトウニャーノフは考えた。

このようにエレンブルグはソ連国内におけるシュペングラー・ブームを巧みに利用し、大衆小説を大量に生産した。エレンブルグにとってシュペングラーの歴史哲学は考察の対象ではなく、文学的登場人物の一人として借用されたといえる。

エレンブルグのシュペングラー・テキストとは趣が異なるのがプラトノフ作品である。1927年に執筆された作品『エーテルの道』を紐解くと、「アユタの書」という架空の古文書が登場するが、これは『西洋の没落』をプラトノフが小説化したもので、作家もまたシュペングラーの文明論に精通していたことがわかる。

ロシアのプラトノフ研究では近年になってシュペングラーの影響が指摘されはじめた。<sup>77</sup>『エーテルの道』が発表されたのは1968年のことで、戦後のソ連社会でシュペングラーはすでに忘れられた思想家に等しく、プラトノフ作品におけるシュペングラー・テキストはこれまで研究の対象にはならなかった。もちろん、文学的脚色を加えながら『西欧の没落』を作品の中で紹介している以上、影響と考えられなくもない。ただし、プラトノフの場合に限っては、影響よりもパロディーと呼んだほうが良いようである。作品には次のような文が認められる。

---

<sup>76</sup>. Там же. С. 154-155.

<sup>77</sup>. Матвеева И.И. Комментарии // А.П. Платонов. Эфирный тракт: Повести 1920-х – начала 1930-х годов. М., 2011. С. 516.

仏陀、ヴェーダの編纂者、数十ものエジプト人、アラブ人、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、スピノザ、カント、そしてベルグソン、シュペングラー。みなが森羅万象の本質をつきとめんとした。しかし、違う。真理を悟ることは出来ぬ。真理にはたどり着くことしかできぬのだ。世界が労働する人間の指の間を通り抜け、有益なる肉体へと変容する。そのときこそ我々は真理の完全なる獲得を成し遂げるのだ。これが 18 年前に起こり、いまだ成し遂げられてはいない革命の哲学だ。<sup>78</sup>

『エーテルの道』以降、プラトーノフがシュペングラーのテーマに回帰することはなく、その影響下にあったとは考えにくい。エレンブルグはシュペングラーを作品の登場人物として用いたが、プラトーノフはソ連における空前のシュペングラー・ブームを冷ややかに注視していたように見える。つまり、プラトーノフの場合に限っては、表層的な熱狂に対する批判精神からシュペングラー・テキストが生まれたと考えられる。

#### 1-2-2. トルストイのシュペングラー・テキスト：亡命をめぐる思惑と駆け引き

続いてソビエト文学を代表する作家 A・H・トルストイの SF 小説『アエリータ』に目を転じたい。この作品でもシュペングラーの文明論が援用されているが、それはトルストイの亡命と帰国をめぐる葛藤と結び付いている。トルストイは十月革命直後にロシアを離れ、1923 年に「赤い伯爵」として帰国するまでフランス、ドイツの各地を転々としていた。そしてトルストイが転向を果たす上でシュペングラーの歴史哲学はまたとない政治的展望を用意した。そして、その決断に少なからぬ影響を与えたのが同伴者作家ピリニャークのメシアニズムでもあった。まずは作品執筆の経緯を見てみたい。

『アエリータ』は宇宙旅行を題材として執筆された作品である。『アエリータ』が最初に単行本として出版されたのは 1923 年のことで、翌年には監督 Я・プロタザーノフによって映画化され、ソ連における SF 作品の先駆けとして長年にわたって親しまれた。当時のソ連社会では宇宙開発に対する関心が高かった。サンクト・ペテルブルグ国立理工大学で学んだトルストイは技術系の知識と題材に困ることはなく、ツィオルコフスキイのロケット理論や、アインシュタインの『相対性理論』を『アエリータ』の題材として用いた。

---

<sup>78</sup>. Платонов. Эфирный тракт. С. 34.



トルストイがこの長編小説に着手したのはベルリンに亡命していた時期のことである。『アエリータ』の構想が生まれたのは 1921 年の夏で、ベルリンに亡命していた法学者の A・ヤーシチェンコに宛てた手紙（7 月 18 日）の中で「近日中に新しい長編小説を書き始めようと思う」と書いている。<sup>79</sup>その後、執筆は中断したが、1922 年の春にトルストイは『赤い処女地』の編集長ヴォロンスキイから作品投稿の誘いを受けて快諾した。<sup>80</sup>トルストイは『アエリータ』執筆を再開、『赤い処女地』（1922 年第 6 号と 1923 年第 2 号）に連載の形で掲載した。その際、作品には主題にあたる「アエリータ」のほか「火星の没落」と副題が付されていたことは特筆に値する。こうしたテクニックを通してトルストイはシュペングラ一の『西洋の没落』と『アエリータ』の関係を読者に印象付けようとしたことは明白である（その後、副題「火星の没落」は作品の副題から削除）。

『アエリータ』は次々と版を重ねるが、1939 年に刊行された版には数多くの削除、書き換えが施されている。改作の箇所は作品全般に及ぶが、中でも革命後のソ連社会を覆い尽くしていた悲観的気運を思わせる個所の修正が目立つ。<sup>81</sup>なお、本論では 1923 年にベルリンで出版された版をもとに分析を進めていく。まずは作品のあらすじを俯瞰したい。

---

<sup>79</sup> См.: Крюкова А.М. Переписка А.Н. Толстого в 2 т. М., 1989. Т. 1. С. 291.

<sup>80</sup> 残念ながらヴォロンスキイがトルストイに宛てた手紙は残されていない。トルストイがヴォロンスキイに返信の手紙を出して、作品投稿を希望したのは 1922 年 5 月 19 日のことである。ここで、その前後のトルストイの活動を分析すると、ヴォロンスキイがトルストイに手紙を書いたのは 1922 年 4 月のことと推測される。ここで重要なのは、トルストイが亡命ロシアを批判する公開書簡を自らが編集する「その前日」のほか、ソ連共産党が刊行していた「イズベスチヤ」にも発表した点である。トルストイの公開書簡はそれぞれ 4 月 14 日と 4 月 25 日に発表された。この公開書簡は亡命ロシアからソ連へ乗り換える意思表示に他ならない。この公開書簡の中でヴォロンスキイはその意向を踏まえたうえでトルストイに手紙を出したものと推測される。

<sup>81</sup> 多岐に及ぶ修正の結果、作品の序盤で描かれるソ連国内の悲観的気運が抑えられる一方、没落に瀕した火星文明の終末感がより一層強調されている。そして滅び行く火星に対して地球はさらなる発展が約束された楽園のように提示されている。『アエリータ』の削除、書き換えに関して詳しくは『トルストイ作品集』の解説を参照。См.: Толстой А. Собр. соч. в 10 т. М., 1958. Т. 3. С. 708-711.

作品の主人公ロースィは技師である。ロースィは宇宙ロケットを開発し、元赤軍兵士のグーセフとともに火星に出発する。無事に到着した一行は、高度に発達した国家「ソアツェラ」を目の当たりにする。火星に栄える国々は、惑星の最高権力「技師最高議会」という組織によって合理的に管理されており、その最高指導者が独裁者トゥスクブである。一行はトゥスクブの娘で火星の女王アエリータに謁見し、その美しさに目を奪われる。一方、アエリータも地球人のロースィに関心を覚える。しかし、地球からの来客は火星社会で歓迎されない。地球人はアナーキズムと非合理主義の権化で、地球人と接触した火星人はその思想に魅了されていく。その結果、ロースィとグーセフは火星社会の秩序を乱すアナキストとして暗殺の憂き目にあうが、アエリータの助けで九死に一生を得る。その間、ソアツェラではトゥスクブの独裁に不満を持つ住民の間で徐々に革命勢力が育っていく。自らの権力が弱体化しているのを知ったトゥスクブは、革命勢力を壊滅するためにソアツェラ自体の破壊を主張する。トゥスクブによれば、ソアツェラの没落はあらゆる文明社会の運命であり、火星文明を救うにはソアツェラを破壊し、新たな国家を建設することが必要である。さらにトゥスクブは選ばれた特権階級の生活を支えるため、ソアツェラに犯罪者を住まわせ、彼らに強制労働の義務を提案する。当然ながら、ソアツェラの労働者はその暴政に不満を抱き、蜂起を企てる。そして革命勢力を指揮するのが元赤軍兵士のグーセフであった。しかし、グーセフの革命は失敗に終わり、逃亡を余儀なくされる。ロースィは恋人のアエリータを連れて帰ることはかなわず、グーセフと二人で地球へ帰還する。

あらすじから明らかな通り、『アエリータ』は「西洋の没落」と火星の没落が重なり合うように作られている。実際、火星の没落というテーマは作品の随所で登場する。その例として、アエリータがロースィに告げる独白から引用する。

ここは明かりもなければ、希望もない。あるのは死、ただ死だけ。太陽も大地を温めない。北極と南極の氷が解けることはもう二度とない。海は干からびていく。終わらない砂漠と銅の砂が火星を覆っていく……地球よ、地球……愛しい巨人。私を地球に連れ去って。私は見てみたい。緑の山、流れる水、雲、丸々と太った動物、巨人を……死にたくない……<sup>82</sup>

---

<sup>82</sup>. Цит. по: Толстой А. Аэли́та. Берлин, 1923. С. 168.

このように火星社会では未曾有の終末思想が蔓延している。火星に到着後、主人公のローシィもまたソアツェラの終末思想に影響を受ける。次に見る例でローシィは火星を彼岸として、そして地球を此岸として見ている。ローシィの中で火星は死者の国として認識されており、生命力にあふれる地球への憧憬が描かれている。

そう、そうだ、そうなんだ、——ローシィは言った——私がいるのは地球じゃない。地球はあそこに、氷の砂漠、無限の空間の向こうにある。こんなに遠くまで来てしまったのか。私がいるのは新世界。そう、私は死んだも同然だ。わかっている。私の魂は地球に置き去りのままだ。<sup>83</sup>

さらにこの終末意識は、火星の描写でも強調されている。その例として『西洋の没落』はロシア語で *Закат Европы* だが、没落を意味するロシア語の *закат* は「日没」も意味する。作品中では頻繁に日没が描かれており、「日没」という章が設けられているほどである。つまりトルストイはテーマ的にも、そして語彙的にも火星文明の没落を強調していることが分かる。<sup>84</sup>さらにこの小説には「アエリータが語る二つ目の物語」という章があり、地球に栄えた様々な文明の興亡が記された書物が登場するが、これはシュペングラーの文明論を簡略に書き換えたものにほかならない。

このように、トルストイもまたシュペングラーの歴史哲学に関心を持っていたことがわかる。シュペングラーとトルストイの関係についてはソ連時代の研究者も着目していた。ソ連時代に出版された『トルストイ作品集』（1958）の解説を見ると、シュペングラーとトルストイの「論争」に関して興味深い指摘がある。

---

<sup>83</sup>. Там же. С. 88.

<sup>84</sup>. 『アエリータ』に見られるザカートの頻繁な使用についてはこれまでも言及されてきた。ソ連時代の研究では語彙レベルにおける「没落」の強調は、シュペングラーの歴史哲学への反論と解釈されている。См.: Плужникова Т.И. Выражение художественного времени языковыми средствами в романе А.Н. Толстого «Аэлита» // Вопросы русской литературы. 1985. Вып. 46. С. 73.

作家は火星の生活と社会を描き、その惑星に住む抑圧された住民の激しい反乱、人民議長ゴル・の葛藤を映しながら、ギルバート・ウェルズの社会論やオスワルド・シュペングラーの悲観的な懺悔『西洋の没落』、そしてブルジョア社会におけるその他の哲学的理論にカモフラージュの形で反駁した。A・トルストイは「選ばれた人々のための文明」を守ろうとする火星の独裁者トゥスクブを描きつつ、ファシズムのイデオロギーと共通の特徴を持つ独裁者の視点に見られる反民衆的性格を暴き出した。<sup>85</sup>

このようにソ連時代の解説で『西洋の没落』はファシズムと同様のレッテルを張られていた。そして、トルストイがシュペングラーの歴史哲学を援用したのは、その「反民衆的性格」の思想に反論するためと解釈されていた。すでに見た通り、シュペングラーの歴史哲学はレーニンの批判を呼んだが、亡命ロシアを生きたトルストイもまたシュペングラーを「ブルジョアの論客」として批判していたのであろうか。ここからは、より具体的にソ連時代のアエリータ論を検討してみよう。

トゥスクブは「選ばれた人々のための文明」を守ると作品集の解説では指摘されているが、それはトゥスクブが唱える不平等の哲学に起因している。あらすじでも触れたとおり、火星文明の独裁者トゥスクブは選ばれた特権階級の生活を保障するため、文明国「ソアツェラ」に犯罪者を住ませ強制労働の義務化を提案する。作品に登場する人民委員ゴルはトゥスクブの思想を次のように説明している。

トゥスクブは黄金時代を夢見ている。火星最後の時代、黄金時代の幕を開こうとしている。そこに入れるのは、至福を享受するにふさわしい選ばれたものだけ。平等は作りえない、平等なるものは存在しない。全民の幸福は狂人、酔っ払いの世迷言。トゥスクブは平等の渴望と全民の公平こそが最高度の文明が産む偉業を破壊すると言った。[中略] 奴隷に足枷をはめて機械、工作機、炭鉱に縛り付けてしまえ……無限の悲しみを味わえばいい。そうすれば至福の人々は無限の幸福が約束される……これが黄金時代。<sup>86</sup>

---

<sup>85</sup> Толстой. Собр. соч. Т. 3. С. 708.

<sup>86</sup> Толстой. Аэлита. С. 190.

トウスクブは完成の域に達した火星文明を保存し、火星の黄金時代構築するために、ソアツェラの破壊と再建を主張する。文明を守るために都市を破壊するとは歪んだ理屈だが、それは支配階級による大衆の搾取を絶対化するアンチ・ユートピアの思想であり、シュペングラーの歴史哲学をブルジョアの論客として扱ったレーニンの批判を踏襲していることがわかる。トウスクブが展開する不平等の哲学を引用しよう。

我々はソアツェラを、アナーキズムと狂気染みた希望の巣窟を破壊する。ここで、まさにここで地球と接触しようという犯罪的計画が生まれたのだ。我々は広場を掘り返そう。我々は官庁や企業の活動に必要なものだけを残そう。そこで我々は犯罪者、アルコール中毒者、狂人、夢食い虫どもを強制労働に就かせよう。彼らに足枷をはめるのだ。奴らが求めて止まない生というやつをくれてやろう。

我々に賛同し、我々の意思に従う全てのものに農園と生活と快適を保障しよう。二万年の強制労働が得られれば、我々はついに何もせず、静かに、真理を見定める生活を送ることができる。文明の最後は黄金時代の冠に飾られることであろう。<sup>87</sup>

このようにトルストイは『西洋の没落』のテーマをソ連のイデオロギー政策にかなう形に変容させ、作品の題材として用いたことがわかる。もちろん、シュペングラーの歴史哲学には、「偉大な文化」とそれ以外の文化という差別的視座が根底にはあるものの、『アエリータ』に見られるような不平等の哲学は見られない。あくまでトルストイは『西洋の没落』をソ連の公式見解にならって脚色したにすぎないが、「ファシズム」の論客として扱うことが目的だったのだろうか。トルストイ作品に現れたシュペングラー・テキストの機能とは何なのか、ここからはその文学的背景に焦点を当てていく。

トルストイとシュペングラーの関係を別の視座から取り上げた研究者に『ナショナル・ボリシェビズムのイデオロギー』（2003）を著した M・アグルスキイの名が挙げられる。アグルスキイの考えによれば、『アエリータ』の中で地球はロシアを、そして破滅に向かう火星は西欧を象徴しており、この文脈でロースィの火星旅行はトルストイ自身の亡命にあた

---

<sup>87</sup>. Там же.

る。つまり、火星へ宇宙旅行するロースィはトルストイ、火星の独裁者トゥスクブはシュペングラーがモデルになったとアグルスキイは考えている。<sup>88</sup>

ここで興味深いのが、ロースィと火星にやってきたゲーセフの存在である。アグルスキイはゲーセフの極めて野蛮な性格付けを指摘して、彼を「スキタイ人」と定義している。<sup>89</sup>事実、ゲーセフはそのあまりにロシア的な自由奔放さにおいて際立っている。次の引用はゲーセフの独白である。

ある時は三百そこらの野郎どもを集めてインド征服に出向いたのさ。目的地を目指したんだが、山間で遭難。吹雪に襲われるわ、雪崩に流されるわで、馬がやられちゃった。生還したのはほんの一握り。マフノの蜂起に加わったのはニヵ月さ。トロイカや馬車<sup>タチャンカ</sup>を乗り回してステップを駆け巡ったもんだ。思うがままに飛び回れ！ 酒だ、メシだ！好きなだけくらえ！ 女だって好きに抱け！ 白軍、赤軍、お構いなしにとびかかれ！機関銃は馬車にあるからぶっ放せ！<sup>90</sup>

このように元赤軍兵士ゲーセフは十月革命後のアナーキズムを代表するマフノー揆にかかわっていたという設定である。<sup>91</sup>ここでアグルスキイのアエリータ論と本論を照らし合わせると、ゲーセフのモデルになったのはピリニャークと考えられる。革命後のゲーセフとピリニャークはその無政府主義的な特徴において共通する点が多い（ピリニャークはアナーキストのコミュニオンで活動していた）。では、この仮説をより具体的に検証してみよう。

ピリニャークは日本を訪れた作家という認識が定着しているが、亡命ロシアと縁深い作家であることはあまり知られていない。特にベルリンの亡命文学史にその名を深く刻んだ

---

<sup>88</sup>. Агурский М. Идеология национал-большевизма. М., 2003. С. 97.

<sup>89</sup>. Там же.

<sup>90</sup>. Толстой. Аэлита. С. 22-23. なお、1958年の版ではゲーセフの無政府主義的な特徴は緩和されている。その例として「インドを征服」ではなく、「インドを解放」と修正されているほか、赤軍と戦ったという描写は削除されている。См.: Толстой. Собр. соч. Т. 3. С. 546-547.

<sup>91</sup>. マフノー揆は現在のウクライナ南部で革命直後に起ったアナーキズム運動。H・マフノ（1888-1934）率いるパルチザン部隊が帝政ロシアの白軍と対峙し、白軍を撃退すると、次は赤軍と対峙した。最終的にマフノは赤軍に敗北を喫してパリに亡命した。

作家である。1922 年にピリニャークはソ連のパスポートを持って（亡命ロシア人ではなくソ連人として）エストニアへ向かい、そこでドイツ滞在用のビザを取得した。そして同年二月に A・クシコフと共に亡命ロシアの一大中心地ベルリンに向かった。ピリニャークは前述の法学者ヤーシチェンコが発刊した白系文芸誌『新しいロシア文学』や道標転換派の機関紙「<sup>ナカヌーニエ</sup>その前日」に作品を次々と発表し、ソ連と亡命ロシアをつなぐ懸け橋として活躍したほか、トルストイ、ソコロフ＝ミキートフ<sup>92</sup>、Г・アレクセーエフを始めとする亡命ロシア人のソ連帰国に影響を与えた。

ピリニャークのベルリン滞在は亡命ロシア文学史に深く刻まれた。その例として、『私はロシアを持ち去った』の中でグーリはピリニャークがベルリンを魅了したイベントを次のように回想している。

カフェ「ランドグラフ」でロシア・ソビエト連邦社会主義共和国からやってきたばかりのボリス・ピリニャークとアレクサンドル・クシコフが作品発表会をした時のことを覚えている。のちに私は二人と、特にサンドロ・クシコフと大変近しい間柄になった。彼らの発表会には実に多種多様な人々が集まった。И・В・ゲッセンをはじめとする「<sup>ルーリ</sup>舵」紙の全編集部、メンシェビキ党员、シュレイデルやルンドベルク、愛らしいグルジア女を引き連れた左派社会革命党员である。ピリニャーク（私はこの散文家を極めて高く評価しているが、彼はあれから 15、16 年後にどこかの強制収容所でスターリンに惨殺された）は大変見事に書かれた『郷議会の集会』を読み上げた。彼の朗読は表現力に富み、力強かった。<sup>93</sup>

ピリニャークの朗読会は話題となり、その場に居合わせたグーリによれば、「会場を文字通り虜にした」。そしてソ連の実情を知るピリニャークは亡命ロシアの注目を集め、ベルリンで名だたる作家たちと交流した（翌年にはエセーニンとイサドラ・ダンカンがベルリンを訪問、同じく話題になった）。そうした作家の中にトルストイの名も認められる。

---

<sup>92</sup> イワン・ソコロフ＝ミキートフ（1892-1975）：ソ連の作家。1912 年から創作活動を開始、紀行文を得意とし、ロシア国内外の各地を遍歴した。1920 年から 1922 年まで亡命ロシアに暮らす。

<sup>93</sup> Гуть. Я унес Россию. С. 192.

1922 年 2 月に亡命ロシアの日刊紙「舵」の編集長ゲッセン宅でトルストイとピリニャークの作品発表会が開かれていることから、この時期に両作家の親交は結ばれたと推測される。<sup>94</sup>ピリニャークはソビエト文学を代表する新進気鋭の作家だったが、トルストイは反革命の態度をとって亡命した作家である。<sup>95</sup>両作家の革命観は対立的だったものの、親交は深まっていった。その証拠にピリニャークは道標転換派の「その前日」紙（1922 年 3 月に発刊）に作品を次々と発表した。その文芸欄を監修していたのがトルストイであった。「その前日」紙には第 29 号から日曜日毎に文芸欄が設けられ、政治色に関係なく作品が発表された。<sup>96</sup>ただし、「その前日」そのものはソ連当局の対外用機関誌という見方が定着している。そしてこの政治性がピリニャークとトルストイの関係に一つの楔を打ち込んでいく。

前述のグーリは道標転換派の政治活動とは無縁だったが、トルストイが 1923 年にソ連へ帰国する際に「その前日」の文芸欄編集を託されており、その歴史的・政治的背景には詳しい。そのグーリは「誰が“その前日”に資金援助をしていたのかは知らないが、誰かしらの顔効きを通してソ連の資金を受け取って発行していた」と証言している。<sup>97</sup>さらに、1922 年に亡命ロシアのベルリンが親ソ派と反ソ派に分裂した際、「その前日」に寄稿を始めた親ソ派の人物に B・スタンケーヴィチがいるが、その「日和見主義」に対する白系ロシア人ヴォ

---

<sup>94</sup> Костиков В. «Не будет проклинать изгнание...» [Пути и судьбы русской эмиграции]. М., 1990. С. 173.

<sup>95</sup> グーリやブーニンが亡命した根底にはポリシェビキに対する憎悪があったが、トルストイの場合、それは恐怖であった。ブーニンとの往復書簡でトルストイはポリシェビキに対する恐怖心をつづっている（「噂はともかく、ポリシェビキがここまで来れるはずがない」[1919 年秋、パリ]、「ここでは民衆の間にも落ち着きが見られます。働こうとする意思があり、ドイツ人の勤労ぶりには類を見ないものがあります。ポリシェビズムの影があるはずもないのはすでに明らかです。」[1921 年冬、ベルリン]）。

<sup>96</sup> 「その前日」の紙面からはピリニャークのほか、チュコフスキイ、ゾシチェンコ、カターエフ、フェージン、ブルガーコフ、マンデリシュタムなど、ロシア・ソビエト文学を代表する作家の作品が次々と日の目を見た。ピリニャークに限ってみていくと、「ロスチスラヴリ町」（28. 03. 1922.）、「ロスチスラヴリ」（02. 04. 1922.）、「ロシア、祖国、母」（30. 04. 1922.）、「題名のない抜粋」（15. 05. 1922.）、「狩り小屋で」（28. 05. 1922）などの作品が掲載された。

<sup>97</sup> Гуть. Я унес Россию. С. 244.



イチンスキーの批判は「その前日」紙の政治的機能を浮き彫りにしている。以下、グーリの回想である。

ウラジーミル・ベネジクトヴィチ（スタンケーヴィチ——著者注）、あなたの考えは理解できますし、あなたの政治的立場というのもわかっています。ですが、ソ連当局に協力したいのであれば、つまり、ソ連の読者に向けて投稿したいなら、「その前日」ではなく、直接「イズベスチヤ」に書いたらどうですか。「その前日」はボリシェビキの政治的カモフラージュです。直接「イズベスチヤ」に投稿した方が良いでしょう。<sup>98</sup>

このように亡命ロシアで「その前日」はソ連当局の媒体として認識されていた。事実、「その前日」編集部は共産党によって任命されており、ソ連が推進する対外政策の忠実な媒体として機能していた。<sup>99</sup>ピリニャークもまた「その前日」に数々のエッセイ、作品を投稿したが、「その前日」がソ連当局の推し進める対外政策の忠実な媒体であることを知ると、協力活動を拒否する声明を「新しいロシア文学」、「その前日」の両紙に発表した（1922 年 6 月）。帰国後にピリニャークが発表した声明が以下の文面である。

編集長 殿

---

<sup>98</sup>. Там же.

<sup>99</sup>. 「その前日」は親ソ路線を取っていた日刊紙で、ロシアに関する情報発信の媒体として 1924 年 6 月まで発行された。「その前日」紙の編集にあたったのは Ю・クリューチニコフと Г・キルデツォフだったが、いずれもソ連に帰国して大テロルの時代に粛清された。

道標転換派はソ連当局が展開した亡命ロシア人の帰還運動政策を推し進める媒体という見方が定着しており、亡命ロシア人の祖国帰還運動が終息した 1920 年代半ばに「その前日」紙は自らの役目を果たし終えた。ソ連政府系の日刊紙は当時としては決して珍しいものではない。その例として、リガのソ連大使館は日刊紙「新しい道」（1921-1922）を発行していたが、その記事はどれもがソ連に関するものであった。「新しい道」は 1922 年の春まで発行され、その活動は「その前日」に吸収された。См.: Краснова Т.И. Другой голос: анализ газетного дискурса русского зарубежья 1917-1920 (22) гг. СПб., 2011. С. 441.

どうか私のこの手紙を掲載して頂きたい。私はこれから先「その前日」紙と協力しない。新しいロシアが生まれ、到来したことを私は知っているし、それを信じている。新たに産まれつつあるロシアの、次世代の生理的な世論がノミだらけのその道を、その新しい道を歩いている。ロシアとともにあることを望むのであれば、ロシアに生きて、自らの旗を確かめなくてはならない。そしてロシアの日常を知らなくてはならない。

私は道標転換派を探究として歓迎する。私自身、その本質においては道標転換派である。しかし、「その前日」紙は我々の日常を知ることなく、我々の若く、新しい革命的世論を看過している。「その前日」紙の戦略は私にとって異質である。まさにそのことが私たちの道を別つのだ（強調はピリニャーク——筆者注、書簡集 I: 456-457）。

道標転換派はロシアの国体保存を目的として親ソ路線を取り、ポリシェビズムへの協力を表明した。ピリニャークもまた革命を受け入れた反共の作家であり、思想的にも道標転換派に近かったといえる。しかし、ピリニャークの目にはその親ソ路線が日和見主義的な運動と映ったと考えられる。ピリニャークは「その前日」に少なからず作品を発表していたため、その唐突な反・道標転換派の姿勢は文壇で動揺を呼んだ。帰国後、ピリニャークはペトログラードの作家 K・フェージンに宛てた手紙の中で道標転換派批判の理由を次のように書き綴っている（1922 年 6 月 23 日）。

俺には分らない。「その前日」と道標転換派、「プラヴダ」とロシア共産党はいったいどこが違う？ もし同じ性質なら、一つの名前にすればいいじゃないか。そうじゃなければ、それは扇動と同じ事だろう。あの新聞がやってることは、扇動したり、玄関を開けるなりナイフでとびかかってくるような真似と同じだよ [もちろん、トルストイが編集している文芸欄はただのエサだ]（書簡集 I: 468-469）。

このようにピリニャークは道標転換派の理念には賛同しつつも、その戦略には強い不信感を示した。<sup>100</sup>また、道標転換派批判の背景には、トルストイの周囲で起こったスキャンダ

---

<sup>100</sup> ピリニャークはトルストイと少なからず文通を交わしたが、残念ながらその書簡の多くは失われてしまったのが現状である。1920 年代にピリニャークがトルストイに宛てた手紙の中で唯一残っているのは 1922 年 6 月に書かれたものだが、それはトルストイとレーミゾフの両氏に宛

ルに伴う義憤があると推測される。それは、トルストイが児童文学作家のK・チュコフスキイに対して行った背德的行為である。

トルストイはチュコフスキイと革命前からの知己であった。トルストイは亡命の道を選んだが、チュコフスキイはロシアにとどまり、執筆活動が続けていた。そしてチュコフスキイはベルリンのトルストイに宛てた手紙の中で、ロシアに残った作家たちを齒に布着せぬ調子で批判した。チュコフスキイが批判した作家の中には盟友ザミャーチンの名前もある。<sup>101</sup>その手紙は私的なもので、チュコフスキイがトルストイに寄せていた信頼が伺える内容である。しかし、トルストイはこの手紙を本人の許可なく「その前日」（1922年6月4日）に掲載してしまった。ゴーリキイはトルストイに宛てた手紙（1922年9月頃）の中で、「チュコフスキイの手紙の件であちらの（ソ連——筆者注）文学者らはえらく君に腹を立てているらしいぞ」と忠告している。<sup>102</sup>「その前日」は空輸でモスクワへ発送されており、ソ連国内でも容易に入手できたため、チュコフスキイの身内批判はすぐさま本国の文壇でも知れ渡るところとなり、渦中の作家たちに深く謝罪する必要に迫られた。それと同時にトルストイを批判する声もまた飛び交った。<sup>103</sup>ピリニャークがトルストイに対して後に覚えた不信感 こうしたスキャンダルにも影響を受けていると考えられる。

---

てて書かれた手紙である。そのため、亡命ロシアのベルリンでトルストイとピリニャークの間でどのような交流があったかは正確には不明である。また、トルストイが亡命ロシアで書き綴った日記にもピリニャークの名前は記されていない。いずれにせよ、トルストイとピリニャークの蜜月は短命に終わったと推測される。

<sup>101</sup>. チュコフスキイはザミャーチンについて次のように書いている。「いいや、トルストイ、帰国するときは誇らしく、そして晴れやかにしなくては駄目だ。ここのろくでなしども（ペetrogradの文壇——筆者注）は、お前が謝罪したり、悪く思ったりするには及ばない連中だよ。ザミャーチンはえらく良いやつだ。えらく、えらく良いやつだ。しかし、彼は潔癖症で、用心深いし、それに残酷な男だよ」。（強調はチュコフスキイ——筆者注）Цит. по: Крюкова. Переписка А.Н. Толстого. Т. 1. С. 312.

<sup>102</sup>. Там же. С. 338.

<sup>103</sup>. 同じく亡命ロシアを生きたM・ツヴェターエフはトルストイの反道徳的な振る舞いに憤りを覚え、公開の絶縁状を執筆、ベルリンで刊行されていた「ロシアの声」紙（1922年6月7日）から発表した。公開書簡の中でツヴェターエフは「ロシアには国家政治保安局（昔日の非常事態

では再びベルリンにおけるピリニャークとトルストイの關係に目を転じよう。ピリニャークはソ連社会を知る作家として亡命ロシアのベルリンで歓迎され、そのベルリン訪問は大事件として報道された。ピリニャークとの接触がトルストイの反革命姿勢に何かしらの影響を与えたことは確かである。その例として、興味深い資料が発見されている。

ピリニャークは 1922 年 4 月に帰国したが、その際にトルストイはソ連社会に宛てた懺悔の言葉を託した。ピリニャークが帰国後に執筆した記事「外国で」の中にその言葉は引用されている。この記事は帰国直後の 1922 年 4 月に執筆、文芸誌「結び目」<sup>ウーゼル</sup>に入稿されたが、この文芸誌は不運にも発刊されなかったため、ピリニャークの記事は日の目を見なかった。しかし、未発表に終わったこの記事では、『アエリータ』執筆の目的を明らかにするトルストイの言葉が記されている。

アレクセイ・トルストイとソコロフ＝ミキートフは道標転換派に属し、二人とも六月にはロシアに帰国する。<sup>104</sup> [中略] 二人とも亡命先では流行りの作家で、特にトルストイはその筆頭である。トルストイがロシアに持ち帰ってほしいと頼んだ言葉をここに伝える。

「私は西欧のすべてを見て、人間嫌いになり、全人類を呪った。そして今の私に残された信仰、希望はただ一つである。ロシアが、ロシア人こそが世界を救う。であればこそ、人間的な弱さゆえここに（亡命ロシア——筆者注）いることを犯罪だと思うのである」（書簡集 I: 425）。

トルストイはピリニャークに託した言葉の中でロシアのメシアニズムを告白した。トルストイの言葉はロシア社会にまで届かなかったが、ピリニャークはソ連当局の高官に取り合ってトルストイ、レーミゾフ、ソコロフ＝ミキートフの帰国支援に取り掛かったと推測さ

---

委員会）があることや、全てのソ連国民がこの国家政治保安局に囚われの身であることや、さらには『文学者の家の記録』が廃刊させられたことを疑いもしない三歳児」と記し、ソ連国内の厳しい文化的・政治的状況を考慮せずにチュコフスキイの私信を公開したトルストイの行動を厳しく批判した Подр. см.: Цветаева М. Собр. соч. в 7 т. М., 1995. Т. 6. С. 217-219.

<sup>104</sup> ソコロフ＝ミキートフとトルストイが帰国したのは 1922 年 8 月と 1923 年 8 月で、ピリニャークに伝えた予定よりもそれぞれ若干の遅れを取る形となった。

れる。帰国後、ピリニャークは亡命ロシアのヤーシチェンコとソコロフ＝ミキートフに宛てた手紙（1922年4月25日）の中で次のように書いている。

長官のところに足を運んできた。お前がロシアに帰るのをみんな心待ちにしているぞ、ミキートフ。トルストイも同様だ（書簡集Ⅰ：432）。

ここでピリニャークはソコロフ＝ミキートフに宛てて「長官」のもとへ足を運んだと報告しているが、この文脈で「長官」が何の要職を指すのかは不明である。いずれにせよ、対外政策の関連部署と推測される。同様にレーミゾフ宛の手紙（1922年5月8日）からもピリニャークが亡命した作家に対して帰国の斡旋をしていた経緯が認められる。

手紙をください。暮らしはどうですか。仕事はどうですか。夏はどこへ行かれる予定ですか、ロシアにはいつ来られますか（その時はぜひわが家へ！）、天気はどうですか？手紙をください。[中略] お願いです。手紙を頂けないと、あなたのことをお願いするのが難しくなってきます（書簡集Ⅰ：448）。

このように、ピリニャークは亡命ロシアの作家に帰国を促し続けた。そしてトルストイの場合に関しては、さらなる朗報がソ連から舞い込むこととなった。ベルリンでともに亡命生活を送っていたソコロフ＝ミキートフからの手紙である。一足先に帰国したソコロフ＝ミキートフはスモレンスク郡からトルストイに送った手紙（1922年9月）の中で、ロシア国内の混乱は過ぎ去ったことを強調し、帰国を勧めている。

ロシアの最も恐ろしい時期は過ぎ去りました。誰しも、復興の喜びに沸きかえっています。みんなベッドから起き上がったばかりで、頭が少しクラクラしているような具合ですよ。でも、恐ろしい時期は過ぎ去り、前途には健全な日々が待つばかりです。こんな気持ちは本当に素晴らしいです。

まだたくさんのゴミと燃えカスがありますが、その多くは「中心」ですから。ここには魔女や、昔ながらの歌、サラファンがあるばかりです。[中略] 略奪と乱暴狼藉の時

代はとうの昔に過ぎ去りましたし、「地主」も、「貧農」も、「プロレタリア」も、「ブルジョア」ありません。<sup>105</sup>

ソコロフ＝ミキートフは革命後の混乱が沈静化したことを指摘し、トルストイに帰国を勧めた。それに加えて階級闘争の嵐も過ぎ去ったと意見している（戦時共産主義は本格的な階級闘争のプレリュードに過ぎなかったが）。

このように、トルストイはピリニャークをはじめとする作家の勧めを受けて徐々に亡命ロシアからソ連へと乗り換えていった。『アエリータ』執筆中のトルストイが自分とピリニャークの姿を作品に書き込んだのは自然な経緯であろう。火星（亡命ロシア）に足を踏み入れた自分を批判するロースィ（トルストイ）の姿が次の引用から見て取れる。アエリータとロースィの会話から引用する。

——どうして地球を離れたの？

——愛する女性が死んだのです、とロースィは言った。——人生が嫌になったのです。私は孤独で、自分と向き合う日々でした。絶望に打ち勝つ力も、生きる気力もありませんでした。生きるためにはたくさんの勇気が必要です。それほどまでに地球は憎しみに満ちていたのです。そして私は怖気づいて逃げ出したのです。<sup>106</sup>

このように、帝政ロシアという、「愛する女性」を失ったトルストイは祖国を離れ、亡命ロシアへと「怖気づいて逃げ出した」一方、ピリニャークは祖国ロシアへの忠誠心に貫かれている。火星に到着した後のロースィは「亡命」を悔やみ続けるが、この点でゲーセフは対照的である。ロースィはゲーセフの愛国心を次のように評価している。

心が凍てつくには理由があった。そう、そうだ、孤独のせいなのだ。ロースィはロケットから飛び降りて、ハッチへともぐりこむと、いびきをかくゲーセフの横に寝転がった。すると、気分がとても楽になった。このお気楽な男は祖国を裏切らず、遠路はるばる空

---

<sup>105</sup>. Крюкова. Переписка А.Н. Толстого. Т. 1. С. 339.

<sup>106</sup>. Толстой. Аэлита. С. 101.

を越えてやってきては家に残ったマーシャへ何を土産にしようかと物色しているありさまだ。すやすやと眠り、その良心に穢れはない。<sup>107</sup>

ローシィは逃亡者の孤独感に苦しむが、グーセフは火星を統治する「技師最高議会」に取り合って、火星をロシアに編入しようと躍起になる。火星に到着した後のローシィ（ムスチスラフ・セルゲーエヴィチ）とグーセフ（アレクセイ・イワーノヴィチ）の会話から引用する。

——さて、これから何をすべきだとお考えで？

——なに呑気なことを言ってるんですか、ムスチスラフ・セルゲーエヴィチ。何か甘いブツでも吸ったんじゃないでしょうね？

——喧嘩したいんですか？

——いや、喧嘩じゃなくてね。でも、どっこいしょして、葉っぱを吸うくらい別にいくらでも地球でできるでしょ。私はね、ここに最初に来た以上、これから火星は我々のものだ、ロシアのものだと思うんですよ。こんなご馳走をほったらかしにしておく手はないわけで。

——変人ですね、アレクセイ・イワーノヴィチ。

——どっちが変人かは後でわかりますよ、——グーセフはベルトを締めて、肩を鳴らし、狡猾に目を細めた——とんとん拍子に行く話じゃないってことはわかってるんだ。こっちは二人ですからね。だから、あいつら（火星人——筆者注）にロシア連邦共和国の加盟国になりたいって書類を出させればいいんだ。そんな書類おいそれとは手に入らないが、こっちにも手はある。火星にはどうやら怪しい空気がある。私の目にはちゃんと見えてますよ。

——革命を起こす気ですか？

——なんというかですね、ムスチスラフ・セルゲーエヴィチ、様子見で行きましょう。

——いや、だめです、革命抜きでお願いします、アレクセイ・イワーノヴィチ。

——革命が何だってんです？ こちとら書類がいるんですよ、ムスチスラフ・セルゲーエヴィチ。空手でペテルブルグに帰るわけにもいかないでしょ？ 干からびたクモで

---

<sup>107</sup>. Там же. С. 68.

も土産にするんですか？ 違うでしょう。火星が編入を希望してますって書類を見せつけるんですよ。これはポーランドから県の一つでもネコババするのはわけが違う。惑星を丸ごといただくんだ。<sup>108</sup>

ゲーセフは火星（亡命ロシア）を地球（ロシア）に編入させることを自らの使命としているが、これを 1920 年代におけるロシア思想史の文脈に置き換えると、道標転換派の祖国帰還運動に当てはまる。上記の引用からも、亡命ロシアの作家に帰国を進めたピリニャークの姿が浮かび上がってくる。

このように、『アエリータ』にはトルストイとピリニャークの関係がテキストに編み込まれていることがわかる。地球からやってきたローシィとゲーセフは火星文明の救世主として描かれており、ロシアからやってきた無政府主義者たちが西欧社会で革命を起こし、亡命ロシアをソ連に吸収するというシナリオとして読めるのである。

以上から、トルストイが『アエリータ』を自らの亡命と帰国の物語として書き上げたことは明らかである。『アエリータ』は、ローシィというトルストイの分身が没落する西欧社会を目の当たりにし、活力にあふれるロシアへ舞い戻るという自伝的作品に他ならない。トルストイがピリニャークに託した言葉にもあるように、1922 年当時のトルストイには、「ロシアが、ロシア人こそが世界を救う」と見えたのである。そしてこうした転向の作品を「赤い処女地」に発表したということは、トルストイが反革命から親ソの立場に転換したことを示す政治的なアピールに他ならない。

ここで考慮に入れたいのは、『アエリータ』が数多く存在した白系の文芸誌ではなく、ソ連の出版文化を代表する文芸誌「赤い処女地」に発表された点である。当然ながら反ソ的作品がソ連の文芸誌に発表されることは考えられなかった。『アエリータ』がソ連で発表されたのは、作品に親ソ的特徴が認められたからに他ならない。つまり、白系ロシアから赤いロシアへと乗り換えるために『アエリータ』は執筆されたといっても過言ではない。

まさにこの文脈において、シュペングラーの『西洋の没落』は重要な役割を果たしているのである。トルストイは作品の随所で『西洋の没落』を援用したが、それはシュペングラーの歴史哲学に影響を受けたからでもなければ、「ファシズムのイデオログ」に反論するためでもない。つまり、亡命ロシアは没落の運命にあり、ソ連こそが発展を約束された豊穡の

---

<sup>108</sup>. Там же. С. 90-91.



地として描き出すうえで、『西洋の没落』は都合のよい政治的展望をトルストイに用意したのである。

### 1-2-3. 『西洋の没落』、あるいは逆行する歴史の針

最後にピリニャーク作品に見られる「西洋の没落」のテーマを見ていこう。『プロシア体制と社会主義』でシュペングラーはピョートル大帝による人為的な西欧化はロシア文化の自然な発展を阻害したと主張したが、ピリニャークもまた同様の歴史観を抱いた作家であった。しかし、興味深いことに『西洋の没落』と豊かな呼応関係を持つピリニャークの代表作『裸の年』が執筆されたのは1920年で、内戦と干渉戦争冷めやらぬロシアでシュペングラー・ブームはその兆しさえなかった時期である。すでに見た通り、ロシアでは道標派の哲学者らが『オスワルド・シュペングラーと西洋の没落』（1922）を発表して、その文明論は話題になったが、1920年のロシアでシュペングラーは無名の思想家であった。さらに革命直後のロシアは前代未聞の大飢饉に襲われ、数百万の餓死者を出した。とくにピリニャークが生まれ育ったヴォルガ川地域の被害は甚大で、ヴォルガ・ドイツ人自治州の人口はその四分の一が餓死したと言われている。<sup>109</sup>戦時共産主義時代のピリニャークは無名の作家で、文壇の重鎮とは違い食糧支援も受けられず、文字通りの生存競争を余儀なくされた。1922年の自伝にある通り、ピリニャーク自身もまた「暖房貨車で食料を求めて放浪」する日々を強いられていた。

このように比較的平穏な亡命ロシアを生きたトルストイやエレンブルグとは違い、革命期の混乱を生きたピリニャークがシュペングラーの歴史哲学に触れる機会はなく、『裸の年』は純粹にロシア思想の文脈で生まれた作品と言ってよい。ピリニャークがシュペングラーの著作に触れたのはドイツ訪問時のことと考えられる。ベルリン滞在後に執筆した作品『第三の首都』（1922）にはシュペングラーの影が認められる。『第三の首都』は1920年代にピリニャークが残した実験文学を代表するアンチ・テクストの典型で、この作品を伝統的な意味で小説と呼ぶことはできない。その実、作品には部分的に戯曲の形式が使用され、作品の冒頭には「舞台」、「時期」、「登場人物」の欄がある。「舞台」の欄に「舞台はない。ロシア、西欧、世界、友愛」と記されているほか、「登場人物」の欄には、「登場人物はいない。ロシア、西欧、世界、信仰、不信、文化、吹雪、雷、聖母の像」とある。作品には伝

---

<sup>109</sup> ゲルマン『ヴォルガ・ドイツ人』117頁。

統的な意味での登場人物や古典的な「物語性」は存在せず、戦後の西欧社会とロシアが経験した歴史的記憶の集合体として成立しており、西欧文化の没落、新たなロシア文化への信仰、革命ロシアの物理的荒廃、欧米、日本における機械技術の発展に関する記録が無秩序にモンタージュされている。『第三の首都』の混沌とした構成はまさに革命後の混乱した社会的・文化的状況を反映しているといえる。多様な記録の中にはピリニャークが執筆したかどうかが疑わしいものもあり、作品の最後で「わたくしピリニャークがこの物語を書き終える」(II:334)と、作品の作者性を自ら強調する必要に迫られているほどである。

『第三の首都』は様々な声が入り乱れるが、作品冒頭にある「時期」の欄に目をやると、そこにはシュペングラーの名前も記されている。

時期：世界大戦から八年目の大斎期、西欧文化の破滅（シュペングラー風に）、大ロシア革命から六年目の大斎期、あるいは——三月、春、流水——偉大なる革命によって大ロシアが「バタビアの涙」と同じ原理ではじけ飛んだとき…… (II:245)

このように作者は『第三の首都』が『西洋の没落』と呼応関係にあることを暗に示している。シュペングラーの声を代弁するのは作品に登場する西欧人である。作品の第三章は「立て襟がついたコート姿の男たちは孤独であるに違いない」（西欧人を指す）という一風変わった題名が冠されており、エドガーとロベルトというイギリス人兄弟が登場する。ロベルトとエドガーはそれぞれロシアと北極に向かう。次に引用するのは、ロシアに暮らすロベルトが北極へ旅立つエドガーに宛てた手紙からの抜粋だが、ここには『西洋の没落』の文明論を想起させる言葉が飛び交う。

お前はどんな喪失も恐れずに海へ行くんだな。それが意思のなせる業か。それが自由意志というやつか。苦悩を求めていくんだな。その苦悩も喪失も、喜びにさえなるだろうな。だって、お前が自分の目で見たいと欲するんだから。もしそれが自分の意思に反していれば耐え難いだろう。俺がいま言いたいのは、欲するという意思、見るという意思のことだよ。その意思が民族、人類、国家によって統合されたとき、この意思は民衆<sup>ナロード</sup>の歴史になる。時にその意思というやつは息絶えてしまう。そのとき国家は歴史を失うんだ。ここ数千年の中国人みたいにね。そういう風に世界の文明は興亡していった。俺た

ちはいま西欧という最後の文明の終わりを生きている。いまは大変な時代だ。世界文明の中心が西欧から飛び立って、その意思がロシアでぶるぶると高まってるんだ。(II:255)

引用にある通り、西欧人のロベルトもまた西欧文明の没落とロシア文明の黎明を告げる。<sup>110</sup>そして『第三の首都』に登場するロシア人たちは歴史的な大飢饉を経験してもなお、西欧文明に背を向け、再生前夜のロシアに対する希望にあふれている。

同志よ、ロシアじゃジャガイモを一袋持つて野郎は幸せさ。別段、秘密にしてるってわけじゃねえんだ、同志よ。ヴォルガ川のあたりじゃ人が人を食うありさまだ。ロシアはそんだけ荒廃しちゃった。だがよ、同志、別におっかねえってわけじゃねえんだ。なんつったって、ロシアにはてめえの権力があるんだ。てめえの主人はてめえだ。お宅らがアメリカからおいでなすった理由はちゃんとわかってんだ。ロシアじゃ豚の脂身も拝めねえ。オートモービルに乗るなんざ、夢のまた夢さ。おれたちには労働者ソビエトの権力があるんで、外国用には第三インターナショナルって手があるんだ。(II:263)

ピリニャークは機械的なものの中に西欧の象徴を認めたが、西欧＝機械文化という図式はロシア文学史で頻繁にみられた典型的認識である。その意味でピリニャークは古典的な作家といえる。ドストエフスキやゲルツェンと同じく、西欧社会に足を踏み入れたピリニャークはスラヴ主義の意識を高め、ロシアを「第三のローマ」とするメシアニズムに衝き動かされることも稀ではなかった。この文脈においてシュペングラーの歴史哲学は、新生ロシアのメシアニズムを強調する上で都合のよい思想的展望をピリニャークに用意したといえる。ただし、ピリニャークはシュペングラーの歴史哲学で自らの作品世界を文学的に補強しただけでなく、その思想的展望に挑んだのも確かである。文化と文明をめぐる対話の過程で

---

<sup>110</sup> 厳密にはシュペングラー哲学の基本的なテーゼは西欧「文化」の没落であり、西欧「文明」の没落ではなかった。シュペングラーによれば、文化が没落した結果として文明は生じるものがあり、文明とは文化が内包する豊かな精神世界が形骸化した状態のことである。従って、ここでピリニャークが主張するシュペングラー風の文明論を言い換えるのであれば、西欧文化の死とロシア文化の誕生ということになるだろう。

ピリニャークは時にシュペングラーの歴史哲学に批判的態度を取ることもあった。<sup>111</sup>ピリニャークの文化と文明をめぐる歴史哲学的葛藤はソ連史の分水嶺「偉大なる転換」まで綿々と続いており、1920年代を通してシュペングラーの歴史哲学に何度も回帰していった。文化と文明をめぐる作家の弁証法は随時分析していくとして、ここからはピリニャークがシュペングラーの歴史哲学に接触する以前に試みた独自の「西洋の没落」論を検討していこう。

シュペングラーと同じくピリニャークもまた西欧文化の没落を認めたが、シュペングラーが文化の死と引き換えに文明の誕生を歓迎したのに対し、ピリニャークは西欧文化の黄昏を契機として、文明に背を向けて原初的なロシア文化を探求するロマン主義的衝動に身をゆだねた。その探求心は『裸の年』第二章「オルディーニン家」に結晶している。

オルディーニンはハンやサルタンに支配される遊牧民を意味する古代テュルク語の「オルドゥー」から派生した姓である。「オルドゥー」は「オルダ」ордаの形でロシア語に定着したが、タタール・モンゴルの軍隊（そこから転じて「烏合の衆」も意味する）を指す言葉で、ロシア史の文脈では東洋による支配を想起させる。ピリニャークはここで没落貴族にオルディーニンというアジア的な姓を冠することで、ロシア文化に脈々と流れるアジアの歴史に読者の目を向けさせようとしたに違いない。自らタタールの血も引いたピリニャークならではの命名であろう。第二章はオルディーニン家の描写で始まるが、その描写には東洋的ロシアと西洋的ロシアが混在している。

窓辺には時計——銅でできた牧童の少年と少女（まだ売り飛ばされていなかった）——大広間にあるガラス張りの時計が半刻をかぼそく告げるが、それはロマンチックな十八世紀の香りがした。それに応えるように、母アリーナ・ダヴィドヴナの眠る寝室から

---

<sup>111</sup> その例として、1927年に発表した『日本印象記』でピリニャークはシュペングラーの歴史哲学に疑問を呈した。地震大国日本の文化は、シュペングラーの歴史哲学を批判的に再考察させる機会をピリニャークに与えた。ピリニャークによれば、日本文化は地震という破壊的な自然現象（あるいは始原力）に「育まれた」結果、西欧社会に特徴的な機械文化は日本に誕生しなかった。地震による破壊とたゆまぬ勤労精神によって再生を続ける日本民族の文化は西欧文化の対極に位置するものであり、シュペングラーの歴史哲学で以って日本史を論じることはいかなる点でもできないとピリニャークは考えた。

はカッコウが返事をした——カッコウは十五回、時を告げる。そのカッコウはアジア、  
ザカミエ<sup>112</sup>、タタールの歴史を思わせた。(I:57)

引用にある「ロマンチックな十八世紀」はピョートル大帝以後に開花したペテルブルグの  
宮廷文化を指す一方、別の部屋からはタタールの歴史を思わせるアジア的なカッコウ時計  
が返事をする。この描写はまさしく東洋と西洋の歴史をうちに宿した帝政ロシアを象徴し  
ている。

このオルディーニン家でピリニャークの思想を代弁する人物、それが三男のグレブであ  
る。グレブの兄はボリスという設定だが、この兄弟はロシア正教会の聖人で古代ルーシの守  
護神「ボリスとグレブ」がモデルになっていることは明白である。<sup>113</sup>グレブは『白痴』に登  
場するムイシュキン伯爵のように純粋な人物だが、西欧社会を遍歴して、その機械文化を前  
に失望の念を抱く。グレブの理想はピョートル大帝による西欧化以前の宗教心あふれる精  
神文化で、彼はロシアの宗教芸術に傾倒している。

我々の偉大な芸術家たちは——グレブは静かに口を開いた——ダ・ヴィンチ、コレッジ  
ョ、ペルジーノのはるか上をいく人々でした。それがアンドレイ・ルブリョフであり、  
プロコーピー・チーリン<sup>114</sup>、そしてノヴゴロド、プスコフ、スズダリ、コロムナ、それ  
に我々の修道院や教会に残るイコン画を描いた芸術家です。(I:73)

このようにグレブはイコン画に代表される宗教芸術の守護者である。グレブは機械文化  
よりも精神文化を重んじ、西欧の近代文明に批判的態度を取る。続いてグレブの台詞から引  
用しよう。

---

<sup>112</sup> カマ川はヴォルガ川の支流で、二つの川はタタールスタン共和国の首都カザンで合流する。  
カマ川の東にはタタール人が多く、「ザカミエ」はロシアの中の東洋を象徴している。

<sup>113</sup> ボリスとグレブはいずれもキエフ大公ウラジーミル一世の息子だが、皇位継承戦争の最中で  
実の兄弟「呪われたスヴァトポルク」に殺害、後に列聖された。二人の聖人は古代ルーシの守り  
神として信仰を集めたといわれている。См.: Большая энциклопедия в 62 т. М., 2006. Т. 7. С.  
59.

<sup>114</sup> ルブリョフ、チーリンともに中世ロシアのイコン画家。

西欧文化の道は戦争につながり、十四年の戦争を引き起こしました。機械文化は精神文化を、精神世界を忘れたのです。〔中略〕西欧文化は行き詰まりの道です。ピョートル以来の二世紀、ロシアの国体はこの文化を受け入れようとしたのです。ロシアが、まったくゴーゴリ的なロシアが息苦しさの中で喘いでいるのです。そして革命は西欧とロシアを対決させました。そしてさらにそれは続きます。革命から数日がたってロシアの日常、気質、都市はすぐさま十七世紀に回帰したのです。(1:74)

ここでピリニャークは「まったくゴーゴリ的なロシアが息苦しさの中で喘いでいる」と書いたが、この文脈における「ゴーゴリ的なロシア」とは、その代表作『ヂカーニカ近郊夜話』に結晶したロシアの民衆文化を象徴するものだろう。ピリニャークにとって十月革命はロシアを西欧文化の「支配」から解放する民衆的な運動の結晶であり、原初的なロシアを復権することに他ならなかった。引用の最後でロシアは「十七世紀に回帰した」とあるが、それはピョートル大帝（在位は 1682-1725）による西欧化以前の中世ロシアに回帰することを意味する。

革命直後のロシア社会では逆行した歴史哲学が顕著に見られた。歴史の転換点においては伝統や文化が大胆に見直されるものであろうが、著名な経済学者 A・チャヤーノフがИ・クレムニョフのペンネームで発表したユートピア小説『農民ユートピア国旅行記』（1920）もその典型である。<sup>115</sup>この作品はアレクセイという登場人物が 1984 年のモスクワ社会ヘタイムワープしてしまう SF 小説である。<sup>116</sup>小説の中では 1934 年に労働農民党が権力を掌握

---

<sup>115</sup>. アレクサンドル・チャヤーノフ（1888-1937）：経済学者、作家。1920 年代に階級の敵とされた「富農」を擁護する学者として弾圧、ソ連当局がねつ造した「労働農民党事件」で 1930 年に逮捕、ソ連政府を転覆しようとした罪で強制収容所に収容され、1937 年に粛清。チャヤーノフはロシアの経済学を代表する知識人でありながら、作家としての名声も高かった。チャヤーノフが 1922 年に発表した悪魔物語『ベネジクトフ、あるいは我が人生の輝かしい出来事』は同時代を生きた M・ブルガーコフの作品世界にも強い影響を与えたと言われている。Подр. см.: Балязин В.Н. Профессор Александр Чаянов. М., 1990. С.132-135.

<sup>116</sup>. 悲劇的運命をたどったチャヤーノフの代表作『農民ユートピア国旅行記』は 1920 年にモスクワで出版された後、ソ連では長らく再版されることはなかったが、1974 年にニューヨークの

し、都市を解体、農村主体の共産制社会をロシアに成立させたという設定で、半世紀後のモスクワには太古から続いた農民経済を基盤とした社会が栄えている。作品に登場する未来社会の住人はロシアで生じた農民革命を次のように説明する。

実際のところ、私たちには新しい原理など、それがどんなものであれ、必要なかったのです。私たちの課題は、大昔の農民経済の基盤を構成し、何世紀も続いた太古の原理を確立することです。[中略] 古代ルーシの場合と同じく、我々の経済機構の基盤には個々の農民経済があるのです。その中においてこそ人間は自然と向き合い、労働は宇宙が持つすべての力と創造的接触を果たし、人間存在の新たな形式を生むのです。それぞれの労働者が創造者であり、個性の発露はそのどれもが労働の芸術となるのです。<sup>117</sup>

周知のとおり、現実のソ連社会では 1920 年代末から国家的に重工業化と農業の集団化が進められたほか、富農撲滅を大義名分として農村部では大規模な粛清が発生した。現実の社会はチャヤーノフが思い描いたベクトルとは真逆の運命をたどったが、農民のための革命という憧憬は国民の間で広く共有されていた。農村を歌ったエセーニンや、クリューエフが革命後の詩壇で支持されたのも偶然ではない。その歌声は、それまで抑圧されてきた農民の声として受容され、「悔める知識人」はその声を通して贖罪しようとした。

チャヤーノフのユートピア小説は『裸の年』の発表直前にモスクワで出版されており、その歴史観にピリニャークが影響を受けたことは大いに考えられる。<sup>118</sup>ピリニャークもまた逆行の歴史哲学に魅了され、西欧化の袋小路に陥ったロシア社会の救世主像を民衆の中に探し求めた。『裸の年』のグレブは脱西欧化としての革命を通してロシア人によるロシア人のためのユートピア建設を夢見ている。

---

文芸誌「新しいロシア文学」に掲載、同年にはフランス語訳が出ている。См.: Флейшман Л. Русский Берлин 1921-1923. Париж, С. 304.

<sup>117</sup>. Кремнев И. Путешествия моего брата Алексея в страну крестьянской утопии. М., 1920. С. 28-29.

<sup>118</sup>. チャヤーノフは小説の中で「製紙業総本部」を意味するソ連時代の略語「グラубум」ГЛАБУМ やボリシェビキを意味する政治的俗語の「革ジャケット」кожаные куртки などを用いたが、これらの表現は同時期に執筆された『裸の年』にも散見される。

ロシアのインテリゲンツィヤは十月革命を支持しなかった。それもそのはずです。ピョートル大帝以来、ロシアは西欧を崇拜してきたが、足元には、後ろ足立ちになった馬の足元（ピョートル大帝の像——筆者注）には我々の民衆が一千年前と同じように生きていて、インテリゲンツィヤはピョートルの忠実な子孫です。ロシアのインテリゲンツィヤの始祖はラジーシチェフ<sup>119</sup>とされているが、それは違う。ピョートルです。ラジーシチェフ以来、ロシアのインテリゲンツィヤは後悔しだしたのです。後悔し、自分の母を、ロシアを探し始めたのです。どの知識人も後悔し、民衆を想い、民衆を知らない。でも革命には、民衆の蜂起には必要なかったのです——他人のものなど。民衆の蜂起が——権力を奪い取り、自分の真実を作り上げるのです——真にロシア人たる人々が真にロシアの真実を。それこそが幸福なのです！……農村ロシアの歴史はどこを見渡してもセクトばかりです。機械の西欧、セクトと正教の宗教的ロシア——そのどちらが勝利するのでしょうか？（I:75、強調はピリニャーク——筆者注）

ロシアのインテリゲンツィヤはフランス革命に影響を受けて自由思想に染まり、やがて革命勢力へと成長していくが、ピリニャークの考えによればそのインテリゲンツィヤもまた西欧化の遺産であり、民衆との間に有機的関連はない根無し草の「余計者」である。ロシア・インテリゲンツィヤの始祖ラジーシチェフもまた西欧で教育を受けた「余計者」で、ロシア文化を体現しているとは言えない。ロシア的人間は西欧に学んだインテリゲンツィヤではなく、母なる大地に育まれた盲目の民衆から生まれるものであり、民衆を主体とした無政府状態をロシアの理想と作家は考えた。そして作家は二世紀にわたる西欧依存の歴史を吹き去る役目を革命に希求した。

西欧では証券取引所やトラスト、植民地政策によって戦争が引き起こされたが、西欧で  
**あのような戦争が発生しえたのであれば、西欧の機械文化には終止符をうつべきでは**

---

<sup>119</sup> アレクサンドル・ラジーシチェフ（1749-1802）：作家、革命家。貴族の家に生まれ、ライプツィヒ大学に学ぶ。在学中に自由思想に感化されるとともに、フランス革命に強い影響を受け、帰国後に自由思想を喧伝する作品を執筆したため逮捕、流刑。プーシキン、デカブリスト、ゲルツェンなどの自由思想に影響を与えた。



ないか。この西欧がロシアではピョートル大帝によって祭り上げられたのだ（そして、まぶしいほど白い教会がそのとき閉鎖された）。——我々の革命は五月の嵐ではないか？——我々の革命は二百年のかさぶたを洗い流した三月の増水ではないか？（1:65、強調はピリニャーク——筆者注）

革命のロマンチズムに魅了されたピリニャークは、ボリシェビキを描くことに心血を注いだ。ケレンスキーの臨時政府を転覆し、農民のための革命を約束したボリシェビキこそ、ピリニャークには「真にロシア的な人々」と映ったのである。

革命後、ピリニャークはボリシェビズムに心酔したが、それはこの運動がロシア的な、あるいは民衆的な現象として作家の目に映ったからに他ならない。ロシア・アヴァンギャルドに詳しい大石雅彦は『裸の年』における革命観を次のように説明している。

『裸の年』の革命運動は、対立する二項の弁証法的運動として展開していく。その典型は、都市と農村、ヨーロッパとアジアである。二項対立の鎖列は、見事な尾根を築いている。〔中略〕『裸の年』の革命観は、ピョートル以降不当に無視され続けてきた後項を復権させて、両者を止揚することである。<sup>120</sup>

亡命した知識人の多くはボリシェビズムをロシアが抱える宗教的、倫理的病気の結実として扱ったが、ピリニャークはボリシェビズムの中にこそ西欧化以前の中世ロシアを復権させるダイナミズムを見出したのである。ピリニャークにとって革命は機械的なもの（それはドストエフスキイが『地下室の手記』で唾はいたロンドンのクリスタルパレスに代表される）からの解放であると同時に、ロシア民族の失われた「純粋な過去」を復権しようとする民族的行為である。ただし、ピリニャークが賛美したのはボリシェビズムであり、共産主義ではない。共産主義は外来の思想的体系、つまり西欧文明の産物として提示されている。その例として、『裸の年』に登場するボリシェビキ、エゴールカの革命観が示唆に富む。エゴールカにとって共産主義者は闖入者であり、ロシア的な革命家とは「百姓上がり」のボリシ

---

<sup>120</sup> 大石雅彦「コスモスあるいはコーラとしての『裸の年』」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第9集、1982年、238-239頁。

エビキである。そしてそのボリシェビキこそが「ドイツのくびき」からロシアを解放した英雄として認識している。

ロシアはタタールの下を歩いでだ——タタールのくびきがあったべ。ロシアはドイツの下を歩いでだ——ドイツのくびきがあったべ。ロシアはそれなりに賢いんだ。ドイツ人は賢いけど、その知恵ってやつが馬鹿なんだな。水洗便所作るごとばっか考えんだ。集会でおらは言うわけよ。インターナショナル<sup>121</sup>なんかあるはずねえべって。ロシア民衆の革命、反乱で、それ以上でねえべよって。ステパン・チモフェーヴィチさまと同じでねえか。そんだったら、「カルラ・マルクソフはどうなんだ」って聞くからよ、ドイツ人だから、馬鹿に決まってっぺって言ってやったんだ。「そんだったら、レーニンはどうだべ」って言うがら、レーニンは百姓上がりだ、ボリシェビキだ、そういうおめえさんはコムネストだ。(I:85)

レーニンの英雄化は当時としては極めて一般的で、ロシア文学史家の「チメによれば、諸外国でレーニンはアレクセイ・カラマーゾフのような聖人として受容されることが典型的だった。<sup>122</sup>『裸の年』でもレーニンは美化されているが、この場合はアレクセイ・カラマーゾフではなく、外国による支配から労農ロシアを開放する農民出の革命家として提示されている。また、ここで共産主義者と異邦人がイコールで結ばれていることは興味深い。つまり、共産主義は西欧文明の遺産であり、それに対置されるべきロシアの民衆的革命運動がボリシェビズムなのである。ピリニャークにとって十月革命は飽くまでも民族的現象であり、ロシアの民衆文化に深く根差している。作品の中で作家が近代になって仏語から借用された「<sup>レヴォリューツィヤ</sup>革命」のほか、よりロシア的な「<sup>ブント</sup>反乱」という言葉を用いているが、それは十月革命を西欧的な「革命」ではなく、ロシア的なものとして提示するためであろう。<sup>123</sup>

---

<sup>121</sup>. インターナショナルはインターナショナル、カルラ・マルクソフはカール・マルクス、コムネストはコミュニスト、プリンプルはプリンシプルの訛り。ステパン・チモフェーヴィチはいわゆるステンカ・ラージンで、十七世紀後半のロシアで発生した大規模な民衆蜂起の首謀者。

<sup>122</sup>. См.: *Тиме Г.А. Путешествие Москва – Берлин – Москва. Русский взгляд Другого* (1919-1939). М., 2011. С. 97.

<sup>123</sup>. 本来的にブントは「組合、結束」を意味するドイツ語の言葉だが、ロシア語には十六世紀か

共産主義は西欧文明の遺産として徹底的に批判されている。もう少しこの点を検証してみよう。以下ではポリシェビキのエゴールカと没落貴族アンドレイの会話を見ていくが、アンドレイは「シェキスピーロフ」（シェイクスピアのロシア訛り）を知っているが、ロシア民謡（「雨垂れの土曜」）は知らない。西欧化されたロシア貴族はエゴールカにとって「コムネスト」であり、異邦人である。

ほれ、シャク……シェキスピーロフとかいったか？ ハムレットは読んどるくせに、おなごが躍る吹雪節も知らんのか。それとも、ほれ、「雨垂れの土曜」の歌は知っとるか？ どうだ？

——いえ、知りません……

——ほれ、見たことか！ お前もコムネストだな！（I:87-8）

このように、西欧化されたロシア貴族は異邦人（「コムネスト」）として提示されている。それに対し、ポリシェビキは民族文化の結晶として描かれる傾向にある。

『裸の年』にはポリシェビキが作品の随所で登場するが、ポリシェビキが身にまとった「革ジャン」はソ連文化の文脈で革命家の代名詞となった。以下で取り上げる例では、ポリシェビキと民衆文化の結びつきが強調されている。

オルディーニン家に置かれた執行委員会（ここの窓辺にゼラニウムの鉢は置かれていなかった）——その二階に集まったのは革ジャンを着た男たち、ポリシェビキ。彼らは各人頑丈、革の快男子、各人強健、そして浅くかぶった帽子の下で癖毛はカールし、各人それぞれ立派な頬骨、唇のしわ、各人それぞれ鋼のような身のこなし。ロシアのもろく、曲がりくねった民衆性から——選りすぐり。革ジャンを着ていれば——めそめそ濡れもしない。こう俺たちは考えるんだ、こう俺たちはやりたいんだ、こう俺らは決定したんだ——何か文句はあるか。（I:156）

---

ら十七世紀ころに借用された。См.: Черных П.Я. Историко-этимологический словарь современного русского языка в 2 т. М., 1993. Т. 1. С. 124.そのため、「ブント」は「レヴォリュューツィヤ」よりもロシア化していると考えられる。

ここでピリニャークは「各人」Каждый、「革ジャン」Кожаные Куртки、「ボリシェビキ」большевики、「革の快男子」Кожанный Красавец、「各人頑強」Каждый Крепок など、「K」の子音反復を通して音楽的に描写しながら、民衆文化で親しまれる<sup>ボガティリ</sup>勇者のようにボリシェビキを提示している。あくまでもボリシェビズムは民族的現象として理解されている。その証拠に、『裸の年』は十月革命を取り扱った作品にもかかわらず、作品の最後は英雄叙事詩風の描写でもって閉じられている。

森は杭のように固く立ちはだかり、吹雪は鬼婆となって森に飛びかかる。夜。勇士たちの死に様を語った英雄叙事詩は森を、吹雪を歌ったのではないか？——吹雪の鬼婆が次々と森の杭に飛びかかり、吼え、わめき、叫び、腹を立てた女のように泣きわめき、死体となって崩れ落ちる。しかし、その後ろを新たな鬼婆が疾走し、おとろえることなく——蛇の頭のように増殖し——二つの頭が一つの断ち切られた頭に繋がって——しかし、森はイリヤ・ムロメツのように仁王立ちしている。(I:180)

『裸の年』にはロシア民謡が数多く引用されているが、それはボリシェビキを英雄叙事詩に登場する勇者の姿と重ね合わせるための演出だろう。数多く登場するボリシェビキの中でも際立っているのがアルヒプ・アルヒポフだが、この人物こそピリニャークの革命観を象徴している。

アルヒプは農夫の父親を持つ。父は胃がんにかかり、助かる見込みは万に一つもない。そして父親はアルヒプに闘病の是非を相談する。以下、長文になるが、アルヒポフ親子の会話を引用しよう。

——ある博識な哲学者が知っているな、お前も知ってるだろう。仮に二ヶ月も死の床に伏し、そのうえ病気で苦しむならば、いっそ自分で手を下した方がよいと……お前はそして言ったな、賛成だと。死はもはやそれほど恐ろしいものではないと——イワン・スピリドノヴィチは厳密に言葉を選びながら静かに、そしてゆっくりと話した。彼は目を伏せていた。

アルヒプ・イワン・ヴィチは席をたった。

——親父、はっきり言え——息子は落ち着き払って言った。——何の話だ？ おい？——そして、「おい」という言葉を発した息子の声は震えた。

——今日は病院でダニール・アレクサンドロヴィチに診てもらってきた。彼が言うには不治の病、胃癌だそうだ。余命二ヶ月らしい。その間、恐ろしい痛みを耐えるそうだ。わかったか？

アルヒプ・イワーノヴィチは我知らず部屋を一周した。そして父の方へ歩み寄ろうと二歩足を進めたが、急にドアへむかった。しかし、もう一度、背を向けて窓辺にある書き物机のあたりで立ち止まり、父に背を向けた。

——お前は言ったな、アルヒプ、自分で手を下したほうがいいと。わしも同感だ。どうだ？ お前は思う？

アルヒプ・アルヒポフは一呼吸おいて静かに答えた。

——ああ、そうだ——静かに答えた。

——つまり、死んだほうがいい——自分で手を下したほうがいいか。

——そうだ——と、静かに答えた。(I:54-55)

ポリシェビキのアルヒプは不屈の意志を持ち、「ロシアのもろく、曲がりくねった民衆性から——選りすぐり」で、父の自殺に動じることなければ躊躇なく反革命分子を銃殺刑に処す。アルヒポフはまさにロシアの民衆から生まれたポリシェビキに違いない。続けてアルヒポフの描写を見てみよう。

昼の間、アルヒフ・アルヒポフは執行委員会で紙を書いては町や工場を駆け回り、会議、集会、ミーティングに出席する。紙を書いては眉間にしわをよせ（そしてひげは少しばかりくしゃくしゃに）、筆を斧のように握っていた。会議では外国の言葉を次のように発していた。コンスタント、エネギルツシュ、リト・フォノグラム、ファクション、ビュジュット——ロシア語の「<sup>モーグト</sup>できる」могут という言葉を——「<sup>マグーチ</sup>でぐる」магутъ と発していた。革ジャンを着てプガチョフ並のひげ。(I:156)

この引用で作家はアルヒポフに民衆性を投影するため、「筆を斧のように」握り、「紙を書く」という描写を加えたほか、コーヒーを「五本指で皿から飲む」(I:164) 姿を描いたが、これはロシア農民の典型的なイメージである。さらに作家は「ひげ」をアルヒポフにつけ加えて、十八世紀に農民戦争を組織した反逆者プガチョフのイメージをも投影しようとした。プーシキンの『プガチョフ叛乱史』(1834) を紐解けば明らかな通り、プガチョフは蜂起に

加わるコサックには自由や富のほか、「ひげ」を与えることを約束した。<sup>124</sup>このことから、『裸の年』の文脈における「ひげ」はプガチョフのイメージを帯びているといえる。さらにこの「ひげ」はピリニャークの歴史哲学とも連動していると考えられる。

周知の通り、ピョートル大帝は西欧化を推し進めるため、1697年3月に総勢250人からなる「西欧大使節団」を組織し、ドイツ、オランダ、イギリス、オーストリアを訪問した。幼少のころから西欧の文物に好奇心旺盛だった皇帝は「ピョートル・ミハイロフ」の偽名で乗組員に変装して西欧を視察し、アムステルダム<sup>125</sup>の東インド会社では自ら船大工として四ヶ月も汗を流したという。そして翌年の8月、皇帝は一年半に及ぶ大使節団の旅から帰国するや否や「髭剃り令」を発布した。皇帝は自ら髭を切り落とすほか、大貴族らの髭も切り落とした。ひげを生やすことはロシアの「悪しき伝統」であり、時の皇帝は野蛮な文化の遺産と位置付けたのである。当時の宗教観からすると、髭をそることは罪深い行為である。ピョートル大帝の治世に詳しい土肥恒之によれば、「敬虔なロシア人にとって、ヒゲは造物主たる神のイメージを保つのに不可欠であり、それを失うことは永劫の罪に落ちるに等しい」。<sup>125</sup>そのため「髭剃り令」を布告したピョートル大帝は「アンチ・キリスト」として恐れられた。宗教的な理由から髭をそることを拒んだ国民は「髭の証」という硬貨を買うことで、ひげを伸ばす権利を守りぬいた。<sup>126</sup>これらのことから、『裸の年』の文脈において「ひげ」は西欧化への抵抗として機能していると考えられる。

このように、ピリニャークは、ボリシェビキのロシア革命をプガチョフやラージンが組織した「民衆の反乱」<sup>フント</sup>にすり替え、逆行する歴史哲学を補強した。当然ながら、ボリシェビキの間で「カール・マルクスを読んだ者は恐らくはいない」(I:46)。マルクス主義はロシア革命にとって無縁のアカデミズムであり、『裸の年』に登場するアナーキストの言葉を借りれば、「どこか遠くにヨーロッパがあつて、そこにはマルクスがいて、アカデミックな社会主

---

<sup>124</sup>. См.: Пушкин А.С. Собр. соч. в 10 т. М., 1981. Т. 7. С. 16.

<sup>125</sup>. 土肥恒之『ピョートル大帝とその時代』中公新書、1992年、60頁。

<sup>126</sup>. <sup>ボロドヴォイ・ズナク</sup>「髭の証」は大北方戦争(1700-1721)の戦費を供出するためにピョートル大帝が考案した硬貨。硬貨の裏には「<sup>ジュニギ・ヴジャティ</sup>徴税済み」の文字が鑄造されていた。宗教的伝統を重んじる古儀式派の人々は、高額な税金を払ってでも髭を守る傾向が見られたという。「髭の証」の額は1715年から一律50ルーブルと定められた。この税金はエカチェリーナ二世の治世で廃止されている。См.: Большая энциклопедия. Т. 7. С. 103.

義があるが、ここでは一千年も変わらぬ信仰が守られてきた」。(I:95)

続いてアルヒポフの恋人でポリシェビキのナターリヤ・オルディーナナの描写に目を点じよう。彼女もまたピリニャークの歴史観から生まれた登場人物といえる。次に引用するのは、ナターリヤが生まれ育った家を捨てて革命に身を投じようとする場面である。以下の場面では没落した家を守ろうとするグレブと、家を出ようとするナターリヤの世界観が対立する。

——でも、ナターシャ、姉さんは何歳だよ？

——28 歳よ。まだまだ生きなくちゃ。生きてる人は行くべきなのよ。

——行くって、どこへ？

——革命の中へ。今日という日は二度と戻らないわ。

——ナターリヤ……いったい……なにを……

——わたしはポリシェビキよ、グレブ！ あたしのように、あんたも今なら分かるでしょう、一番大事なのは——パンとブーツかしらね——どんな理論よりも価値があるの。だってパンと職人抜きにはあんたは死ぬし、どんな理論も死んじゅうわ。そしてパンを与えてくれるのは農民。農民と職人が自分の価値を使いこなせるようになればいいの。

(I:83)

ここでナターリヤは自らの革命観を説くが、そこでもつばら強調されるのは「パンとブーツ」で、それは理論よりも上にある。彼女もやはりアルヒポフと同じくピリニャークの革命観を代弁しており、共産主義の影は認められない。ナターリヤにとって重要なのは生きること、そして繁殖することである。ナターリヤはその死生観を次のように語っている。

人生はロマンチズムのおセンチな玩具じゃない。きっと私は嫁ぐ。私は夫を裏切らない——でも、心を彼に明け渡すようなことはしない。子供を持つために体だけ渡す。これは面倒で冷めてるけど、それが正直なの。ロマンチックなオスのメスになるには、学びすぎてしまった。私は子供が欲しいだけ。(I:81)

そしてナターリヤは子供を受けるためだけにアルヒポフのプロポーズを受け入れる。

今日は初めて暖炉を焚いた——窓が汗ばんだ。月の朧な光が砕け、反射している——  
ガラスに浮かぶ涙の中で、そして目元に浮かぶ涙の中で。  
——愛さず——そして愛す。そして生活が始まる、子供たちが生まれる、そして——労働、労働が！……あなた、大切なあなた！嘘と痛みが消えていく。(I:165)

これまで見てきた通り、ピリニャークの革命受容には「ロシア的なもの」を求める傾向が顕著に見られた。そしてこの民族性は共産主義とも西欧文明とも無縁のロシア的なユートピアを求めるダイナミズムとなって『裸の年』に表出した。

『裸の年』は革命の成就を告げるツバメとして歓迎されたものの、作品の「曖昧さ」は批評家たちを苛立たせた。ポロンスキイは『裸の年』の疑わしき「革命性」を次のように揶揄している。

ピリニャークは革命を肯定したのか、あるいはその権威を失墜させようとしたのか？  
歓迎したのか、批判したのか？ 罪があるのは読者の方ではない。作家の罪である。仮に  
ピリニャークがこの長編を執筆していた際に、思いがけぬ質問を出したとしたら：  
——お前は革命を信じてるのか？  
当惑して、こう答えたに違いない：  
——僕ですか？ 僕は革命を……信じたいです……<sup>127</sup>

ピリニャークの政治的側面に対する不信感ポロンスキイに限らず、1920年代の批評家たちの間に強く見て取れる。ピリニャークは革命を受け入れたにもかかわらず、『裸の年』は決してプロレタリア文学の規範には収まらない。

反共の革命作家ピリニャークの作品はスターリン、トロツキイを始めとする共産党幹部による批判の対象となった。その例として、スターリンはスヴェルドロフ大学で行った講義

---

<sup>127</sup>. Полонский. О литературе. С. 144. ポロンスキイはピリニャークに辛らつな批判をいくつも残したが、この評論が書かれた時期を考慮する必要がある。執筆は1927年で、ピリニャークが『消されない月の話』を発表し、四面楚歌にあった時期である。いわば、作家としての「死刑」を宣告された後に発表された経緯を考慮に入れれば、ポロンスキイは時に辛らつな批判を浴びせつつも、「更生」の機会をピリニャークに与えようと努力したのだと推測される。



「レーニン主義の基礎」(1924)の最終章で『裸の年』を真のレーニン主義にはほど遠い作品と紹介、「エネギルツシュ」に「ファクション」するボリシェビキの「無原則的功利主義」を批判した。<sup>128</sup> すでに見た通り、スターリンはトロツキイの庇護を受けるピリニャークに反感を抱いており、ピリニャーク批判の裏にはトロツキイへの敵意が見え隠れする。しかし、そのトロツキイもまた『裸の年』に登場するボリシェビキは容認することができなかった。トロツキイは作家としての才能を高く評価しつつも、その民族的な革命理解を痛烈に批判した。以下、トロツキイの『文学と革命』から引用である。

まさにこの点において、もっとも気がかりな面が姿を見せている。すなわち、ピリニャークの歴史哲学はまったく逆行的なものであり、この革命の芸術的同伴者は、革命の道が前方に向かってではなく後方に向かっているかのように考えている。革命がピリニャークにとって受け入れられるのは、民衆的であることによるが、革命が民衆的であるのはピョートルを投げ捨て、十七世紀を再生されているからというわけだ。<sup>129</sup>

中世ロシアとボリシェビズムを統合しようとする作家の挑戦は大きな波紋を呼んだ。トロツキイは続けてピリニャーク作品のボリシェビキ像を次のように批判している。

時代は生きた半分と死んだ半分に分断されており、生きたほうを選ばねばならない。選択にあたってピリニャークは決断できず迷っており、妥協としてボリシェビキのアルヒポフにプガチョフ風の髭をつける。だがそれはもはや小道具である。われわれはアルヒポフに会ったことがあるが、かれはいつも髭をそっている。<sup>130</sup>

革命はロシアをソ連という「生きた半分」と、中世ロシアという「死んだ半分」に分断したが、ピリニャークが選んだのはまさしく「死んだ半分」であり、それはマルクス・レーニン主義を奉じるオールド・ボリシェビキにとって受け入れがたい反動的な革命理解であった。フォルマリストのシクロフスキイもトロツキイと同様に「ひげはアルヒポフに張り付か

---

<sup>128</sup>. Подр. см.: Сталин И.В. Сочинения. М., 1952. Т. 6. С. 188.

<sup>129</sup>. Троцкии『文学と革命(上)』116頁。

<sup>130</sup>. 同上、119頁。

ない」<sup>131</sup>として、ボリシェビズムと中世ロシアの統合に難色を示している。

ピリニャークの革命観に対する批判は矢継ぎ早に続いた。その典型的な例として、Я・レ  
ルスは評論「新しいブルジョアのイデオロギーが生んだ芸術作品としてのピリニャーク創  
作」（1926）を発表、作品に登場する反動的なボリシェビキ像を批判している。

アルヒポフをまじまじと見てみればわかるだろう。彼の中には皮ジャケットのしなや  
かさがなく（内面も表面も）。彼の父親は農夫で、土いじりが好きな男である。革ジャン  
を着てはいるが、その中に着ているチョッキがのぞいて見え、その下にはルバシカを  
着ている。彼はマルクスを読んではいるが、外国語の発音はてんで出鱈目で、政治教育  
課程の速習講座さえしっかり習得できるか、怪しい限りである。<sup>132</sup>

ナ・バストゥ  
歩哨派を始めとする左派の評論家はこぞってピリニャークの民族的革命理解を批判した。  
そしてその作品世界は階級闘争が激しさを増す中で反動文学の筆頭として認識されるよう  
になる。例として、左派の評論家 И・ヴァルデンは評論「ヴォロンスキイ根性を打倒すべし」  
（1924）を発表、ヴォロンスキイの庇護下にあったピリニャークとエセーニンの創作にみ  
られる反時代性を糾弾し、階級闘争としての政治文学を創造する必要性を訴えた。

当然ながらピリニャークやエセーニンをとっ捕まえて、共産主義者に『転向』させるな  
どとふざけた考えを起こすものは誰もいない。彼らの文学的独自性に危害を企てよう  
とするものも誰もいない。しかし、彼らには口を酸っぱくしてやってやる必要がある。  
共産主義から距離を置けば、その分だけ彼らは本当の生や闘争、時代が課す焦眉の課題  
からは遠ざかっていくだろう。<sup>133</sup>

オールド・ボリシェビキの多くは作家ピリニャークの才能を高く評価したが、評論家、あ  
るいは革命家としてのピリニャークには疑義を抱かざるを得なかった。ピリニャークと交

---

<sup>131</sup>. Шкловский В. Гамбургский счет: статьи, воспоминания, эссе: 1914-1933. М., 1990. С. 263.

<sup>132</sup>. Лерс Я. Творчество Бор. Пильняка, как зарождение художественной идеологии новой  
буржуазии // На литературном посту. 1926. № 7-8. С. 24.

<sup>133</sup>. Вардин И. Воронщину необходимо ликвидировать // На посту. 1924. №. 4. С. 15.

流の深かったヴォロンスキイも作家の保守革命には厳しい態度を取り、西欧の文明を利用してこそ西欧との闘争に打ち勝つべき、との指摘を加えている。

西欧のブルジョア文化は行き詰まりに入った。それはその通り。その文化は一連の機械である。かなりの程度、それは正しい。しかし素晴らしい時代もあったではないか。カント、ヘーゲル、マルクス、シラー、ゲーテ、イプセン。人間精神という宝物を豊かにしていったすべての人の名前を挙げる必要もなかろう。そもそも「すべてが死んでいる」などと今でさえ言うことができるだろうか？ 西欧のブルジョア文化はいまだ凄まじい抵抗力を有しており、精神面においてもいまだその覇権をつなぎとめようと戦っている。[中略] そしてこの文化に打ち勝つにはこの文化の武器である鋼鉄とコンクリートによってのみである。<sup>134</sup>

ヴォロンスキイは同伴者作家を支持しつつも、その作品世界に見られた民族主義的調子には危機意識を持っていた。そして西欧に背を向けるのではなく、批判的に学ぶ必要性を主張した。

これまで見てきた通り、ピリニャークは「民衆の反乱」として十月革命を理解した。ピリニャークにとっての革命はロシアの原初的な文化を復権することであり、西欧文明の遺産はその文化的パラダイムの中に居場所はない。ピリニャークもまた道標派やユーラシア主義者と同じく、精神性豊かなロシア文化の探求を課題として、西欧化以降のロシア史を批判的に再読し、逆行した歴史哲学を展開した。民族の原点を探ろうとするピリニャークの衝動は、文化と文明の興亡を論じたシュペングラーの歴史哲学に支えられ、1920年代の文壇で一つの大きな流れを作っていた。もちろん、ピリニャークの文明論は純粋にロシア思想史の流れに成立したものだが、その影響力がそれほどまでに高じた理由の一つはシュペングラー・ブームの存在も否定できない。

革命前後のピリニャーク作品を比較すると、自然崇拝という特徴でこそ共通しているが、その変化は目覚ましいものである。その変化を可能としたダイナミズムの思想的源流はどこにあるのか。ここで我々の関心を引くのが革命期のペトログラードで開花した文芸活動の「スキタイ主義」である。

---

<sup>134</sup>. Воронский. Искусство видеть мир. С. 239.

## 第二章 ロシア文化の源流を求める「スキタイ人」の芸術運動

ピリニャークは革命を通してコロムナで活躍する地方作家から文壇の中心へと躍り出て、「革命的」作家として注目を集めた。その変容ぶりは目を疑うほどで、ピリニャークはまさしく「革命によって押し出された」作家にほかならない。しかし、その変容を可能とした原動力についてはピリニャーク研究の中でも曖昧なままである。ただし、近年刊行された書簡集などから、革命前後のピリニャークを取り巻いた文壇の状況が徐々に明るみに出てきた。そこで着目したいのが、革命期のペトログラードで脚光を浴びたスキタイ主義である。

文芸サークル「スキタイ人」は歴史家のイワノフ＝ラズムニクを筆頭に、シンボリストのB・ブリューソフやA・ブローク、A・ベールイ、新農民詩人のC・エセーニン、H・クリューエフ、П・オレーシン、そしてモダニストのA・レーミゾフ、E・ザミャチンを中心に二月革命前夜のペトログラードで結成された。スキタイは紀元前八世紀から紀元三世紀にかけて黒海北部、現在のウクライナに栄えた騎馬民族で、古くはヘロドトスの『歴史』などにも記されている。

「スキタイ人」は十月革命を受け入れたものの、特定の政治色には染まらなかった文化人らで構成された文芸サークルである。スキタイ主義者たちと直接の交流があった教育人民委員ルナチャルスキは評論「革命時代の文学に関して」（1922）の中でスキタイ主義を取り上げているが、それによると、スキタイ主義は革命を受け入れようとする葛藤の中で生じた神秘主義的運動と紹介されている。<sup>135</sup>スキタイ主義の中にはイワノフ＝ラズムニクの内在的主観主義に始まり、ブロークの象徴主義、ベールイの人智学的探究、レーミゾフの神話創造芸術、シェストフの根無し草主義、プリシヴィンの現実創造芸術など、その創作原則はモザイク上に入り組んでおり、一義的に特徴付けることは難しい。<sup>136</sup>

なぜイワノフ＝ラズムニクはあえて「スキタイ人」というアジア的な名称を採用したのか。スキタイ主義の研究者П・カローヒンは、命名の経緯を次のように説いている。

スキタイ人にはそれこそB・タチーシチェフやM・B・ロモノーソフも関心を示していた。時とともに「スキタイ人」という言葉は、旧世界の破滅と新世界の隆盛を象徴する代名詞として機能するようになった。イワノフ＝ラズムニクはA・И・ゲルツェンの

---

<sup>135</sup> См.: Щербина. Литературное наследство. Т. 82. С. 221.

<sup>136</sup> Леонтьев Я. «Скифы» русской революции. М., 2007. С. 222.

思想を高く評価していたが、その彼は「年老いたスキタイ人」と自称し、次のように書いた。「私は、真のスキタイ人ながら旧世界の瓦解を歓迎する。そして我々の使命とは、来る終末を旧世界に告げることである」。ゲルツェンが書いたこの言葉こそ、イワノフ＝ラズムニクを刺激し、作品集「スキタイ人」刊行へと駆り立てたのである。<sup>137</sup>

このように、ロシア思想史の文脈において「スキタイ人」という表象は、旧世界の破壊者としての象徴を帯びており、西欧を訪れた際にゲルツェンが自らを「スキタイ人」に譬えたことから、ロシアでは無政府主義を意味する文芸用語として十九世紀後半から徐々に定着していったといえる。

イワノフ＝ラズムニクもまた自ら「スキタイ人」を名乗り、1917年に刊行した作品集の序文を執筆した。それが以下に引用する文書である。

#### 「スキタイ人」

この言葉の中に、この響きの中に、飛翔に酔いしれる矢の口笛を聞く。重みある丈夫な弓で軽快に、そしてしなやかに弧を描いた逞しい腕。[中略] スキタイ人が弓引くのを恐れるものは何もない！ 弦を張る腕の動きを休める偏見もない。生の呼びかけがはっきりと聞こえるその時に疑いを囁く神もいない。スキタイ人の神は一時も離れることなくスキタイ人の腰に――それは鍛造された神だ。彼はその柄を上にして丘に突き刺して祈る。これまでの破壊とこれからの破壊をもたらす鍛造された神に彼は祈るのだ……しかし、破壊と創造に彼は自らの腕以外の創造者を求めてはいない。創造者は自由で大胆な人間の腕である。<sup>138</sup>

イワノフ＝ラズムニクは1917年と1918年に一巻ずつ作品集『スキタイ人』を刊行したが、第一次世界大戦、革命、内戦の結果、ロシア国内の出版業界は急激に活動が停滞し、予定されていた第三巻の刊行は取りやめとなり、スキタイ主義の活動は停止に追い込まれた。それと同時にサークルを脱退する作家も少なからず見られた。再編を繰り返すサーク

---

<sup>137</sup>. Карохин Л. Сергей Есенин и Иванов-Разумник: «Человек, перед которым я не лгал...» СПб., 1998. С. 38.

<sup>138</sup>. Скифы. Вместо предисловия // Скифы. Пг., 1917. С. VII.

ル「スキタイ人」であったが、1918 年 3 月からイワノフ＝ラズムニク、ブローク、K・エルベルク、A・シュテインベルクが中心となって自由哲学アカデミー（以降、ヴォリフィーラ）<sup>139</sup>の設立準備が始まった。ヴォリフィーラの議長にはベールイ、副議長にはイワノフ＝ラズムニクとエルベルクが就任している。やがて教育人民委員ルナチャルスキイから設立許可と活動資金支給の約束を得るものの、「社会革命党左派暗殺事件」（1918 年 7 月）の関連で 1919 年 2 月にスキタイ主義者たちは一斉に逮捕され、ヴォリフィーラ設立の動きは一時的に休止へ追い込まれる。<sup>140</sup>この逮捕を通してレーミゾフはスキタイ主義の活動から距離を置いていく。釈放後、スキタイ主義者たちは徐々に活動を再開し、1919 年 4 月にヴォリフィーラはモスクワへの誘致を受ける。しかし、ソ連当局の厳しい監視下で活動することを嫌ったスキタイ主義者たちはペトログラードにとどまり、1919 年 9 月にペトログラード支部人民教育相認定の高等教育・研究機関として正式に誕生し、四万ルーブルの資金援助を受ける。

ヴォリフィーラの第一回公開定例会は 1919 年 11 月 16 日に開催され、ブロークが評論「人道主義の瓦解」を報告している。この定例会は出版社の一室で行われた小規模のものだったが、Д・メレシフコフスキイや K・チュコフスキイ、K・フェージンなど、ペトログラードの文壇を代表する顔触れが参加している。その後、ヴォリフィーラが開催した定例会では

---

<sup>139</sup> 1918 年 10 月にイワノフ＝ラズムニクはシュテインベルクをルナチャルスキーのもとへ派遣し、ヴォリフィーラの規則案を提出し、団体設立の裁可を仰ぐ。イワノフ＝ラズムニク、ブローク、シュテインベルク、エルベルクの署名が入った「自由哲学アカデミーの規則案に関する説明書き」は Bc・メイエルホリドの編集していた「人民教育委員部付属演劇部門時報」の 1918 年第 1 号に発表される。ヴォリフィーラの設立者リストにはイワノフ＝ラズムニクのほか、ブローク、ベールイ、メイエルホリド、エルベルク、シュテインベルク、B・クシュネル、K・ペトロフ＝ヴォトキン、E・ルンドベルク、C・ムスチスラフスキー、A・アヴラーモフ、Л・シェストフの名が連なっている。ヴォリフィーラ設立過程の詳細に関しては次の文献を参照。Белоус В.Г. ВОЛЬФИЛА [Петроградская Вольная Философская Ассоциация]: 1919-1924. М., 2005. Кн. 1. С. 29-74.

<sup>140</sup> スキタイ主義者の多くは社会革命党左派の機関紙に作品を発表していたため、政治犯と誤認されて逮捕の憂き目を見た。Подр. см.: Леонтьев. «Скифы» русской революции. С. 275-293.

数千人の参加者が出ることもあり、社会的影響力の大きさが見て取れる。<sup>141</sup>やがてヴォリフィーラはモスクワ、チタ、ヴォロネジにも支部を設立、1922年にはベールイをベルリンに派遣し、海外支部を築くなど、積極的な動きを見せる。ヴォリフィーラはもっぱら公開定例会、講義の開催に専心するが、ドイツ国内で生じた経済危機を契機にベルリンが亡命ロシア人とソ連人の町と化していくと、イワノフ＝ラズムニクはベルリンの出版社「スキタイ人」から論集、作品集の刊行を再開する。<sup>142</sup>ベルリンにはヴォリフィーラで活動していたИ・シュテインベルク、А・シュレイデル、Е・ルンドベルクが派遣され、数々の出版物を刊行した。亡命ロシアを生きたグーリは、スキタイ主義者たちのベルリン訪問を次のように回想している。

「スキタイ人」たちはかつての法律人民委員 И・シュテインベルクを筆頭に、А・シュレイデルを引き連れて 1921 年にベルリンへやってきた。彼らは大量の資金を抱えながらベルリンに騒がしくやってくると、すぐさま大風呂敷を広げたのだ！ 彼らは大きな出版社を設立し、それを「スキタイ人」と名付けた。<sup>143</sup>

スキタイ主義者たちが世に送った作品集、論集の数は膨大で、その活動は全盛期を迎えたに思われた。<sup>144</sup>しかし、「ポリシェビキから受け取った資金が底をつくと」（グーリの証

---

<sup>141</sup> ヴォリフィーラが開催した代表的な公開定例会の共通論題は次の通りである。「А・И・ゲルツェンの回想」、「П・П・ラヴロフの回想」、「プロレタリア文化に関して」、「ヴォリフィーラとは何か」、「創造の哲学」、「Вл・ソロヴィヨフの回想」、「プラトン」、「アレクサンドル・ブロークの回想」、「Ф・М・ドストエフスキイの回想」、「フォルマリズムに関して」。

<sup>142</sup> А・シュレイデルとルンドベルクがベルリンで設立した出版社（1920-1923）。ここからスキタイ主義者の作品が次々と刊行された。

<sup>143</sup> Гуль. Я унес Россию. С. 163.

<sup>144</sup> ベルリンの「スキタイ人」から出版された作品集は文献的に貴重な資料でその実物は確認できていない。グーリの証言によれば、ベルリンの「スキタイ人」から出版された作品の著者は次の通りである。ブローク、イワノフ＝ラズムニク、クリューエフ、エセーニン、ベールイ、クシコフ、シュレイデル、シュテインベルク、ルンドベルク、レーミゾフ、シェストフ、エルベルク。См.: Гуль. Я унес Россию. С. 165.

言)、その出版事業は足早に頓挫した。そして文芸活動の統制が強まりを見せたことを背景に、1924 年 5 月にヴォリフィーラは活動禁止命令を受け、事実上の解体に追い込まれる。

スキタイ主義者たちの創作原則は多彩を極めるが、ヴォリフィーラは革命を支持した作家、思想家らの手で設立されたソ連共産党政府公認の教育機関であり、その活動目的は革命期の文化にかかわる諸問題を「社会主義の観点から」考察することであった。1918 年 10 月にイワノフ＝ラズムニクがルナチャルスキイに提出した「自由哲学アカデミーの規則案」第一条には次のように記されている。

自由哲学アカデミーは文化的創造に関する諸問題を社会主義、哲学の観点から研究、対処するとともに、これら諸問題に対して社会主義的、哲学的に考究された態度をもって取り組む姿勢を広く民衆の間で普及させることを目的として設立される。<sup>145</sup>

ヴォリフィーラは社会主義の観点から革命期の文化に関わる諸問題に取り組むことを目的としていた。しかし、ヴォリフィーラの中に社会主義者は見られなかったばかりか、その実際の活動の中で社会主義と革命の関係性が議論されたこともない。なぜヴォリフィーラの活動方針に「社会主義的」と書き込まれたのか。規則案の草稿を執筆したシュテインベルクは回想録『若き日の同胞』で次のように言及している。

社会主義を新たな宗教と考えていたのはイワノフ＝ラズムニクのみならず、マルクス主義者で、ときの教育人民相であったルナチャルスキイもまた然りである。ゲルツェンのみならず、ベリンスキイもまた然りである。そしてジョルジュ・サンドに倣った若き日のドストエフスキイもまたそう考えた。そうとすれば、その孫弟子である私が社会主義と宗教の婚姻に何かしら恥すべきものを見出しえたであろうか。<sup>146</sup>

この通り、ヴォリフィーラ内部で社会主義はロシア正教に替わる新たな宗教的概念として理解されていたといえる。即ち、ヴォリフィーラの活動における「社会主義」はマルクス＝レーニン主義の枠組みには収まらない宗教性、ないしは精神世界の探求であった。

---

<sup>145</sup> . Белоус. Вольфила. С. 41.

<sup>146</sup> . Штейнберг А. Друзья моих ранних лет (1911-1928). Париж, 1991. С. 30.



イワノフ＝ラズムニクをはじめ、スキタイ主義者らが革命を受け入れたことは確かだが、彼らは左派の文化論に批判を加えた。その例として、ヴォリフィーラが1920年3月21日に開催した公開定例会「プロレタリア文化に関して」の議論が示唆に富む。

この公開定例会にはイワノフ＝ラズムニクのほか、ベールイ、ペトロフ＝ヴォトキン、シクロフスキイが報告者として参加している。報告者のイワノフ＝ラズムニクは左派が擁する「プロレタリア文化」の定義そのものに疑義を抱き、マルクス主義の文化論に根本的な矛盾を指摘している。一般的にマルクス＝レーニン主義の文脈において文化とは特定の階級によって生み出されるものと理解されているが、イワノフ＝ラズムニクは文化の創造者を階級ではなく、民族に認めた。<sup>147</sup>報告者の考えによれば、文化を生むのは民族であり、階級が生むものは文明である。そのためイワノフ＝ラズムニクは、プロレタリアと文化の語結合は「丸い四角」同様、矛盾に満ちたものであると考え、プロレタリア文化なるものは存在し得ないと主張している。

特定の階級が特定の文明を産み、この文明は「超民族的」なものとなる。なぜというに、西欧文明の共通水準は、どこの水道管の水を汲んでも同じように概して均一である。しかし、特定の階級が文化を産むという主張はすぐさま無数の疑問を引き起こす。たとえば、我々が貴族文化の話をするとき、それはプーシキンでも、レフ・トルストイでも構わないが、そのとき私はこのことを深く疑問視するのである。なぜなら、私の考えによれば貴族階級がロシアで生み出したのは特定の文明だからだ。しかし、プーシキンやレフ・トルストイの話になると、私は確信しているが、プーシキンやレフ・トルストイの創作は民衆の中にある深い根源的なものから生まれたものであり、ここで問題となるのは階級的文化でもなければ、貴族文化、ブルジョア文化でもなく、民衆文化のこと

---

<sup>147</sup> 文化を民族固有の産物、文明を超民族的なものとするイワノフ＝ラズムニクの定義は、シュペングラーの『西洋の没落』とも密接な呼応関係にある。スキタイ主義もまた文化と文明の問題を取り扱った思想的探究であり、その文化論には奇妙な符合が認められる。ただし、シュペングラーは文明を文化の発達段階として捉えていたのに対し、イワノフ＝ラズムニクは、ロシアにおいては文明(西欧化)がまず先に起こり、それから文化の探求が始まったとする主張を行い、『西洋の没落』に見られる文化と文明の継承関係に疑問を提示した。

である。そのため「文明」の概念は階級的であると同時に超民族的である。そして「文化」の概念は非・階級的であると同時に民族的である。<sup>148</sup>

イワノフ＝ラズムニクの考えによれば、文明は階級の所産であり、文化は民衆、あるいは民族の所産であった。報告者の批判を換言すれば、存在しえるのは「プロレタリア文明」であって、「プロレタリア文化」ではなく、イワノフ＝ラズムニクは共産党の文化政策を真っ向から批判した。また、ヴォリフィーラの中心に位置したベールイもマルクス主義陣営の「社会主義アカデミー」やプロレタリア文学者が集まるサークル「プロレトクリト」から参加を要請されるが、いずれへの協力も拒否している。<sup>149</sup>

### 2-1. 「スキタイ人」としてのピリニャーク

ピリニャークもまたペトログラードに開花したスキタイ主義の運動に多大な影響を受けた作家と考えられる。実際、革命後にピリニャークが発表した作品の多くはスキタイ主義を牽引した作家たち（ブローク、ベールイ、レーミゾフ）に捧げられている。またピリニャークはザミャーチン、エセーニン、オレーシン<sup>150</sup>など、スキタイ主義の中心にいた作家たちとの交流も盛んであった。

ピリニャークがスキタイ主義の思想的探究に触れたのは『裸の年』を執筆していた 1920 年のことと考えられる。ピリニャークは 1937 年に逮捕され、ルビャンカの地下牢に入れられていたが、その際にまとめられた調書で作家は「1920 年に『スキタイ人』に共感を抱いていた」<sup>151</sup>と証言している。もちろん、ルビャンカで作成された調書の発言内容がどれも作家の真意とは限らない。同じ調書でピリニャークは「最初に日本を訪れた 1926 年に帝国軍

---

<sup>148</sup> Белоус. Вольфила. С. 209.

<sup>149</sup> См.: Белоус. Вольфила. С. 207-214.

<sup>150</sup> ピリニャークはオレーシンの作品を評価し、詩人と交流を深めた。ピリニャークは『裸の年』でオレーシンの詩を引用したほか、共同の作品発表会も企画していた。См.: Пильняк. Письма. Т. 1. С. 278.

<sup>151</sup> Шенталинский В. Рабы свободы. М., 2009. С. 398.

将校で教授、諜報員の米川正夫に接触し、彼を通して私は日本軍の工作員となり、スパイ活動を行ってきた」<sup>152</sup>と証言しており、KGB 職員による拷問があったことは明白である。

また、当時の書簡集を紐解けば明らかな通り、ピリニャークにはスキタイ主義者としての自意識が見られたのも事実である。その例としてザミャーチンに宛てた手紙（1921 年 9 月 10 日）の中でピリニャークは次のように書いている。

モスクワでは作家出版協会が出来上がりました（ザイツェフ、パステルナーク、チュルコフ、ノヴィコフ、私、その他）。あなたのことも視野に入れています。燃え尽きるまで「スキタイ人」をやしましょう！（書簡集 I:373-4）

この手紙の中でピリニャークは文集『同時代人』<sup>ソヴレメンニク</sup>（未刊に終わる）の構想に関してザミャーチンに打診した。パステルナークとピリニャークを除く作家たちは程なく国外追放処分を受けたが、きたる出版事業の中に「スキタイ人」としての創作原理をピリニャークが夢見ていたことは興味深い。

「スキタイ人」としての自意識はそのほかの手紙にも表れている。その例として 1923 年にイギリスを訪問した際、通訳として同行していたイギリス人 H・ハワードに宛てた手紙が興味深い。この手紙でピリニャークはロシア文化に脈々と流れる「スキタイ人」の意識を書き綴っている。

私はロシア人で、作家で、都会生まれではない。鳥のさえずりが私にとってどれだけの意味を持っているか、お分かりにならないでしょう。あるいは、私は茹で卵を食べることさえ拒否しましょう。体に流れるスキタイ人の血を騒がす必要もありません。（書簡集 II:46）

このように革命後の書簡集を紐解くと、「スキタイ人」の用語が散見される。また、その作品世界に「スキタイ人」の表象が登場するようになったのも革命後のことである。その例としてピリニャークがドイツ滞在後に発表した『第三の首都』（1922）には次のような描写がある。

---

<sup>152</sup>. Там же. С. 395.

いまクレムリンのそばを通りかかった。クレムリンはいつも無口で、夜になると、闇に沈んでいく。ロシアのクレムリンは数百年も立ち通し。モスクワを十露里も離れて「雀が丘」や「ロゴシスカヤ関」の外に出ると、そこには森が広がり、狼やヘラジカ、クマがわんさかたむろしている。クレムリンの中には第三インターナショナルを信じ切った連中がいるが、クレムリンの門には太古のスキタイ人風な格好をした二人の守衛が立っていて、それは文盲の民衆だった。(II:329)

ここでピリニャークはクレムリンの「外」と「中」に広がる文化的・思想的断絶を巧みに描き出している。クレムリンの中には第三インターナショナルを信仰する異邦人の共産主義者がいる一方、その外にはスキタイ人のように野蛮な民衆が生きている。

また、エーゲ海を舞台にした短編小説『グレゴ・トリムンタン』(1925)を紐解けば、作品に登場するロシアの船乗りたちは「スキタイ人」の末裔として描かれている。ロシア人をスキタイ人の末裔として描く傾向はその後の長編小説『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』(1930)でも見られる。

スキタイ人の表象はピリニャーク作品に息づいたが、ピリニャークに最も強い影響を与えたスキタイ主義者はブロークだろう。ピリニャーク作品の研究者 A・アウエルは、ブロークの影響は絶大で、両作家は師弟関係にあったと考えている。<sup>153</sup>ピリニャークはベールイとレーミゾフも師として尊敬していたが、その影響は文体上のもので、審美学上の師として仰いだのはブロークに他ならない。その作品を紐解けば明らかなように、ピリニャークはブロークの作品からエピグラフに好んで引用を行った。次に引用するのは、ピリニャークが『裸の年』に引用したブロークの詩『寂寥の年に生まれし者たちは』(1914)である。狂気と希望が錯綜する時代の戦慄がこの詩からは読み取れる。

寂寥の年に生まれしものたちは  
おのが道をおぼゆることなし

---

<sup>153</sup>. Ауэр А.П. «Как многому я учился у Блока» (Блоковское начало в поэтике Б.А. Пильняка) // Пильняк Б.А. Исследования и материалы / Под. ред. А.П. Ауэра. Вып. 3-4. Коломна, 2001. С. 3.

戦慄の都市なるロシアの子ら 我ら

露もわするる力なし (I:20)

この詩は血の日曜日事件、ロシア第一次革命、日露戦争などの暗澹たる大事件を経て、第一次世界大戦が勃発した 1914 年に執筆されたものである。数多の戦争を通して国土は疲弊し、なおかつ革命気運が高まるこの時期に、ブロークは「血塗られた」ロシアの宿命を鮮明に感じ取った。そしてこの詩は『裸の年』に時代の凄惨な香りを与えたといえる。

ピリニャークはブロークの後を追いつけた。1921 年にブロークが病没すると、ピリニャークは短編『サンクト・ピーテル・ブルフ』<sup>154</sup>を執筆して詩人に捧げた。ザミャーチン宛ての手紙（1921 年 8 月 21 日）でピリニャークは次のように書いている。

これからペテルブルグについての物語「サンクト・ピーテル・ブルフ」を書こうと思う。

これはブロークを記念する作品になる。ペテルブルグについて読んでおくべき本のタイトルを教えてほしい。（書簡集 I:364）

ゴーリキイが設立した出版所「世界文学」でザミャーチンはブロークとともに外国文学をロシアに紹介する仕事に携わっており、詩人の最期にも詳しかった。<sup>155</sup>そこでピリニャークはブロークを知る数少ない友人のザミャーチンに打診をしたようである。ザミャーチンのほか、ピリニャークはペトログラードの詩人 M・シカプスカヤに手紙（1921 年 9 月 10 日）を出している。ここでピリニャークはブロークから受けた影響を包み隠さず告白している。

---

<sup>154</sup>. 現在はサンクト・ペテルブルグ（「聖ペテロの町」の意味）として親しまれているが、この町はかつて対北欧の要塞基地として建設された。建設当初の 1703 年、ピョートル大帝はその要塞を「サンクト・ピーテル・ブルフ」と名付けた。バルト海に臨むこの都市は、「西欧への窓」と呼ばれ、西欧の文物が真っ先に流入するロシアの国際都市として機能してきた。См.: Большая энциклопедия Т. 43. С. 308.

<sup>155</sup>. 「世界文学」（1918-24）はペトログラードの人民教育部内に設置された出版社で、ゴーリキイの要望で設立された。この出版社からは古今東西の文学作品が詳細な解説とともに日の目を見た。

ブロックについて知っていることすべてを、彼の死、葬儀について教えてください。「サント・ピーテル」は彼に、彼の記念に捧げようと思います。誰も気づいていませんが、私は本当に多くのことをブロックに学びました。（書簡集 1:371）

このようにピリニャークはペetroグラードの作家たちに打診し、ブロックの最期を詳しく尋ねた。そしてピリニャークはブロックの死を悼むエッセイを執筆し、ベルリンの文芸誌「新しいロシア文学」から発表した。そのエッセイには次のような一文がみられる。

燃えるように暑い八月のある日、黒い手紙を受け取った。手紙からは真紅の血となってバラの花びらがこぼれ落ちた。アレクサンドル・ブロックの棺に添えられていた花びらはまだ精彩を放っていた。ブロックの血を送ってくれたのはマリア・ミハイロヴナ（シカプスカヤ——筆者注）だった。果たして誰がブロックの血を忘れるだろう。<sup>156</sup>

このようにピリニャークはブロックと面識こそなかったものの、その作品世界の虜になっていた。ピリニャークはブロックの評論にも精通していたと考えられる。後述する通り、革命後にブロックは「全身、全霊、全意識で革命を聴け」と同時代の作家たちを鼓舞したが、ピリニャークはその呼びかけに応えるように耳を澄ませ、革命の吹雪を歌い始めた。ピリニャークがここで用いた「グヴィイウウ」や「グラヴブウム」などのオノマトペは革命後に登場したさまざまな略語から借用されたもので、「プガチョフ並みのひげ」をはやしたポリシェビキと同じく、中世ロシアとソ連を統合しようとする歴史哲学の所産である。<sup>157</sup> 以下、『裸の年』からの引用である。

革命の雄叫びが聞こえるか、まるで吹雪をいく魔女のようだ！ 聞いてみよ——グヴィイウウ、グヴィイウウ！ ショオヤ、ショオヤヤ……ガアウ。そして森の悪魔が太鼓

---

<sup>156</sup>. Пильняк Б.А. М.М. Шкапская. «Mater Dolorosa». Петербург. 1922. [рец.] // Новая русская книга. 1922. № 3. С. 8.

<sup>157</sup>. ここでは軍事技術総本部（ГВИУ）、特攻部隊（ШО）、住宅経営（КВАРТХОЗ）、砲兵部隊総本部（ГАУ）、軍事教育機関総本部（ГУВУЗ）、製紙業総本部（ГЛАВБУМ）、疎開部門長官（НАЧЭВАК）などの政治的・軍事的略語がオノマトペとして用いられている。

をたたく——グラヴBUM！　グラヴBUM！……魔女どもが小躍りをする——クヴァルトゥホーズ！　クヴァルトゥホーズ！……森の悪魔が荒れ狂う——ナチェヴァク！　ナチェヴァク！　フムウ！……それに風も、松も、雪も——ショオヤ、ショオヤ、ショオヤ……フムウ……そして風が——グヴィイウウ……聞こえるか？（l:77）

ピリニャークは革命の音楽を追い求め、その結晶を吹雪の中に認めた。『吹雪』という小説まで発表しているほどである。革命の音楽を求めるピリニャークの探求は追って分析するにせよ、ブロークが初期ソビエト文学に与えた影響は支配的だったといえるだろう。その影響は評論家たちの目にもとまった。ブロークの死後、左派の評論家 A・ゾーニンは評論「耕しどき」（1923）を発表し、詩人が若手ソビエト作家に与えた影響を次のように評価している。

ブロークはスキタイ人、ピリニャークはピョートル以前のルーシ、マルィシキンはポロヴェツ人を謳った。これら三つの表象は形こそ違えど、いずれも同じ意味、意義を帯びている。<sup>158</sup>

『西欧の没落』が支配的思潮となった革命後のソ連では非合理的でアジア的な原理を追求する傾向が強かったが、ゾーニンはその結晶を「スキタイ人」、「中世ロシア」、「ポロヴェツ人」といった表象の中に認めた。ブロークのスキタイ主義とピリニャークの影響関係を指摘したのはゾーニンに限られない。その例として、ペトログラードの文学者 П・ゲーベルが執筆した記事「ボリス・ピリニャーク」（1921）が興味深い。

ゲーベルはピリニャークと親交を結んだペトログラードの文学者である。ピリニャークは 1921 年にペトログラードを訪れ、「セラピオン兄弟」が活動の拠点とした「芸術の家」で『裸の年』を発表した。その模様を作家の M・スロニムスキイは次のように回想している。

---

<sup>158</sup>. Зонин А. Надо перепахать (О литературном отделе “Красной Нови”) // На посту. 1923. № 2. С. 220.

ピリニャークの取り巻きは頻繁に入れ替わったが、いつも印象的で多様な顔ぶれだった。その中には、ピリニャークの「無頼漢」（始原力）<sup>スチヒーヤ</sup>な風格に全くそぐわないような人物、それこそ文学者 П・グーベルのような人物も見られた。彼はピリニャークが駆け出しのころに書いた作品を熱狂的に歓迎した。<sup>159</sup>

グーベルはピリニャークの作品世界に魅了され、評論「ボリス・ピリニャーク」を発表した。その中でグーベルはピリニャークの初期作品を紐解きながら、スキタイ主義の金字塔としてその作品世界を評価している。

1917 年、ロシア文学にスキタイ人が現れた。いや、正確に言えば、彼らはもっと前に現れていたのだが、1917 年に彼らはスキタイ人であることを自覚したのだ。ボリス・ピリニャークもまたスキタイ人である。いや、この名を正式に名乗っている人々よりも彼はさらにスキタイ的である。<sup>160</sup>

1920 年代にはピリニャークをスキタイ人として定義する評論が少なからず認められる。別の例を引けば、文芸誌「出版と革命」の編集長 Вяч・ポロンスキイが発表した「キングのいないチェス」（1927）が挙げられる。この評論の中でポロンスキイはグーベルと同じくピリニャークを「スキタイ人」として定義したが、その評価はスキタイ主義の骨子を見事に伝えている。

スキタイ主義はロシアの独自性を構築しようとする最後のロマン主義的運動である。これは脱階級化したインテリゲンツィヤのロマンチズムであり、革命の芸術学であり、残酷で動物的で根源的な力を賛美するポエジアである。

スキタイ人は革命の意味を追求しない。同様に彼にとっては組織的、意識的な闘争というのも異質である。彼はそんな闘争のことなど考えたこともなければ、考える力もない。その階級闘争的文脈も、その闘争を衝き動かす力も彼には理解できない。その代り、なんと素晴らしいことか！ [中略]

---

<sup>159</sup>. Слонимский М. Книга воспоминаний. М.-Л., 1966. С. 128.

<sup>160</sup>. Губер П.К. Борис Пильняк // Летопись Дома литераторов. 1921. № 4. С. 4.



スキタイ主義のロマンチズムはピリニャークという類まれな体现者の中に宿った。彼はあるがままに革命を受け入れ、そこに美を見出した。彼は竜巻、カタストロフィ、破滅への衝動に歓喜したのである。<sup>161</sup>

ここでポロンスキイはスキタイ主義を階級闘争的文脈やイデオロギー的闘争を意に介さない革命のロマンチズムとして評価し、その類稀な体现者としてピリニャークを筆頭に挙げた。そして作家自身もまたスキタイ主義者としての意識を保ちながら革命後の文壇で筆を振るった。

これまで見てきた通り、ピリニャークの革命観はブロークをはじめとするスキタイ主義者の影響を受けて形成されていったと考えるべきである。中でもブロークの影響は強く、子弟関係にあったといってよいだろう。では、スキタイ主義者はなぜ革命を受け入れたのか。この問題に次は焦点を当てていく。

#### 2-2-1. スキタイ主義と十月革命

十月革命という歴史の分水嶺はロシア文化のアイデンティティを再考させる、またとない機会を作家たちに与えた。そしてブロークの影響を受けたピリニャークは西洋ではなく東洋としてのロシア、内なる東洋への知的好奇心をたくましくしたと考えられる。ピリニャークの変容を明確にするため、ここからはスキタイ主義の十月革命理解に焦点を当て、その革命受容に流れる反西洋思想を検証していく。

すでに見た通り、スキタイ主義者らは西欧社会に足を踏み入れた無政府主義者のゲルツェンになって西欧文明社会の超克を夢見た。ただし、ここで重要なのは、ペトログラードの作家たちが「スキタイ人」を名乗ったとはいえ、決して西欧の遺産とは決別していない点である。西欧へのアンビバレントな姿勢はイワノフ＝ラズムニクの評論「雷雨と嵐の試練」(1918)に表出している。

---

<sup>161</sup>. Полонский. О литературе. С. 127-128.

深淵から、高みから、彼ら（スキタイ主義者——筆者注）は革命の雷雨、革命の嵐の中を突き進む新たな世界の動きをつぶさに感じとっている。旧世界ソドムの崩壊、アトランティスの破滅、そして新たなロシア、新たな西欧、新たな世界の到来を。<sup>162</sup>

引用から明らかな通り、「スキタイ人」・イワノフ＝ラズムニクは十月革命を歓迎し、その歴史的な大変動を「新たなロシア」、「新たな西欧」の始まりと認識していた。イワノフ＝ラズムニクは続けて次のように書いている。

ピョートル大帝のロシア、その終わりは旧世界の終わりでもある。確かに旧世界には栄誉、繁栄、権勢をほしいがままにした時代があった。ならば、我々は永久に輝きを失うことのない旧世界、「古代ギリシャ」の遺産を新たな世界へと確かに持ちかえろうではないか。<sup>163</sup>

このように、スキタイ主義者たちは十月革命を帝政ロシアの終わりとして歓迎しながらも、「旧世界」の文化的遺産そのものを否定したわけではなかった。スキタイ主義者たちが夢見たのは、ロシアの価値観によって西洋を更新することであり、その文化的遺産を唾棄することではない。スキタイ主義に詳しいA・ギリドネルの言葉を借りれば、ロシア思想史の文脈でスキタイ人は「再生の力を体現するとともに、東洋と西洋を統合する仲介者」<sup>164</sup>である。

では、西欧の克服はいかなる形で実現されるべきものだったのか。イワノフ＝ラズムニクの「雷雨と嵐の試練」に再び目を転じよう。

かつてキリスト教の革命は世界に、精神的自由を獲得した「新しい人間」を産み落とした。そして、この革命は旧世界の向かい風に倒れた。精神的自由を得たとはいえ、人間は物理的、経済的、社会的、つまりは精神的にも奴隷状態におかれていたのだ……しか

---

<sup>162</sup> . *Иванов-Разумник Р.В.* Вершины: Александр Блок, Андрей Белый. Пг., 1923. С. 177.

<sup>163</sup> . Там же. С. 183.

<sup>164</sup> . *Гильднер А.* Иванов-Разумник и «Скифский» мотив в русской культуре // *Иванов-Разумник: Личность, творчество, роль в культуре* / Под ред. В.Г. Белоуса. СПб., 1996. С. 120.

し、今回の革命は人間の完全なる解放、即ち、物理的、社会的、精神的解放を成し遂げるであろう。<sup>165</sup>

イワノフ＝ラズムニクはイエスが行った布教活動の中に一種の革命を見ていた。しかし、イエスによる精神革命は西欧近代社会の物理的隷属状態を通して次第に形骸化したと考えた。物理的隷属状態が人間存在の精神的開放を阻害したという確信に衝き動かされたイワノフ＝ラズムニクは、革命を通して人間を物理的にも解放することで、結果的に精神的にも再び解放し、イエスによる人間存在の解放を完遂しようとした。

このように、イワノフ＝ラズムニクは「社会の革命」を「精神の革命」へと通じる前段階として捉えていた。ただし、革命の受容をめぐるインテリゲンツィヤの中でも熾烈な対立があったことは周知のとおりである。そして革命を受け入れた芸術家たちの態度も決して一様ではない。その例として、革命をすぐさま支持したのは新農民詩人に代表される若手为中心で、革命前から名を馳せていた詩人の多くは革命を前に沈黙を守っていた。そしてイワノフ＝ラズムニクは沈黙を守るペトログラードの文壇に革命への協力を呼びかけるべく評論「詩人と革命」（1917）を発表した。

「都市の詩人」らは恥ずべきことに、ほぼ全員が革命、戦争を前に倒れた。少しでも記憶に残るような言葉を、戦争を歌った力強い言葉を、民衆詩人をおいてほかに誰が残したろう。バリモントでも、ブリューソフでも、ソログーブでもない。ただ一人、才能ある未来派のマヤコフスキイ、ポエジアの御者だけだ（長編詩『戦争と平和』）。もう幾人かの真に偉大な詩人は黙している。彼らの言葉はいずれ解き放たれよう。<sup>166</sup>

「都市の詩人」はイワノフ＝ラズムニクが評論「バラと十字架」（1913）でブロークを形容した表現だが、ここで「真に偉大な詩人」とイワノフ＝ラズムニクが称したのもブロークに他ならない。ブロークは世界大戦の勃発とともに軍務に就いており、十月革命を迎えるまでめざましい詩作を行っていなかった。つまり、沈黙し続けるブロークを鼓舞するために「詩人と革命」は執筆されたといえる。同様に、矢継ぎ早に発表した評論「反キリストと

---

<sup>165</sup> *Иванов-Разумник*. Вершины. С. 186.

<sup>166</sup> *Иванов-Разумник Р.В.* Год революции. Статьи 1917 года. Пг., 1918. С.177.

ともにキリストを求めて」（1918）の中でもイワノフ＝ラズムニクは革命に背を向ける「都市の詩人」に対して切実な呼びかけを行っている。

始原力、その最初の嵐、戦争の嵐が 1914 年のロシアを震撼させた。そして「大地」の民衆は戦火のすさまじい試練を耐え抜いた。「敵」に怒り、憎悪を覚えることなく民衆は命令のまま敵を殺し、命を落とした。しかし、「山頂」にあるものたち、作家、芸術家、学者はことごとくこの試練に敗れた……彼らが戦争という嵐の始原力の声に、民衆の高揚に答えられないはずはない。さあ、思い直すのだ。

作家とは大海の  
ロシアに打ち寄せる波のこと  
あらぶれる始原力の  
虞のこと<sup>167</sup>

引用にある「大地」とは広く民衆のことを指すが、イワノフ＝ラズムニクは「山頂」、つまりペトログラードの詩壇がめざましい作品を発表していないことを批判している。上記の引用で引かれている、「作家とは大海の……」で始まる詩は始原力と詩人の宿命的な繋がりを歌った十九世紀の詩人 Я・ポロンスキイの作品だが、イワノフ＝ラズムニクはこの詩を通してブロークをはじめとする「都市の詩人」たちに始原力との共生を呼びかけている。

「始原力」の概念はスキタイ主義の革命理解において重要な役割を担っている。革命後にイワノフ＝ラズムニクが執筆した評論には「始原力」の表現が頻繁に登場するが、それはブロークが革命前に発表していた評論「始原力と文化」（1908）と密接な呼応関係にあると考えられる。では、イワノフ＝ラズムニクが革命の原理として待望した始原力とは何なのか。ここからは始原力の象徴に焦点を当てていく。

## 2－2－2. 始原力とは何か

始原力はロシアの民衆文化を特徴づける重要な要素の一つであり、この概念はロシア文化・芸術の中で脈々と受け継がれてきたものであろう。始原力はゴーゴリが長編小説『死せ

---

<sup>167</sup>. *Иванов-Разумник Р.В.* Свое лицо. Берлин, 1918. С. 13.

る魂』で描いた疾走するトロイカとしてのロシアであり、プーシキンが歌った「破滅的なものは甘い誘惑を放つ」（『ペスト流行時の酒盛り』）ものである。またはИ・レーピンの作品「何という広がりだ！」（1903）に表出している、盲目的な自然の賛美でもあれば、シベリアを横断したチャーホフが日記に書き記した、「ロシアに広がる偉大な草原を勇壮の人が駆け抜ける！」という文にも表れている、自然との運命論的な共存に集約されるといえるだろう。ロシアは広大な<sup>ステップ</sup>平原をその領土に含み、この大草原を介してユーラシア大陸のさまざまなアジア系民族と交流したが、騎馬民族のような自由奔放さは始原力という概念によって表現されてきたとも言えなくない。

まずは始原力<sup>スチヒーヤ</sup>の概念がロシアで形成された過程を俯瞰してみよう。スチヒーヤはギリシャ語の「ストイケイオン」がロシア化したもので、水、土、空気、火などの「基本元素」と一般的に訳される。П・チョールヌィフが編纂した現代ロシア語歴史・語源辞典によれば、始原力は古代ルーシの時代から「スチヒーエ」、あるいは「ストウヒーヤ」という形態で使用されてきた。<sup>168</sup>この言葉がスチヒーヤという今日の形態で使われるようになった初期の例としてチョールヌィフは宮廷詩人Г・デルジャーヴィンの詩『メシチェルスキイ公爵の死に寄せて』（1779）を紹介している。以下でその詩を見ていくが、この場合における始原力は「元素」ではなく、人間を滅ぼす破滅的な力の意味で用いられている。

生きとし生けるもの

運命の爪からは逃げられず

君主も囚人もすべからくウジ虫の餌

悪意の始原力がその霊廟を食い荒らす<sup>169</sup>

デルジャーヴィンの例からも明らかな通り、ロシア語の始原力は基本元素のほかに、「自然の盲目的力」や「人間存在の中にある衝動的な力」も意味する。ソ連科学アカデミーが刊行した現代標準ロシア語辞典で説明されている「始原力」の意味は以下のとおりである。

1. 古代ギリシャの唯物論哲学者の間で万物の根源にある、自然の基本的要素の一つ。

---

<sup>168</sup> Черных. Историко-этимологический словарь современного русского языка. Т. 2. С. 203.

<sup>169</sup> Там же.

2. 力強く、そして抗うのが困難で、しばしば破壊的な力として表出する自然現象、また同様にその現象が発生する領域、環境。
3. 人間や社会の規制的な作用に従わない社会的生活の現象。
4. 慣れ親しんだ領域、存在環境<sup>170</sup>

本論で着目していくのは第二義の用法である。現代標準ロシア語辞典で紹介されている最古の例はプーシキンの作品「海へ」（1824）であり、十九世紀初頭にはすでに第二義の意味が形成されていたと考えられる。

さらば、自由なる始原力よ！  
別れ際にお前は見せてくれた  
青々とした波を  
誇り高き美を<sup>171</sup>

プーシキンの詩から明らかな通り、始原力は自由を志向する抑えがたい衝動の意味で用いられている。なお、「元素」を意味する言葉として、ロシア語には始原力のほかに、エレメント（ラテン語の *elementum* から派生）もある。ロシア語のエレメントはドイツ語（あるいはオランダ語）を通じてピョートル大帝の時代に取り入れられたより近代的な言葉である。<sup>172</sup>しかし、エレメントにはスチヒーヤの第二義が存在しない。ロシア文化の始原力に詳しい郡伸哉はスチヒーヤとエレメントの意味形成の過程について興味深い考察を残している。

西欧近代においてエレメントの語義が、古代的な「基本元素」から近代的な「化学元素」へと重点を移し、「（一般に）構成要素」という機能的な意味の比重も高めていくのと対照的に、始原力は古代的元素の意味を中心的なものとして担いつづけ、そこへ（おそら

---

<sup>170</sup>. Цит. по: Словарь современного литературного русского языка в 17 т. М.-Л., 1963. Т. 14. С. 891-892.

<sup>171</sup> Цит. по: Словарь современного литературного русского языка. Т. 14. С. 891.

<sup>172</sup>. Черных. Историко-этимологический словарь современного русского языка. С. 446.

くこの点では西欧近代のエLEMENTの詩的用法に残る古代的要素とも連動して）古代的自然観に由来する「自然の力」の意味を背負いこみ、さらにその意味の比重が増大し、その適用範囲も自然界を超えて精神界へと及ぶようになったのではないか。<sup>173</sup>

郡の考えによれば、スチヒーヤは古代教会スラヴ語を通してロシア語に入ってきた過程で、中世ロシアの自然観も取り込む形で意味が形成されてきたのに対し、ロシアではより近代的な概念として成立したELEMENTは西欧近代社会の産物であり、それはより科学的な用語として機能してきた。つまり、スチヒーヤはより根源的なものを、ELEMENTはより科学的なものを指し示す際に用いられる。であればこそ、西欧化以降のロシアを生きた詩人たちは自然崇拜の念をELEMENTという西欧的な概念ではなく、スチヒーヤという、古代ギリシャ由来の太古の言葉に込めたのだと考えられる。スチヒーヤは都市化、近代化に対する精神世界の抵抗として機能しており、ロシアの作家がスチヒーヤという古代の言葉で自然をうたうとき、自然を考究の対象ではなく、同化すべき霊性の原点として認識しているといえるだろう。

ロシア文学の黄金時代に着目されはじめたこの不合理で運命論的な始原力は革命期の混乱を背景に暴力的な形で社会の表層に溢れ出して来た。スキタイ主義の中心にいたベールの作品「祖国へ」（1917）はロシア文化の始原力を賛美する代表的な作品である。

鳴け、嵐の始原力

雷炎のなかで！

ロシア、ロシア、ロシア

狂え、そして私を焼き払え！<sup>174</sup>

始原力の賛美はブロークをはじめとするスキタイ主義者の創作で頻繁に認められる。ブローク作品の金字塔として高くそびえる長編詩『十二』は「黒い夜／白い雪／風、風！」という、すべてが混濁していく印象的な描写で始まるが、ペトログラードを行進する赤軍兵士

---

<sup>173</sup> 郡伸哉「ロシア語の СТИХИЯ（始原力）——ロシア人の人間観・言語観をのぞく窓——」『類型学研究』2005年、135頁。

<sup>174</sup> Цит. по: Белый А. Сочинения в 2 т. М., 1990. Т. 1. С. 215.

に四方から迫りくる吹雪は革命の始原力として認識された。そしてブロークの長編詩では十二人の赤軍兵士をキリストが導いていくが、スキタイ主義を主導したイワノフ＝ラズムニクは兵士を引き連れて革命の吹雪を突き進むキリストの姿にロシアの精神的復活を待望したといえる。

このようにスキタイ主義者の多くは、新世界のロシア文化を創造するための原動力として始原力を賛美したが、インテリゲンツィヤの中には始原力を脅威と認識した人々も少なからずいた。その例として宗教哲学者B・ヴィシエスラフツェフの始原力観が興味深い。

ヴィシエスラフツェフは革命後にドイツへ亡命し、『ドストエフスキイのロシア的始原力』（1923）を出版、この中でロシア文化に潜む始原力を次のように特徴づけている。

ロシア人であれば誰しもロシアの始原力を感じ取るものだが、それは理解しがたく、しかも外人には伝えにくいロシア的精神、ロシア人氣質、ロシアの運命、ひいてはロシアに広がる自然の本質のようなものである。そして我々自身、この始原力なるものをよく理解していないことも認めなくてはならない（「理性でロシアは知りえない」）。理性でこそ理解できないが、始原力は身近で、身に覚えがあり、懐かしいものなのだ。なぜなら、我々はこの非合理的な始原力の中に生まれ、この始原力を生きるからである。今やすでに外人も始原力を感じ取り始めている。シュペングラーはそれを「<sup>ダス・ルツェントゥム</sup>ロシア的なもの」と呼び、西欧文化とは根本的に異質なものとしてこの始原力を追体験している。<sup>175</sup>

ヴィシエスラフツェフによれば、西欧は組織力の中に美を認め、空間の有限化を志向するのに対し、ロシア的精神は無限を求め、有形化を拒む。そのため、時にロシア的精神は醜悪さの中に美を見出す。この始原力はロシア文化をなす基本的な特徴の一つだが、それは理性で論じられるものではなく、あくまで体感されるものでしかない（チュッチェフの詩「理性でロシアは知りえない」）。ただし、身をもって十月革命の暴力性を経験したヴィシエスラフツェフにとって始原力の脅威は看過しえない問題であった。始原力に関して考察を重ねたヴィシエスラフツェフは、ドストエフスキイ作品の中にその結晶を見出している。以下、『ドストエフスキイのロシア的始原力』からの引用である。

---

<sup>175</sup> *Вышеславцев Б.П.* Русская стихия у Достоевского // Ф.М. Достоевский. Бесы. Роман в 3 ч.; «Бесы»: Антология русской критики. М., 1996. С. 587.



1880 年代から 1890 年代は静かな停滞期で、ロシアの始原力は居眠りし、大地の脈動さえ聞こえなかった。そしてドストエフスキイについては「病的な才能」で「犯罪の深い心理学者」程度のことしか言えず、どこか犯罪的な作家で、例外的でありそうもない異常な生活ばかりを描いていると考えられていた。しかし、ロシアの始原力が荒れ出し、全世界を飲み込まんとする今や、ドストエフスキイについては次のように言わなくてはならない。彼は実に慧眼であり、ロシアの現実の深奥にひそむ極めて本質的なもの、そして地下深くを流れる隠された動力を表現した作家であり、その力はしかるべくして地上へと表出したもので、我々ロシア人を含む、あらゆる民族を震撼した。<sup>176</sup>

ヴィシエスラフツェフによれば、ロシア文学の黄金時代を代表する作家たちは盲目的な始原力をうたったが、十九世紀後半にはロシアの始原力もまた静まり、ドストエフスキイの創作は犯罪小説として受容されてしまった。しかし、革命期になって初めてドストエフスキイ作品の中に潜む始原力に注意のまなざしが向けられたことを強調している。ドストエフスキイ作品に流れるロシア文化の始原力は次のように評価されている。

ドストエフスキイの長編小説では、限りなく緊張したシーンで終わる事件が決まって立て続けに起こる。そうした事件はどれも魔訶不思議、カオス的、非合理的で、始原力に満ちている。登場人物は理性とは裏腹に行動し、何をやっているのか自分でも理解せず、事件の場を制御することができない。魂の奥深くにある流れが行動へと駆り立てるのだ。最終的に登場人物が行動しているのではなく、彼らには見えない秘められた始原力が作用しているのである。

人物たちが自ら行動しているのではないというのが極めて重要だ。彼らはなにか荒れ狂うような、時に自分にも分からない力に憑りつかれている。<sup>177</sup>

ヴィシエスラフツェフはドストエフスキイの長編小説に始原力の結晶を見出した。それは制御できない根源的な衝動であり、登場人物が自らの意思で行動しているのではなく、ロシア文化の始原力によって動かされていると考えた。ヴィシエスラフツェフの言葉を借り

---

<sup>176</sup>. Там же. С. 589.

<sup>177</sup>. Там же. С. 597.

れば、ドストエフスキイ作品の登場人物たちは「人間の主体性<sup>サーモステ</sup>самость がどこかに行ってしまったかのようだ」。<sup>178</sup>

このように、亡命ロシアでは始原力が危険視されたのに対し、スキタイ主義者は創作の原動力として探求した。中でもブロークは革命前から始原力について考察を重ねていた。これらの考察は評論「始原力と文化」（1908）、「民衆とインテリゲンツィヤ」（1908）に結晶している。

二つの評論が執筆された二十世紀初頭のロシア社会は混乱を極めた時代で、社会を根底から揺さぶる大変動が矢継ぎ早に起こった。それと連動する形で支配階級と大衆の間には亀裂が深まっていった。そして社会の空隙が、新たな大変動をロシアに引き起こすと詩人には思われたのである。実際に民衆とインテリゲンツィヤの亀裂は深刻なものであった。同時代を生きたユーラシア主義者の H・トルベツコイはその亀裂が発生した原因をピョートル大帝の改革に認めている。以下、評論「チンギスハンの遺産」から引用する。

西欧の軍事技術や産業技術の借用は外国の文化的侵略からロシアを守るために必要だったが、ロシアの為政者は借用行為そのものに熱中し、西欧文明に魅了され、西欧国家と表面的に瓜二つの列強をロシアから作り上げ、西欧列強の中でも指導的立場にある国々と肩を並べたいという虚栄心に駆られた。そのため、外国の脅威（防衛のために西欧技術の借用が開始されたのだが）は未然に防ぐどころか、ロシア人の手でロシアに持ち込まれたのである。ロシアは西欧文明の属国となり、その文明が生んだ帝国主義はロシアで次々と成果を上げた。ロシア人は技術の代わりに西欧の思考様式を借用したが、それは西欧精神の持ち主でなければ使いこなせない代物だった。ロシア人は汝自身たることをやめたものの、さりとて西欧人にもなりきれず、単なる落伍者と化した。その結果、ロシア人同士の同朋意識も破壊され、ロシア人の間には深い溝が広がり、社会の絆は千切れてしまった。<sup>179</sup>

このように、社会に生じた文化的断絶は人為的な西欧化が残した負の遺産であり、この分裂状態が新たな大変動を起こしうるといふ社会不安が二十世紀初頭のロシアでは支配的だ

---

<sup>178</sup>. Там же.

<sup>179</sup>. Трубецкой. История. Культура. Язык. С. 259.

った。ブロークもまた、分断された社会状態が引き起こすであろう大変動の予兆をひしひしと感じ取っていた。評論「民衆とインテリゲンツィヤ」の中でブロークは「私たちがこうやって議論している間に、なにか恐ろしい事件が静かに起こってしまうのではないか」と危機感を漏らしている。<sup>180</sup>

この「民衆とインテリゲンツィヤ」が執筆された背景には、当時の文壇で起こっていたゴーリキイ批判がある。その例として同時代を生きたバローノフはインテリゲンツィヤとしてのゴーリキイに疑義を投げかけている。一方、ブロークは分裂した社会を統合する救世主像をゴーリキイの中に探していた。ブロークは評論の中で次のようにゴーリキイを弁護している。

ゴーリキイの『懺悔』で実際のところ貴重なのは、バローノフが沈黙を守っている点である。それはつまり、ゴーリキイとルナチャルスキイの袂を分かつものであり、ゴーリキイへと接近させるものである。それは、「インテリゲンツィヤ」の現代的精神ではなく、「民衆的」精神にある。<sup>181</sup>

バローノフはインテリゲンツィヤとしてのゴーリキイを批判したが、ブロークは民衆作家としてのゴーリキイに着目する必要性を訴えた。ブロークが評価したのは、教養と社会的使命感あふれるインテリゲンツィヤとしてのゴーリキイではなく、始原力の胎動を深く感じ取る民衆作家としてのゴーリキイであった。ブロークはゴーリキイの「民衆的精神」を次のように評価している。

民衆とインテリゲンツィヤを結びつける特徴を持った最後の現象はマクシム・ゴーリキイの出現であった。彼こそが再三証明している。インテリゲンツィヤが恐れ、理解に苦しむものを彼は深く愛している。彼は我々と同じロシアを愛しているが、それは別の愛で、我々には理解できないものだ。彼が描く登場人物も同様に我々の理解を超えるが、彼らの中にもその愛が流れている。それは「腹を割って話さない」無口な人々で、未知なるものを告げる薄ら笑いをたたえている。ゴーリキイはその精神においてインテリ

---

<sup>180</sup>. Блок А.А. Собрание в 6 т. Л., 1982. Т. 4. С. 106.

<sup>181</sup>. Там же. С. 108.

ゲンツィヤではない。「我々」は同じ対象を愛するが、それは別の愛だ。そして毒に侵された「我々」の愛に対する解毒剤を彼は持っている。それは——「健康な血」だ。<sup>182</sup>

ブロークによれば、民衆、インテリゲンツィヤともにロシアに対する信仰を持っているが、インテリゲンツィヤの信仰は文明の毒に侵されており、民衆の中に流れる「健康な血」こそ社会の亀裂を回復へと導くと考えた。ブロークはゴーリキイの「民衆的精神」を神聖視したが、当のゴーリキイは「民衆作家」というレッテルに嫌悪感を示していた。以下、ゴーリキイが執筆したブロークの追悼文から引用である。

彼は言った。私が「社会問題を解決しようとするインテリゲンツィヤの癖」から解放されていくのを目にするのは心地よいと。

——それはあなたの本質ではないと、私はいつも思っていた。『オクーロフの町』を読めばわかる。あなたがカッカさせられるのは、もっとも根源的で、恐ろしい「子供の問題」なんだ！

彼は間違っている。しかし、私は反論しなかった。好きに判断すればよい。それが心地よく、必要なら。<sup>183</sup>

ブロークはゴーリキイの中に民衆的精神を認め、それを救世主として祀り上げようとした。しかし、ゴーリキイ本人はそのレッテルに不快感を示し、ブロークの民衆信仰を疑問視した。ゴーリキイとブロークの対立（あるいは、無理解）はその文化論に端を発している。続いてブロークの評論「始原力と文化」を見ていこう。

終末思想と破滅の予兆に囚われたブロークが革命前に発表した評論には、合理主義や進歩などの肯定的概念に対する根本的な不信感が流れている。「始原力と文化」でブロークはイタリアの地震活動を取り上げて合理主義の限界に着目している。そこには「文化」に対する不信と「始原力」に対する恐怖が入り乱れた詩人の心境がにじみ出ている。

---

<sup>182</sup>. Там же. С. 111.

<sup>183</sup>. Цит. по: Горький А.М. Полн. собр. соч. в 25 т. М., 1973. Т. 17. С. 224.

「病気は治療できる、病気など存在しない、我々に不可能はない」という声を聞きたびにぞっとする。アリの巣を踏み潰してみるといい。すると、アリはすぐさま破壊された巣の復旧を始める。そして数時間もたつと、その平穩を脅かした者など誰もいないとアリは思うのだ。アリは永遠の労働を生き、すべては修復できると確信し、永遠の進歩に身をゆだねる。それは夢見心地だ。ロウソクの炎に誘われる蝶々もまた同じ夢を見ている。噴火口の周りで踊る陽気なワルツもまた死を前にした夢見心地である。労働し、歌い、世界の輪舞に身をゆだねる。夢見心地で我を忘れ、酔いしれながら。<sup>184</sup>

ブロークによれば、西欧文明がロシアに産み落としたインテリゲンツィヤは始原力の存在から目をそらし、「地底からこみあげてくる始原力の唸り声」には耳を貸さない。このアポロンの生の中では、自らの不可避免的な死は認識されず、すべては復旧できると信じるアリの過信と同じである。続けてブロークは始原力と文化の関係を次のように論じている。

人間の文化はますます鋼鉄化、機械化していく。そして、刻一刻とこの文化は巨大な研究室へと変わっていく。そこで我々は始原力へ復讐を果たすのだ。科学は発達し、大地を奴隷と化す。芸術——それは翼の生えた夢、飛翔する神秘の船——は発達し、大地から飛び去ろうとする。産業は発達し、人々は大地から離れていこうとする。

あらゆる文化人は大地を呪う悪魔であり、大地から飛び去らんとして翼を作る。進化を賛美する心臓は、まだ十分に固まってもいない大地と始原力に暗黒の復讐を果たそうとする。<sup>185</sup>

評論の中で始原力は「大地」、「民衆」、「自然災害」の代名詞として使用されており、それは非合理的な、あるいはディオニュソス的な原理を象徴している。その一方、ブロークは「始原力への復讐」を果たすために人間が行う営みを総称して「文化」と呼んでいるが、この文脈における「文化」は「文明」と同義である。始原力と文明という、両極へ分裂していく社会を統合し得る何かしらの原理をブロークは探し求め、次のように書いている。

---

<sup>184</sup>. Блок. Собрание. Т. 4. С. 118.

<sup>185</sup>. Там же. С. 120.

科学、公共事業、芸術などの肯定的原理で救われようとする知識人たちは減少の一途をたどる。これを我々は日々、目にし、耳にする。これは自然の成り行きであり、致し方のないことである。何か別の、至高の原理が必要なのだ。さもなくば、デカダンの低俗な「背信」に始まり、放蕩、饗宴、自殺に代表される、ありとあらゆる自己破壊にいたるまでの蜂起、暴力を駆使してその原理は代替されねばならない。(強調はブローク——筆者注)<sup>186</sup>

このように、社会の分裂状態を克服しえる別の何か、「至高の原理」なるものを追い求める衝動がこの評論からは読み取れる。この「至高の原理」でもって詩人がいわんとしたところのものは甚だ不明確だが、民衆とインテリゲンツィヤの間に広がる空白を埋めるであろう、超越的存在と考えられる。長編詩『十二』では革命の吹雪をイエス・キリストが突き進むが、それは断絶した社会関係を回復するための聖なる行進に違いない。

革命はブロークにとって根本的なパラダイムシフトであり、それは「文明の嘘」からロシア社会を開放する芸術運動である。評論「芸術と革命（リヒャルト・ワーグナーの創作に関して）」（1918）でブロークが書いた言葉を借りれば、「自由な芸術を人々に返すことができるのは、偉大で世界的な革命だけであり、その革命が文明の嘘を破壊し、民衆を芸術的人類の高みへと持ち上げる」。<sup>187</sup>この転換において、既存の文化体系は詩人にとって意味をもたない。その例として、ブロークは波紋を呼んだボリシェビキの教会破壊活動を積極的に評価しようとした。この点に関して 1918 年にブロークはエセーニンと意見を交わし、日記（1918 年 1 月 4 日）の中でその内容を次のように記している。

憂さ晴らしのように破壊が行われている（エセーニンには教会、クレムリンが惜しくない）。至高の価値観のために破壊している人々はいないのだろうかとは私は尋ねた。彼はいないと答えた（つまり、私の考えは時代の先を行くのだろうか？）。<sup>188</sup>

---

<sup>186</sup>. Там же. С. 113.

<sup>187</sup>. Там же. С. 240.

<sup>188</sup>. Цит. по: *Иванова Е.* Александр Блок: Последние годы жизни. СПб., 2012. С. 136-137.

周知のとおり、革命後にボリシェビキは反宗教運動を展開した。1917 年 11 月に開催された第二回ロシア・ソビエト大会では一切の土地所有権を廃止する「土地について」が布告され、広大な教会領が国有化された。さらにソ連政府は「無神論者同盟」を組織して反宗教新聞の「無神論者」を発刊（編集長はオールド・ボリシェビキの E・ヤロスラフスキ）、反宗教政策を社会の底辺まで推し進め、ソ連文化を担う「新しい人間」の宗教教育に力を入れた。1920 年代末には「戦闘的無神論者同盟」という全国的団体が組織されたが、その加盟者は 550 万人にも上ったという。<sup>189</sup>

当然ながらボリシェビキの反宗教運動は保守派の反感を呼んだ。そして帝政ロシアに生まれ育ったブロークもその破壊行為に無関心ではなかった。しかし、ブロークが危惧したのは、教会破壊行為そのものではなく、その目的であった。革命後の評論「インテリゲンツィヤと革命」でブロークは次のように記している。

クレムリン、宮殿、絵画、本の破壊を恐れる必要はない。それらは民衆のために保護しなくてはならないが、それらを失ったとしても民衆は全てを失ったわけではない。破壊されるような宮殿は宮殿ではない。地上から消し去れるようなクレムリンはクレムリンではない。自ら台座を降りた皇帝は皇帝ではない。クレムリンは私たちの心の中に、皇帝は頭の中に。私たちに啓示された永遠の形式は、心と頭がある限り、生き続ける。

190

エセーニンがボリシェビキの教会破壊活動を単なる乱暴狼藉とみなしていたが、ブロークは教会破壊の背景に「至高の原理」を見ていた。そしてブロークが追い求めた「至高の原理」は「平和と諸民族の友好」というテーゼを伴って革命後の評論に登場した。「インテリゲンツィヤと革命」でブロークは次のように書いている。

革命は嵐のごとく、猛吹雪のごとく、常に新たな、そして予期しえぬものをもたらす。それは残酷に人を欺く。それは己が分水嶺において尊いものを不具にする。それはしばしば不要なものを無傷のまま陸に打ち上げる。しかし——これらは革命の一部に過ぎ

---

<sup>189</sup> 廣岡正久『ソヴィエト政治と宗教——呪縛された社会主義——』未来社、1988 年、75 頁。

<sup>190</sup> Блок. Собрание. Т. 4. С. 235

ず、それによって潮の流れも、そこから生まれる恐ろしい、耳を聳するような唸りも変わる事はない。いずれにせよこの唸りは常に——**偉大なものを**。[中略]

「平和と諸民族の友好」——その印を背負いロシアの革命は進むのだ。それを想って流れは唸るのだ。これぞまさに耳あるものが聞かねばならぬ音楽なのだ。(強調はブロック——筆者注) <sup>191</sup>

「至高の原理」のための破壊是認は革命前後のブロック創作を通底する重要な構成要素であった。インテリゲンツィヤと民衆の間に広がる無限の空隙を克服しようと試みたブロックは新たな原理を追い求め、「平和と諸民族の友好」というスローガンにたどり着いた。この探求において重要な役割を果たしたのが始原力に他ならない。ブロックは地底からこみ上げる始原力に耳を澄ませた。詩人は当時の日記に次のような言葉を記している。

『十二』を書いている間も、書き終わった後も、私は数日間、物理的に、自分の耳で、あたりに大きなざわめきを、溶け合うようなざわめきを耳にした（おそらくは旧世界が崩壊するざわめきを）。<sup>192</sup>

革命後のブロックは非合理的なもの、野蛮なもの、革命の「耳を聳するような唸り」を肯定的に評価し、そこから新世界のロシア文化をくみ取ろうとした。スキタイ主義に詳しいB・ペロウースはブロックの文化論を次のように説明している。

音楽の真の源流は例の始原力であり、それは音楽が帰っていく場所であり、民衆もまた然りである。その民衆は音楽的精神以外の何も知らない野蛮な大衆だが、その彼らが唯一の文化の所持者なのである。[中略] 彼の主張によれば、西欧文明の代わりに文化の再生の波が訪れ、そして若い文化の主な所持者と目されたのが音楽的始原力によって衝き動かされる民衆の群れなのである。<sup>193</sup>

---

<sup>191</sup> Там же. С. 232.

<sup>192</sup> Цит. по: Фокин П. Блок без глянца. СПб., 2008. С. 357-358.

<sup>193</sup> Белоус В.Г. Вольфила, или кризис культуры в зеркале общественного самосознания. М., 2007. С.103



このように、ブロークの文化論では始原力と音楽的精神が密接な関係にある。ヴォリフィエーラの定例会でブロークが発表した評論「人道主義の瓦解」（1918）でも始原力と文化の関係は論じられている。それによれば、あらゆる文化は民衆が内包する音楽的精神から生まれる。文化はこの音楽的精神と調和を保ちつつ発達するが、時代とともにこの文化は死に至り、文明へと変容する。そして文化が文明へと移行する際、文化が内包する音楽的精神も消滅する。<sup>194</sup>ブロークによれば、西欧社会で音楽的精神を保ち続けた最後の芸術家がシラーであったが、その死と共に文化はその音楽的精神を失って文明に代替された。つまり、文化は音楽性に満ち溢れる民衆の中から生まれるが、いずれ死滅し、文明（機械文化）に代替されると主張した。「人道主義の瓦解」でブロークは文化（音楽）と文明の関係を次のように論じている。

この音楽とは野蛮な合唱のことであり、文明化された人間の耳には騒がしい叫び声である。それは我々の多くにとってはきわめて耐え難く、我々の多くにとっては致命的であるといったとしても決して大げさではない。それは不動と思われた文明の偉業を破壊する。それは、「真実、善、美」を奏でる耳慣れたメロディーに抵抗する。それは、人道的な西欧の教育と教養でもって前世紀に我々の中に埋め込まれたものに真っ向から対峙する。<sup>195</sup>

このようにブロークは民衆の始原力から誕生する音楽を文明に抵抗する原理として定義した。評論「インテリゲンツィヤと革命」でブロークは「全身、全霊、全意識で革命を聴け」と同時代人に呼びかけたが、その背景には新世界のロシア文化をもたらすであろう、革命の野蛮な音楽を追い求める詩人の探求心があったといえる。

これまでの分析からも明らかな通り、「人道主義の瓦解」における文化の概念は民衆、始原力、音楽の同義語として用いられており、それは文明へのアンチテーゼとして機能している。始原力は野蛮な民衆の音楽的精神から生まれ、民衆が文明化されるにつれてその音楽的精神とともに消えていく。ブロークが同時代的にシュペングラーと共通の問題意識に取り組んでいたことは確かだが、両文化論の決定的な差はシュペングラーが文化の死と引き換

---

<sup>194</sup>. Там же.

<sup>195</sup>. Блок. Собрание. Т. 4. С. 345.

えに文明を歓迎したのに対し、ブロークは文明を退け、音楽的精神の探求に没頭した点にあるだろう。ブロークが選んだのは人道主義あふれる西欧の文明ではなく、年老いた文明に再生の契機をもたらす「野蛮」な文化であった。<sup>196</sup>「人道主義の瓦解」でブロークは文明批判を展開している。

大衆を文明によって貫くことがいつか可能になると仮定してみよう。すると、そこには疑問が生じる。果たしてそれは必要だろうか？〔中略〕大衆を文明化するのは不可能なばかりか、その必要もない。人類を文化に触れさせようというなら話は別だ。だれがだれを文化的たらしめるのはわからない。文明化された人々が野蛮人をか、それともその逆か。（強調はブローク——筆者注）<sup>197</sup>

このように、革命前では文化（インテリゲンツィヤ）と始原力（民衆）の対置が顕著であったのに対し、革命後には文化と始原力は限りなく近似値で結ばれている。つまり、本来であれば「文化」から程遠いはずの野蛮な民衆が新たな文化の所持者であるという主張をブロークは展開したのである。ブロークが革命前に意図していた文化とはロシアのインテリゲ

---

<sup>196</sup>. 「人道主義の瓦解」と『西洋の没落』は非常に近い問題提起のもとに執筆されているが、ブロークはシュペングラーの影響下にはなかったことは先行研究で指摘されている。См.: Белоус. ВОЛЬФИЛА. Кн. 2. С. 546. ブロークが「人道主義の崩壊」を報告した公開定例会に出席したシュテインベルクもまたシュペングラーの影響を否定している。その回想録には次のように記されている。「シュペングラーの『西洋の没落』はそのときまだ現れていなかったことは付け足しておきたい。ブロークは西欧文明の終わりを予言する、純粹にロシア的伝統の文脈で発言したのである」 Цит. по: Штейнберг. Друзья моих ранних лет. С. 45.

すでに見た通り、ロシアで『西洋の没落』が翻訳されたのは1922年のことで、ブロークが「人道主義の崩壊」を執筆した戦時共産主義のロシアでその文明論はまだ紹介されていなかった。また、別の例を引けば、ブローク研究者のЕ・イワノワは、「人道主義の瓦解」の背景には当時の文壇で幅広い議論を呼んだЕ・ポレターエフ、Н・プーニンが共著で発表した『文明への抵抗』（1918）があると考えている。См.: Иванова. Александр Блок. С. 347.

<sup>197</sup>. Блок. Собрание. Т. 4. С. 333.

ンツィヤを生んだ西欧文明に代表される外来のものであるのに対し、スキタイ主義が革命後に探求した文化はまさにロシアの民衆から生まれる民族的なものに他ならない。

### 2-2-3. 内なる東洋をめぐる論争

ブロークは「文明の嘘」からロシアを解放する力を革命の中に認め、音楽的精神あふれる文化の探求に身を乗り出した。その過程でブローク作品には東洋の主題が登場するようになった。1918年にブロークは韻文作品『スキタイ人』を短期間で書き上げたが、作品の一連三行目で詩人は「スキタイ人とは我々だ！ 細く貪欲な目をしたアジア人とは我々だ！」と記し、ロシア人をアジア人として提示している。また、三連の三行目から四行目でブロークは「我々はアジアの顔をもって西欧へいどむ」と挑戦的表現を用いたほか、「タタール・モンゴルの軛」を想起させるモチーフを数多く用いた。革命後のブロークはなぜアジアへの接近を試みたのか。<sup>198</sup>ここからはブローク作品に現れた東洋の表象を追うとともに、東洋への転回がピリニャークをはじめとする若手ソビエト作家に与えた影響を考察する。

ブロークの東洋観を論じるうえで見過ごせないのが十九世紀末のロシアで支配的だった黄禍論である。黄禍論をロシアで提唱したのは宗教哲学者の Bn・ソロヴィヨフだが、その影響下にあったブロークは東洋の存在をとりわけ強く感じていた。当時の支配的な思潮によれば、汎モンゴル主義は日本で発生すると信じられていた。日本人はモンゴロイドを思想的に結束し、朝鮮、中国を支配したうえでロシアに進軍してくる驚異的存在としてロシア人の目には映っていた。そしてそれは「タタール・モンゴルの軛」という暗黒の歴史を経験していたロシアにとっては絵空事ではなく、焦眉の問題として認識されていた。<sup>199</sup>「銀の時代」に詳しい研究者の B・チェルカスキーはブロークの東洋観を次のように論じている。

ブロークの世界における東洋の表象は柔軟で、変動的で、有機的に統合された体系である。それは長い時間をかけて豊かになり、東洋文化の代表的なものの諸特徴を内部にお

---

<sup>198</sup>. ユーラシア主義もまたスラヴ民族と中央アジア人の統合を目指しており、その主導者でもあったサヴィツキーは 1926 年にプラハで行った講演会でスキタイ主義をユーラシア主義の垂流として位置づけている。ただし、ブローク研究者のイワーノワはその逆にユーラシア主義こそブロークの『スキタイ人』から生まれたとしている。См.: Иванова. Александр Блок. С.175.

<sup>199</sup>. 沼野恭子『夢のありか：「未来の後」のロシア文学』作品社、2007 年、131 頁。

いて統合している。そしてブロークはそれらの文化がロシアにとって脅威をなした（なしている）と考えた。それらの文化とはタタール・モンゴル、ポロヴェツ人、トルコ、日本、そして中国である。<sup>200</sup>

日本の帝国化と連動してロシアでは黄禍論が影響力を強めた結果、日本に代表される東洋の脅威がタタール・モンゴルの支配をブロークに想起させたとチェルカスキーは主張している。確かに、二十世紀初頭のロシアではこうした思潮が支配的で、ベールイの長編小説『ペテルブルグ』でも日本の脅威はタタール・モンゴルの再来として提示されている。<sup>201</sup>しかし、ブロークにとって東洋は決して恐怖の対象だけではない。ブロークにとっての東洋は滅び行くべき文明に終焉をもたらす始原力の源泉として機能したともチェルカスキーは考えている。

ブロークが築いた世界様式の中で東洋は懲罰する歴史の鞭としての役割を果たしており、物理的・精神的に寿命をまっとうし、すでに立ち向かうことができないあらゆる弱者はその鞭によって滅びる運命にある。東洋の表象が持つこの機能的役割は、十月革命後のブローク作品の中で新たな、そしてきわめて鮮明な前例を見出している。<sup>202</sup>

滅び行く文明を破壊する懲罰者としての「アジア」はブロークの同時代人に共有されていた共通認識である。宗教哲学者のベルジャーエフもまた神の法に背いた民族を「懲罰するもの」としての姿を日本の中に見ていた。<sup>203</sup>

1918年の詩『スキタイ人』が示す通り、ブロークはロシア人を「アジア人」として描き出したが、詩人にとって「アジア人」とは恐怖の対象でありながら、その文化をロシアもま

---

<sup>200</sup>. Черкасский В.Б. Образ Востока в творческом сознании Блока // Восток в русской литературе XVIII – начала XX века / Под. ред. Л.Д. Громовой-Опульской и др. М., 2004. С. 237.

<sup>201</sup>. バーバラ・ヘルト（秦野一宏訳）「ロシア文学に描かれた『日本人』——変容するアイデンティティ」『ロシア文化と日本』彩流社、1995年、213頁。

<sup>202</sup>. Черкасский. Образ Востока в творческом сознании Блока. С.244-245.

<sup>203</sup>. См.: Бердяев Н.А. Судьба России. М., 1990. С. XII.

た継承しているという意識の表れである。そしてブロックは始原力豊かなアジア性を積極的に評価することで、黄禍論の恐怖をも克服しようとしたと考えられる。つまり、『スキタイ人』でブロックが自らをアジア人と形容したのは、アジアに対する恐怖の裏返しであり、それは同時に克服でもあったといえる。

ブロックのスキタイ主義は熾烈な議論を巻き起こした。<sup>204</sup>革命前にブロックが深く交流していた作家の多くはこれ見よがしに背を向けた。中でも M・プリシヴィンが発表したブロック批判の評論「『見世物小屋』のボリシェビキ」（1918）は詩人を深く混乱させた。この中でプリシヴィンは始原力を神格化するブロックをアイロニカルに描いている。

この始原力に近い者たちは進め、始原力の仮面舞踏会を踊れ、それが嫌なら牢屋に入れ。舞踏会と牢屋——それこそが真実だ。<sup>205</sup>

さらにプリシヴィンはブロックを「懺悔する<sup>バーリン</sup>旦那様」と呼び、詩人のレトリックを援用してその革命観を辛辣に非難した。

この（革命の——筆者注）桶に懺悔する旦那様の根性でアレクサンドル・ブロックが歩み寄り、我々のような知識人に革命の音楽を聞け、失うものは何もない、私たちこそが本当のプロレタリアなのだとそそのかす。<sup>206</sup>

ブロックが文壇に与えた影響の強さは、西欧派の作家たちが展開した批判の熾烈さからもうかがえる。その例としてゴーリキイによるブロック批判を検証したい。

---

<sup>204</sup>. 革命後のブロック創作に対しては、ゴーリキイやメレシコフスキイをはじめとして疑問を抱く文化人も数多く見られた。しかし、ブロックを擁護した知識人らもまた多かった。その例としてベルジャーエフは「ブロックの弁護」（1931）で、プーシキンやチュッチェフとは違い、ブロックをロゴスが欠如した詩人として評価している。そして、その非合理主義を詩人の欠点とは見なさなかった。См.: Бердяев Н. В защиту А. Блока // Александр Блок: pro et contra / Сост. Н. Грякаловой. М., 2004. С. 454.

<sup>205</sup>. Пришвин М. Большевик из «Балаганчика» // Александр Блок: pro et contra. С. 257.

<sup>206</sup>. Там же.

ゴーリキイはブロークのスキタイ主義を厳しく批判した西欧派の一人である。ゴーリキイはブロークと出版社「世界文学」で各国の国民文学をロシアに紹介する作業に従事したが、その世界観には不満を持っていた。その例として、ブロークの評論「人道主義の瓦解」に対するゴーリキイの批判が興味深い。

ブロークは 1919 年 4 月 9 日に「世界文学」で「人道主義の瓦解」を発表したが、このタベに参加したゴーリキイは評論に流れる反西洋思想に不満を持った。その後、ゴーリキイはブロークからヴォリフィーラの公開定例会に誘いを受けたが、参加を断っている。そして詩人の死後にゴーリキイが発表した評論「A・A・ブローク」（1923）には二人の間に存在した対立が浮き彫りになっている。ゴーリキイはブロークが「世界文学」で「人道主義の瓦解」を発表した時の様子を次のように回想している。

評論は私には不明瞭ながらも、悲劇の予兆に満ちたものと思われた。ブロークが評論を読んでいる際、彼はおとぎ話に登場する、森で迷子になった子供を想起させた。彼は暗闇の中から化け物が出てくるのを感じ取り、何かの呪文をささやくのだ。それが化け物退治に効果覲面と期待しながら。[中略] 報告の中で展開されているいくつかの論旨はあまり十分に考え抜かれていないように思われた。その典型が、「大衆を文明化することとは不可能なばかりか、不要だ」というやつである。<sup>207</sup>

ゴーリキイは革命前から西欧的啓蒙化の必要性を主張してきた人物である。<sup>208</sup> ゴーリキイは東洋の中に社会的・政治的組織が有する形式を破壊しようとする様々な宗教的昂揚感の源泉を認めており、ゴーリキイ作品で東洋は極めて陰鬱な色彩で描かれることが多い。<sup>209</sup>

---

<sup>207</sup>. Цит. по: Горький. Полн. собр. соч. Т. 17. С. 223.

<sup>208</sup>. Н・プリモチкинаはゴーリキイが行った東洋批判の根底にはイスラム教徒の宗教的熱狂心に対する根底的な抵抗感があると考えている。革命思想に感化され、投獄の憂き目にあっていた時期にゴーリキイは牢屋の窓からイスラム教シーア派の狂信的な宗教儀式を目にしており、作家の反東洋思想はそうした実体験をもとに形成された。См.: Примочкина Н.Н. Антиномия «Восток - Запад» в мировоззрении и творчестве Горького // Концепция мира и человека в творчестве М. Горького. Вып. 9. / Под. ред. Л.А. Спиридоновой. М., 2009. С. 43-44.

<sup>209</sup>. 反東洋思想の例として、作家の実体験に基づいて執筆された『私の同伴者』（1894）という

ゴーリキイの反東洋思想を明らかにするうえで重要なのが評論「二つの精神」（1915）である。

評論の中でゴーリキイは東洋思想と西洋思想の比較を行い、前者を消極的な力として、後者を積極的な力として定義し、ロシア文化に特徴的な「オブローモフ主義」や厭世的な余計者の人物像は老子の無為自然に通じるものがあるとして、「西洋に学べ、科学の力でもって世界を変革せよ」と訴えた。「強く美しい人格」を形成する西欧社会の価値観にならって、現実に対して積極的な働きかけを行う必要性を説いたのである。従って、神秘主義的な「音楽的精神」の崇拝やロシア民族を文明化する必要はないと主張するブロークの主張に反感を覚えたのは当然かもしれない。「A・A・ブローク」でゴーリキイは「人道主義の瓦解」を次のように評価している。

ロシア民族にとって文明化は不可能で、また不要だという主張、これは明らかに「スキタイ主義」であり、それはロシアの大衆に特有の反国家性に対する迎合だと思う。なぜブロークは「スキタイ主義」に染まったのだろう。<sup>210</sup>

西欧主義者ゴーリキイはブロークのスキタイ主義、そして「人道主義の瓦解」を徹底的に批判した。もちろん、ゴーリキイの西欧主義的論調は極めて複雑な性格を持っており、ロシア文化に存在する内なる東洋を真っ向から否定していたとは一概にいけない。<sup>211</sup>しかし、ゴ

---

初期の短編が示唆に富む。作品の主人公はシャクロというグルジアの貴族である。シャクロは、故郷のチフリスを目指して語り手とともに旅をする。語り手は美德や公平さに代表される肯定的原理を重んじるが、同伴者のシャクロは非合理的な情念に衝き動かされ、様々な面倒を引き起こす。語り手はシャクロが生まれた故郷のチフリスへ連れていくが、シャクロは語り手の人格を意にも介さず、奴隷として扱う。まさに『私の同伴者』は理性や合理主義が作用しないアジア的な始原力の象徴をグルジア人の中に見出す物語として編まれている。

<sup>210</sup> Горький. Полн. собр. соч. Т. 17. С. 223-224.

<sup>211</sup> 革命前後の文壇でゴーリキイは西欧主義者として振る舞ったが、ゴーリキイ作品で深い共感とともに描かれる登場人物の多くは東洋的な特徴を帯びていることが多い。チュコフスキイによれば、評論家としてのゴーリキイは西欧を志したが、表現者としてのゴーリキイは東洋的土台に根差していた。その例として興味深いのがゴーリキイのエセーニン論である。ゴーリキイは、

ーリキイは革命期の文壇に登場したスキタイ主義、ならびにその影響下にあったピリニャークの創作理念には一貫して批判的態度を取った。

スキタイ主義に特徴的な始原力の神話化は同伴者作家の間で継承されたが、その影響を危険視したのがペトログラードの「セラピオン兄弟」で活躍した文芸理論家のЛ・ルンツであった。<sup>212</sup>ルンツは「セラピオン兄弟」で活動する傍ら、大学でスペイン文学、ドイツ文学の研究に携わっており、世界文学に育まれた十九世紀ロシア文学の遺産を顧みず、始原力という謎めいた東洋精神を追及するスキタイ主義とピリニャークの実験文学を痛烈に批判した。ルンツはスキタイ主義の公開定例会に討論者として参加して、その文芸活動を批判したほか、評論「西洋へ！」（1922）を発表し、西欧文学に学ぶ必要性を強調した。<sup>213</sup>評論の中でルンツはスキタイ主義の挑戦的な創作姿勢を冷ややかに評価している。

---

エセーニンの「ロシア的」（それは多分に東洋的）特徴に魅了されており、その才能を高く評価していた。しかし、エセーニンが東洋的なロシアではなく、西欧社会への進出を推し進めると、ゴーリキイは詩人の「西欧かぶれ」を批判している。

<sup>212</sup> 革命前から名をはせていた芸術家の集った「スキタイ人」とは違い、「セラピオン兄弟」は作家養成所ともいえるサークルで、文学理論や文学史に関する講義や作品の発表会、および討論が活動の中心となった。「セラピオン兄弟」を指導した作家にЕ・ザミャチン、К・チュコフスキイ、Ю・トウニャーノフ、В・シクロフスキイがいる。また、「社会主義リアリズムの父」М・ゴーリキイも「セラピオン兄弟」の指導に関わっていた。この「セラピオン兄弟」が輩出した作家が、К・フェージン、М・ゾシチェンコ、Вс・イワノフ、Н・ニキーチンである。「セラピオン兄弟」は1921年にペトログラードで結成され、積極的な活動を展開するが、活動の中枢に位置したユダヤ系ロシア人作家のЛ・ルンツが1924年に病死、イワノフ、ニキーチンらが「セラピオン兄弟」を離れたことがきっかけとなって自然解体した。

<sup>213</sup> ルンツはヴォリフィーラが1920年6月24日に開催した公開定例会「二十世紀のロシア文学」に討論者として出席し、ベールイ、およびイワノフ＝ラズムニクの文化論に見られる「古臭い」審美学を批判した。しかし、残念ながら公開定例会の発言記録は部分的にしか保管されておらず、ルンツが行ったヴォリフィーラ批判の全貌は明らかではない。См.: Белоус. ВОЛЬФИЛА. Кн. 1. С. 804-808.



ヘレーン（古代ギリシャ人——筆者注）に学ぶものはないさ。俺たちはスキタイ人。右に出るものはない。これが現代ロシア批評のスローガンである。そしてロシア文学はこの厚かましいスローガンをたたきつけ西欧に背を向けた。<sup>214</sup>

評論でルンツは文化的中心地のヨーロッパからすれば辺境に位置するロシアの文化的独自性を追い求めようとするスキタイ主義を揶揄した。ルンツの目には、民衆文化（始原力）を神格化し、大衆の日常と心理の探求に忙しいスキタイ主義は「田舎者」の美学と映った。続けてルンツは次のように記している。

複雑な仕掛けと巧みな起承転結は、長年にわたる鍛錬の結果として得られる功績であり、それは素晴らしい文化から受け継いだ産物である。

しかし、私たちロシア人はファーストラを操ることができなければ、ファーストラが何かを知りもせず、それを軽蔑する。[中略]しかし、この軽蔑は田舎者特有の軽蔑である。我々は田舎者だ。そしてそれを誇りに思っている。誇ることもないはずだが。<sup>215</sup>

ルンツの中で「文化」の中心は西欧にあり、その中心からすればロシアは「田舎者」に過ぎない。民衆を神話化するスキタイ主義者らの作品はルンツにとって文学の規範から外れるものであり、思想喧伝ではなく、芸術作品としての伝統的な文学に回帰する必要を訴えた。特にピリニャーク作品に代表される実験文学はルンツを刺激した。ルンツは続けて次のように同時代の作家を批判している。

君らは革命的、民衆的作家たることしか考えていない。だから、ナロードニキに成り下がったのだ。しかし、実際は革命、民衆から遠ざかっているだけだということがなぜ分からないのだ……いかなる時であれ、農民、労働者が君らの長編を手に取り取ることはない。筋金入りのインテリでさえ顎が震え、横隔膜が破裂しそうになる本を誰が読むという

---

<sup>214</sup> Лунц Л.Н. Литературное наследие. М., 2007. С. 355.

<sup>215</sup> Там же. С. 350.

のだ。農民、労働者にも常識はある。彼らに必要なのは策略に満ち、プロットを備えた面白い文学だ。<sup>216</sup>

ここでルンツが批判の矛先を向けたのは、スキタイ主義の後継者として評価を寄せたピリニャークであった。

ルンツはピリニャークの実験文学を嫌ったが、その作品世界を敵対視していた理由の一つとして、1920年代前半にピリニャークがH・ニキーチンやBc・イワノフなどの中心メンバーを引き抜いて「セラピオン兄弟」を事実上の解体に導いたことが指摘できる。「セラピオン兄弟」の作家M・スロニムスキイはピリニャークのペトログラード訪問（1921年4月）を次のように回想している。

我々セラピオン兄弟と知己を得るため、彼は1921年にペトログラードを訪れ、始原力主義<sup>ストヴォ</sup>Стихийничествоと当時は呼ばれていたものを我々の文芸精神に吹き込んだ。それは強いて言えばモスクワの文壇に特有のものだった。ペトログラードの落ち着いた文壇は、エキセントリックな場面でさえ、美しさや端正さを追及していた。<sup>217</sup>

ピリニャークはペトログラードでも活動を開始し、「始原力主義」をその文壇に持ち込んだ（それはもともとブロークの影響下で形成されたものだったが）。ピリニャークはゴーリキイの仲介を得てペトログラードの文芸誌『芸術の家』（1921年、第2号）に『裸の年』の断片を『連結列車五十七号』と題して発表したほか、翌年一月にはイマジニストのA・クシコフを連れてペトログラードを再訪して前衛小説『吹雪』を発表、ブロークにならって革命の吹雪を歌った。

雪のかたまり、最初の塊は十月の吹雪だった（なんと、雪は吠えるのだ）。吹雪、吹雪、吹雪！ 一寸先も見えない、かすみ、もや、きり。（I:284）

---

<sup>216</sup> Там же. С. 357.

<sup>217</sup> Слонимский. Книга воспоминаний. С.127-128.

『作家の家・年報』（1922年、第3号）にはピリニャークの発表会に関する記事が掲載されたが、その会で討論者として参加したのがグーベル、フェージン、シカプスカヤ、そしてルンツであった。ルンツのピリニャーク批判はこの時期に形成されたものと推測される。

<sup>218</sup>その例として、評論「《親類たち》について……」が興味深い。

ルンツは1924年に療養先のハンブルクで病没したため、この評論は未完に終わったが、この中でルンツは「セラピオン兄弟」を「西洋派」（ルンツ、A・カヴェーリン）、「東洋派」（Bc・イワノフ、ニキーチン、フェージン）、「中間派」（スロニムスキイ、ゾシチェンコ）に分類している。ルンツは「セラピオン兄弟」を三つの大きな流れに分類した。中でも「東洋派」はペトログラードからモスクワへ活動の拠点を移し、ピリニャークの傘下に入ったと説明している。<sup>219</sup>実際にピリニャークは「セラピオン兄弟」と連携を深めていった。また、「セラピオン兄弟」のほうでも、ピリニャークと協同する姿勢を見せた。その例としてザミャーチンは評論「ロシアの新しい散文」（1923）でピリニャークをモスクワで最も才覚のある作家として評価、スターリン時代に亡命を余儀なくされるまで親睦を深めた。そのほか、ピリニャークはニキーチンを連れて1923年にロンドンを訪問、ペン・クラブの大会

---

<sup>218</sup> 1922年末からルンツのピリニャーク批判には変化がみられる。ゴーリキイ宛の手紙（1922年11月9日）でルンツは次のように書いている。「ところでピリニャークについてです。モスクワに行ってきたのですが、ピリニャークをよく知って、彼についての考えが少し変わりました。彼はそんなに悪い人間ではありませんでした。彼はただの無頼漢で、**ワルダチ**です。ですが、根は優しく、陽気で、それに世話好きな友人です！もちろん、彼の創作手法は依然として有害なものだと考えますが」（強調はルンツ——筆者注）。Цит. по: Лунц. Литературное наследие. С. 423. 同様にピリニャークもルンツに好印象を覚えたと考えられる。1922年8月にピリニャークは自ら編集長を務める文芸誌「円」の関係で「セラピオン兄弟」とモスクワで顔を合わせている。ゴーリキイ宛の手紙（1922年8月18日）でピリニャークは次のように書いている。「三日前にここでBc・イワノフ、フェージン、スロニムスキイ、ルンツ、そしてウラルから戻ったHk・ニキーチンと顔を合わせました。肩を組んで歩き、出版社立ち上げの話をしました」（書簡集 I:489）。この際ピリニャークは、「円」が刊行する作品集用にルンツの作品「祖国」の原稿を受け取り、その刊行に尽力した。最終的にルンツの作品は「円」から日の目を見なかったが、甲斐甲斐しく作品発表の機会を用意するピリニャークにルンツは親交の念を覚えたものと推測される。

<sup>219</sup> Лунц. Литературное наследие. С. 408.

に出席した。さらに翌年にはイワノフとソ連各地で作品発表の巡演も行った。<sup>220</sup>ペトログラードの「芸術の家」と連携を深めた結果、当時の文壇ではピリニャークも「セラピオン兄弟」の一員と認識されるまでになった。<sup>221</sup>

ピリニャークはペトログラードの文壇に強い影響を与えた。ルンツがゴーリキイに宛てた書簡からは、スキタイ主義、及びピリニャークの影響を退けようとする姿勢が読み取れる。ドイツで療養中のゴーリキイに宛てた手紙（1922年8月16日）でルンツはペトログラードの状況を次のように説明している。

私は九割のロシア作家や、それにピリニャーク、セラピオン兄弟の大半がやっているような書き方に染まりたくないのです。〔中略〕レーミゾフもベールイも耐え難い。ロシア文学よりも西欧文学を私は愛しています。〔中略〕こちらでは、最もけがらわしい類のイワノフ＝ラズムニク流が横行しています。私の唯一の支えはセラピオンですが、彼ら自身も足元がおぼつかず、しっかり地に足がついていません。<sup>222</sup>

ペトログラードの文壇でスキタイ主義の影響は支配的で、駆け出しの文芸理論家だったルンツはスキタイ主義の中心にいたベールイ、そしてレーミゾフの影響を嫌うと同時に、モスクワで活躍したピリニャークの実験文学にも批判的態度をとった。続けてルンツはゴー

---

<sup>220</sup>. Иванов и Пильняк в Одессе // Вечерняя Москва. 05. 04. 1924.

<sup>221</sup>. その例として 1925 年 4 月 30 日の「モスクワタ刊」紙には B・オシンスキイが行った講義「現代と文学」に関する記事が出たが、その見出しは「《セラピオン》の終わり」と題された。この評論ではイワノフ、ニキーチンと並んでピリニャークもまた「セラピオン」として紹介されている。記事では、ピリニャークの作品にみられる変化が次のように論じられている。「明らかにピリニャーク、イワノフ、ニキーチンの意義は低下している〔中略〕ピリニャークは相変わらず読者をうんざりさせる《手品》や、言語的、シナリオ的トリックで読者の度肝を抜こうとしているが、もうお手上げです、実は空っぽ、読者には何も読ませるものは提供できないといわんばかりだ！」Cit. по: Литература – сегодня («Текущий момент и художественная литература» - лекция тов. Осинского) // Вечерняя Москва. 30. 04. 1925.

<sup>222</sup>. Лунц. Литературное наследие. С. 416-417.

リキイ宛ての手紙（1922 年 9 月 22 日）でピリニャークのペトログラード訪問を次のように非難している。

ピリニャークが我々の間へ執拗に入り込もうとしています。中には彼を愛し、セラピオンと呼ぶ者もいます。私にはそれがつらい。私は彼を人間として、作家として好きになれません。しかし、彼は私たちに大きな影響を与えている。フェージン、特にニキーチン、そしてイワノフまでもがその影響を免れませんでした。残念です。なぜというに、ピリニャークはもちろん大変な才能の持ち主ですが、安っぽく、個性がない。<sup>223</sup>

ルンツはピリニャークに露骨な嫌悪感を示し、モスクワへ活動拠点を移そうとする「セラピオン兄弟」の同僚に批判の手紙を少なからず書き送った。特にニキーチンに対する批判の調子は激しかった。ルンツがニキーチンに宛てた手紙（1923 年 7 月 18 日）が興味深い。

いいか、俺は君に何があっても二度と腹は立てないと誓ったんだ。だって、君はどうしようもない金魚のフンだから。〔中略〕それにしても、この「スキタイ主義」、「ユーラシア主義」、そしてピリニャークの「パミール主義」に至るありとあらゆる垂流は、全くもって腹立たしい運動だよ。これは自分の無知を鼻にかけて万歳三唱する無礼者と無学者の寄せ集めだ。いいか、辛抱強く、根気よく西欧に学ぶ必要があるんだ。<sup>224</sup>

ここでルンツはスキタイ主義、ユーラシア主義のほか、「<sup>パミールストヴォ</sup>パミール主義」Памирство という用語を用いたが、これはピリニャークの小説『スミレ』（1922）に表出した神秘主義を指している。ゴーリキイに捧げたこの作品で作家は革命後のモスクワを中央アジアの奥地に広がるパミール高原に喩えた。

参謀本部、<sup>チ</sup>非常事態委員会、婦人部、政治啓蒙局——いたるところで新たなロシアを創造する熾烈な運動が起こっていた。〔中略〕そして数万日も続くであろう道のりを告げる汽笛は特急列車のように鳴り響いた。縞模様のニコラエフスクの見張り小屋から、ラ

---

<sup>223</sup> Там же. С. 421.

<sup>224</sup> Там же. С. 445.

スプーチンが今日の熱病に陥るまでの<sup>ラスプーチン</sup>分かれ道。我々が生きる今日という日は、ダライ・ラマの名にかけて誰にも研究されてこなかった広大なパミール高原とは映らないだろうか。(I:209-210)

ピリニャークは新生ロシアをパミール高原という、アジアの秘境にたとえたが、それは1922年の春に作家がベルリンに滞在していた際の印象をもとに書かれている。ピリニャークはベルリンからモスクワのД・ルトーヒンに宛てた手紙の中で、西欧社会から見たロシアの中の東洋を次のように描いている。

私の考えでは、ロシア革命——それはすべてをひっくり返して受け入れる必要がある。それは共産主義で、エスエル主義で、白衛主義で、君主制だ。そのどれもがロシア革命史の各章を彩る。でも、もっとも大事な章はロシアの中に、モスクワの中にある。ドイツから見たロシアはシラミがたかったパミールのような。そしてシラミがたかって、共食いさえ起こるロシアが、世界に新しい何かを運んでくるように見えるんだ。(I:442)

ピリニャークは1922年に西欧社会へ足を踏み入れ、そこではじめて文明化された社会から混沌としたアジア的ロシアに直面した。ドイツから見たロシアは広大なアジアとして作家の前に広がり、ロシア文化の中にある東洋の展望が開けたのである。そしてこの体験はピリニャーク作品の中で「パミール」という神秘的表象の中に息づいた。<sup>225</sup>ピリニャークは「ダライ・ラマの名にかけて誰にも研究されてこなかった広大なパミール高原」を革命ロシアの象徴として描き、この神秘的、東洋的表象の中に新たなロシアのたどるべき道を見出そうとした。

これまで見てきた通り、革命後のピリニャークには、同伴者作家、道標転換派、パミール主義者、スキタイ主義者等々、実に多様なレッテルが用意された。それらをまとめて「<sup>ピリニャーク流</sup>ピリニャーク流」と総括することも稀ではなかった。とくにこの「ピリニャーク流」という言葉は、作家の実験文学を総括する侮蔑的な用語として1923年から左派の文芸誌で用い

---

<sup>225</sup> ピリニャーク作品の中で「パミール」は1924年に執筆された『機械と狼』に登場したのが最後、それ以降は姿を消している。

られ始めた。<sup>226</sup>後述する通り、難解なピリニャーク作品は大衆読者の支持を得なかったが、新世界のロシア文学を志向する作家の名は評論家らの人口に膾炙した。そして文芸上の探求はこれまで見てきた同時代の歴史哲学と連動している。作家の作品世界は革命を契機として変容を遂げたが、ここからは革命後に執筆された反西欧思想の作品を分析し、ピリニャークの夢見たロシア文学像を浮き彫りにする。

### 2-3. アンチ・ペテルブルグ・テキストの誕生

十月革命を契機として、首都モスクワとペトログラードでは雨後の筍のように文芸集団が興り、新生ロシアの命運を見極めようとして作家たちが筆をふるった。これまで見てきたとおり、革命期のロシアでは「ドイツのスラヴ主義者」シュペングラーの歴史哲学や、近代の超克を夢見たスキタイ主義が支配的思潮を為したが、西と東の両極へ向かおうとする革命期ペトログラードの歴史哲学論争は 1920 年代半ばにかけてソ連当局による文化統制の強化を背景に消滅していった。そして、この思想的・文化的変革の精神はモスクワの文壇に継承された。中でもピリニャークはその議論の中心に位置した。

作家の作品世界は劇的に変化していった。本論の第一章でみたとおり、革命前のピリニャーク作品はその多くが人間存在の原初的なものを歌い上げる素朴なものだったが、革命後のピリニャークは新たなロシア文学の旗手として注目を集めた。レーミゾフ宛の手紙（1922 年 8 月）で「自分の流派を作って、自分の声を社会に投げかけたい」と告白していたピリニャークは確かに一つの流派を初期ソビエト文学の中で作り上げていった。そして、モスクワの文壇で指導的役割を果たしたピリニャークは伝統的なテキストを破壊し、新時代のテキスト空間を生み出すことに心血を注いだ。この実験文学は新生ロシアの運命を探求するダイナミズムと連動している。その葛藤と課題を如実に描き出す手紙がある（1919 年 2 月 9 日）。その一文をここに引用しよう。

食料が腐る。灯油もない。しょうがなくツルゲーネフを読んでいるが、つまらない作家だ。おお、神よ！ いつになればロシア文学はこの原始的状態を抜け出せるのだろう。短編のテーマのほかに、次のことについて頭を悩ませている。1. ロシアの旧習、2. 文学、3. 民族、民衆、インテリゲンツィヤ、4. ロシアをモスクワからペトログラードに

---

<sup>226</sup> М.П. Литературная пильняковщина // На посту. 1923. № 1. С. 149-150.

持ち去ったアンチ・キリスト・ピョートル大帝、ロシアを揺籃の地に連れ戻したボリシェビキ——ここに新しいロシア文学の鍵があるのではないだろうか。（書簡集Ⅰ:287）

引用から明らかな通り、作家は十九世紀ロシア文学の西欧主義者ツルゲーネフに代表されるヨーロッパ・ロシアの文化に批判的態度をとる一方、中世ロシアに思いをはせ、新しいロシア文化をボリシェビズムの中に探求した。ロシアの中心地を「西洋への窓」ペトログラードから中世ロシアの中心地モスクワに遷都したボリシェビキがピリニャークの目にユートピアの建設者として映ったことは間違いない。この手紙が書かれた 1919 年はペトログラードのスキタイ主義が活動の最盛期を迎えており、無名の作家は輝かしい活躍を続けるスキタイ主義者らに決定的な影響を受けたことは確かである。

ピリニャークの反西欧主義は一時的な熱狂ではなかった。その後、1922 年にピリニャークがベルリンの『新しいロシア文学』誌から発表した評論には、反西欧主義の文学観が認められる。評論の中でピリニャークはペテルブルグの古典文化を直線的で人工的なものとして、つまり非・ロシア的なものとして退けている。

私はペテルブルグが嫌いだ。その生みの親、ピョートル大帝も嫌いだ。そして文学者が  
**みんな**ペテルブルグ上がり人間なのも嫌いだ。彼らの文章は直線的で、からっぽだ。  
ペテルブルグを走る<sup>プロスペクト</sup>大通りのように。（強調はピリニャーク——筆者注）<sup>227</sup>

1920 年代前半はスキタイ主義の影響が極めて強く、この時期のピリニャーク作品にはアンチ・ペテルブルグ・テクストとでも呼ぶべき現象が成立している。ピリニャークのスキタイ主義は『酔いどれ提督ピーテル陛下』、『サンクト・ピーテル・ブルフ』、そして『裸の年』に結晶した。これらの作品はいずれも 1919 年から 1921 年の間に執筆されている。作家の反西欧主義に特徴的なのはピョートル大帝に代表される男性性と「母なるロシア」の女性性を対比し、宗教性に満ちた後者の精神世界を再生することである。短編『サンクト・ピーテル・ブルフ』の中でピリニャークは帝政ロシアの文化を次のように定義している。

---

<sup>227</sup> . Пильняк. М.М. Шкапская. «Mater Dolorosa». С. 7.



私は断言する。ロシアでは社会の底辺から実に民族的で、健全で、必要不可欠な運動が起こっている。それは西欧のサンジカリズムとは無縁の代物である。ロシアでは国体無き国家を実現するために、あらゆる国家に対する無政府主義的な蜂起<sup>フント</sup>がおこっている。私は断言する。ロシアはピョートル大帝根性、ペテルブルグ根性の熱、アイデア、セオリー、数学的カトリック教という熱を、飲み干そうとしているし、それが使命である。私は断言する。ロシアで勝利するのは、ロシア的なものだ。(I:404、強調はピリニャーク——筆者注)

既に本論の第二章でも見たが、ピリニャークにとっての十月革命は中世ロシアを復権するための無政府主義的運動で、それは「国体」государственность という非・ロシア的概念（ピリニャークの考えによれば）に対する民族的抵抗であった。『裸の年』に登場する無政府主義者は理想の「国家像」を次のように論じている。

我らが大ロシア国はいかに誕生したと思うかね？ 我らが歴史の始まりはキエフ・ルーシの崩壊にある。ペチェエグ人から隠れ、タタール人を避け、封建諸侯らの内乱を逃れ、森に隠れては村やフィン族の間で息をひそめ、国体への恐怖を感じながら我らの国家が誕生したのだ。ペストのように国体を恐れて逃れていったのだ！ (I:75)

国体は「ペスト」であり、ピリニャークは中世ロシアの女性性を志向した。「母なるロシア」、あるいは「母なる湿潤の大地」Мать-сыра-земля を探求する過程でピリニャークが規範としたものは、時代の申し子ブロークが執筆した詩『ロシア』（1908）の女性像である。ピリニャークはブロークの『ロシア』を短編『酔いどれ提督ピーテル陛下』のエピグラフに引いている。

ロシアよ、赤貧のロシア  
おまえの住まう灰色の小屋は  
おまえの歌う風の音は  
涙のような初恋だ (I:372)

「赤貧のロシア」という表象は革命後のピリニャーク作品に息づいた。作家が『第三の首都』で書いた言葉を借りれば、「赤貧の、素足で、食べるパンもなく、墓場のにおいがするロシアは全てのロシア人にとって——偉大な哀しみで——偉大な喜び」(II:258)である。同時期に執筆された小説『スマレ』でも「赤貧のロシア」は歌われている。この「赤貧のロシア」は「美しい女性」や「美しい母」など、様々な表象に変貌するが、この「母なる湿潤の大地」は新世界を産み落す陣痛に耐えている。

国境の向こうからロシアを見てごらん。それは途方もない光景だよ、言葉にならないね！ 赤貧で、腹を空かせた裸足のロシアが、ロシアという美しい女性が世界を救うために、世界に立ち向かうんだ。宇宙の力で革命のボイラーに放り込まれたこの地球に、眩しいほどの真実を運んでいるんだ。その真実に手を上げたり、反論できる人はこの世にいないよ。俺はイギリス、インド、ペルシアに行ってきたが、全世界が共振していて、我先にとロシアを目指すんだ。感じるかい、とても眩しくて、壮大で——言葉にならないよ！——途方もない真実を偉大なロシアが、諸民族の美しい母が世界に運んでくる、その足音が聞こえるかい？！ とてつもない始原力が陣痛に苦しんでいる！（I:248）

このように、ピリニャーク作品では「母なるロシア」という土着の女性像は聖母マリアと同じく、救世主を産み落とす役割を果たしていることがわかる。そもそもロシアでは伝統的に聖母マリアは「母なるロシア」という大地信仰と混同されてきたため、聖なる大地をわざと踏みつけたり、土を掴んで投げすてたり、大地に唾を吐く行為は罪として認識されていた。

<sup>228</sup> ドストエフスキイの『悪霊』に登場する老女の言葉を借りれば、「聖母さまは大いなる母、マチ・スライラ・ゼムリャーうるおえる大地でね、それがまた人間に取ってのおおきな喜びでもあるんだよ」。<sup>229</sup> ロシアの大地信仰を示す例として、古儀式派信徒の大貴族婦人 Φ・モローゾヴァ（1632-1675）が地下牢で死期を迎えた際、聖なる大地を汚さないようにと下着を洗わせた逸話は有名である。伝統的にロシアの民衆信仰では「母なるロシア」と並んで「父なるツァーリ」も崇拝さ

---

<sup>228</sup> 白石治朗「一九世紀ロシア農民の大地信仰」山本俊朗編『スラヴ世界とその周辺』ナウカ、1992年、136頁。

<sup>229</sup> フョードル・ドストエフスキイ（江川卓訳）『悪霊』『ドストエフスキイ全集 11』新潮社、1978年、145頁。

れてきたが、ロシア史で初めて「<sup>インペラートル</sup>皇帝」の称号を用いたピョートル大帝に民衆はなじまなかったと言われている。<sup>230</sup>ロシアの大地信仰に詳しい白石治朗の言葉を借りれば、「民衆が信じたツァーリは、家父長的な父であり、国家の支配者ではなかった」。<sup>231</sup>

ピリニャークもまたロシアの大地信仰に貫かれた作家であった。その作品に登場する「母なるロシア」という大地信仰もキリスト教の聖母マリアと結びつき、罪を許す存在として民衆の信仰を集める。『裸の年』のグレブ・オルディーニンはロシアのマリア信仰を次のように説明している。

太古のロシアを生きた画家たちはマリア像を母性の甘い神秘、精神世界の神秘として、いや、母性そのものとして解釈してきました。今日に至るまでロシアの女たち、母親たちはみな罪を打ち明けるとき、マリアに祈るのですが、それには理由があるのです。彼女は母性を守り、許し、罪を理解する存在なのです。(I:74)

ピリニャークもまた「母なるロシア」という土着的な聖女マリアを探求したが、この文脈においてピョートル大帝による改革は西欧という男性によって「母なるロシア」が辱められることと同義である。作家のアンチ・ペテルブルグ・テキストではピョートル大帝が「赤貧のロシア」を辱めるさまが描かれている。その例として『酔いどれ提督ピーテル陛下』が示唆に富む。

この作品では皇帝に仕える親衛隊長ゾートフの視点から「サンクト・ピーテル・ブルフ」の建設が描かれている。早速、作品の冒頭では「国家なるものは、物理的のみならず、精神的要素との調和であったればこそ、ピョートル・アレクセーエヴィチ陛下の所業はロシア国にとって百害あって一利なし」(I:372)と記されており、ピョートル大帝の政策を批判する作家の視線が明らかになる。短編にはピョートル大帝と妾のマリアが登場するが、両人物の性格付けは父権中心文化と母権中心文化のコントラストを印象深く読者に提示する。ピョートル大帝はマリアを寵愛したが、マリアは皇帝の家臣と罪を犯して皇帝の怒りを買ひ、死刑を言い渡される。そしてマリアは自らが犯した罪とともに、その宿命を受け入れる。

---

<sup>230</sup> 白石治朗『ロシアの神々と民間信仰：ロシア宗教社会史序説』彩流社、1997年、219頁。

<sup>231</sup> 同上。

マリアは陛下の従卒オルロフの慰み者になっていたが、彼女が愛したのはピョートル大帝だった——しかし陛下は彼女を死刑に処した。陛下は処刑に立会い、断頭台でマリアと別れの挨拶を交わし抱擁した。彼女は黒いリボンのついた白いドレスを着ていた。そして刑吏が彼女の首を切り落とすと、ピョートル大帝は首を持ち上げ、列席者に喉元の構造をこれ見よがしに説明し始めた。(I:387、強調はピリニャーク)

作品に登場するマリアは罪を受け入れ、それを許す人物だが、ピョートル大帝はいびつなまでの合理主義者として描かれている。マリアの遺体で解剖学を講義するエピソードからは作家の反西欧思想が読み取れるだろう。さらに作家の批判はペテルブルグ建設そのものにも向けられている。そもそもペテルブルグ建設は、プーシキンが『青銅の騎士』で歌った通り、「西欧への窓」を開けるためであった。

荒涼たる河の岸部  
壮大な想いに充ちて、彼は立ち  
遠方を見つめていた [中略]  
われわれがヨーロッパへの窓をあけ  
海辺にしっかりと足をふまえて立つのはここだと  
自然がきめてくれているのだ<sup>232</sup>

しかし、建設の負担は民衆の肩に重くのしかかった。湿地帯に帝都を建設するため、ロシア全土から膨大な数の農奴が駆り出されたが、その大半は劣悪な労働環境の中で次々と命を落とした。ピリニャークは帝都建設の悲惨な様子を次のように描いている。

労働に駆り出された哀れな人々は飢え、やせ衰えて次々と命を落とし、一年以上の労働に耐える者は稀だった。命を落とした者の数は毎年、十万人に達し、町は人骨で埋め立てられた。作業道具が足りなければ、人々は上着の裾で土を運んだ。草履が足りなければ裸足で歩いた。腰まで水につかって働き、腐りかけの掘立小屋に寝起きした。逃げ出

---

<sup>232</sup> アレクサンドル・プーシキン（木村彰一訳）「青銅の騎士」『プーシキン全集 2』河出書房新社、1972 年、594-595 頁。

し、森へ隠れるもの、盗賊になるものもいた。時には暴動も起こった。すると、反徒の輩は見せしめに要塞の外壁に数十と吊り下げられた。(I:377)

「サンクト・ピーテル・ブルフ」の建設に際しては数万人の農奴、懲役囚、捕虜が命を落としたといわれている。<sup>233</sup> 建都に伴う犠牲者の数を特定することはここで課題ではないが、ピリニャークは西欧化の過程で蹂躪されたロシアの民衆を描き出し、ピョートル大帝の治世を民衆文化抑圧の歴史として提示していることがわかる。作品には、皇帝の暴君ぶりを揶揄する民謡も引用されているが、そこからは帝都建設のために搾取される民衆の苦難が読み取れる。

ペトラ様はおっかねえ  
公爵からは百ルーブル  
大貴族からは五十ルーブル  
百姓からは五ルーブル  
金がなけりゃ  
童をとっちまえ  
童がなけりゃ  
嫁をとっちまえ  
嫁がなけりゃ  
頭から丸ごと食っちまえ！ (I:382)

さらにこの作品には「アンチ・キリスト」ピョートル大帝に対する呪詛の言葉も登場する。続けて引用しよう。

わしの言葉は山より高く、金より重く、賢者の石より固い……恐ろしい<sup>チョルト</sup>悪魔、荒々しい疾風、片目の悪魔<sup>レーシイ</sup>、異郷の悪魔<sup>ドモヴォイ</sup>、慧眼の烏、カラス魔女、不死身のヤドンよ、力を貸し給え——極悪のアンチ・キリスト・ペトラアア！ おのれの最期はいずれ来る。  
(I:383-384)

---

<sup>233</sup>. Большая энциклопедия. Т. 43. С. 308.

「レーシイ」や「ドモヴォイ」、「コシチェイ」はいずれもスラヴ民族のフォークロアに典型的な土着の悪魔だが、引用の呪詛からは「母なるロシア」という神聖な大地を辱めた西欧主義の権化ピョートル大帝にローカルな文化で抵抗しようとする構図が見えてくる。

ピリニャークの批判的態度はピョートル大帝の都市計画にも向けられたが、作家の言葉を借りれば、「サンクト・ピーテル・ブルフ」は「モスクワに似ることがない」ように建設されただけの都市だった。『酔いどれ提督ピーテル陛下』でペテルブルグの建設は次のように描かれている。

ピョートル大帝は〔中略〕思い立ったようにネヴァ川の三角州が広がる沼地とエニサリ島にペトロパヴロフスク <sup>フォルテツィーヤ</sup> 要塞 фортеция を建設した。それは1703年のことだった。そして十年後にはサンクト・ピーテル・ブルフの建設が始まった。それは、荒々しく、直線的に、厳粛に進められた。それがピョートル大帝のやり方だった。(I:376)

「要塞」はロシア語でクレポスチだが、ピリニャークはここでフォルテツィーヤというイタリア語を用いている。こうして作家は「サンクト・ピーテル・ブルフ」の建設を西欧化に没頭する暴君の気まぐれとして提示している。『裸の年』のアナーキストもまたペテルブルグ建設をロシア史の過ちとして評価している。

この地に我々がやってきたのはエカチェリーナ時代のこと。三十年も、百年も変わらぬ生活を送っているうえ、自己流に解決してきた。であればこそ、どんな統治も無用、兵士も無用。ペテルブルグは疥癬のようなもの。民衆は庇護がないほうが暮らしもよくなり、休む暇もあり、考えもめぐるだろう。民衆はそうやって一千年も生きてきた。(I:100)

アナーキストの理想郷はペテルブルグによる支配の及ばないロシア南部（コサックの拠点）の自由な大地である。コサックの目に、ロシアの民衆文化と断絶したペテルブルグは西欧による植民地化の牙城として映っていることが分かる。『第三の首都』でピリニャークが用いた言葉を借りれば、ピョートル大帝の治世以降、「ロシアはアングロ・サクソン民族、そのあとはゲルマン民族による『資本論』の非公式的な植民地と化した」(II:296)。こうした歴史観は短編小説『酔いどれ提督ピーテル陛下』にも表出している。作品では異邦人と化したロシア人官僚の姿が農民の目線から描かれている。

農民たちは、髭を剃ったこの真新しい官僚たちをペストのように恐れていた。この官僚たちは年がら年中酔っぱらっていて、ロシア語とドイツ語がまざったような言葉で話す奇妙な連中だった。そして新しい世代が誕生し、ロシアがトルコ人、スウェーデン人、ペルシア人だけでなく、自分自身と戦っているのが自明になった。(I:383)

ピョートル大帝は使節団で西欧各国を訪問した際、数百名におよぶお雇い外国人（主にオランダ人）を引き連れて帰ったが、その過程でロシアの貴族文化はゲルマン化し、その改革はロシア語にも強い影響を与えた。そして大衆は造物主の象徴である髭を剃り落とし、「ロシア語とドイツ語がまざったような言葉で話す」国家の官僚を「異邦人」として受け入れた。西欧化の中心にいたピョートル大帝もまた異邦人として描かれている。

皇帝は口さパイプくわえてよ、海の向こうさいる船乗りみてえなもんだ。格好だってドイツ野郎でねえか〔中略〕おらんどこの皇帝は、にせもんだがんな。ありゃドイツ野郎だ。おかみが家来ひつつれて海の向こうさ行ったら、ストックホルムの国さついでよ、その姫様んどごさいったが、その女はウルリカとかいって、おかみを寝床さ連れでって馬鹿騒ぎするわけだ。おかみのヘソ取っちゃって、そこでてめえのヘソくつつけんだが、アマのヘソは焼いた鍋みてえに熱いんだ。それで、ドイツのストックホルムのアマは、ピョートル・アレクセーエヴィチを化け物に変えちまったつつう話よ。(I:379)

周知の通り、十八世紀半ばにロマノフ朝は男系の血筋が絶えたため、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン＝ゴットルプ公（改宗後はピョートル三世）を皇帝に招き入れた。こうしてロシア史ではホルシュタイン＝ゴットルプ＝ロマノフ朝が始まったが、この時代にはれっきとしたドイツ人女性のエカチェリーナ二世（アンハルト＝ツェルプスト家に生まれ、本名はゾフィー・アウグスタ・フレデリーケ）が半世紀に渡って国家を統治する異例の事態が発生した。そして宮廷は外国出身の役人が幅を利かせる場所となり、知識人の反感を買った。ユーラシア主義者トルベツコイの言葉を借りれば、「ドイツ系の役人や似非軍人、高官（彼らはロシア語がままならず、ロシアの民衆を心底軽蔑していた）でロシアの官庁や海軍艦隊、近衛連隊、県庁、さらには皇室も埋め尽くされた」のである。<sup>234</sup>

---

<sup>234</sup> . Трубецкой. История. Культура. Язык. С. 255.

ドイツ人としてのピョートル大帝像は同時期に執筆された『裸の年』にも登場する。作品に登場するボリシェビキは帝政ロシアをドイツによる支配の時代として認識している。

ロシアはタタールの下を歩いでだ——タタールのくびきがあったべ。ロシアはドイツの下を歩いでだ——ドイツのくびきがあったべ。ロシアはそれなりに賢いんだ。ドイツ人は賢いが、その知恵ってやつが馬鹿なんだな。水洗便所作るごとばっかし考えでんだ。  
(I:87)

このようにタタール・モンゴルの支配はもちろんのこと、ホルシュタイン＝ゴットルプ＝ロマノフ朝の統治もまた異国による支配とピリニャークは提示する。この文脈において革命は断絶した社会関係を回復する契機にほかならない。『裸の年』のグレブは「地上を偉大な浄化が駆け抜けた。革命だよ。ねえ、わかるかい、なんて美しいんだろう」(I:61)と歓喜するが、革命は西欧文明からの解放であると同時に、ピョートル大帝の改革によって断絶した社会関係を回復することでもあった。であればこそ作家は帝政ロシアの終わりを鮮明に描き出した。

『裸の年』の第二章「オルディーニン家」で描かれる「家」の表象は、西欧化を経験した帝政ロシアそのものを象徴しているといつてよい。オルディーニン家の人々はみな梅毒をわずらい、家の中には「年老いた人間の体臭」が立ち込める。父のエヴグラフは革命前まで情欲に耽り、その体は梅毒に冒されているばかりか、子供たちも父の病気を先天的に受け継いでいる。さらに守銭奴の妻からは「不潔で太った人間の体に特有のいやらしい臭い」(I:65)が漂う。また、長女のリディアは女優の道へ進み、憧れのパリへ旅立つが、蓋を開けてみれば情事と中絶を繰り返すモルヒネ中毒者で、「誰にも必要ない、砂漠のような」(I:69-70)日々を生きる。「誰にも必要ない」オルディーニン家がたどる破滅への道はおとぎ話のようであり、旧世界の住人はおとぎ話のように次々と命を落とす。オルディーニン家の長男ボリスは革命を経て経験した世界観の変容を次のように表現している。

春だった。俺はオルロワ山に登って、ヴォルガ川の向こうに広がる低地を眺めていたよ。あれは春だった。ヴォルガの水は増し、空は青く染まり、周囲でも、俺の中でも命がみなぎっていた。俺は世界を抱きしめたかった！ よく覚えてるよ。そしてそのときこうも思った、俺こそが中心だ。そこからすべてが広がって行って、俺こそが全てだと。あ



とになって知ったよ。この世には周辺も、中心もない。すべては革命に飲み込まれ、だれもかも生に翻弄される兵隊アリなんだ。(I:62)

帝政ロシアの貴族階級は世界の中心のようだったが、革命を経てオルディーニン家は重心を失って崩壊し、旧世界の章はボリスが自殺する銃声音で幕を閉じる。同様に西欧化を経験したロシアの都市も破滅は免れえない。次に引用するのは、戦時共産主義下の混乱で餓死が日常化した都市の描写である。

町には飢餓、梅毒、そして死が徘徊していた。<sup>プロスペクト</sup>大通りには発狂した自動車が、臨終の苦しみにもがきながら右往左往していた。人間たちは狂暴になり、パンとジャガイモを夢見て、飢えに苦しみ、明かりも灯さず寒さを耐えしのいでいた。人間たちは死に瀕した石と書記事務所を暖めるべく、木の柵と小屋を取り壊して拾い集めた。赤い血に溢れた生活は、まるでそこにはなかったかのごとく町から消えうせ、いくなれば——白い紙の生活が訪れた——それは死である。町は誕生を孕むことなく死に瀕していた。(I:122-3)

この引用からはロシアと西欧の対照的な姿が立ち現れる。引用では「死に瀕した石」でできた街が描かれているが、ロシア文化の文脈において「石」の表象は西欧文明を象徴する。その例として『カラマーゾフの兄弟』に登場する思想家のイワンは西欧社会を次のように評している。

俺はヨーロッパへ行ってきたいんだ、アリョーシャ。ここから出かけるよ。しょせん行きつく先は墓場だってことはわかっているけど、しかし何よりいちばん貴重な墓場だからな、そうなんだよ！ そこには貴重な人たちが眠っているし、墓石の一つ一つが、過ぎ去った熱烈な人生だの、自分の偉業や、自己の真理や、自己の闘争や、自己の学問などへの情熱的な信念だのを伝えてくれるから、俺は、今からわかっているけど、地面に倒れ伏して、その墓石に接吻し、涙を流すことだろう。そのくせ一方では、それらすべてがもはやずっと以前から墓になってしまっていて、それ以上の何物でもないってことを、心から確信しているくせにさ。俺が泣くのは絶望からじゃなく、自分の流した涙によって幸福になるからにすぎないんだよ。自分の感動に酔うわけだ。春先の粘っこい若葉や、青い空を、俺は愛してるんだよ、そうなんだ！ この場合、知性も論理もあ

りゃしない。本心から、腹の底から愛しちまうんだな、若い最初の自分の力を愛しちまうんだよ。<sup>235</sup>

このように、ドストエフスキイは偉人の眠る墓の「石」に西欧文化の没落を見ていた。イワンはその「石」に涙すると同時に、「春先の粘っこい若葉」のようなロシア文化の脈動に歓喜するのである。『裸の年』でも「石」は西欧社会を象徴している。先の引用で描かれる街には西欧的な大通りがあり、<sup>プロスペクト</sup>「発狂した自動車」が駆け抜ける。これらのことから、この街がペテルブルグを指すことは想像に難くない。『酔いどれ提督ピーテル陛下』によると、「陛下は布令をだし、領国内ではサンクト・ペテルブルグを除いて石の建造物を作ることは禁止」(I:376)しており、ピリニャーク作品に登場する「石」も文明社会（とりわけ西欧社会）を象徴すると考えてよい。その一方、木造建築は西欧化以前の中世ロシアを象徴している。「百姓小屋」はブロークが『ロシア』で歌い上げた母なるロシアを象徴するものである。先の引用に戻れば、都市では西欧的なものを守るためにロシア的なものが破壊されており、それをピリニャークは原初的なロシアに対する冒涇として描き出しているといえよう。『裸の年』に登場する人々は飢えを耐え忍びながらも文明の遺産を守ろうとするが、それは「白い紙の生活」で、赤い血にあふれた生活ではない。「白い紙の生活」は非ロシア的な官僚主義であり、ピリニャークの描くロシアには無縁の統治原則である。その例として、『裸の年』の第五章にはイワンという農民出のボリシェビキが登場するが、彼はその類稀な勤労精神が評価され、ソ連共産党の末端組織にあたる<sup>ヴォロスノイ・コミテ</sup>郷委員会 волостной комитет に選出される。それはイワンにとって大変な出世である。そしてイワンは共産党の官僚主義に組み込まれるが、彼は「大変な労力で書類にサインしていた。しかし、これは労働ではなかった。書類は彼の意思抜きにあっちこっち飛び回っていた。彼は書類を理解していなかった。彼はただサインしてただけだった。彼は労働がしたかった」(I:139)、と感じており、共産党の官僚主義はイワンの世界観と有機的に結びついていないことがわかる。さらに、イワンは帝政ロシアの貴族文化にも価値を認めない。次に引用するのは、国有化された貴族の屋敷に足を踏み入れたイワンの描写である。

---

<sup>235</sup> フョードル・ドストエフスキイ（江川卓訳）「カラマーゾフの兄弟」『ドストエフスキイ全集 15』新潮社、1978年、276頁。

すでに日はとつぷりと暮れていて、屋敷は静まり返り、庭では家畜番がのど自慢をしていた。彼は書斎へ行き、ソファに腰かけ、その上品さと柔らかさを確かめていると、放り投げられていた懐中電灯が腰に当たった。それを手に取って壁を照らし、客間に時計が転がっているのを見つけると、どうしたものかと考えた。そして便所に運んで放り捨てた。(I:141)

イワンは百姓小屋<sup>イズバニ</sup>を離れ、国有化された貴族の屋敷に移り住む。しかし、「突然、彼は自分自身と妻のことが哀れになって、家に帰り、暖炉<sup>ベチカ</sup>の上で寝転がりたくなった」。(I:141) このようにピリニャークはイワンを通して始原力との共生をロシア民衆の運命として提示している。

作家は「二百年のかさぶた」を洗い流す五月の洪水として革命を賛美したが、西欧化の「かさぶた」がはがれ落ちて歴史の表舞台に登場したロシア的人間は人道主義を意にも介さない、本能のままに生きるスキタイ人のような人々であった。『裸の年』に登場する無政府主義者のイリーナは新時代の文化を体現する革命家である。イリーナにとって革命前の伝統、文化、倫理は無縁である。

この世にはやっぱり支配者がいるの。その人たちは石みたいに筋肉がかたくて、意志は鋼のようにしなやかで、悪魔みたいに頭は冴えてるし、それにその美しさと言ったら、アポロンも悪魔もかなわない。人の首を絞めることも、女を殴ることも時には必要よ。あなたはヒューマニズムとか、公平なんて言葉をまだ信じてるの？ ばかくさい！ 戦えない人間はみんな死ぬ。強くて自由な人だけが生き残ればいい！  
——それはダーウィンの理論だね——アンドレイは静かに言った。  
——うるさい！ これは私の言葉だ！ (I:108-109)

このように、ピリニャーク作品に登場する「新しい人々」は「スキタイ人」のように強く、原初的生を絶対の美として認める人々である。続いて別の例を見てみよう。

次に見るのは没落貴族アンドレイが死に瀕した町を抜け出し、放浪生活に身を投じた場面からの引用である。この描写でもやはり旧世界からの解放が賛美されている。

計り知れない喜び、自由！ 自由！ 家、過去の日々、過去の生活——永遠に過去——

くたばれ！ 石がぱらぱらと飛び散り、彼と一緒に崖の下へと落下（落下音はグヴィウ！……）、そして落下の最中すべてが目の中の火花となって散った、そのとき残ったものはひとつ、赤い心臓。監視人が上から何か叫んだ。そのあとは飢えた人々の鍋、枕木、飢えた人々が奏でる歌の断片、そしてヴォロガの水——自由！ 自由！ 何も持たず、すべてと縁を切り——賤民になる！——夜も、昼も、夜明けも、晴れの日も、猛暑の日も、霧の日も、雷雨の日も——明日を知ることもなく。(I:84)

アンドレイを描く筆致は無窮のステップを駆け抜けるギャロップそのものであり、躍動感にあふれている。アンドレイは「夢、革命によって生まれたこの全ての喜びを痛み、慈しみとともにもう一度鋭く体感した」(I:91)と歓喜する。そしてロシア文化の始原力は甘い誘惑となってアンドレイを誘い込む。

五月になると、大地が手招きをする。五月の夜明け、霧の中で女の中へ——大地に横たわり、大地に消える。大地に引き寄せられる。(I:85)

始原力と共存するイリーナやアンドレイの姿はピリニャークが活動初期から抱いていた自然崇拝から生まれたものであれ、ペトログラードのスキタイ主義によって補強されたものであることは明らかである。イワノフ＝ラズムニクが評論「詩人と革命」で呼びかけたように、ピリニャークは破滅的な始原力に身をゆだねる。次に見る描写でも、始原力と共生するアンドレイの姿が表現豊かに描かれている。

今日という日が有無を言わず飛び込んできて、彼は自由奔放な始原力に吹き飛ばされる人間の葉っぱだった——そして時間からもぎ取られた——だからアンドレイは一つの自由に思い当たった——表面ではなく、内面の自由。物質、時間と縁を切り、何も持たず、何も望まず、何も惜しまず、賤民になる——見るために、ただ生きる。芋を食おうが、塩漬けキャベツを食おうが、百姓小屋に住もうが、自由だろうが、束縛されていようが——<sup>ヴィージェチ</sup>見<sup>テ</sup>る видеть ために。(I:88)

上記の引用では「見るために、ただ生きる」とあるが、ここで使用されている動詞「見る」

は能動的に「見る」<sup>смотреть</sup>ではなく受動的に「見る」<sup>видеть</sup>行為であり、それは主体的な意思を否定して始原力との調和を志向するものである。プーシキンが『ペスト流行時の酒盛り』で歌った通り、始原力との共存は同時に死との共存を意味するが、アナーキストにとっては破壊的な始原力との共存こそが存在の喜びである。

そしてアガーニカは七月に死んだ——大地を黒い天然痘とチフスが嘗め尽くした……——死、<sup>スムータ</sup>動乱、飢餓、松明——生きるために、見る。七月初めの数日間、それは猛暑が訪れる前だったが、五日間も雷雨が続き、アナーキストたちは家の中で暮らした——そして、それほど強い喜びを、存在の喜びをアンドレイはいままで感じたことはなかった！（I:93）

このように、ピリニャークは始原力との盲目的な共存に「新しい人間」の本質を認めた。そして革命期のロシアに登場した「新しい人間」の真骨頂こそ、パンを求めて暖房貨車で移動する赤貧の人々である。彼らはステップを移動しながら生存競争を際限なく繰り広げるが、この描写をもってペトログラードのП・グーベルは作家を「最大のスキタイ人」と評価した。

人間たち、人間の足、腕、頭、腹、背中、人間の糞——暖房貨車が人間たちで埋め尽くされているように、シラミで覆われた人間たち。ここに集まり、拳の凄まじい努力でもって移動する権利を守り抜いた人間たち。なぜなら、飢餓が流行した諸県では、どの駅でも腹を空かせた数十の人間たちが暖房貨車に飛び掛ってきたからである。そして彼らは頭、首、背中、足をかき分け、人間たちの間を這いながら中に押し入ってきた——彼らは殴られ、殴り、移動していた者たちを突き飛ばし、引きずりおろし、この大格闘は列車が動き出し、残った者たちを運び去るまで続いた。そしてこの新たに這いこんだ者たちは新たな駅での新たな喧嘩に備えた。人間たちは数週間かけて移動する。この人間たちはみなとつくの昔に夜と昼、不浄と清潔の差を忘れ、すわり、立ち、ぶら下がりがりながら寝るようになった。暖房貨車の中では至る所に何段にも寝床板が備え付けられていて、寝床の上、寝床の下、床、棚、あらゆる隙間で座り、立ち、横たわりながら人間たちは静まり返った——駅で騒ぐために。（I:144）

上記の例からも明らかなように、「人間たち」は単語の列挙で描写されているが、草原を駆け抜けるギャロップのような躍動感にあふれる文体はスキタイ人の精神世界を表現しているように読める。この描写から浮かび上がってくるのは通常の間人ではなく、野生化した「人間」という名の動物である。それは生存競争に駆られる行動のみならず、本来ならば不要な形容詞「人間の」による修飾や、「這う」лезтьや「静まる」притихнутьといった、レトリックから創出される効果である。また、ここで興味深いのは名詞の用法である。ここで作家は暖房貨車に乗り、生存競争を続ける乗客に名詞の「人間たち」людиを常に適用する。本来ならば「彼ら」や「乗客」を適度に織り交ぜて、トートロジーを避けることがロシア語の規範だが、ピリニャークは違和感を覚えるほど意図的に「人間たち」を反復する。その結果、この「人間たち」は通常の意味で使用される「人々」ではなく、革命期に登場した「新しい人間」を指す固有名詞として機能している。まさにこうした描写を評価してトロツキイは『文学と革命』で次のように述べたのであろう。

ピリニャークはリアリストであり、新鮮な眼と立派な耳をもった素晴らしい観察者である。かれにとっては、人びとや事物は古くて使い古された、まったく元のままのもの——ただし革命によって一時的に混乱状態にはあるもの——には見えない。<sup>236</sup>

ピリニャークは革命を経て登場した「新たな人間」を描くことに専心した。次に見るのはこの「新たな人間」の主人公とも言える「人間」の描写である。この人物にもやはり名詞「人間」человекが頻繁に使用され、「人間」が固有名詞化しているかのようである。そして、パンを求めて放浪するに従い、かつて「人間」が抱いていた社会主義の理想は朽ちて、「本能」という新たな「友愛」が主題となる。

肺炎による最後の紅潮に燃え尽きそうな人間の感覚は奇妙で、錯綜している。禁欲、名誉、小さな部屋、パンフレット、本、飢え——全てが悪魔に食われてしまったような気分だ。眠れぬ幾夜を通して思考はまさしく熱病患者のように分裂し、人間は自分の「わたし」が二分化、三分化し、右腕が息をして、自分の独立した考えを持ち、何かについて分裂した別の「わたし」と口論しているのがわかる。昼、夜、暖房貨車、駅の集落、

---

<sup>236</sup> トロツキイ『文学と革命（上）』106頁。

三等車、昇降踏み段、屋根——全てが混ざり合い、絡まりあい、人間は倒れ、途方もないほど甘い眠りにつきそうだ——踏みつけられても、つばを吐きかけられても、シラミをかけられてもいい。禁欲、社会主義と肺病のパンフレット、神の本——人間は新しい、比類ない友愛を思う——眠りで足が折れて倒れ、人間に寄り添う——誰だこいつは？なぜ彼が？ 梅毒？ チフス？——彼を暖め、人間の体温で暖を取る。[中略] 誰かが彼の上に崩れ落ちる。人間は石のようにひっそり、甘く眠っている。暖房貨車はひっそりと眠っている……駅、汽笛、振動……人間はすこし目を覚ます。人間の頭——人間の「わたし」が二分化、三分化、十分化する——彼の頭は女のむき出しになった腹の上に乗っかっていて、鼻をつくようなトリメチルアミンの臭いがして、市場に群がる雑多な女どものように思考が押し寄せてきて——思考が悪魔に食われる！——獣！——本能！

(I:145-146)

ここでは乗客の変容が巧みに描かれている。理性がまさに「食われて」しまったかのごとく、文章は途切れ途切れの列挙を中心に構成され、「人間」の原初的な世界観が反映されているといえよう。ノーベル賞作家のA・ソルジェニーツィンは『裸の年』を分析し、作品の主題を「本能」と定義したが、実に的確な評価といえる。

裸の年。なぜそう名づけられたのか？ 最初は思うだろう、飢えた年？ あるいは、国家の飢えた年かと？ ところが違うのだ。裸とは人間の本能がむき出しになったことである（その後、肉体的にも）。<sup>237</sup>

ロシア語の形容詞「裸の」<sup>ゴールイ</sup>голый は「極貧の」という意味も含んでいる。そして読者は自然と音声的、意味的に近い「飢えた」<sup>ゴロドヌイ</sup>голодный を連想する。しかし、ピリニャークは「飢え」のみならず、文字通り「裸」という意味にも重点を置いている。事実、作品の中では数多くの性交が描かれている（ボリス・オルディーニンの強姦、エゴールの買春、アナーキストのフリーセックス、バウデクとナターリヤの性交、イリーナとマルクの性交、エゴールカとアリーナの近親相姦、オーレンカの同性愛、列車の中で行われる兵士と婦人の性交、梅毒を患う女の性交、駅舎での酒池肉林など）。革命は歴史を「裸」にしたが、この極限状態

---

<sup>237</sup>. Солженицын А. «Голый год» Бориса Пильняка // Новый мир. 1997. №1. 195.

においては本能が絶対的な美を獲得し、テキストは存在を賛美する単語の列挙で占められていく。

ステップ。空虚。無限。闇。寒。

列車が夜明けを迎えた駅で、人間たちは水を汲みに空っぽの井戸へ、水溜りへ駆け出し、鍋を焚いて、暖を取り、芋を茹でる〔中略〕枕木、暖房貨車、人間たち。鍋が赤い火で燃え、煙のにおいがする。芋を煮る鍋のあたりで——芋を煮る間に——人間たちはシャツ、ジャケット、スラックス、ズボンを脱いで、火の中にシラミを叩き落とし、卵を押しつぶす。人間たちは数週間かけて移動する——ステップへ！ パンを求めて——パンが無い、塩が無い。人間たちはむさぼるように芋を食う。(I:146)

『裸の年』の第五章に収められたこのエピソードは「最も暗い」という副題が付されているが、ピリニャークの心情は本能的な人間像の側に置かれていた。そして本能のままに生きる「人間たち」はその後の代表作『機械と狼』にも息づき、作家の革命的ロマンチズムは「狼」の表象に継承された（この点は追って詳述する）。

『裸の年』は革命後の文壇で議論を呼んだが、その背景にはピリニャークと旧世界の複雑な関係がある。ピリニャークは 1894 年生まれで、れっきとした帝政ロシアの人間である。Вяч・Полонскийは評論「キングのいないチェス」でピリニャーク作品の両義的な革命観が呼んだ反響の大きさを指摘している。

ピリニャークについては多くのことが書かれた。恐らくピリニャーク以上に両極端な評価を同時に呼んだソビエト作家はいない。ピリニャークは革命期の作家であるばかりか、革命的作家と考える人がいる一方、その反対に反動こそが彼の筆を動かしていると確信している人もいる。ピリニャークの才能を疑うものはまれだった。しかし、その革命性は大変な疑惑を呼んだ。<sup>238</sup>

作家は革命を支持して新たなロシアを夢見たが、帝政ロシアは同時に自らが生きたロシアでもあった。そのため、ピリニャークは旧世界の破滅に対しても無関心ではない。『裸の

---

<sup>238</sup>. Полонский. О литературе. С. 126.



年』には破滅する旧世界への郷愁が漂っている。その例として、『裸の年』で描かれるオルディーニン家の破滅は帝政ロシアに生まれたピリニャークの終わりも象徴しているように読める。

——ナターリヤ、家を出るのかい？——グレブは言った。

——ええ、出ていくわ。

——ナターシャ。いいか、家が死んでしまうんだ。そんな態度はないだろう！ 強いのは姉さん一人だ。死にたくない、ナターシャ。[中略] 姉さんも知ってるだろう。家のガラスはくすんでしまって、色あせている。そんなガラスがとてとたくさんある。そこに映った自分の顔を見るのが怖い。なにもかもひび割れた。夢にもひびが入ってしまった。(I:82-83)

このように帝政ロシアの破滅は作家にとっての破滅でもあり、一概にピリニャークを「革命作家」、あるいは「ソビエト作家」と定義することはできない。まさに『裸の年』は過渡期の文学である。古いものは滅びたが、新しいものは誕生していない。それを象徴するかのよう、赤軍兵士のドナトが挿入的に登場するが、「新しいものをドナトは知らなかった。ドナトは古いものは知っていた。そして古いものを彼は破壊しようとした」。(I:34) そしてドナトは何も建設しないうちに、白軍によって殺されてしまう。

『裸の年』の両義的な革命性は極めて対立的な評価を呼んだ。スターリンを除くオールド・ボリシェビキの多くは作家の作品世界を評価したが、反感を呼んだ例は決して少なくない。その例として M・ブルガーコフによるピリニャーク批判が興味深い。

ピリニャークとブルガーコフの関係は複雑さを極める。後述する通り、ブルガーコフは全体主義時代到来前夜のロシアでザミャーチンとピリニャークが弾圧された際、進んで擁護に回っているが、それはピリニャークではなく、ザミャーチンをかばうためであったと考えられる。ブルガーコフ作品にはピリニャークがモデルとなった作品があるが、そのどれもが根強い憎悪に貫かれている。<sup>239</sup>その証拠に、両作家は十五年以上も同じモスクワに暮らしながら、交流といえるほどの関係を敢えて築こうとはしなかった。

---

<sup>239</sup> ブルガーコフは好んでピリニャークを作品のモデルに起用していた。特に、1930 年代にブルガーコフが執筆した戯曲にはピリニャークの滑稽な姿が書き込まれている。

両作家は1921年にウラジカフカスで出会ったが、この時ですでに深い交流には発展しなかったようである。ブルガーコフの初期作品『カフスボタンの手帳』でピリニャークは風変わりな男として写實的に描かれているだけである。<sup>240</sup>ピリニャークに対する反感はその後のモスクワ生活で形成されたと考えられる。ブルガーコフはモスクワに活動基盤を移してから「ニキーチンの土曜日」や「緑のランプ」といった文芸サークルに顔を出していたが、そこではピリニャークが散文界の寵児としてもてはやされていた。<sup>241</sup>そこでブルガーコフはピリニャーク作品を手にとったと考えられる。<sup>242</sup>

『裸の年』を始めとするアンチ・ペテルブルグ・テキストでピリニャークは帝政ロシアという「家」の破滅を鮮明に描いたが、同時代のモスクワを生きたブルガーコフもまた帝政ロシアの「家」を描くことに挑んだ作家であった。『ゾーヤのアパート』（1925）や『犬の心臓』（1925）、『巨匠とマルガリータ』（1929-1940）などの代表作が示すように、ブルガーコフ作品では「家」の表象が重要な意味を持つ。ブルガーコフが愛した帝政ロシアという「家」の敷居をまたぐ住宅管理委員会の役人はいずれも作家の憎悪と嘲笑を呼んでいる。そのため、「家」の破滅を描いたピリニャーク作品にブルガーコフが無関心でいらなかったのも当然だろう。

『ハンズの炎』の主人公アントン・トゥガイ＝ベグ＝オルディンスキイは、『裸の年』のオルディーニンと同じく没落貴族という設定である。「オルディンスキイ」は「オルディーニン」と同じく、「遊牧民」を意味する古代テュルク語の「オルドゥー」から派生した姓であり、「タタール・モンゴルの軛」に起源をもつ。『裸の年』で描かれた「オルディーニン家」への皮肉を込めてブルガーコフは作品の主人公を敢えてオルディンスキイと命名したようである。

物語の主人公はグレブ・オルディーニンしながら革命後に西欧諸国を遍歴するが、後に偽名でソビエト・ロシアへ帰国する。しかし、革命前に暮らしていた屋敷は国有化され、歴史博物館に様変わりしていた。オルディンスキイは博物館の来場者に紛れながら、没収された

---

<sup>240</sup>. См.: Булгаков М.А. Собр. соч. в 5 т. М., 1990. Т. 1. С. 484

<sup>241</sup>. См.: Чудакова М.О. Жизнеописание Михаила Булгакова. М., 1988. С. 172-173.

<sup>242</sup>. ブルガーコフがピリニャーク作品に精通していたことは先行研究で指摘されている。Подр. см.: Яблоков Е.А. О голых гадах и годах (Б. Пильняк и М. Булгаков) // Б.А. Пильняк. Исследования и материалы / Под. ред. А.П. Ауэра. Вып. III-IV. Коломна, 2001. С. 9-23.

領地の変わり果てた様子を目の当たりにする。すると、一人の来訪者がオルディンスキイの注意をひく。それが「裸の男」アントーノフで、ピリニャークがモデルと推測される。短編で「裸の男」は次のように描かれている。

薄こげ茶で膝頭も隠れない短パンをはいており、ベルトで腰から釣り上げていたが、そのベルトには「第一実践学校」というバックルがついていた。それを除けば、男は真っ裸であった。<sup>243</sup>

「裸の男」アントーノフは鼻眼鏡をかけた奇妙な風采の男で、ソビエト・ロシアの文化を体現する人物である。「裸の男」は国有化された没落貴族の領地を駆け回り、その研究を生業としている。「裸の男」はオルディンスキイが暮らしていた屋敷を調べあげ、その遺産に泥を塗る。オルディンスキイ家の大広間に足を踏み入れた「裸の男」は次のような毒を吐く。

このガラクタを切り出すために民衆はえらく骨を折ったようすなあ。しかし、それもこれも、あとで穀つぶしどもがその上をぴょんぴょん飛び回るためだけにね。オネーギンのような輩が、くるくるっとね……夜通しバカ騒ぎしていたんでしょなあ。まあ、他にやることがなかったんだからしょうがない。<sup>244</sup>

「裸の男」が声高に論じる反帝政ロシアの歴史観は主人公を深く傷つける。そして主人公がソビエト・ロシアに抱く反感のすべてが、愛すべき「家」の敷居をまたいだ「裸の男」に向けられるのである。オルディンスキイは「裸の男」に抱く反感を博物館の職員で、かつての召使いヨアンに打ち明ける。以下、アントンの台詞から引用である。

いいかい、俺は同志アントーノフを海の底まででも探しに行って、とっ捕まえてやる。もちろん、そのときまで奴に息の根があればの話だがね。あるいは、赤の広場で縛り首

---

<sup>243</sup>. Булгаков. Собр. соч. Т. 1. С. 525.

<sup>244</sup>. Там же. С. 528.

になってなければいいが。しかし、仮に絞首刑になっていても、俺は奴の遺体を拝借して、一両日はうちの庭につるしてやるよ。<sup>245</sup>

このように『ハンの炎』では、革命前と革命後の世界が衝突する。そして革命後のロシアを体現するのが「裸の男」なのだが、「裸の男」の分析を通してブルガーコフのソビエト文化観が立ち現われてくる。

ブルガーコフが見たソビエト文化の特徴とはなによりもまず、その悪魔的要素に代表される。興味深いことに、「裸の男」は『ファウスト』に登場する悪魔のように描かれている。ゲーテはメフィストフェレスを片足が馬の脚の悪魔として描いたが、「裸の男」もまた左右の足の太さが違う奇形の人物として描かれている。「裸の男」の悪魔的要素は偶然に作られたものではない。その例として召使いヨアンの台詞が興味深い。

まったく、忌々しい男め——ヨアンは招かれざる客に一瞥をくれて、なすすべもなく憎悪を込めて心の中で毒づいた——<sup>ニリョーフカヤ</sup>重い力 не легкая に引き連れられてきたな。<sup>246</sup>

引用にある「忌々しい男」、「招かれざる客」とは「裸の男」を指す。その「裸の男」は「重い力」に連れられてきたとあるが、ロシア語で「重い力」とは不浄の力を意味することから、その悪魔的起源を暗示している。それに加えて「裸の男」の宗教観も冒瀆的である。「裸の男」の言葉を借りれば、ソビエト権力の「お陰様で天国も、この屋敷に住んでいた貴族も、もはや存在しない」。<sup>247</sup>それに対しヨアンは「天国に関しては仰る通り。誰か様にとっては存在しない。ズボンもはかず、みっともない格好で天国には上がれないでしょう」<sup>248</sup>とやり返す。

このように、ブルガーコフはソビエト文化をきわめて非宗教的な、あるいは悪魔的なものとして認識していた。それは作家の実際的な見聞から得られた認識でもある。ブロークを始めとするスキタイ主義者は形而下としてのロシア正教には価値を認めず、教会破壊を容認

---

<sup>245</sup>. Там же. С. 536.

<sup>246</sup>. Там же. С. 526.

<sup>247</sup>. Там же. С. 527.

<sup>248</sup>. Там же.

したが、聖職者の家庭に生まれ育ったブルガーコフはボリシェビキの反宗教運動に強い憤りを覚えた。その例として、ブルガーコフはボリシェビキが展開した反宗教運動の媒体である「無神論者」紙の記事で繰り広げられた冒涇的な論調に憤慨していた。ブルガーコフの日記には次のような記述がみられる（1925年1月）。

自宅で「無神論者」の数日分をばらばらめくっていると、驚愕した。[中略] イエス・キリストまさにその人が無頼漢、詐欺師として描かれているのだ。誰の仕業かを突き止めるのは難しい話ではない。これは許しがたい犯罪である。<sup>249</sup>

このようにブルガーコフはソビエト文化の中に反宗教的要素を認め、この新たに生まれつつある悪魔的な文化への抵抗として『ハンの炎』を書いた。この作品は「家」を破壊したソビエト文化への憎悪に貫かれており、ソ連社会の風刺作品というよりは反ソ作品といったほうがよい。そして「内的亡命者」ブルガーコフが憎んだ新しい文化の体现者として登場するのが「裸の男」ピリニャークであった。

もちろん、ブルガーコフによるピリニャーク批判は亡命ロシアの立場から放たれたもので、ピリニャークの作品世界を一面的に「革命的」とみなしている感は否めない。ポロンスキイが指摘した通り、『裸の年』の革命性は両義的で、旧世界の終わりは作家自身にとっても悲劇として受容されていたことは事実である。

これまで見てきた通り、革命期のスキタイ主義がピリニャークに与えた影響は決定的であった。ピリニャークはペトログラードの「スキタイ人」に倣って独自の無政府主義的な作品世界をはぐくみ、アンチ・ペテルブルグ・テキストとも呼ばれる数々の作品を発表した。その中ではピョートル大帝による西欧化と中世ロシアの美学が対置され、前者はロシア史の過ちとして提示されている。しかし、こうした反動的な革命受容は文壇の左派による激しい批判を呼ぶこととなった。それと同時に作家の歴史哲学は過去を志向する逆行的な運動から、未来と過去、ソ連と中世ロシア、西洋と東洋の間を揺らぐ振り子の運動へと移行していく。

---

<sup>249</sup> . Булгаков М.А., Булгакова Е.С. Дневник Мастера и Маргариты. М., 2012. С. 66.

### 第三章 ソビエト文明の夜明け前

#### 3-1. 足早に訪れた創作の危機

1920年代前半、ソ連の文壇は足早に変化していった。革命前の文壇で指導的立場にあった作家の多くは亡命したほか、革命を支持しながらも政治的理由で国外へ追放されたゴーリキイも影響力を失っていった。革命前に名をはせた作家が急速に存在感を失っていくのとは反比例する形で、ピリニャークやイワノフ、エセーニンなど、革命の同伴者作家らが脚光を浴びた。ただし、同伴者作家らは革命を受け入れたとはいえ、彼らが夢見た「ロシア」は決してマルクス＝レーニン主義の文化的パラダイムに合致するものではなく、同伴者作家の作品は反動文学として批判され始める。ピリニャークの場合、その作品世界はさらに複雑化し、難解さを極めた。なかでも1925年に発表された長編小説『機械と狼』は数々の否定的な評価を呼び、作家の評価を著しく低下させる結果につながった。その例として評論家のГ・ゴルバチョフは評論「転換期」（1926）を発表、ピリニャーク作品の評価が急速に低下している現状を指摘した。ゴルバチョフによれば、1923年の時点でピリニャークが「現代で最も才覚のある散文作家」と評価されていたとすれば、1925年に「ピリニャークの作家人生は完全に終わった。〔中略〕『機械と狼』はその動かぬ証拠である」。<sup>250</sup> 革命前後のピリニャーク作品はチェーホフやザイツェフ風の抒情性と哀調豊かな作風を誇ったが、『機械と狼』は「誰もがとっくにうんざりしている狼、吹雪、人間、ラッセーヤ（「ロシア」の訛り——筆者注）、コロムナ、沼、悪魔についての形式も何もない語結合の連続」で構成され、読者の関心を引く力はないと結論付けた。

このように『機械と狼』の発表を契機としてピリニャーク作品の評価は著しく低下したが、その原因は作家が用いたアンチ・テクストの手法にあるだろう。ピリニャークは古い作品の数々をマテリアルとして使用して新しい作品を作る手法を得意とした。1922年に『裸の年』が発表された当時、思想的には「反動的」ながらも形式的には前衛的なこの作品はその斬新さで文壇の話題作となった。物語の展開は動機付けを伴うことなく、語り手の恣意的な判断で進められる。そして作品で用いられる数々のエピソードは芸術的に完結されることなく、未完のまま読者に提示される傾向にある。その典型的な例として、『裸の年』の結論には「本質的にはマテリアル」という副題が記されている。

---

<sup>250</sup> Горбачев Г. На переломе // Звезда. 1926. № 1. С. 226.

『裸の年』以前の作品はその内部構造を保ったまま、本質的に組みかえられることなく引用されている。その結果、ピリニャークの作品は自己完結的ではなく流動的なものとなった。その例として、『裸の年』は断片的に『第三の首都』に引用され、『裸の年』もまた引用されるマテリアルとしてのプレ・テキストとなっている。アンチ・テキストの手法は賛否両論を呼んだが、ヴォロンスキイはその手法に現代性を認めている。

いま、散文は詩のように、そして詩は散文のように書かれている。これはパラドクスではなく、古い形式と手法が瓦解し、破滅したことを証明する事実である。古い形式に新たな感情は納まるものではない。特に、かつての、平坦で、均一化され、落ち着いたスタイルで我々が日々を描くことは難しいようだ。[中略] Б・ピリニャークは最近、長編『裸の年』を世に送り出したが、これのどこが長編だという？ 全てが破片で成り立っている。どの章も自由に組み替えることが可能だ。<sup>251</sup>

このようにヴォロンスキイは、革命後にピリニャークが使用した手法を新たなものと迎え入れている。大石雅彦の言葉を借りれば、『裸の年』は「中心も周縁も高位も低位も」<sup>252</sup> なくなったアンチ・テキストとして構成されており、当時の混とんとした時代精神を体現しているといえる。芸術学アカデミーの校長を務めた批評家のП・コーガンもピリニャークが用いた斬新な手法に注目している。評論「ボリス・ピリニャーク」（1925）でコーガンは次のように記している。

彼は書いたものをバラバラに切り裂いて、それに新しいものを付け加える。そのため彼の小説は以前に書いたものを改作したに過ぎないようなことが頻繁にある。しかし、その改作によって作品はよりよくなり、彼の新しい考え、発達した認識の新しい段階に沿うようになっている。彼は必要なものをあらゆる文学的偏見抜きに自分の作品からのみならず、他人の作品からも選んでくる。しかし、これは模倣、あるいは他人のアイデアやイメージの借用というには程遠い。そうではなく、全てが彼の必要に応じており、彼の目的に従っているのだ。こうした作業のメソッドにおいて、ピリニャークは作家と

---

<sup>251</sup>. Воронский. Искусство видеть мир. С. 359-360.

<sup>252</sup>. 大石雅彦「コスモスあるいはコーラとしての『裸の年』」232頁。

して唯一の例を成している。この意味において、彼は何と言おうか、自己流に文学の自  
足的価値、文学そのものを全く破壊してしまった。<sup>253</sup>

『裸の年』は長編小説と呼ばれてはいるが、その内部には歴史小説、詩、フォークロア、  
戯曲など、多様なジャンルの要素が取り込まれており、事実上、『裸の年』に伝統的な長編  
小説というジャンルを適用することは出来ない。

ピリニャークの創作手法は 1920 年代の文壇で熾烈な論争を巻き起こした。全体としてみ  
ると、ピリニャークの手法を評価した作家はマイノリティで、フォルマリストらが中心とな  
ってその手法を批判した。中でもトゥィニャーノフは引用を基本とする手法を真っ向から  
批判した。トゥィニャーノフによれば、ピリニャークは類まれな引用好きで、「文学におい  
て引用が行われるケースはたびたびあったが、ページ単位での引用がなされたことはなか  
った」。<sup>254</sup>そしてトゥィニャーノフは、一つのエピソードから次のエピソードへ文学的動機  
付けも無しに移行するピリニャークの構成を「破片の構成」と呼んだ。これに加えてトゥイ  
ニャーノフはピリニャークに追従する A・マルィシュキン、C・ブダンツェフ、B・リディ  
ンなどの若手作家を「大きな地すべりに釣られて転げる小さな地すべりたち」<sup>255</sup>と呼んで、  
否定的態度をとった。マルィシュキンとブダンツェフはピリニャークが編集していた文芸  
誌「円」に寄稿していた作家である。

ピリニャークが編み出した引用の手法は数多くの作家によって「引用」されていった。そ  
れによってピリニャークを大家とする傾向があったと同時に、その影響力は疑問視される  
ことも少なくはなかった。トゥィニャーノフと同様、シクロフスキイも引用と複数の「破片」  
からなるエピソードで構成するピリニャークの創作手法を「幼稚」で、斬新さはない、とし  
て退けた。

---

<sup>253</sup>. Коган. Борис Пильняк. С. 112. 補足するならば、コーガンはその後、ピリニャークの創作  
手法に対しても否定的な態度を取るようになる。コーガンの取ったピリニャーク評価について  
は下記の論文が詳しい。Елина Е. Б. Пильняк в литературной критике 1920-1930-х годов // Б.  
А. Пильняк. Исследования и материалы / Под. ред. Г.В. Краснова. Коломна, 1991. С. 89-97.

<sup>254</sup>. Тынянов. Поэтика. История литературы. С. 162.

<sup>255</sup>. Там же. С. 163.



ピリニャークが使用した形式のモダニズムはいたって表面的で、非常にコピーに適している。ピリニャーク自身、個性が薄く、深みがない。

主な手法の幼稚さが結果としてピリニャークをコピーしやすくしている。だからこそ、若手作家は容易くその手法に感染するのだと考えられる。<sup>256</sup>

ピリニャーク作品の多くは古い作品をモンタージュして作られているため、「破片」と「破片」の間には自由に引用が挿入できる隙間が生まれる。その結果、「破片の構造」は引用を行う上で都合がいいといえる。こうした仕組みでピリニャーク作品には様々な資料（統計、新聞記事、食材の値段、指令書など）も数多く引用される。こうしたピリニャークの創作をトゥイニャーノフは文学にあらず、とまで断定した。

こうしたジャンルの崩壊こそフォルマリストとピリニャークが対立した原因といえよう。1920年代の文学におけるジャンルという問題について、トゥイニャーノフは次のような見解を残している。

必要にして必須と思われた、そして思われるものは長編小説である。この問題は複雑で、中心的な問題のひとつをなしている。つまり、ジャンルの感覚が消滅したのである。[中略]ジャンルの感覚は重要である。それを抜きに言葉は共振器を取り除かれたようなものであるし、物語は計算されないまま当てもなく展開する。直裁に言おう。新しいジャンルの感覚は文学における新しさの感覚であり、思い切りのある新しさである。これぞ革命だ。他のものはすべて改革に過ぎない。<sup>257</sup>

引用が示す通り、既存のさまざまなジャンルを碎き、破片と化した無数のジャンルを張り合わせただけの手法は、フォルマリストの目には「改革」としか写らなかった。まさにフォルマリストらが欲したものは新たなジャンルの誕生であり、既存形式のモンタージュではなかったのである。

『裸の年』と同様の手法で執筆された『機械と狼』は評論家の冷笑を呼んだ。『機械と狼』は1923年から1924年にかけてピリニャークが執筆した短編小説、記事などをモンタージュ

---

<sup>256</sup>. Шкловский. Гамбургский счет. С. 263.

<sup>257</sup>. Тынянов. Поэтика. История литературы. С. 150.

ュして作られた作品で、前述のゴルバチョフは『機械と狼』を『裸の年』の幼稚な模倣作品と評価した。1925年の『新世界』誌に掲載された書評もその論調においてゴルバチョフの評論「転換期」とおおむね一致している。この書評（執筆者は不明）によれば、『機械と狼』は「前作と比べて勝るところか、劣る一方だ。いつまでも自己引用し続けてはならず、ピリニャークは別の道を探すべきであり、同じ轍を踏んではならない。リャザンからリンゴへ、リンゴからリャザンへ。さもなければ、どれほどの才能や可能性を秘めていても、作家人生は終わりを迎えるだろう」（強調は書評家——筆者注）。<sup>258</sup>実際に『機械と狼』は芸術手法の点で『裸の年』の延長線上にあり、それ以前に執筆された作品が切り絵のようにモンタージュされている。作品を構成する数々の「破片」は一つの文学作品として再統合されることなく作家の恣意的な判断で無秩序に裁断・縫合されている。そのため『機械と狼』でも連綿と続く物語性は消失し、この作品に与えられた長編小説のジャンルは名ばかりで、実際は物語や日記、記事、統計などの断片で成り立っている。その結果、この長編小説はピリニャークが1923年から1924年の間に行った執筆活動の集合体として読者の前に浮かび上がる。であればこそ、この長編小説には実に広大で包括的な副題が付されているのだろう（「コロムナの大地、狼の餌食と機械、黒パン、リャザンのリンゴ、ロシア、ラッセーヤ、ルーシ、モスクワと革命、人間、共産主義者と占い師、イワン・アレクサンドロヴィチ・ニポームニャシチイの統計、その他もろもろについて1923年から1924年にかけて執筆された本」）。この作品もまたピリニャークが革命後に手がけたアンチ・テクストの系譜に連なっているが、その作品世界が当時の読者を魅了することはなく、『機械と狼』は「ピリニャーク流」の挫折として認識された。

『機械と狼』の発表と共に作家の評価は著しく低下した。その例として、『<sup>コムソモール</sup>青年団の真実』紙（1927年2月20日）に掲載されたC・ベルコーヴィチの記事「読者についてのメモ——若者と文学」が興味深い。この記事でジャーナリストはソビエト作家と大衆読者の関係について興味深い証言を残している。ベルコーヴィチは公共図書館で一般読者による様々な作家の作品取り寄せ回数などの統計を利用し、大衆読者とピリニャークの関係を次のように評価している。

---

<sup>258</sup> Брюс. Бор. Пильняк. «Машины и Волки». ГИЗ. ЛНГ. 1925. [рец.] // Новый мир. 1925. № 11. С. 147.

ピリニャークの愛読家を探し出すのは難しい。作品集『死なるものが誘う』はまだ歯が立ったが、『機械と狼』となるともうお手上げで、この作品を読んだ読者にもう一度ピリニャークの作品を勧める図書館員はいない。一般的に労働者階級の読者（それは若者の労働者にも当てはまる）は細々と入り組んだ不明確極まりない本を読んだりはしない。明快さ（単純という意味ではない）は労働者階級の読者が何よりもまず重宝する長所である。<sup>259</sup>

このように、『機械と狼』はピリニャーク作品から大衆読者を引き離す契機になった作品という評価が定着した。「モスクワタ刊」紙に掲載された書評も同様の論調である（「ピリニャークは脳みそをかき回しでもしない限り理解できない」）。<sup>260</sup>『機械と狼』はピリニャークの作家人生に訪れた危機として理解されたが、あるいはピリニャークも創作手法に対する批判を予想していたかもしれない。作品の序文でピリニャークはアンチ・テキストの創作手法を以下の通り擁護している。

私の作品は私と同じくでたらめである。新しい作品を書くとき、私はまず古い作品をマテリアルとして持ち出し、それを破壊し、そこからより良いものを作ろうと努力する。私には自分の作品よりもいまの自分が主張したいもののほうが大事である。古い作品が役に立つならば、私はそれを犠牲にする。私の仕事的大事ではなく、私「たち」が行うことが大事であり、私「たち」を精算するのは時期早々だ。我々の作品の<sup>ソボルノスチ</sup>総和主義が重要なのであり（これまでも、いまも、これからも）、私はベールイとブーニンから生まれた作家で、あたりを見渡せば私より面白い作品を書く作家はいくらでもいる。そしてそういう優れた作品なり、私がよりよくできるようなものを借用して改作する権利があると考えます。私から何が残るかはあまり重要ではない。しかし、我々にはロシア文学を<sup>ソボルノ</sup>総和的にする使命があり、それは偉大な義務である。(II:8)

このようにピリニャークはロシア文学を「総和的」に発展させていく必要性を説いた。ロシア語の「ソボル」（集い）から派生した用語の「<sup>ソボルノスチ</sup>総和主義」は十九世紀スラヴ派を代表す

---

<sup>259</sup>. Комсомольская правда. 20. 02. 1927.

<sup>260</sup>. Вечерняя Москва. 16. 04. 1927.

る思想家 A・ホミャコフが説いた神学思想の概念で、西欧的個人主義のアンチテーゼとして機能してきたものである。思想家 C・レヴィーツキイはホミャコフが用いた「ソボールノスチ」の概念を次のように説明している。

ホミャコフが説いたのは総和主義であって、集団主義ではない。カトリシズムでは統一が自由を支配し、プロテスタントでは自由が統一を支配しているが、正教は統一と自由の総合である、という。[中略] この総合を表現するのに、彼は「ソボールノスチ」という概念を用いる。これはほかの外国語で正確に翻訳できない言葉だが、この概念のなかでは、精神の内的集中と、教会における統一性とが融合している。<sup>261</sup>

これまで見てきた通り、ピリニャークの文化観、宗教観は土着的なもので、作家が用いた「総和主義」はロシア正教会本来の宗教的解釈からは程遠い。しかし、作家はここで「総和的」というロシア精神世界の概念をあえて導入することで、「個人的」な文学作品の作者性を否定し、作者の枠を超えて生まれてくる「総和的」な文学作品を志向するものとして『機械と狼』を紹介し、手法の擁護を試みた。しかし、作家の弁明は功を奏さなかった。1920年代の半ばからピリニャークの芸術手法は数々の批判を呼び、その難解さと大衆読者層との解離性が問題視されはじめた。ベルコーヴィチをはじめとするジャーナリストの評価から明らかな通り、『機械と狼』は「明快」な小説を好む同時代の大衆読者を混乱に陥れ、作家の評価を著しく低下させる結果につながった。それと同時に、大衆読者による圧力も指摘しなくてはならない。

ソ連政府は識字率の上昇をスローガンに掲げ、初等教育に力を入れた結果、一般大衆の読者層が急速に形成され始めた。そして 1920 年代には文壇と社会的注文をテーマとした評論が紙面を賑わせるようになった。その例として、ジャーナリストのレヴィドフが執筆したコラム「単純な真実——門外漢の目線で」（1925）が興味深い。ここでレヴィドフはベールイとピリニャークに代表されるモダニズム文学に牙をむき、歯に布着せぬ調子でその作品を批判している。

---

<sup>261</sup> セルゲイ・レヴィーツキイ（高野雅之訳）『ロシア精神史』早稲田大学出版部、1994 年、62 頁。

腹立たしいのはピリニャークだけではない。純文学そのものが腹立たしいのだ。登場人物をでっち上げて、生きた人間である私に読ませ、興味を持てという。しかし、私の話は聞いてくれたらうか。どういう登場人物が面白いのか、何を書いてほしいのか、どんなストーリーが面白いのか。私の注文は受けてくれたらうか。注文通りに働いているか。(強調はレヴィドフ——筆者注)<sup>262</sup>

このコラムでジャーナリストは難解を極める当時の純文学に価値を認めず、大衆小説を積極的に発達させる必要性を説いている。レヴィドフは次のように続けている。

私の注文は単純明快——だれでも知っている。小説が休日の読み物として息抜きになってくれればよい。これが第一。

はたして文学は私を教育できるような代物だろうか。まあ、はなはだ怪しい。そんな時代はとうの昔に過ぎ去った。いまは教科書があればそれで十分。それに人生そのものが先生で、しっかりと生きていればそれで十分勉強できるものだ。

ベールイがピリニャーク、リベジンスキーと手を組んで私に何を教えようというのか。暇つぶしにもならないし、フィクションで楽しませるでもない。奇天烈なSFで度肝を抜くでもない。あるいは、そんな力もないのか。<sup>263</sup>

レヴィドフは皮肉を込めてモダニズム文学を批判し、指導者然としたインテリゲンツィヤに牙をむいた。すでに「民衆とインテリゲンツィヤ」の解離性が説かれていた時代ではなく、「大衆」が誕生しつつあったが、その大衆とは社会的使命感に燃えるインテリゲンツィヤの精神には見向きもしない新しい読者層であった。

読者層の変化は作家たちの意識にも影響を与えたに違いない。『機械と狼』が読者離れを引き起こした状況はすでに見た通りだが、作家は逆行した歴史哲学からしばし身を置いて、現代的テーマに着手したことも確かである。ピリニャークの作品に生じた変化は評論家の目にも留まった。その例として「青年団の真実」紙(1925年10月14日)に掲載された書

---

<sup>262</sup>. Левидов Мих. Простые истины: Сторонний взгляд // Вечерняя Москва. 31. 03. 1925.

<sup>263</sup>. Там же.

評が興味深い。執筆者の H・ユルギンは『機械と狼』に生じた作風の変化を次のように評価している。

この本をピリニャークがそれまでに書いた作品（『裸の年』、『第三の首都』など）と比較すると、『機械と狼』ですぐさま目に飛び込んでくるのはピリニャークが急に舵を切ってプロレタリアートが十月革命で担った役割を認め始めていることである。

この作品でピリニャークは「プロレタリアートのロマンチズム」について少なからず紙片を割いているが、このプロレタリアートはロシアで機械のための革命、機械による人間の解放、野蛮で組織されていない「狼の」ロシアが計画的に組織された機械のロシアに交代されていく。（強調はユルギン——筆者注）<sup>264</sup>

ユルギンが指摘した通り、『機械と狼』は現代性を扱った大作で、その主要なテーマは戦後の復興政策として採用された新経済政策（NEP）とプロレタリアートの誕生である。

周知のとおり、戦時共産主義下のロシアでは工場などが国有化されるほか、農業面では食料割合徴発制が採用され、食料の供出が義務化された。しかし、1921 年 3 月に開催された第十回ロシア共産党大会では食糧徴発制に代わって現物税が導入され、現物税納入後に残った余剰生産物の自由な商取引が許可された。こうしてソ連では戦時共産主義から一転して自由主義経済がとられ、それは「新経済政策」と呼ばれた。産業面でも企業の私有化が限定的に認められ、国内経済は戦後の荒廃から徐々に立ち直っていった。当時の社会ではネップマンという、いわば「成金」が続々と登場、巷で幅を利かせたネップマンが文学作品でも描かれるようになった。その例として、「青年団の真実」紙には「ブルガーコフがネップに取り掛かる（ワフタンゴフ・スタジオの「ゾーヤのアパート」）」という記事が掲載されている。<sup>265</sup>この中で記者は新作を酷評したが、それでもなおブルガーコフが革命後の内戦を取り扱った戯曲「トゥルビン家の人々」（1925）の後にネップを主題とする戯曲執筆にとりかかったのは象徴的である。そしてネップ期はピリニャークにとってもロシア史の転換点として映った。

---

<sup>264</sup>. Юргин Н. Бор. Пильняк. Машины и волки [рец.] // Комсомольская правда. 14. 10. 1925.

<sup>265</sup>. Уриэль. Булгаков взялся за нэп («Зойкина квартира» в студии им. Вахтангова) // Комсомольская правда. 13. 11. 1926.

### 3-2. 「機械」と「狼」の間で

『機械と狼』はプリニャークが1923年にイギリスを訪問した後に執筆され始めた作品で、訪英はその作品世界に強い影響を与えた。1924年に作家は文集『文学と自分について作家が語る』に日記の一部を発表した。日記には訪英を終えて帰国した時の心境がつづられているが、そこには「ピョートル以前のルーシ」に対する憧憬の念はみじんも感じられない。日記には次のように書かれている。

ロシアを愛する気持ちは大いなる悲しみに満ちている。この国では教会の鐘楼が工場の代わりなのだ。神の畜生が鐘楼を天国に持ち帰ればいいものを。ダドン皇帝<sup>266</sup>が統治した時代と変わらぬ鐘楼が胸騒ぎを起こす。あたりに立ち込める静寂から背筋がぞくぞくする。悪魔の畜生め。ロシアよ、機械音で鳴り響け！(Пильняк 1994: 478)

訪英はプリニャークの革命観に新たな視座をもたらした。作家は静寂におおわれた中世ロシアの美学に背を向け、より現代的な視座を獲得する必要を痛感した。日記を開いて別の頁に目を転じると、作家は『機械と狼』の執筆を決意した経緯を次のように記している。

訪英後、私の中で初めて野原、農民、ポリシェビキの革命ではなく、共産主義、労働者、機械の革命が「鳴り響いた」。それは工場や都市・郊外労働者の革命、機械と鋼鉄の革命だ。いままで私は「草原の花」、アザミ、その命、開花を歌ってきたが、これからはその花よりも機械の花を歌いたい。私の長編小説は以前のような調べではなく、煤と油にまみれるだろう。これは都市と機械の革命だ。(Пильняк 1994: 480)

ここでプリニャークは「共産主義」を持ち出しているが、それはマルクス＝レーニン主義で理解される体系的な理念ではなく、西欧文明、都市、機械のシノニムとして用いられていると考えられる。プリニャークは転向の誤解を避けるべく、ロシア共産党への懐疑的姿勢を強調し、同伴者作家としての立場を明確にしている。

---

<sup>266</sup> ダドンはプーシキンの民話『黄金鶏』（1834）に登場する架空の皇帝。作品の舞台は中世ロシアで、神話的空間。

私は共産主義者ではない。だからこそ、共産主義者であるべしとか、共産主義風に作品を書けというたぐいの命令は受け入れない。ロシアの共産主義権力は共産主義者の意思ではなくロシアの歴史的運命によって成立したのであり、私はただこのロシアの歴史的運命を追いたいからこそ共産主義者に協力する（自己流で、私の良心と良識が示唆する範囲内で）。つまり、共産主義者がロシアとともにある限り、私は彼らとともにある……ありていにいえば、ロシア共産党の運命は私にとってどうでもよく、ロシアの運命こそが重要なのだ。ロシア共産党は私の中でロシア史を彩る一時の過程に過ぎない。（Пильняк 1994:481-482）。

このように、ピリニャークは『機械と狼』執筆当時もなお共産党への中立姿勢は変えていなかった。創作の基礎にあったのはイデオロギーとしての共産主義ではなく、祖国ロシアへの信仰であり、ピリニャークはその大地に生きることをロシア作家の使命と認識していた。つまり作家はプロレタリア作家に「転向」したのではなく、高度に文明化された大英帝国訪問を通して十月革命の可能性を労働者（「機械」）の視座から分析する必要性を覚えたのだと考えられる。

興味深いことに、ピリニャーク作品の中でスキタイ主義の革命的ロマンチズムは徐々に風化していった。以下に引用する『機械と狼』の一節は作家の革命観に生じた変化を端的に示している。

五月が訪れ、過ぎていく……  
六月が訪れ、過ぎていく……  
九月が訪れ、過ぎていく……  
十月が訪れ、過ぎていく！……(II: 146)

この文脈で「十月」はロシア革命を象徴しているが、上記の例で作家はその興奮が風化したことを示唆している。作家は1921年の小説『吹雪』を「革命は続く」という言葉で閉じたが、『機械と狼』の中で始原力としての革命、革命の吹雪は過ぎ去って行った。そしてピリニャークは革命の吹雪が過ぎ去ったあとのロシアに「ネップ」という歴史の新たな表情を認めたのである。『機械と狼』の中で、作家はネップ期のロシアで生じた変化を次のように記している。



ロシアにはいま二つの勢力しかない。それは俗物と共産主義者だ。誰が勝利を収めるのか。俗物が勝利すれば、ロシアは破滅する。しかし、ネップがやってきた。ネップは共産主義者でも、俗物でもない。ネップは実際的な勘定で、脇の下から足は生えてこないことを国家がいい加減に悟った結果である。(II:212)

『裸の年』で作家は旧世界の破滅を賛美したが、現実のロシアではネップという「俗物」でも「共産主義」でもない復興精神が沸き起こっていた。そして作中では復興過程の中で大きな役割を担ったプロレタリアートがクローズアップされている。

作品でピリニャークはプロレタリアートを描くことに心血を注いだ。その登場は印象的に描かれており、ピリニャークの歴史哲学とも連動している。革命の吹雪が過ぎ去ったあと、油まみれになった労働者の姿がそこに現れるのである。では実際にプロレタリアートの描写を見てみよう。ピリニャークはブロークの『十二』を想起させる、白と黒が混濁していく印象的な描写で始めている。

ロシアの革命は白い吹雪で、いや、実際には白ではなく灰色なのだが、それは兵隊が羽織るオーバーコート色をしている。この吹雪に食い込むように割り込んできたのは労働者の黒い手だった。五本の指ががっしりと握りしめられていて、その指は黒々としたスにまみれ、まるで鋼鉄から切り取ったような筋肉をしている。この機械のような腕がロシアをひつつかみ、ロシアに吹き抜ける吹雪を脇の下で抑え込んだのだ。この腕から漂うロマンをロシアで理解した者は皆無だった。誰も理解しなかったのだ——その腕はそれこそ教会、修道院、僧院、村はずれの教会、庵を不倶戴天の敵のように憎んだ。しかも、それはロシアに限らず、全世界の教会を憎んだ。この腕は——ロマンの名に懸けて、機械のように——機械が計算され、平均化され、システム化されたのと同様にノルマ化、システム化、平均化、計算し、そうして機械は太陽を追い出して電気で交代し、その機械が工場や労働者寮で作られた日常のロマンを各家庭に運び込んだが、その労働者の住まいといえは薄暗くて埃っぽく、狭苦しく、給与明細がゴミと一緒に部屋の隅や床に散らかったり、テーブルの上にあるニシンの缶詰めの下に挟まっていた。それこそが労働者だった。(II:58-59)

革命の嵐が過ぎ去った後に歴史の表舞台へ登場した民衆は鋼鉄のような腕をしたプロレタリアートであった。作家によれば、そのロマンは今まで見過ごされ、冷遇されてきた民衆の姿であった。まさにジャーナリストのユルギンが指摘した通り、ピリニャークは中世ロシアのロマンから身を引いて機械のロシアへ、プロレタリアートのロシアへと歩み寄った。

このように、訪英後のピリニャークは「機械」のロマンチズムについて語り始めたが、それでもなお作品世界にはブロークが歌った中世ロシアの美学が漂っていることも事実である。その例として、作品の中には文明破壊を賛美するスキタイ主義の衝動が依然として読み取れる。

オカ川を歩いてきたよ。人っ子一人いないオカ川の向こうには静寂が立ち込めていて、川向うには草原、地平線、林が広がっていた。これが原点で、命の源じゃないかな。町を作るんじゃない。どうやって町を壊すか、そんなことを考えよう。ライ麦のように、森のように、何気なく私は生きたいよ。(II:115).

ピリニャークはネップ期のロシアに誕生したプロレタリアートに長編小説を捧げつつも、プロレタリアートそのものに対する態度は複雑で、一概に肯定的とは評価できない。上記の引用が示す通り、作品にはプロレタリアートによる新しいロシアの建設精神と並んで、スキタイ主義に特徴的な文明破壊のロマンチズムも流れている。さらに言えば、作家はプロレタリアートの誕生をロシア史の必然と認識しているものの、そのロマンチズムは「美しいマリア」の美学に反するものである。その「美しいマリア」はブロークが歌った「美しい婦人」であり、『裸の年』で賛美した「ピョートル以前のルーシ」であり、マリアという女性に代表される、中世ロシアの母権中心文化である。

私にはわかっているよ。ロシアとはつまりマリアなんだ。ほら、ここにすやすやと寝息をたてている女のことさ。幸い、女のもとまで機械はその手を伸ばしてこなかった。さもないと、機械の野郎は彼女を工場に放り込んでしまったろうからね。機械は女の淡い道徳と倫理を食べ物にして、リンゴ色のほっぺも食べちまって、石炭を積んだトロッコを溶鉱炉に運ばせたらうよ。女はススだらけの空気を炭鉱職人の汗くさい匂いと一緒に吸って、それで炭鉱労働者は女に言い寄って、アパートに連れ込んだり、オカ川の向こうにあるシチューロフ林に連れて行っちまう。そこで女は抱かれるんだ。工場の女はみ

んなそうさ。ノミだらけのバラックで雑魚寝してるが、あれは人間の掃き溜めみたいな場所だ。炭鉱労働者が色目かけてくれるのを女の方はありがたいと思って、男と一緒にウォッカをあおって、それが人生だと思ったりするんだ。(II:120-121)

作品の中でロシアはマリアという女性によって代表されるが、機械の表象は男性性を帯びている。そして重工業化の中に作家は「美しいマリア」の穢れを予感し、その破滅を前に慟哭する。

マリア、マリア、頼むから！ お前は食べ物にされてしまう！ お前だけが私に残されたロシアなんだ。おいで、こっちにおいで。さあ、抱きしめてあげよう！ おいで！  
(II:129)

作家にとってリンゴ色のほっぺをしたマリアは中世ロシアを象徴している。しかし、マリアは作家のロマン主義的なロシア観に嫌気が差し、その手を離れていく。

バカばかりいうんだから。工場ではさも人殺しがまかり通ってるみたいに。それにあたしは誰とでも寝る女だと思ってるんでしょ。顔に書いてあるわ。でも、工場には勤めますからね。掃除婦だっていいや、雇ってもらおう。何が悲しくて、馬の世話をしなくちゃならないんだか！ (II:122)

このようにピリニャークにとって「美しいマリア」は母権中心的なロシアの象徴である。そして作家は長編小説を「機械」のロマンチズムに捧げながらも、その機械と「美しいマリア」の共生を不可能と考えている。

時代は重工業化を急ぎ、ピリニャークの歴史観は孤立を深めた。そして作家は「ロシアの歴史的運命」によって機械を賛美する必要に駆られていたが、その心象風景を占めていたのは中世ロシアのロマンチズムであり、作家が描いたプロレタリアートのロマンは仮初のものであったに違いない。

ピリニャーク作品には理性と本能、西洋と東洋、機械と狼の二項対立が顕著で、作家はこの両極の間を振り子のように揺れ動いたが、作家の審美観は後者のほうにあったといえる。沼野恭子は「機械」と「狼」をめぐる作家の葛藤を次のように評価している。

ピリニャークが理想とする人間は、たしかな本能をたよりに、たくましく生きて子孫を残す「自然児」である。思索することよりも行動することを好み、近代文明の「機械」になるよりは「狼」のままでいることを望む人間である。<sup>267</sup>

ピリニャークの歩み方は決して平坦ではなく、深い葛藤を伴うものであった。その葛藤を象徴する会話がこの小説にはある。以下の引用は技師コザウーロフと作者ピリニャークの会話である。コザウーロフと作家はとある動物園を訪れるが、そこには狼が檻に入れられている。作家は狼の始原力に魅了され、その中に十月革命のロマンを認めているが、技師のコザウーロフにとってはロシア民族の野蛮さを象徴するものでしかない。

ともにいた技師コザウーロフは狼の檻を前にして言った。

——いやあ、ひどい！ 狼を見てますとね、思うんですよ。あたしらの野蛮さ、つまりロシアのって意味ですがね。そいつは狼からきてるんじゃないかってね。こんなロクデナシどもは動物園にぶち込んじゃうのがいいんだ。

私は思った。

「しかし私は、——私は狼を見ていると哀れで仕方がない。狼の中にこそ我々のロマンが、革命の全てが、ラージンの全てがあるというのに。哀れだ。狼が閉じ込められている！ 狼は放たねばならない——自由へ——18 年を忘れてはならない」

私は言った。

「我々の革命は狼とおなじ始原力なのです」(II:108)

このように「狼」はピリニャークの革命観を代弁している。しかし、機械は狼を檻に放り込み、その始原力を飼い慣らしてしまう。檻に入れられた狼はもはや機械でしかなかった。『機械と狼』には次のような描写が見られる。

薄暗く照らされた部屋の隅には鋼鉄の檻がある。そこには狼がいた。それは小ぶりの狼で、年老いて耄碌していた。檻は小さかった。そして狼は檻の中を駆け回っていた。狼は檻を知り尽くしていた。狼はその中を回り、自分の後を追いかけて、一步一步踏み出し

---

<sup>267</sup> 沼野恭子『夢のありか：「未来の後」のロシア文学』18 頁。

ていた。その動きは単調だった。それは生き物ではなく、**機械**のようだった。(II:107、強調はピリニャーク)

NEP の始まりとともに始原力のロマンチズムは機械によって克服され、ロシアの精神文化は機械化し、それはソビエト文明の夜明けを感じさせるものであった。マリアのために機械を捨てるべきか、機械のためにマリアを捨てるべきか、作家の葛藤とは裏腹にロシアは重工業化の道を突き進んだ。それと連動してロシアの民衆も変容していく。『裸の年』で始原力と共生する農民は西欧文明へのアンチテーゼとして理想化されたが、革命の吹雪が過ぎ去ったあとの農民はピリニャークが描いた「民衆」とはかけ離れていた。現実の農民は狼に宿る始原力を看過し、そのロマンチズムを足蹴にする。作品の中では農民による狼狩りが描かれているが、その様子は中世ロシアを志向する作家の美学を根底から覆す。

「撃ったか？ 殺ったか？ 逃げらっしゃか？」——「なあ、一服すんべ！」——「おらの帽子はどこさいだ？」——そして茂みの中から獵師が狼を引きずり出してくる。百姓は背筋も凍る形相だった。ひげ面の男に、兵隊風にひげをそった男、老若男女、羊の毛皮を着たもの、毛皮のブーツをはいたもの、草履をはいたもの、素足のものもいて、土地のものたちは撃ち殺された狼さながら犬歯をむき出して、理由もなく残虐に腹いせをする。殺された狼を殴り、鼻づらを蹴り上げ、脇を蹴飛ばし、しっぽの付け根を蹴飛ばし、唾を吐きつける。「うーうーうー、ぶぁああけもんめえ！ うー、畜生めえ、うーうーうー、えらそうな顔しやがってえ、うーうーうー、このろおくでなしいい！」(II:57、強調はピリニャーク——筆者注)

ピリニャークが理想化した民衆は蓋を開けてみれば野蛮な人間たちの集まりでしかなかった。その人間たちは革命のロマンチズムが結晶した狼を狩り、残虐になぶり殺す。もはや『機械と狼』には革命前の文壇で喧々諤々と議論された神話的な「民衆」の姿はない。

これまで見てきた通り、ピリニャークは訪英とネップという新たなロシア史の段階を迎えて、「ピョートル以前のルーシ」が鋼鉄のロシアに生まれ変わる歴史の動きを感じ、プロレタリアートの誕生をロシア史が迎えるべき必然の過程と考えた。訪英後の作品でピリニャークが歌いだしたのは、ヨモギのにおいが立ち込める百姓小屋のロシアではなく、機械音で鳴り響くプロレタリアートのロシアである。しかし、それと同時に作家はプロレタリアー

トの「黒い腕」に「麗しいマリア」を破滅に導く文明の悪をも認めた。ブロークという時代の象徴がうたった「赤貧のロシア」に対する憧憬の念は依然として強く、作家は機械と狼の間で揺れ動いていた。まさに『機械と狼』は葛藤の文学である。ピリニャークは様々な物語や記事、統計の断片で長編小説をコラージュしたが、それは変容するロシアに対する態度を決定できない葛藤の結果だったに違いない。この長編小説の難解さは作家が抱えた葛藤の深さを示しているといえるだろう。

「機械」と「狼」、未来と過去、文明と文化、西洋と東洋の間で揺れ動く作家の葛藤を示す作品として他にあげられるのが『飛翔するロシア』(1926)というルポルタージュである。ピリニャークがこのルポルタージュを執筆したのは1925年の夏で、時期的には『機械と狼』の出版直後に当たる。作家は1925年の夏にウラル山脈付近の街(チストポリ、チェルディニ、ペルミ、ウソーリエなど)を小型飛行機で調査し、その印象を『飛翔するロシア』のタイトルで発表した。<sup>268</sup>

この作品で「飛行機」самолет は機械化、文明化を象徴しており、この作品は文明社会への熱烈な賛美として左派の文壇では歓迎された。シベリアの文壇を代表する文芸誌「シベリアの灯」にはこの作品について好意的な書評が寄せられた。そこには次のような評価がみられる。

『飛翔するロシア』は素晴らしい本である。これは新たなロシアに対する信仰の念を読者の間に育む。作家は「大地」に着地したことで、新たな力と新たな言葉を獲得したように見える。<sup>269</sup>

書評の執筆者は『飛翔するロシア』をプロレタリア作家・ピリニャークの幕開けとして評価した。また評論家のП・コーガンも『新時代』に発表した評論「ボリス・ピリニャーク」の中でこのルポルタージュをプロレタリア文学への接近として評価、「十七世紀のルーシを想う興奮は完全に葬られた」と結論付けた。<sup>270</sup>その実、『機械と狼』では西洋と東洋、機械

---

<sup>268</sup>. このルポルタージュは「イズベスチヤ」紙や「赤い処女地」(1925年、第8号)に発表されたほか、その断片は後の小説『イワン・モスクワ』に組み込まれた。

<sup>269</sup>. Россия в полете [рец.] // Сибирские огни. 1926. № 1-2. С. 240.

<sup>270</sup>. Коган. Борис Пильняк. С. 118.

と狼、ピョートル以前のルーシと鋼鉄のロシアという二項対立の構造が連綿と続いていたのに対し、『飛翔するロシア』は中世ロシアの西欧化を讃えた頌歌に他ならない。

『飛翔するロシア』は『機械と狼』と同じく、十月革命の運命を扱った作品だが、その中では分断された社会関係回復の必要性が強調されている。『飛翔するロシア』の歴史的展望は常に前進的であり、『裸の年』で支配的だった原点回帰の革命観は無縁である。ピリニャークの言葉を借りれば、フライトの目的は「この飛行機を見せて、我々が数千露里も人里離れたロシアのへき地を飛び越え、数百人の百姓、労働者、這うよりも飛ぶことを望む人々を載せてきたのだと語ること」(1926:4)であり、その背景には「トルストイとレーニンから文盲のモルドヴァ人、我々の飛行機から川辺で労働する草履姿の人々、その体に止まったノミの差の間に広がる垂直構造が数千露里も続いている、その断絶について日々喧しく議論されている」(1926:14)からにほかならない。

ルポルタージュの中でピリニャークは革命前の文壇でしきりに議論された社会の断絶状態に焦点を当て、農村を都市に、東洋を西洋に組み替える原動力を革命の本質として提示する。機械との接触を通して農民に生じた変化は次のように描かれている。

草履をはいた農民らが飛行機のキャビンに近寄ってきたが、それは素晴らしい事実だ。  
なぜかといえば、それは飛行機がここまでやってきたからであり、ロシアでは草履と飛行機が共存するからであり、ロシアでは革命が続いているからだ。(1926:6)

この例が示す通り、ピリニャークの中で「革命」はもはや「ピョートル以前のルーシ」への逆行ではなく、文明への絶え間ない前進運動を意味するようになった。ピリニャークの言葉を借りれば、「1917年という革命の夢は白昼の現実になる道を突き進む」(1926:8)。革命は機械化であり、百姓小屋の「ラッセーヤ」を鋼鉄のロシアにつくりかえることである。ピリニャークは始原力を克服した「機械」を賛美して、「飛行機は人類の天才が生んだ素晴らしく偉大な発明であり、その天才こそが夢を現実に変えた」(1926:4)と称賛した。さらにピリニャークは飛行機を「美しい鳥」と形容し、プーシキンの詩『ペスト流行時の酒盛り』をリフレインして次のように歌った。

戦いには歓喜がある      Есть упоение в бою  
飛翔にも歓喜がある！      Есть упоение в полете! (1926:20)

このように、ルポルタージュ『飛翔するロシア』には革命直後のピリニャーク作品で支配的だったスキタイ主義の影響は見られない。ブロークは評論「ヒューマニズムの瓦解」で「大衆は文明化するのは不可能なばかりか、その必要もない」と主張し、ピリニャークはその影響を強く受けて西欧文明を吹き流す革命の吹雪を追い求めたが、その吹雪が過ぎ去り、文明破壊を賛美するスキタイ主義の美学が風化したネップ期のピリニャークにとって、革命は脱西欧化を通したロシア民族文化の再興ではなく、ソビエト文明の始まりとして受容され始めたのである。ピリニャークの中でそれは同時に左翼芸術への接近にもつながる。その例としてピリニャークは労働者のミーティングに参加し、その印象を次のようにつづっている。

我々は革命を、労働者を、世界の労働者を、全世界の革命を歓迎したが、それは素晴らしい理想、文化、知識、勝利、全世界的勝利を追い求める意思だった。私はこうしたミーティングに参加するたびに、偉大な意思が普段はだらしのないロシアをその熱で溶接するのを感じる。(1926:23)

この例からも明らかな通り、ピリニャークはスキタイ主義のロマンチズムと決別し、文明化していくソ連社会へと歩み寄った。仮にロシア民族の野蛮さと、『裸の年』に登場するスキタイ人のような「人間たち」がロシアの新たな民族文化の揺籃の地としてピリニャークの目に映ったとして、機械化が急速に進むネップ期のソ連においてスキタイ主義はもはや文明社会への脅威として受容されている。ピリニャークは次のような疑問を読者に提示する。

勝利するのはだれか。鋼鉄の素晴らしい機械、人類の偉大な発明が森と動物に勝利するのか。それとも森、沼、愚民、愚者が我々を倒し、だまし抜き、沼地で足を掬い取るのか、熊を恐れ、数百露里の沼を歩いて家路につくのか。(1926:49)

そしてこの二者択一にピリニャークは決定的な答えを出す。



森林の上空を飛行していた際、私は考えた。森と我々——素晴らしい鳥——のどちらが勝つのだろう。そして勝ったのは我々だった！（1926:52）

ピリニャーク作品の中でスキタイ主義のロマンは完全に過ぎ去った。そして未来のロシアを支える「新しい人間」を蜂起する百姓や、暖房貨車で移動する人々ではなく、ピオネールの中に見出した。作家はピオネールの中に新世界を担う「新しい人間」を見出し、次のような感想を漏らしている。

フライトのキャプテン・ワフラーモフは革命の老兵で、赤軍では袖に二つの菱型階級章を受けた。ピオネールの話し方や挨拶の仕方を見ると、この老兵でさえ喉が苦しくなり、涙をこらえるのに必死になるようだ。同じことはほかの人も、そして私も経験する。（1926:27）

「新しい人間」ピオネールの様子は作家の琴線に触れる。そしてピリニャーク自身、祖国の変容に適応する必要があるのだが、ソビエト・ロシアに順応しえない旧世界としての自分が存在することも認めている。

私にはつらい。私は三十歳で十歳ではない。仮に私が十歳なら、必ずピオネールになったろうし、その騎士道精神を愛したに違いない。（1926:27-28）

このように、ソ連社会に誕生したピオネールという「新しい人間」との接触を通してピリニャークには旧世界の人間としての自意識が芽生えた。スキタイ主義は旧世界の破壊を賛美したが、自らもまた旧世界の人間であることに思い当たるのである。そしてこの意識はその後作家の脳裏にあり続け、その後の大長編小説『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』に受け継がれている（この点は追って詳述する）。

これまで見てきた通り、ピリニャークはスキタイ主義の文明破壊賛美から身を引いて「共産主義」的視座の獲得へ向けて歩みだし、その運動は『飛翔するロシア』というルポルタージュを生んだ。『機械と狼』から『飛翔するロシア』への移行は、同伴者作家からプロレタリア作家への着実な転向に他ならない。しかし、ピリニャークの中で機械のロマンチズムは長続きしなかった。作家は再び「機械」と「狼」の間を振り子のように揺れ動き、十月革

命が辿る運命の探究を自らの使命として課す。そしてその探求の過程でピリニャークのまなざしは「日出づる国」日本に向けられた。

### 3-3-1. 革命の終わりと新たな始原力の探求

1920年代後半を迎えると、革命直後から活躍した「古株」同伴者作家の危機が指摘されるようになった。すでに見たとおり、1925年の「モスクワタ刊」紙にはH・オシンスキイの評論が発表され、同伴者作家（ピリニャーク、H・ニキーチン、Bc・イワノフ等）の時代が「終わり」を迎えたと評価されていた。この関連で興味深いのがЯ・グリゴリーエフの評論『「古株」同伴者作家の危機』（1927）である。

評論の中でグリゴリーエフは「古株」同伴者作家の代表格としてピリニャークの作品を取り上げ、その作品世界に劇的な変化がみられることを指摘した。なかでもグリゴリーエフはピリニャークの短編小説『零れ落ちた時間』（1924）に着目し、同伴者文学の変化を象徴する作品として紹介した。その理由をグリゴリーエフは次のように説明している。

第一陣の同伴者作家は十人十色とはいえ、一様に変化を遂げており、その変化をより鮮明に示すような資料はまたとないだろう。ピリニャークの変化はほかの作家と比べても格段に鮮明だが、それは彼が評論家のように露骨な書き方をするからである。<sup>271</sup>

『機械と狼』と同時期に執筆された『零れ落ちた時間』は十月革命後の国内で生じた変化を取り扱った作品である。作品の中で作家はネップ期のロシアにおける存在の「息苦しさ」をこう伝える。

生活はとても緊張している。人間の脳味噌は水差しのようで、淵のぎりぎりまでしか思想をため込めない。さもないと縁から溢れてしまう。[中略] 昼間のうちに編集部へ原稿料を取りに行ったり、役所にパスポートを取りに行ったり、所得税を払いに行く日は憂鬱だ。それで一日は過ぎていく。時間は異常なまでに狭苦しく、脳味噌は水差しのようで、思想が零れ落ちないように大事にしなければいけない。(II:478)

---

<sup>271</sup>. Григорьев Я. Кризис «старых» попутчиков // На литературном посту. 1927. № 20. С. 29.

短編の中でピリニャークはネップ期の私生活を淡々と写実する。ここでは『裸の年』に登場する逃亡者アンドレイの「自由！自由！」という声が響くことはなく、その跳躍感あふれる文体も無縁である。ネップ期の日常は緻密に管理され、カオスを志向するスキタイ主義の熱狂は微塵も感じられない。

ところが、その単調な生活に転機が訪れる。戦時共産主義時代に食料を求めて暖房貨車とともに旅した「赤毛の女」から手紙を受け取るのである。<sup>272</sup>送り主「赤毛の女」は革命後に体験した出来事の数々を手紙に書き綴った。その手紙にピリニャークは深い印象を受ける。

1919 年当時、私は人知れず駆け出しの物語を書き殴り、闇市で飢えを耐え凌いでいたが、手紙を読み終えて、あの年がはるか遠い過去の話に思えた。(II:480)

ネップ期のソ連において戦時共産主義時代の興奮と混乱は過去と化したことを作家は痛感する。興味深いことに、ペトログラードのスキタイ主義が過去の現象として扱われ始めたのもまさにこのころである。「モスクワタ刊」紙に掲載された Ю・ソーボレフの記事「ブローク没後から五年」に目を転じたい。

この中でソーボレフはブロークの作品世界が文壇で影響力を失いつつある状況を指摘した。ソーボレフは評論を「ブロークの死からわずか五年が過ぎただけである。しかし、ブロークはすでに過去と化した」<sup>273</sup>という文章で始めている。ソーボレフは『十二』や『スキタイ人』を取り上げて詩人のスキタイ主義的革命観を読者に紹介、その短命を指摘している。ソーボレフの言葉を借りれば、「嵐が過ぎ去り、始原力が日常の労働に吸い取られると、ブロークに（革命の音楽——筆者注）は聞こえなくなってしまった」。<sup>274</sup>そしてソーボレフは評論を次の文章で閉じている。

---

<sup>272</sup>. ピリニャークの自伝によれば、1917 年から 1920 年の間に作家はロシアやウクライナ、カフカス各地を放浪して糊口をしのいだとされる。Подр. см.: Пильняк Б. Писатели о себе. Новая русская книга. 1922. №. 2. С. 42-43.

<sup>273</sup>. Соболев Ю. Посмертный Блок – пятилетие со дня смерти // Вечерняя Москва. 07. 08. 1926.

<sup>274</sup>. Там же.

ブローク最期の日々は実に悲惨だった。しかし、その悲劇はブローク個人の悲劇でしかない。新たな時代が訪れようとする、二つの世界に足をまたいだこの目覚ましい人間の中に存在する空虚さが口を開き、彼はこの世で生きる意志を見いだせなかった。抒情的な詩情は勇壮な叙事詩に生まれ変わらなかったのだ。我々はもはやブロークを同時代人として体感することはない。ブロークはもはや過去である。<sup>275</sup>

詩人の死から五年が経ち、ソーボレフはブロークのスキタイ主義を過去の現象として扱った。時代は旧世界の終わりを賛美するスキタイ主義ではなく、新世界を歌う勇壮な叙事詩を求める時代に移行しており、ブロークの革命観（「全身、全霊、全意識で革命を聴け」）は急速に影響力を失っていった。ピリニャークの革命観に関しても、『零れ落ちた時間』や『飛翔するロシア』が示す通り、その作品世界からは「吹雪」や「赤貧のロシア」など、ブローク作品から借用された表象は後景に沈み、革命の興奮は着実に冷めていった。

ピリニャーク作品に生じた変化はヴォロンスキイの目にもとまった。ヴォロンスキイが率いた作家集団の<sup>ベレフル</sup>峠派は「ゲルツェンの家」で文学の夕べ（1925年12月9日）を開催し、この席でヴォロンスキイは評論「我々の文学に足りないもの」（初出は「赤い処女地」誌、1925年、第10号）を発表、その評論に関してГ・ニキーフォロフ、С・マラーシキン、Л・アヴェルバフ、Б・グーベルらが討論者として参加した（この夕べについては翌日の「モスクワタ刊」紙に記事が掲載）。評論の中でヴォロンスキイはネップ期のソビエト文学に生じた劇的な変化を次のように評価している。

1922年から1923年の間に書かれた作品を取り上げ、それをいまの出版物と比較すると、その差は目覚ましい。革命のロマンチズムや熱狂が減少し、高揚感よりも幾分冷静な描写が勝り、新たな道を探求する姿勢が歴然としている。<sup>276</sup>

ヴォロンスキイによれば、1920年代の半ばに十月革命と内戦の主題は後退し、作品の文体は「無味乾燥」なものになっていったのと同時に、新たな主題探しが始まった。事実、ピリニャークが1920年代半ばに発表した作品の多くは十月革命ではなく、海外の題材をもと

---

<sup>275</sup>. Там же.

<sup>276</sup>. Воронский А. О том, чего у нас нет // Красная Новь. 1925. Кн. 10. С. 256.

に執筆されている。そのため作家は題材を求めて世界中を駆け回っている、という評価を受けるに至った。その例として、ピリニャークはギリシャを旅行し、帰国後に短編小説『グレゴ・トリムンタン』（1925）を発表、エーゲ海に生きるロシア人船乗りたちの恋愛と悲劇を豊かな抒情性で歌ったが、左派の H・ファートフはこの作品を「テーマ的に偶然のもので、B・ピリニャークがすでに何を書くべきか知らないことの証左である」と切り捨てた。<sup>277</sup> こうした評価の例は枚挙に暇がないが、もう一つ例を挙げよう。

ピリニャークは日本滞在を終えて帰国後の 1927 年に作品集『零れ落ちた時間』を出版した。この作品集には革命前後に執筆された作品のほか、海外の題材をもとに執筆されたものも多数収められている。この作品集について書評を書いた 3・シュテインマンはピリニャークの遍歴を揶揄している。

『零れ落ちた時間』は本物の傑作で、読者を興奮させる力がある。しかし、この作品集には焦眉の現代的な生きたテーマの勘を失った作家の悲劇が如実にあらわれている。

主題を求めて作家は日本から北極へ、ロシアの雪原から灼熱のパレスチナへと駆け抜ける。作家に必要なのは人間について物語るためのエキゾチックなトランポリンである。<sup>278</sup>

『機械と狼』の発表後、ピリニャークは海外の題材を主題とした作品を次々と発表した結果、評論家の目には十月革命の主題を失った作家が題材を探し求めているように映った。確かにピリニャークはソ連を離れる機会が増えたが、それは題材探しというよりも、始原力の探求であり、「機械」と「狼」、東洋と西洋の間を振り子のように揺れ動く探求へと回帰していったとヴォロンスキイは考えた。ヴォロンスキイはピリニャークの葛藤を次のように評価している。

彼は機械を狼の上位において、その優位性を教師風に説教する始末だが、それでもなお題材の観察者、収集者としての彼は以前よりも強さを増している。[中略] そしてピリニャークの文体はより無味乾燥なものとなった。彼には新たな充電期間が必要だが、そ

---

<sup>277</sup>. Фатов Н.Н. Лицо наших журналов // На литературном посту. 1926. № 2. С. 51.

<sup>278</sup>. Штейнман З. «Расплеснутое время» [рец.] // Звезда. 1927. № 10. С. 137.

れは彼の理性が機械の方へ傾いたからである。しかし、彼の心情は相変わらず狼や吹雪とともにあり、狼を描く筆致は機械よりも優れている。<sup>279</sup>

『飛翔するロシア』が示した通り、理性でピリニャークは機械を賛美した。しかし、その心情は狼とともにあり、作家の審美観は依然として「ピョートル以前のルーシ」を志向しているとヴォロンスキイは考えた。時代は重工業化を急ぎ、その流れに逆行することは難しく、一世を風靡した同伴者作家はプロレタリア作家に転向したかに見えた。そして作家は機械に征服された狼の始原力を描き、『飛翔するロシア』で作はピオネールに代表されるソ連の「新しい人間」に賛辞を送ったが、ピリニャークの始原力を探求する試みはそれで終わりを迎えたわけではない。ヴォロンスキイは続けて次のように書いている。

彼は農民や地方の人々から離れ、イギリスや船乗り、飛行機乗り、トルコ人についての小説やルポルタージュを書く。『裸の年』のロマンチズムは過ぎ去ったが、いつものピリニャーク節で、「狼」の生理学に立脚した独自の文化論を喧伝するにはもう一度世界を見つめなおす必要があった。だからこそ、ピリニャークは船に乗り、旅に出て小説を書くのだ。<sup>280</sup>

ヴォロンスキイはピリニャークの海外作品に新たな「狼」のロマンチズムを探求する志向を認めた。つまり、ピリニャークが世界を遍歴したのは「狼」のロマンチズムから身を引くためではなく、反対にその積極的な探求のなせる業と考えた。

ヴォロンスキイのピリニャーク論は反響を呼んだ。前述のグリゴリエフは評論『『古株』の同伴者作家の危機』の中でヴォロンスキイの評価に疑義を呈した。

「腕白の年」（『裸の年』の挿絵——筆者注）と「狼」は作家にとって遠い過去の話であり、「ピリニャークの心は相変わらず狼や吹雪とともにあり、狼を描くタッチは機械よりも優れている」というヴォロンスキイの主張は不当なものだ。我々としてヴォロンスキイのいわんとすることはわからないでもない。彼にはピリニャークの変化が気に入ら

---

<sup>279</sup>. Воронский. О том, чего у нас нет. С. 256.

<sup>280</sup>. Там же.

ず、1920 年から 1922 年当時のピリニャークであってほしいと望んでいるのだ。しかし、実際の作品はそれとは真逆のことを証明している。<sup>281</sup>

このように、ピリニャークが発表した海外ものは相反する評価を呼んだ。ピリニャークの探求は複雑で紆余曲折を経たが、それでもなおヴォロンスキイの評価には賛同できる点が多い。ピリニャークの場合、ソ連国内の問題を扱った作品が重視されるあまり、作家が残した数々の紀行文は忘失されている感がある。しかし、そうした作品を紐解くと、「機械」と「狼」をめぐる作家の弁証法が継承されていることに気が付かされる。

十月革命に対する新たな視座を探求する過程で、ピリニャークの目はロシアと同じく遅れて近代化を果たし、列強として成長していた日本に向けられた。ピリニャークが 1926 年に日本を訪れた際に執筆した『日本印象記』を紐解くと、そこには飽くなき始原力の探求が見て取れる。作家は日本という東洋の中に始原力の源泉を認め、再びスキタイ主義のロマンチズムに身をゆだねるのである。まずは作家の日本滞在の概要を俯瞰したい。

### 3-3-2. 始原力の探求と『日本印象記』

日本がピリニャークの関心を呼んだのは干渉戦争の記憶が新しい 1922 年の頃であった。革命後のソ連社会では『西洋の没落』が広く親しまれ、シュペングラーの文明論は文壇にも大きな影響を与えたが、「西洋の没落」は同時に「東洋の夜明け」を引き起こすであろうと考えられていた。<sup>282</sup>時を同じくして、ピリニャークも日本に着目した。ピリニャークの小説『第三の首都』（1922）では日本の産業化に対する関心が認められる。

西欧には無数の墓標が立っている。西欧の歴史を思い起こせば、ロンドン、ローマ、パリには生きた人間よりも死者の骨のほう圧倒的に多い——しかし、二千年間にわたって西欧が世界の覇権を握っていたが、世界文化の中心が初めて西欧を離れ、アメリカ、黄色人種の日本人の手に渡ったのだ。(II: 289)

---

<sup>281</sup>. Григорьев. Кризис «старых» попутчиков. С. 30.

<sup>282</sup>. バールィシェフ「第一次世界大戦における日露接近の背景：文明論を中心として」217 頁。

その後、日本のテーマは作家の脳裏にあり続けたようである。1926年にピリニャークは日本に三か月滞在し、その間に『日本印象記』（原文では『日本の太陽の根』）、『鹿の町——奈良』、『物語がいかにつくられるかの物語』を執筆した。帰国後はモスクワの政治史博物館で聴衆を前に訪日の感想を語ったとされる。<sup>283</sup>一方、日本の文壇もピリニャークに対して無関心ではなかった。ピリニャークの来日までに『スマイレ』、『彼らが生のひととし』、『裸の年』の邦訳が新潮社から出版されており、その名はロシア文学愛好家の間で人口に膾炙していた。

ピリニャークはマールイ劇場の女優で妻のオリガ・シチェルビノフスカヤと中国、朝鮮を経由して下関に到着した。日本側でピリニャークの受け入れ態勢を組織したのは日ソ国交樹立後に設立された日露芸術協会、昇曙夢や秋田雨雀、米川正夫らがピリニャークを世話していた。日本滞在中にピリニャークは通訳を連れ立って信州、奈良、大阪を旅行したが、いずれの体験も『日本印象記』の題材となっている。滞在中、ピリニャークは特別高等警察の厳重な監視下に置かれていたため、「イヌ」の尾行・追跡に手を焼いたが、小山内薫をはじめとする文化人と知己を得た。中でも秋田との親睦は深かった。<sup>284</sup>東京へ到着したのが3月17日、東京を離れたのが5月25日のことで、その両日とも秋田が送迎に東京駅まで足を運び、別れ際には和歌を贈っている。

#### そよ風よ

---

<sup>283</sup> ピリニャークの講演会に関する記事はレニングラードの週刊誌「交代」<sup>スメーナ</sup>に掲載。記事そのものは作家の「近眼的」日本観を批判している。*Воронцова Л. Япония глазами Пильняка // Смена*. 01. 12. 1926.

<sup>284</sup> その後、1927年に秋田雨雀は全ソ対外文化連絡協会 ВООС の招へいでロシア革命十周年記念祝典に出席するため訪露するが、秋田と通訳の鳴海完造（東京外国語大学ロシア語学科出身）を乗せた列車が到着するモスクワのヤロスラヴリ駅まで迎えに出たのがピリニャーク夫婦であった。両作家の写真は「モスクワタ刊」（10月17日）に掲載されている。秋田の滞在中、ピリニャークは「ゲルツェンの家」で秋田、米川正夫を主賓に迎えて日本文学の夕べを開催している。しかし、その後、無政府主義者ピリニャークとプロレタリア作家秋田雨雀は思想上の食い違いから決別している。秋田雨雀とピリニャークの関係については次の文献が詳しい。中村喜和『ロシアの風——日露交流二百年を旅する』風行社、2001年、17-23頁。



平安を送れ  
まろうどの  
ピリニャークのゆく  
船の真上を  
ピリニャーク  
オリガのゆく日  
雨そぞろ<sup>285</sup>

秋田のほか、米川正夫とピリニャークの関係もまた日本の文化史に重要な足跡を残している。両氏は 1926 年に日本で面識を得た際に意気投合し、深い交流を続けた。その交流の深さを示すエピソードとして、1926 年に米川は問題作『消されない月の物語』の翻訳を本人から提案されている。<sup>286</sup>そして米川は政治的影響を恐れることなく、1933 年に春陽堂から『北極の記録』、『狼の掟』、『スペランザ』といったピリニャークの名作とともに『消されない月の物語』の邦訳を世に送り出した。また、1928 年に米川は秋田雨雀、小山内薫、尾瀬敬止らとともに革命十周年祝典にソ連の国賓としてモスクワを訪れ、ピリニャークとの再会を果たした。そこで米川はピリニャークの誘いで全露作家同盟が主催した日本文学の夕べに出席し、ロシア文学が日本に与えた影響をテーマに講演している。そして帰国の際、米川はピリニャークの息子アナトーリー（当時八歳）を養子に迎えて日本へ連れ帰り、1932 年にピリニャークが再度来日した際は、米川の妹・文子をソ連に連れて帰り、両氏は親戚同然の付き合いを始めた。帰国後のアナトーリーは父親の粛清と長期の日本滞在が災いしてスパイ容疑で逮捕、強制収容所に収監されたが、一方の文子は半年間ほどピリニャークの自宅で暮らし、モスクワやレニングラードで琴や三絃の演奏会をしていたという（その後、文子は自身のソ連滞在についてエッセイを発表している）。

このように、ピリニャークは戦間期の日本に確かな足跡を残した作家だが、その来日は忘れられてしまった感がある。その理由の一つに、ピリニャークと交流した日本の文化人は左派が中心であったことが挙げられるだろう。1920 年代後半のソ連で文化統制が激しさを増す中、文壇では宗教裁判さながらピリニャーク批判の記事が矢継ぎ早に発表されたが、日本

---

<sup>285</sup> 中村喜和『ロシアの風——日露交流二百年を旅する』18 頁。

<sup>286</sup> 米川正夫『鈍・根・才 米川正夫自伝』日本図書センター、1997 年、133 頁。

の文壇でもソ連に追従する傾向が見られた。そのため、ピリニャークの足跡は今日の日露文化交流史でも忘れられているのが現状である。そこでここからは『日本印象記』に関する議論を俯瞰し、その背景に迫りたい。

日ソの国交が樹立されたのは 1925 年のことで、両国間の正式な文化交流は未開拓の段階にあり、帝政ロシアの作家が日本に身を寄せたことはあるにせよ、ソビエト作家が日本を正式に訪問したことはなかった。そのためピリニャークの訪日は両国のメディアで大々的に取り上げられた。その例として「モスクワタ刊」紙にはジャーナリストのレヴィドフが『日本印象記』に関して書評を発表、ピリニャークの作風には難色を示しつつも、「『日本の太陽の根』をもっと深く理解したくなる」貴重な本として読者に紹介した。<sup>287</sup>さらに「モスクワタ刊」紙には「変身するピリニャーク」と題されたカリカチュアが掲載、日本、中国、トルコの民族衣装に身をまとったピリニャークが描かれている。<sup>288</sup>また、「文学の歩哨」誌には日本の自然や文化に感極まるピリニャークの姿が滑稽に提示されている。

嗚呼、日本！ 海藻スープ！ ワニのウロコでできたゼリー……公衆便所まで男女共学社会。なんて新鮮な空気に、なんて巨大な地震だろう！<sup>289</sup>

ピリニャークの訪日は話題となったが、その熱気に水を差すかのように文壇の反応は冷ややかだった。ソ連の文壇で『日本印象記』は日本の右翼思想を助長する作品という声が圧倒的であったことは否めない。その例として O・プレートネルは『日本印象記』に見られる「異国情緒」（侍、芸者、花魁等の描写）への傾倒を指摘し、作中では「虚偽に満ち、日本の帝国主義を助長するようなことが描かれて」おり、「日本の右翼思想を賛美する」作品として『日本印象記』を評価した。<sup>290</sup>プレートネルがこの記事をソ連共産党の機関紙で最も影響力のある「プラウダ」紙に発表したことは、ピリニャークの訪日がソ連社会で引き起こしたセンセーションの大きさを物語っている。

---

<sup>287</sup>. Левидов М. Бор. Пильняк – Корни японского солнца // Вечерняя Москва. 06. 07. 1927.

<sup>288</sup>. Пильняк – трансформатор // Вечерняя Москва. 17. 12. 1927.

<sup>289</sup>. Арго. Юмор. Наши писатели на даче. Борис Пильняк // На литературном посту. 1927. № 15-16. С. 99.

<sup>290</sup>. Правда. 24. 06. 1927.

次に日本でピリニャークが受けた評価に目を転じたい。最初の例として、ドイツ文学者阿部六郎の反応を紹介しよう。阿部は戦前の日本でシェストフ・ブームの立役者となった人物で、ソ連の文芸にも関心を持っていたようである。阿部の日記を紐解くと、ピリニャークの短編小説を読み漁っていた記録が認められる。阿部は『彼らが生のひととし』や『死なるものがいざなう』などの初期作品には感銘を受けたが、『日本印象記』には反感を覚えたようである。阿部は評論「ピリニャークの日本印象記」を「プロレタリア芸術」誌（1928年、第1号）から発表し、その着眼点を批判した。以下、引用である（表記は現代仮名遣いを用いる）。

素直なロシアの民衆は、遠いふしぎな国でまるで異様な生活をしているものと、吾々を思いこむだろう。ブルジョアの好事家にとっては、妖精の国は悦びでも、民衆にとっては、握り合うべき手の遠さは悲しみだ。実装の社会が一つの歴史の流に奔り進む他はなくなっている時に、この実相をぼかす霧が、民衆と民族との合流を少しでも妨げるようなことがあるならば、吾々はかんにんすることはできない。ピリニャークの来訪は、一つの害悪であり、この「印象記」は反動効果をしか持たないものとして排撃されなければならぬ。<sup>291</sup>

日本の文人の多くはピリニャークの『日本印象記』に憤慨したが、それは文壇の求めたソビエト作家像からピリニャークがあまりにもかけ離れていたからに他ならない。日本の文壇はプロレタリア作家としての社会批判的視座を期待したが、その予想は大きく外れた。その最たる例として、信州地方の描写が示唆に富む。ピリニャークは日本の作家たちと連れ立って信州のとある紡績工場に足を運ぶが、そこで目にした女工らは悲惨な生活のあまりに「女工が人なら電信柱には花咲くものさ」と歌って身の上を嘆く。しかし、ピリニャークの関心は女工にはなく、「それが問題ではない」と言って日本社会の労働問題には一瞥もくれない。<sup>292</sup>そうした姿勢に日本の左派が憤りを覚えたことは想像に難くない。文壇の期待を欺

---

<sup>291</sup> 『阿部六郎全集 1』一穂社、1987年、97頁。

<sup>292</sup> ピリニャークは1932年に再び日本を訪れ、長編小説『石と根』を執筆した。この小説は『日本印象記』の改作で、「1926年のピリニャーク」と「1932年のピリニャーク」が対話する形で執筆されている。その中で「1932年のピリニャーク」は「1926年のピリニャーク」が『日本印

くように、『日本印象記』には侍、芸者、花魁など、日本の伝統文化を象徴する表現が頻繁に飛び交った。親交の深かった秋田雨雀もまたピリニャークの作品世界を知るにつれ、創作理念の差に失望し、「イデオロギーの上では最も幼稚なものしかもっていない」とピリニャークの作品世界を批判した。<sup>293</sup>

また、『日本印象記』はジェンダー論の視点からも批判された。その例として宮本百合子の例が興味深い。周知のとおり、宮本は1927年から1930年にかけてソ連に滞在し、その日常生活や政治生活に関する記事を日本の文芸誌から発表したほか、同伴者作家や「内的亡命者」の文芸活動にイデオロギーの点から批判を加えた。<sup>294</sup>宮本によるピリニャーク批判は多岐に及ぶが、『日本印象記』との関連で見えていく上で欠かせない資料がある。

宮本は1928年にレニングラードでゴーリキイと対談し、その様子を回想録としてまとめた。戦後のソ連で出版された文集『日本の作家がソ連について語る』に収められたその記録によれば、宮本は『日本印象記』について次のような感想をゴーリキイに漏らしたとされる。

ピリニャークは芸者の歪んだまやかしの美を描いています。この点、ピリニャークは西欧の作家と同じです。しかし、作者はソビエト作家なのです。私は女としてこの作品に不満を覚えます。<sup>295</sup>

---

象記』の中で労働問題に関心を払っていない点を批判している。紡績工場の個所で「1932年のピリニャーク」は「いいや、まさにそれこそが問題なのだ！」(V:405)と「1926年のピリニャーク」を批判している。

<sup>293</sup> 中村喜和『ロシアの風——日露交流二百年を旅する』23頁。

<sup>294</sup> 宮本のピリニャーク批判には私的な反感が根底にはある。宮本の私小説『道標』を紐解くと、両作家が不和になった事件が語られている。伸子（宮本）はソ連を訪れて間もなく、モスクワで文壇の寵児ポリニャークと面識を得る。その後、ポリニャークからペレジェールキノにある別荘での食事会に招待される。伸子は酒が弱く、勧められたウォッカを断る。食事の席でウォッカを断ることは非礼に当たるが、伸子にはそのことが理解できず、拙いロシア語で「や・にえ・まぐう」（飲めません）と断る。ポリニャークは機嫌を損ない、宮本の「や・にえ・まぐう」をわざとらしく繰り返す。その後、伸子は酒の回ったポリニャークに抱きかかえられ、接吻されそうになる。この些細に思える出来事はピリニャークに対する嫌悪感を宮本の胸に植え付ける。

<sup>295</sup> Миямото Ю. Моя встреча с Горьким // Японские писатели о Стране Советов / Под ред.

文面から明らかな通り、宮本は西欧文学にはない役割を「ソビエト作家」に求めている。しかし、宮本にとって同伴者作家ピリニャークは「ソビエト作家」の範疇には当てはまらない。さらに続けて宮本はゴーリキイにピリニャークについての感想を求めた。

ピリニャークについてはいかがお考えでしょうと尋ねると、ゴーリキイは二言だけとても何気なく、ですが、鋭く答えられました。

「ふむ！ 彼か……」

この二言だけで彼が作家をどう評価しているか察することができたのです。<sup>296</sup>

このように宮本はゴーリキイもまたピリニャークに批判的態度をとったと解釈した。もちろん、ゴーリキイもまたピリニャークを批判した作家には違いないが、宮本とゴーリキイが行った批判の性質は似て非なるものである。宮本はジェンダーに関するピリニャークの保守的な理解や異国情緒への傾倒に嫌悪感を示したのに対し、ゴーリキイは後述する通りピリニャークのスキタイ主義的東洋観を批判していた。

これまで見てきた通り、日本とソ連の文化人は『日本印象記』にみられる「異国情緒」への傾倒を取り上げ、ソビエト作家にはふさわしくない作品として批判した。当時の日本社会で求められていたソビエト作家は同伴者作家ではなく、プロレタリア作家であり、その誤差が『日本印象記』の評価を一方向的に貶めた点は否めない。もちろん、こうした一連の批判に対してピリニャークを擁護する評論家も見られた。その例として П・Сапожников はプレートネルと同じく「プラウダ」紙に書評を掲載し、「ピリニャークはありのままに受け入れる必要がある」とし、イデオロギー的側面から作品批評することの不毛性を強調した。<sup>297</sup>

日ソの文壇で『日本印象記』は反動作品として扱われることが多かったが、ピリニャークは「異国情緒」に傾倒するあまりこの作品を執筆したわけではない。日本という時空間は始原力と文明、東洋と西洋、機械と狼の関係を考察する上でまたとない機会をピリニャークに用意したのである。『日本印象記』で作家は次のように訪日の目的を語っている。

---

Г.Г. Свиридова. Л., 1987. С. 34.

<sup>296</sup> Там же.

<sup>297</sup> Сапожникова П. Еще о книжке Б. Пильняка // Правда. 24. 06. 1927.

私は日本のためではなく自分のために来日した。日本は私にとって砥石であり、私はこの砥石で自分自身を研ぎあげたかった——肌を通して、目でもって、思考でもって——アジアが日本列島の火山に伴われて太平洋へとぶつかる日本列島の断崖に立ち、地上に生まれるすべての文化を規定する偉大な二つの東洋と西洋の文化が入り乱れる、文化の溝で私は自分の目と思考を研ぎ上げたかった。(III: 505)

このように、東洋における西欧化の歴史を考察することこそ作家の訪日目的だったことが分かる。ピリニャークは東洋と西洋という二大文化圏の境界として日本をとらえ、「文化の溝」で近代化の歴史を再考する決意をした。東洋と西洋の問題はピリニャークが革命直後から取り組んできた主要な問題の一つであり、偶発的な問題意識ではない。『裸の年』でピリニャークは東洋と西洋という「二つの精神」について次のように書いている。

二つの精神、東洋と西洋、民衆の知恵、我々の原初的な素晴らしい要素、愚かさと知恵、苦しみと偽りで編まれたおとぎ話のような真実、数世紀も鳴石の下敷きになり、真実によって解きほぐされたおとぎ話。(I: 128)

東洋と西洋の対立は『裸の年』ではまだ鮮明に提示されていないものの、その問題意識はピリニャーク作品に根を張り、着実に成長していった。1931年1月にピリニャークがスターリンに宛てた手紙でもこの問題意識は確かに息づいている。<sup>298</sup>手紙の中で作家は執筆を予定している新作の構想（後の長編小説『オーケイ、アメリカ物語』）を次のように説明している。

作家人生の年齢と経験が大きなキャンバスに取り掛かる時期がやってきたと私に言うのです。そしてそれを描くための力が私にはあると思うのです。この長編小説ではここ最近の15年間に地上で起こった出来事を取り上げます。そして私は我々が築き上げている歴史を、そのほかの歴史と比較したい。そのほかの歴史とは、現在は生きていても、過ぎ去り、そして死んでいく歴史のことです。実際にここ数年で起こった地殻変動は巨

---

<sup>298</sup> ピリニャークは「偉大なる転換」前後から当局の厳しい監視下に置かれ、出国許可が下りなかった。そのためピリニャークはスターリンに直訴状を送ることを余儀なくされた。

大で、本当に我々は歴史を変革しています。この長編小説のシナリオはすでに考えてありますし、それは頭に収まっています。この長編小説の舞台はソ連と米国、アジアと西欧です。(書簡集 II: 420-421)

この通り、ピリニャークの作家生活には東洋と西洋の対立が一つの問題意識として通底していた。『日本印象記』でもこのテーマは重要な骨子をなしている。ピリニャークはキップリングの有名なテーゼ「東洋は東洋であり、西洋は西洋である」を日本文化論の出発点としている。

西洋人の心理は未来肯定、未来建設を足場になっているが、日本民族の心理は過去肯定を足場にしており、彼らの間には先祖崇拝が顕著で、まさにその崇拝がこの国を死者の国、死者が命令を下す国に変えている。(III:431)

ピリニャークは西欧文化を「活動的」、東洋文化を「受動的」と定義した。こうした特徴づけは、先祖崇拝や自殺の美化、伝統を重視する意識など、実際の見聞をもとに得られたものでもある。日本語を知らなかった作家は聴覚を駆使して日本の習俗を分析した。中でも下駄の音がピリニャークの耳には印象深く残ったと見られる。そしてピリニャークはこの下駄と東洋精神の受動的な世界観を結び付け、日本を黄泉の国として提示した。

民族が発する騒音にはそれぞれの意味があり、民族の特徴を反映している……下駄の騒音は骨のように、裸になった神経のように固い——下駄がアスファルトとぶつかる時の騒音は西欧人の耳に恐ろしく響く。それはコルクでガラスを鳴らす時と同じだ。民族が発する騒音にはそれぞれの意味がある。日本で響く人間の騒音は骨のように響く下駄の騒音だ。(III:456)

このように、ピリニャークは日本の伝統文化を論じるうえでキップリングのテーゼを踏襲しているように思われる。しかし、近代化以降の日本は東西の文化が交流し、特殊な文化圏を形成する場所として理解されている。そうした理解はピリニャークが交流した作家との交流から得られた印象も手伝っている。その例として、交流の深かった秋田雨雀の描写が興味深い。

秋田の存在はピリニャークの日本観に強い影響を与えた。『日本印象記』の中で秋田は西欧化された東洋人として描かれており、明治維新の精神を象徴しているといえる。秋田の描写で興味深いのは、西洋人の仮面を如才なくつけ外しする巧みさであろう。ピリニャークは幾度か秋田の自宅を訪れているが、秋田は着物姿で座敷に通す。秋田が火鉢を前に坐しているところへその娘が障子戸を引いて入ってくる。秋田家は伝統的な様式でピリニャークをもてなすが、書齋に山積する書籍はどれも外国語で書かれているほか、ピリニャークに披露する自作の詩はソ連の左翼芸術に勝るとも劣らない。ピリニャークはその印象を次のように記している。

今こそ真実を愚弄する  
残酷な法を覆すときだ  
さあ、立ち上がれ、労働者よ——  
我々の勝利は近い！

——これはどうしたことだ？ この掘立小屋で本に埋もれ、私の前で火鉢にあたっている男は何者なのだ？（III:430）

その後、ピリニャークは帝国劇場へ足を運ぶが、すると秋田は西洋人顔負けの洋装でピリニャークを出迎える。さらに日本人形のような秋田の娘も洋装で、流ちょうな英語でピリニャークに挨拶する。

作家は秋田と交流し、その人格の中に東洋と西洋が共生している状況に深い印象を受けたようである。そしてピリニャークは自身の文化的アイデンティティを再考し、ロシア文化と日本文化の共通項に思いをはせるのである。それというのも、ピリニャークというロシア人もまた「歴史的に西欧でもアジアでもなく、西欧文化とアジア文化を受容した辺境の地にある国」に生まれたからである。（III: 503）ピリニャークは日本の歴史や習俗を分析するにつれ、ロシア史が衝突した西欧化の問題に回帰する。ロシア社会はピョートル大帝の人為的な西欧化によって社会的・文化的断絶を経験したが、日本社会に同様の断絶、あるいは西と東の葛藤は認められない。



私は古い日本と新しい日本に思いをはせる。私には確信がある。数世紀かけて創造されたものが数十年の間に消滅するはずがない。新しいものと古いものは日本でどうやって融合したのだろうか。どんな力がそれを可能にしたのか。(III:430)

ここで古い日本と新しい日本の分岐点となっているのは明治維新だが、日本の西欧化を可能にした要素をピリニャークは探求する。作家の中で東洋と西洋は反発しあう文化圏として理解されているため、異文化の流入に対して違和感を覚えない日本人の姿に作家は大きな驚きを覚える。ピリニャークは続けて次のように記している。

数千年にわたって続いた日常はあらゆる異民族に無縁の道德と倫理、審美眼を生み出したが、それは工場や機械、大砲、そしてそれらすべてに通底する西欧精神を受け入れうるうえでの妨げとはならなかった。

いかなる知恵によって日本民族は古いものと新しいものを統合したのか、如何に、そして何故それらは融合したのか、この国に昇る太陽の根はどんなものなのか——それを知ることが大きな目的である。(III:504)

ピリニャークの中では文化と文明は対立するという理解が支配的であった。しかし、日本の近代化は作家の世界観を更新する。作家は開国以降の日本に文化と文明の共生を認め、それは当時の歴史哲学に対する作家の認識を改めさせる契機にもなった。すでに見たとおり、1922年にドイツを訪れて以来、ピリニャークはシュペングラーの文明論にも関心を払うようになったが、日本での見聞を通してその文明論に批判的姿勢を強めたことは興味深い。『日本印象記』の中でピリニャークは次のような印象を漏らしている。

西欧文明は全地球の主人を気取っているが、年老いた文明のおばあさんと同じ年の国が西欧から東へ一万キロのところに今も生きている。そしてシュペングラーの理論は覆される——覆されるのだ——覆されるその理由は、どんな西欧人も知らなかった国が、列島に広がる国が、地球の火山活動から冷めきっていない国が、その歴史において二世紀も民族的・修道僧的鎖国を行い、その間に西欧は力を蓄えたのだが、この国は最終的に石化し、シュペングラーの言説に従えば、死んでしまったのだが、突然、世界の

国々が驚いたことに、わずか三十年で復活し、西欧人が理解しているその言葉の意味において列強——西欧的な列強——となったからである。(III:504)

『西欧の没落』でシュペングラーは、文化は自然のように成長し、やがて「文化の死」としての文明にたどり着くという文明の有機体説を展開した。しかし、日本の近代化はシュペングラーの文明論に矛盾する。シュペングラーの言説に従えば、日本文化はすでに石化し、その文化は文明に変容していたはずだが、日本の文化は石化（文明化）することなく成長を続けた。ピリニャークは豊かな精神文化を誇る国として日本を評価している。

人類文化の発達についてあまり知られていない法則がある。その法則とは、精神文化と物質文化は足並みをそろえて成長しないというものだ。なぜなら、物質文化は精神文化を常に追い越すからである。[中略] この点においてアメリカの例は驚異的である。この国は驚異的な物質文化を誇るが、精神文化はいまだオムツが取れず、独り立ちには遠い。——その一方、**日本民族の精神文化を乗せた亀は遥か遠くまで歩みを進めた。**

(III:461-462、強調はピリニャーク——筆者注)

このように、日本は豊かな精神文化を持つ国として提示されている。そして日本の精神文化を論じるうえで作家が着目したのが地震であった。

ピリニャークが来日したのは 1923 年の関東大震災発生後のことで、この歴史的な大災害は作家の来日と密接に関係しているようである。ピリニャークは地震に関して数多くの記述を『日本印象記』に残している。中でも東京の小金井を文人らと散策していた際に受けた地震体験に関する記述が興味深い。ピリニャークは地震体験を通してその宇宙的な力の中に神秘的なものを認める。それはピリニャークが長年にわたって追求してきた始原力であり、その宇宙的な力との接触は作家にとって創作の原動力となる。

宇宙的な地殻変動から未だに冷めきっていない地<sup>ゴスバジャ・ゼムリヤー</sup>球夫人が私を揺さぶったとき、私は宇宙に、偉大で未知で神秘的な**地球**に、あるいは宇宙的力と呼べるものに一瞬だけ接触したのである。そして私は誇らしくなった。(III:426、強調はピリニャーク——筆者注)

ここで作家が地球を「夫人」Госпожа という女性的な表象で描き出していることは興味深い。この文脈における「地球夫人」は、それ以前の作品にしばしば登場した「母なるロシア」という大地信仰や「美しいマリア」像に通底するものであり、文化の本質を女性的なものとして認識する作家の文化観が表出しているといえる。

ピリニャークの考えによれば、日本は常に自然災害にさらされてきた結果、西欧社会に特徴的な機械文化が伝統的には存在せず、機械文化への依存から解放されている。さらに日本民族は物質文化から自由であるばかりか、死に対する抵抗感が希薄である。それをピリニャークは始原力の賜物と考える。中でも作家は関東大震災の事例に「魅了」された。震災時の記録をピリニャークは収集し、次のような例を読者に紹介している。

地震が起こった時、日本人が**真っ先**に**取った行動は動かず**、状況を確認し、**神経を組織**することである。〔中略〕町はあたり一面火の海で、人々は逃げ場を失った。火事を消し終わった後、生存者は遺体を掘り起こしにやってきたが、死者はまったく取り乱すことなく、整然とした並木のように並んで炭になり、大人たちは**組織的に炭となり**、生存者は遺体の下に生きた子供たちを発見した。彼らはパニックを起こさず死に、あるいは、ほとんどパニックを起こすことなく——いずれにせよ、炭になりながら——自分の肉体を炭にすることと引き換えに——子供たちを救った。(III:424、強調はピリニャーク——筆者注)

ピリニャークは地震の事例を通して日本文化に占める始原力の重要性を確認する。そして日本が西欧世界に比肩する力を獲得する際に、始原力との共存こそが大きな役割を果たしたと考える。

日本に独自の物質文化は存在せず——代わりに数世紀かけて研ぎ澄まされた精神文化があり——その文化は数世紀の地震で研ぎ澄まされ、意志と神経によって形成されたのである。物質文化に特有の石灰岩と硬化症が日本民族の腕を縛ることはなかった。

〔中略〕そしてこの闘争の中で決定的な要素となったのが日本に伝統的な意思と神経の文化であり、地震によって生まれた文化なのである。(III:464)

このように、日本の近代化は日本民族が地震との共存を通して培ってきた精神文化の土壌に根を張ったことをピリニャークは強調する。作家は日本滞在中に数多くの自然現象について考察を残しているが、それは始原力に育まれた精神文化こそが日本の近代化に大きく寄与したという認識の上に成立している。

十月革命を始原力の表出として認識していたピリニャークにとって、地震を出発点とした日本文化論は必然的だったかもしれない。作家は『日本印象記』を通して始原力が民族の歴史において果たす役割の重要性を強調したが、それは十月革命において始原力が果たす役割にロシア人読者の目を向けることも視野に入れていたに違いない。

このように、ピリニャークは民族の歴史において決定的な役割を果たすのは物質文化ではなく、精神文化であることを日本で確認し、その文化は始原力の非合理的な原理から生じるというスキタイ主義の文化論に回帰していった。地震という始原力を出発点とした日本文化論は、その源流をたどればブロークの評論「文化と始原力」にたどり着くものである。すでに分析した通り、この評論はイタリアで発生した地震に触発されて執筆されたものであった。まさに『日本印象記』における文化論の着眼点はブロークから借用されたものと言ってよいだろう。

ではここでゴーリキイによるピリニャーク批判に目を転じよう。先に見たとおり、宮本百合子は文化を女性的なものを通して分析した『日本印象記』に生理的不快感を覚えた。そしてゴーリキイもまた批判的態度をとったが、批判の源流はジェンダー論ではなく、西洋と東洋の文化的対立項の中に見出せるだろう。ゴーリキイは十月革命の過程をつぶさに追い、その中に民主主義と西欧化へのアンチテーゼを認めていた。作家は、革命の進展に危機感を募らせていたが、それは「野蛮な」前近代への回帰が予想されたためである。さらに東洋で生じた西欧化の波はゴーリキイの西欧主義に油を注いだ。戦時中の評論「二つの精神」に目を転じると、「前世紀からはアジアの国々でも実に機転のきく人々が西欧の偉大な科学的実験、その思考様式、生活形態を受容し始めた」<sup>299</sup>という一文が認められる。

このことから、ゴーリキイは東洋の西欧化にロシアが後れを取ることに危機感を抱き、自国での啓蒙活動に心血を注いだことが分かる。もちろん、ゴーリキイは単に西欧化の一辺倒だったわけではない。モスクワで出版社「世界文学」の設立に貢献し、ソ連における東洋学

---

<sup>299</sup> Горький А. М. Две души // Максим Горький: pro et contra / Сост. Ю. В. Зобнина. СПб., 1997. С. 95.

を支えたのもゴーリキイであった。<sup>300</sup>そのほか、ゴーリキイは浮世絵の収集家としても知られており、日本の伝統文化に深い造詣をもっていた。しかし、ピリニャークが『日本印象記』で展開したような始原力賛美はゴーリキイには異質であり、ピリニャーク批判の背景にはスキタイ主義への猜疑心が流れている。

ゴーリキイによるピリニャーク批判はロシア文学者・昇曙夢の耳にも入った。昇曙夢はピリニャークの来日中に親交を深めており、ソ連における『日本印象記』の評価に関心があったようである。そして1928年にレニングラードでゴーリキイと会見した際、『日本印象記』について意見を交わしている。この席でもゴーリキイはピリニャークを批判したが、その批判には本論で見たような思想対立の片鱗が認められる。『日本印象記』についてゴーリキイは次のような感想を漏らしている。

ピリニャークのように日本をとらえてはいけない。日本の精神と文化の本質をのぞき込む必要があるのだ。私自身、来日したいと前々から考えている。<sup>301</sup>

始原力を出発点とした日本文化論はゴーリキイの目に表層的なものと映ったと考えられる。ゴーリキイの課題は東洋地域の研究を推し進めることであり、東洋的ロシアの美化ではなかった。

これまで見てきた通り、ピリニャークの「機械」と「狼」の間を揺れ動く振り子の運動は『日本印象記』などの紀行文にも継承されたことがわかる。作家は日本の近代化を通して始原力の存在にソ連読者の目を向けさせようとした。ただし、ここでピリニャークの作家人生に大きな転機が訪れる。スターリンによる赤軍司令官フルンゼの暗殺を示唆した作品『消されない月の物語』をピリニャークが「新世界」誌（1926、№5）から発表したのである。

---

<sup>300</sup>. 「世界文学」は西洋部門と東洋部門から成立し、後者ではB・アレクセーエフやC・オリエンブルグなどの東洋学者が活躍した。「世界文学」の東洋部門については次の文献が詳しい。  
*Бодрова А.А. Горький и Восточная коллегия «Всемирной литературы» // Советское востоковедение. 1958. № 5. С. 124-127.*

<sup>301</sup>. *Нобори С. Живая сила нашего творчества (Беседа с Максимом Горьким) // Японские писатели о Стране Советов. С. 49.*

この作品発表はソ連社会を揺るがす事態となった。『消されない月の物語』の発表はピリニャークの政治的過失となり、作家の名前は 1926 年の文壇から完全に消え去った。事態の深刻さに危機意識を覚えたピリニャークは日本滞在を切り上げて早急に帰国し、公開書簡（1926 年 11 月 25 日付け）を渦中の「新世界」（1927, No.1）に発表、「『消されない月の物語』の執筆、発表ともに大変な間違いであった」と自らの過ちを公に認めた。<sup>302</sup>そして作家は 1927 年から徐々に文壇への復帰が許されたが、この政治的誤算のためにその作品世界はスキタイ主義の文脈を離れ、階級闘争と文学の文脈で議論されていくようになる。ここからは、政治的圧力の水面下で生じていた作家の葛藤と挑戦に焦点を当てていく。

### 3-4-1. 贖罪として書かれた『赤のソルモヴォ』

1928 年にピリニャークが発表したルポルタージュ『赤のソルモヴォ』は 1926 年の政治的過ちを償うために執筆された感は否めない。1928 年 5 月にピリニャークはニージニー・ノヴゴロドにある工場「赤のソルモヴォ」へ派遣され、工場の名を冠した作品を執筆した。このルポルタージュでピリニャークはヴォルガ川沿いの町ソルモヴォに建設された工場の文化的・経済的發展を高らかに賛美した。1928 年は国内産業を飛躍的に発達させるためにソ連共産党が導入した第一次五か年計画の初年度に当たり、『赤のソルモヴォ』では社会主義建設の理念が謳われている。結論から言うと、このルポルタージュは 1926 年のルポルタージュ『飛翔するロシア』と同じく、機械の賛美に捧げられた作品である。この作品がどれほど作家の自由な創作精神のもとで執筆されたかは定かでない。ピリニャークは『日本印象記』で地震という大地の始原力に歓喜したが、『赤のソルモヴォ』ではその始原力を克服し、人間存在を自然から解放する機械に脱帽するのである。作品分析は追って行うとして、まずはメディア向けに用意されたピリニャークの弁明に着目しよう。その例として「青年団の真実」紙に発表されたピリニャークのアンケート結果が示唆に富む。

ニージニー・ノヴゴロド派遣に先立つ 1928 年 4 月、「青年団の真実」編集部は文壇を代表する作家に宛てて公開アンケートを発表した。そのアンケートは次の文面で始まっている。

---

<sup>302</sup> Бор. Пильняк. Письмо в редакцию // Новый мир. 1927. № 1. С. 256.

作家よ！ 夏はもうすぐだ！ この夏の間に君は何を待つ？ どこへいく？ 踏みならされた道に行くか、それとも人里離れた辺境に行くか。どこへ行く。人ごみの海岸か、それとも未開の地か。偉大なる建設、偉大なる生活を見よ、感じよ、学べよ、観察せよ。

303

このアンケートに対し、ピリニャークは次のような回答を寄せている。

これまで私は夏の間に海外へ出ていました。しかし、もはや外国には飽きました。外国へいっていたために、何かを「書き残した」気がするのです。私はそのために多くのものを見落とししました。<sup>304</sup>

1921 年からピリニャークは頻繁に外国へ足を運んでいたが、『消されない月の物語』発表後は出国を自粛している。作家は続けて次のように記している。

夏になれば、ほかの作家と同じく、どこか地方へ出かけたい。作家のニキーフォロフと相談したのだ。サックを担いで、ニキーフォロフが大工、私はその助手といった具合で歩いて出かけよう。村や町、工場ではどんなことが話題になっているのか、歩き回り、耳をダンボにして、見聞を深めよう。そんな夏が最高に違いない。<sup>305</sup>

こうしてピリニャークは（結果的にニキーフォロフ抜きで）『赤のソルモヴォ』を執筆し、その中でソ連におけるプロレタリアートの誕生と発達を賛美した。しかし、外国渡航の自粛は自発的な決断ではなく、外部からの圧力があってのことと推測される。その証拠に、1931 年にピリニャークは長編小説執筆のために渡米を試みるが、出国は認められなかった。そのため作家はスターリンに直訴し、出国許可への斡旋を頼んだが、その手紙には次のような記述が認められる。

---

<sup>303</sup>. Комсомольская правда. 28. 04. 1928.

<sup>304</sup>. Там же.

<sup>305</sup>. Там же.

最終的に自らの過ちを修正し、自分の立場を革命のために有効活用するには、外国へ行く必要があると思われたのです。それに私の中で外国滞在はありふれたことですし、1921年に初めて国境を越えてから私は17回に渡ってソビエトの国境を越えましたが、いまは1928年から一度も国境を越えていないのです。（書簡集 II:420）

作家は出国を自粛してルポルタージュ執筆に取り組む決意を先の公開書簡で表明したが、スターリン宛の手紙が示す通り、ピリニャークは「鉄のカーテン」が降ろされた1930年代も海外の題材に関心を高くしており、社会主義国建設の機運が高まる1920年代末をソ連にとどまることで、祖国に対する忠誠心を証明しようとしたことは明らかである。

「外国には飽きた」という作家の発言は『消されない月の物語』発表に伴う政治的過ちを詫げる意図があったことは確かである。<sup>306</sup>事実、ピリニャークを批判する声は激しさを増した。批判の声は文壇の左派だけでなく、亡命ロシアの側からも上がった。「内的亡命者」ブルガーコフもその一人であった。ブルガーコフと交流を深くしたモスクワの古本商人㊟・ツィッペリゾンの手記には次のような記述がみられる（1930年8月29日）。

M・A（ブルガーコフ——筆者注）はピリニャークが嫌いだ。『消されない月の物語』には手術の最中に医師が昇永水で手を洗うシーンがあるが、そんなことは実際にしないと腹立たしく、これみよがしに指摘した。それは些細なことで、そうした間違いは古典作家にもみられると口をはさむと、M・Aは例になく興奮して公共の場で弁舌をふるい、腹立たしくピリニャークをやり玉に挙げ（普段の彼は押し黙るほうだが）、ピリニャークを「舌足らず」と呼び捨て、ロシア人作家と呼ぶにはふさわしくないと指摘した。「彼

---

<sup>306</sup> ピリニャークの手紙にスターリンは次のように返事をした（1931年1月7日）。「親愛なる同志ピリニャーク！ 1月4日付けのあなたの手紙を受け取りました。確認を取ったところ、監視機関はあなたの出国に対して反論する点はないようです。疑惑があったようですが、それは後に晴れたようです。つまり、あなたの出国は認められるという事です。ごきげんよう。И・スターリン」（書簡集 II:422）。こうしてピリニャークは1931年3月13日にニューヨークへ向けて出発した。しかし、その翌日には作家の父アンドレイが逮捕されている。この逮捕は、作家の帰国を「保証」するためという見方が有力的になっている。См.: Пильняк. Письма. Т. 2. С. 416.



は物語るのではなく、がちがちとわめきたてるんだ（ロープがついたそういうおもちゃがある)」。<sup>307</sup>

『ハンの炎』の分析が示した通り、ブルガーコフのピリニャーク批判には歴史観上の対立があり、両作家の不仲はすでに見た通りだが、『消されない月の物語』の発表に伴うスキャンダルでピリニャークの擁護に回る作家は皆無に等しく、スターリンを批判する行為は一般的に度が過ぎる真似と映ったことがわかる。

ピリニャークの「転向」に関しては別の事情も考慮に入れる必要がある。それはピリニャークの盟友ヴォロンスキイの更迭である。「赤い処女地」誌の編集長として革命後の文壇を主導したヴォロンスキイはピリニャークの政治的過失に連座した（スターリンによるフルンゼの暗殺説をピリニャークに示唆したのはヴォロンスキイと考えられている）。<sup>308</sup>1927年にヴォロンスキイは長年務めてきた「赤い処女地」誌編集長の座を追われ、1928年2月にはトロツキズム関与の疑いで共産党員資格をはく奪、1929年1月に逮捕、そしてタンボフ県リペツク市に1930年まで追放されていた。<sup>309</sup>

こうしてピリニャークは後ろ盾を失い、四面楚歌に陥った。言論統制が激しさを増すこの時期、公に謝罪することで作家人生を立て直そうとしたことは容易に想像がつく。ピリニャークがスターリンに宛てた手紙（1931年1月4日）には次のような記述がみられる。

---

<sup>307</sup>. Петелин В. Художник и диктат времени // Михаил Булгаков. Собрание сочинений в 10 т. М., 1999. Т. 8. С.

<sup>308</sup>. ヴォロンスキイの娘ガリーナの回想によれば、この政治的過失の後にピリニャークとヴォロンスキイの交流は数年間途絶えたという。しかし、その後二人は和解し、逮捕されるまで親交を深めた。См.: Воронская Г.А. Воспоминания о 20-х годах XX века // От свитка до Интернета: библиотека, образование, чтение / Под ред Л.В. Дудова. М., 2011. С. 136-140.

<sup>309</sup>. ヴォロンスキイの失脚については次の文献が詳しい。Дидушина Н., и др. «Может быть, позже многое станет более очевидным и ясным» (Из документов «Партийного дела А.К. Воронского») // Вопросы литературы. 1995. № 3. С. 269-292.

真っ先に申しあげたいのですが、私は自分の命と業績を我々の革命と永遠に結びつけていますし、革命作家を自負し、私のレンガも確かにこの国家建設の土台になったと思う次第です。私の運命はまさに革命の中にあるのです。

私の作家人生には数多くの過ちがありました。自分の過ちは自分がよく知っています。過ちを償うには、功績を出す必要があります。あるいは矛盾に聞こえるかもしれませんが、自分の過ちを反省するに従い、自分の過ちは次のような確信から生じたことを内省する際によく思うのです。つまり、革命の作家たりえるのは、革命に対して誠実で、嘘をつかない人間だけという確信です。ソビエト作家という偉大な名誉を受けた以上は、私に対する信頼があるものと思い込んだのです。（書簡集 II:419-420）

ここでピリニャークは過ちを償うために成し遂げた業績を指摘しているが、それこそまさにここで取り上げる『赤のソルモヴォ』に違いない。『赤のソルモヴォ』はピリニャークがソ連市民であり続けるために執筆を余儀なくされた自己批判の書であり、それは作家としての再起をかけた挑戦に他ならない。そしてピリニャークの挑戦はある程度の功を奏した。左派は『日本印象記』を始めとする海外作品にはこぞって罵声を浴びせかけたが、『赤のソルモヴォ』は高く評価した。その例として左派の論客 H・ファートフは次のように評価している。

直截に言って、『赤のソルモヴォ』は非の打ち所がないルポルタージュと呼ぶことはできない。しかし、B・ピリニャークはここで正しい手法を採用し、その手法が重要な結論に結び付いた。<sup>310</sup>

ファートフは、ピリニャークが労働者と同じ目線で工場を描いた点を高く評価した。ファートフの言葉を借りれば、ピリニャークのルポルタージュが読者を「興奮させるのは、その中で現代的で焦眉の問題が描かれると同時に、社会主義を建設するプロレタリアートの存在が確かに感じられる」からである。確かに『赤のソルモヴォ』でピリニャークはインテリゲンツィヤの高みからではなく、「われら」という集合体の中に同化し、均一化されていく労働者の視点からソビエトの日常を描いた。『赤のソルモヴォ』では労働者とピリニャーク

---

<sup>310</sup>. На литературном посту. 1928. № 15-16. С. 95.

の会話が数多く取り入れられているが、それは「わたし」ではなく「われら」の中に自我を昇華させようとする苦悩の過程で生じた転換であろう。<sup>311</sup>この点に関してはジャーナリストのソーボレフも同じ意見を提示している（「今回の作品は作家の叙情的な感覚ではなく、極めて具体的な資料をもとに執筆された」）。<sup>312</sup>

もちろん、『機械と狼』でもピリニャークは労働者を描いてきたが、『赤のソルモヴォ』にはピリニャーク作品に特徴的な抒情的逸脱や始原力を起点とした文化論は全く見られない。そして作品の題材選びにも大きな変化がみられる。このルポルタージュではソルモヴォの工場が成し遂げた経済成長を示す統計資料が作品の随所で紹介されるほか、労働者の会話も数多く引用されている。中でも重要と思われるのが、「中年労働者」がピリニャークに対して放ったとされる次の言葉である。

同志ピリニャーク、難しい作品を書きますな。あなたとマヤコフスキイは難解を極める。  
(1928:226)

『機械と狼』に代表されるピリニャークの実験文学は一般読者の間で不評だったが、作家がそうした批判に耳を貸してきたとはいいいがたい。しかし、作家は「赤のソルモヴォ」を訪問し、労働者との交流を通して作品世界の反大衆性に直面する。ルポルタージュの中では「中年労働者」から受けた批判を何度も内省するさまが提示されている（「労働者階級には難しい作品を書きますな、同志ピリニャーク！——そして私は自分の罪を自覚する」(Пильняк 1928:228))。作家はこうした「自己批判」を行うと同時に、ゴーリキイの大衆性を積極的に評価する。ソルモヴォで作家はとある労働者のアパートに招かれるが、その家にはゴーリキイの長編小説『母』があり、アパートの住人・ノヴォジーロフとの間で次のような会話が始まる。

——これは家内が読んでいるのです——とノヴォジーロフは言った。  
——面白いですか？——私は尋ねた。

---

<sup>311</sup>. Там же. С. 96.

<sup>312</sup>. С-в Ю. Среди книг: «Новый мир». Книга седьмая // Вечерняя Москва. 10. 07. 1927.

——ええ、と彼女は答えた——話によれば、この本の中ではうちの工場が描かれている  
そうね。老人の口振りなんて、本当によく似てるわ。(1928:228)

このように『赤のソルモヴォ』ではゴーリキイと大衆読者の親密な関係が提示されており、その体験はピリニャークの文学観に変化をもたらした。後に「社会主義リアリズムの父」として祀り上げられるゴーリキイの存在はピリニャークに焦燥感をたきつけたといつてよい。そもそもコロムナで活動していたピリニャークを革命後のモスクワに呼び寄せたのはゴーリキイだったが、当の本人はゴーリキイの権威を意に介さず、古臭い作家として理解していた。児童文学作家のK・チュコフスキイは両作家と交流があったが、その日記（1921年4月31日の頁）によれば「ゴーリキイは年を取った。人間としてはいいやつだが、作家としては時代遅れだ」とピリニャークは言い放ったとされる。<sup>313</sup>

革命後に『裸の年』で輝かしい成功を収めたピリニャークはゴーリキイを「時代遅れの作家」と評価していた。しかし、その後の作家人生が示す通り、ピリニャーク作品の難解さは徐々に読者離れを引き起こし、作家は難解な創作手法に対する責任の念を抱き、プロレタリアートへの接近を最重要課題として認識する。その例として示唆に富むのが労働者の会議にピリニャークが出席した際の描写である。ピリニャークは労働者の会議に出席したものの、そこに居場所はない。そして作家は異邦人としての意識を高め、ソビエト社会から孤立する。

そしてまた耳慣れない言葉と表現の嵐。生産会議と委員会、専門家委員会、技術者会議。

〔中略〕 会話はとても緊張していて、みんな私のことなど忘れてしまった。(1928:227)

ルポルタージュの中でピリニャークはプロレタリアートの活躍を描くと同時に、インテリゲンツィヤの孤独を浮き彫りにした。その行間には現代という列車に乗り遅れてしまった同伴者作家の焦燥感がにじみ出ている。生産会議の終了後、作家は次のような結論にたどり着く。

---

<sup>313</sup>. Чуковский К. Собр. соч. в 15 т. М., 2001. Т. 11. С. 331.

これは一目瞭然で、実に重要なことだが——私はソルモヴォの労働者の社会生活を決定する会話の場に参加していたのだ。これは一目瞭然だが、工場は——彼らのもので、彼らは工場とともに生き、彼らが工場を建設・管理し、その工場で労働し——そこから一連の発明が誕生すること——それをすでに**労働者は知っている**——しかし、それは革命によって**変革**された**心理的要素**の一つである。工場は——われらのものだ！(1928:228、強調はピリニャーク——筆者注)。

このようにピリニャークはプロレタリアートが革命による <sup>ベレストロイカ</sup> 変革の結果として誕生した存在であることを認め、彼らを歴史の主人公として認識する。それと同時に作家は読者に対して自らの「過ち」を認める。

労働する人間、その生活、その日常、その関心、ヒロイズムを私は理論で聞き知っていたにすぎなかった。労働する人間が新たな国体を建設し、労働する人間が大衆の中にも理論で聞き知っていたにすぎなかった。そして私は初めてその人間を目にした——ソルモヴォで。——「同志ピリニャーク、難しい作品を書きますな！」——私は恥ずかしい、恐ろしく腹立たしい。なぜ私は難しく作品を書いてきたのか、そしてそのことに気が付くのにこれほど時間がかかったのが恥ずかしい。読者にはわかるだろう、この言葉が私にとってどれほどの重みを持っているか。(1928:230)

このようにピリニャークはソビエトの世論を前に懺悔し、プロレタリアートの「注文」を受けて活動する意思を表明した。もちろん、この「転向」は作家人生を立て直すための戦略だったに違いない。ピリニャークの盟友、ポロンスキイは『赤のソルモヴォ』を無言でやり過ごしたが、左派の評論家はピリニャークの劇的な「転向」を絶賛した。「青年団の真実」紙に寄せられた書評では作家の懺悔が好意的に評価されている。

彼は労働者階級が新たな生活の指導者であることを直截に認めている。彼が労働者階級を指導者と認めるのは、その手に権力があるからではなく、労働者の世論に流れる雰囲気——「真実で、健全で、あらゆる点で正しい生活」だからである。ピリニャークはそれでもってインテリゲンツィヤの孤高を撤回した。そして、その創作が労働に励む

大衆からほど遠く、「難解」であることを理解し、潔く恥じる。現代作家の関心の中心を占めるのは労働者階級のほかない、という結論にたどり着く。<sup>314</sup>

この通り、文壇の左派はピリニャークの転向を象徴する作品として『赤のソルモヴォ』を高く評価した。「現実を革命的発展」とともに描く社会主義リアリズムがドグマとして採択される 1934 年の第一回ソビエト作家大会まで 6 年、ピリニャークは左翼芸術への転向を成し遂げたかに見えた。しかし、この『赤のソルモヴォ』もまた、自身の革命に対して真摯であろうとする作家の隠れ蓑であった。ピリニャークは政治的過失を償うべく、体制賛美のルポルタージュを執筆し、ソビエト社会を前に謝罪したが、それは「偉大なる転換」に伴う一大論争の序曲であった。ピリニャークが 1928 年の秋から一年の間に執筆した作品はいずれも創作の自由と原初的なロシアを求める運動の証しである。

#### 3-4-2. 「<sup>ヴァリニキー・ベレロム</sup>偉大なる転換」とソビエト文明の夜明け

「偉大なる転換」はソ連社会の大きな転換点を象徴する政治用語である。用語の起源はスターリンが 1929 年に発表した演説文「偉大なる転換：十月革命の十二周年に寄せて」にある。スターリンはこの演説文を共産党の機関紙「プラウダ」（1929 年 11 月 3 日）に発表し、「過行く年は社会主義建設のあらゆる前線において偉大なる**転換**の年となった」（強調はスターリン）という文章で始めた。<sup>315</sup>

ソ連ではネップの採用後、自由主義経済が一時的に容認されていたが、演説文の中でスターリンは産業の重工業化と農業の集団化を急ぐとともに、市場における「資本主義的要素」の撲滅と国家的計画経済への移行を唱えた。それと同時に、国家的な文化統制の波が文壇に押し寄せ、ピリニャークを始めとする同伴者作家には「階級の敵」というレッテルが用意された。中でもスターリンにとって同伴者文学の存在は目障りだったに違いない。スターリンは演説の結論で、「我々は長きにわたる《ラッセーヤ的》後進性を放擲し、社会主義を目指して産業化の道を全速力で駆け抜けよう」と強調した。<sup>316</sup>ここでスターリンが放擲すべしと強調した「ラッセーヤ」（ロシアの訛り）こそ、ピリニャークの逆行した歴史哲学のロマン

<sup>314</sup>. На литературном посту. 1928. № 15-16. С. 96.

<sup>315</sup>. Цит. по: Сталин И.В. Сочинения. Т. 12. М., 1952, С. 118.

<sup>316</sup>. Там же. С. 135.

チズムが結晶したものであり、作家が『機械と狼』の副題でも歌った表現である。ピリニャークの歴史観は時代の流れに逆行し、それは社会全体を巻き込んだ論争へとつながっていった。

「偉大なる転換」前夜のモスクワではピリニャークをはじめとする同伴者文学と、文壇の左派が熾烈な論争を繰り広げた。そしてこの論争を通して、ピリニャークは『ヴォルガ川はカスピ海にそそぐ』という大長編小説を執筆し、ソビエト社会に対する態度を明示する。この作品を分析する前に、まずは同伴者作家と左派の間に生じた議論を俯瞰しよう。この論争とピリニャーク作品世界の連動を見ていくうえで、重要な記事がある。それは「偉大なる転換」のおよそ一年前に発表された記事である。1928年7月3日の「青年団の真実」紙に目を転じると、農業集団化の現場を描くべく、コルホーズへ赴く作家たちの姿が描かれている。その記事は威圧的な見出しで始まっている。

革命は要求する。貧困と農地分裂状態を脱出せよ。無知と<sup>クラーク</sup>富農の貪欲という柵を飛び越えて共同の大地で共同の労働に就け、文明化された共同組合を組織せよ。コルホーズに向かう作家と画家から、我々は集団化、農地開拓のための闘争を歌う小説、歌、ポスターを待つ！<sup>317</sup>

この記事にはコルホーズでルポルタージュを執筆する意思を表明した作家のリストが添付されていた。その中にはC・ゴロデツキー、E・ザミャーチン、Л・レオーノフ、B・カタエフ、C・トレチャコフ、M・ショーロホフ、そしてピリニャークの名前があった。作家たちのカリカチュアは「モスクワタ刊」紙（7月14日）に「コルホーズにインスピレーションを求めて！」のタイトルで掲載された。<sup>318</sup>そしてコルホーズから戻り、ピリニャークはルポルタージュ『中央黒土地帯』、戯曲『地方のまぬけ』の二作品を矢継ぎ早に発表した。いずれの作品も「偉大なる転換」の過程でピリニャークが経験する変容を把握する上で重要な位置を占めている。

---

<sup>317</sup>. Комсомольская правда. 03. 07. 1928.

<sup>318</sup>. В колхоз, за вдохновением! // Вечерняя Москва. 14. 07. 1928.

周知のとおり、ピリニャークはプラトノフと「共作」でこの二作品を発表した。1928 年の夏から両作家の親交は深まったと考えられる。<sup>319</sup>最初に発表されたのは戯曲『地方のまぬけ』である。ピリニャークは同年 10 月にこの戯曲を「ゲルツェンの家」で読み上げており、この朗読会は「モスクワタ刊」紙（10 月 15 日）で大きく取り上げられた。記事は「地方のまぬけ——Б・ピリニャークの新たな戯曲」と題され、プラトノフとの共作であることは本文で明記されたにすぎず、この作品は同時代的にピリニャークの作品として認識された。この記事には「劇作家としての文芸活動をかけた最初の挑戦は聴衆の側から実に批判的反應を呼んだ」と記されており、ピリニャークの戯曲は不評だったとがわかる。<sup>320</sup>その理由として戯曲の風刺が度を過ぎたもので、正当化されないという説明を記者は加えている。朗読会の閉会時にピリニャークは指摘を踏まえて作品を修正すると発言したが、『地方のまぬけ』が作家の生前に舞台化されることはなく、完全に忘れられてしまった。<sup>321</sup>

続いてピリニャークはプラトノフと共作でルポルタージュ『中央黒土地帯』を発表する（「新世界」誌、1928 年、第 12 号）。中央黒土地帯 1440 はヴォロネジ市を中心として 1920 年代末に編成された農業経済地域だが、この作品ではこの中央黒土地帯における官僚主義の実態が提示されている。前作の戯曲は日の目を見なかったが、このルポルタージュはピリニャークとプラトノフの関係を明らかにするうえで重要であると同時に、両者の作家人生に訪れた危機を物語る。後述の通り、1929 年 8 月には「ピリニャーク事件」という全国的な追放運動が勃発し、この事件に連座する形でピリニャークと交流の深かったプラト

---

<sup>319</sup> ピリニャークとプラトノフの関係は複雑極まりない。トルスタヤはそれを師弟関係として位置付けていたが、次第にプラトノフがピリニャークに影響を与えるようになったと指摘している。事実、プラトノフの影響を指摘している研究者は少なくない。その例として、ピリニャークの問題作『マホガニー』はプラトノフの『チェヴェンゲール』に影響を受けて執筆されたと考える傾向がある。Напр., см.: Григорьева Л.П. Возвращенная классика (Из истории советской прозы 20-30-х годов). Л., 1990. С. 25-26.

<sup>320</sup> Кут. А. «Дураки на периферии»: новая пьеса Б. Пильняка // Вечерняя Москва. 15. 10. 1928.

<sup>321</sup> 現在残されている『地方のまぬけ』がピリニャークの朗読会で読み上げられたものと同一かどうかは不明である。『地方のまぬけ』の風刺度はプラトノフ作品の中でも際立っていると指摘し、その源流をピリニャークの関与に帰結する傾向もみられる。



ノフの弾圧が始まる。そこでプラトーフは次のように弁明している。

Б・А・Пирнякは『中央黒土地帯』を執筆していない。この作品は私個人で執筆したものだ。Б・Пирнякは出来上がった原稿を編集、修正したに過ぎない。Б・Пирнякに批判すべきものがあるとして、『中央黒土地帯』で批判はできない。<sup>322</sup>

このようにプラトーフは発言したが、Пирнякは実際に『中央黒土地帯』の執筆に携わらなかったのだろうか。プラトーフ研究で有名なН・Колниенкоは両作家の「共作」を次のように評価している。

Пирнякは知る人ぞ知るソビエト作家だったが、プラトーフはモスクワに来て二年目で、文壇の大家に見い出されてしかるべく評価されることもなかった。作品集『エピファニの水門』（1927）と『秘められた人間』（1928）はすでに出版されていたが、当時の文壇では話題にならず、プラトーフに名声をもたらしたのは『中央黒土地帯』の共作者Пирнякの名前である。<sup>323</sup>

当時は無名の作家だったプラトーフを文壇の中心に引き込む目的でПирнякが共作者として名前を提供したとКолниенкоは考えている。Пирнякと交流のあった同時代人もまた『中央黒土地帯』の作者をプラトーフと認識していた。その例としてПирнякの弟子作家В・А・Пановは『中央黒土地帯』をつぶさに分析し、次のように結論付けている。

Пирнякは石を投げつけられ、「Пирнякの亜流」として名が通っていたプラトーフ（すでに立派な風刺作家だったが）もついでに石を投げられた。プラトーフはルポルタージュを書いたのは自分で、Пирнякは完成した原稿に手を入れたに過ぎないと一度ならず宣言していた。私は『中央黒土地帯』をしっかりと読んでみた。

---

<sup>322</sup>. Цит. по: Корниенко Н.В. (сост.) Платонов А: Воспоминания современников: Материалы к биографии. Сборник. М., 1994. С. 252.

<sup>323</sup>. См.: Платонов А.П. Дураки на периферии: Пьесы, сценарии. М., 2011. С. 686.

両作家の作品に精通していた私はそこで確信した。文体は確かにプラトーフのものであったが、プロレタリア文学の無頼漢たちはピリニャークが作者だと騒ぎ立てた。<sup>324</sup>

このようにピリニャークは実際に共作者として名前を提供したに過ぎないという評価が一般的に見られた。実際にピリニャークはルポルタージュの執筆には携わらなかったようである。国立出版所「ИЗ」が作家の生前に刊行した八巻立ての作品集（1930）に目を転じると、この作品集には様々な作家（П・パヴレンコ、Н・フェドロフスキー等）と共作で執筆した作品（『バイロン卿』、『死亡事件』等）は収められているのに対し、プラトーフと共作で発表した作品の題名は見当たらない。しかし、文壇の左派は『中央黒土地帯』にピリニャークの影響を認め、厳しい批判を行った。その例として、「青年団の真実」紙に掲載された書評で『中央黒土地帯』はソビエト権力に対する「悪意に満ちたカリカチュア」として酷評された。<sup>325</sup>また、「文学の歩哨」誌に発表された書評でこのルポルタージュは「党とソビエト権力が推し進める経済的、政治的路線に対する中傷」として断罪された。<sup>326</sup>著者のファートフは次のようにルポルタージュを評価している。

日常の描写に目をやると、彼（主人公フョードル・フョードロヴィチ——筆者注）はプラトーフの短編に登場する、世間の目はお構いなしで機械に恋する奇妙な労働者によく似ているが、このルポルタージュで放たれるセリフから判断するに、フョードル・フョードロヴィチはピリニャークの作品や発言に大変精通している（余談ながら、ピリニャークが協力していないプラトーフ作品の労働者はまったく別の台詞を放つ）。<sup>327</sup>

『中央黒土地帯』の主人公によれば、「肝心なのはお互いの通路を見つける」ことで、「友情こそが共産主義」である。しかし、舞台となった中央黒土地帯では官僚主義が社会の隅々まで根を張り、人々の関係は行政機構に管理され、作家が想い描いた共産主義の影はみじん

---

<sup>324</sup>. Панов В.А. Встречи с Пильняком (отрывок из рукописи «У порога Москвы») // Б.А. Пильняк. Исследования и материалы. Вып. 3-4. С. 175.

<sup>325</sup>. Комсомольская правда. 14. 02. 1929.

<sup>326</sup>. На литературном посту. 1929. №1. С. 68.

<sup>327</sup>. Там же. С. 69.

もない。ファートフは『中央黒土地帯』を「実に興味深く、見事に編まれた」作品と評価しながらも、そのメソッドには「中傷」が少なからず見られると判断した。ファートフは続けて次のように記している。

彼らはフョードル・フョードロヴィチという、たった一人の人間に着目したが、彼は「鉄道工事現場で働く熟練の労働者で、哲学者」である（強調はファートフ——筆者注）。

328

ファートフは着眼点の狭さを指摘したうえで、主人公の官僚主義批判を分析し、次のような結論に至る。

ルポルタージュ全体がフョードル・フョードロヴィチの判断で占められているが、すでに見たとおり作家の判断も「哲学者」の考えと大差ない。しかし、ピリニャークとプラトノフが知らないとは考えにくい。フョードル・フョードロヴィチの考えは産業化に関する党の路線、国内の政治状況に関する党の評価、そして労働組合の政策やソビエト活動の課題に矛盾しており、明白な中傷なのだ。<sup>329</sup>

このように『中央黒土地帯』は共産党に対する中傷というレッテルを貼られた。作家の「過ち」は、中央黒土地帯で得られた見分が共産党の路線に矛盾したことで、官僚主義の現状を描こうとする試みは反社会的行為として断罪された。しかし、創作上の自由を求める動きはまだ力を保ち、文壇の左派と論争する余地があるかに見えた。

1929年2月、ソビエト作家連合 ФОСП<sup>330</sup>は「ソビエト文学の課題」を主題に「ゲルツェ

---

<sup>328</sup>. Там же. С. 68.

<sup>329</sup>. Там же. С. 68-69.

<sup>330</sup>. ソビエト作家連合（Федерация Объединений Советских Писателей）は1926年12月に設立された団体で、全露プロレタリア作家協会 ВАПП のほか、全露農民作家団体 ВОКП、全露作家同盟 ВСП が加わった。連合の目的は、1925年6月18日にソ連共産党が決議した「文学領域における党の政策について」に従って共通の活動方針を定めることだった。連合の指導部は各作家団体の代表者で構成されていた。連合は出版社「連合」を運営したほか、機関紙「文学新聞」

ンの家」で文学の夕べを開催した。その様子は「本と革命」誌（1929 年、第 2 号）に掲載された。この文学の夕べはオールド・ボリシェビキの П・ケルジェンツェフによる基調報告で始まったが、その中で報告者は現代的なテーマ、すなわち、産業化と階級闘争を反映した政治文学をソ連で発達させる必要性を主張した。またケルジェンツェフは共産党中央委員会が 1925 年に採択した決議「文学領域における政策について」（「プラウダ」紙、1925 年 7 月 1 日に掲載）<sup>331</sup>の見直しを提案した。この決議では同伴者作家に対し「柔軟で慎重な態度」をとる必要性が確認されたが、ケルジェンツェフはその姿勢を見直し、同伴者作家の速やかなイデオロギー教育を提唱した。ケルジェンツェフの報告に対する討論者として А・エフロスとピリニャーク（当時は全露作家同盟モスクワ支部議長）が登壇、エフロスは同伴者作家に対する早急なイデオロギー教育には難色を示し、ピリニャークは文芸活動の自由を主張した。討論でピリニャークは次のように発言している。

作家としては有能だが、政治家としては無能ということはある。自らの創作において作家の使命とは独創的であることで、仮に作家が「指令」通りに執筆しようとしても、優れた芸術作品は生まれない。反対に、文学が文学たり得るのは、こうした「指令」を破壊するときである。<sup>332</sup>

このようにピリニャークは創作上の自由を作家に求めた。同様の主張をピリニャークはエッセイ「作家が社会的注文について語る」（「出版と革命」誌、1929 年、第 1 号）でも行っている。しかし、ピリニャークの主張は支持を得ず、左派による一方的な批判が加えられた（マヤコフスキイ、カナトチコフ、ファジェーエフ、アヴェルバフ等）。そして基調報告を担当したケルジェンツェフはピリニャークへの反論で文学の夕べを締めくくった。

---

を発行した。1932 年 4 月 23 日に共産党が「文学・芸術団体の改組に関して」の決議案を発表したのに伴い、連合はその他の作家団体と同様に解散した。Подр. см.: Литературная энциклопедия. Т. 11. С. 673-674.

<sup>331</sup> Резолюция ЦК РКП(б) «О политике партии в области художественной литературы» // Правда. 01. 07. 1925.

<sup>332</sup> Книга и революция. 1929. № 2. С. 62.

我々がイデオロギー的に見事な作品を「指令」で作家に執筆させるつもりだと考えるのは浅はかだ。そうした通俗的な見方でポリシェビキを認識する傾向が 1917 年から 1918 年の間に見られたが、作家が労働する読者の利益を考慮に入れないならば、彼らは現代に取り残されるだろう。

同伴者作家の多くがプロレタリア作家に決して転向しないことは承知しているが、彼らの中に何かしら異質なものを認めるのであれば、我々にはそれを指摘する義務がある。文学は階級闘争の武器であり、この武器が我々に牙をむくようなことがあってはならない。<sup>333</sup>

このようにソビエト作家連合が開催した文学の夕べでは文学を「階級闘争の武器」として政治的に活用する必要性が確認された。そしてこの夕べを契機として、左派による同伴者作家の批判は激しさを増した。その例として、「青年団の真実」（1929 年 2 月 14 日）に掲載された『中央黒土地帯』の書評でこのルポルタージュはソ連の生活に対する「悪質なカリカチュア」として酷評されたほか、前述のケルジェンツェフが編集長を務めた「本と革命」誌（1929 年、第 3 号）には B・フリーチェの評論「階級の敵がかぶる仮面」が掲載され、その中でピリニャークを始めとする同伴者作家が「階級の敵」として断罪された。フリーチェは評論で次のように記している。

以前同様、今日の文学では小市民的、ブルジョア的傾向が表出し、特定の社会的グループはプロレタリアートの独裁、社会主義革命、そして社会主義国建設に反対している。

<sup>334</sup>

フリーチェは同伴者文学をプロレタリアート独裁に反対する「小市民的要素」と定義し、「階級の敵」の最たる例としてピリニャークのほか、ザミャーチン、ブルガーコフ、エレンブルグの名前を挙げた。それまでピリニャークはプロレタリアートの誕生をロシアの歴史的必然（『機械と狼』など）として描いてきたが、フリーチェは作家の葛藤には目もくれず、その作品世界を一面的に反社会的と評価している。そしてフリーチェは「プロレタリア・共

---

<sup>333</sup>. Там же. С. 62-63.

<sup>334</sup>. Фриче В. Маски классового врага // Книга и революция. 1929. № 3. С. 3.

産主義批評の課題は多様なマスクをはいで、作家たちの階級的表情を暴き出すことである」という威圧的な言葉で評論を閉じている。<sup>335</sup>

同伴者作家の弾圧は日を迫うごとに激しさを増していった。フリーチェの評論に続いて、「モスクワタ刊」紙の編集部は文壇を代表する作家や評論家に公開質問状を提示し、1928年の文芸活動に関する総括を求めた。そして1929年4月27日の紙面にはアヴェルバフやコーガン、オレーシャなど、そうそうたる文人の回答が掲載された。記事は「ソビエト文学の一年」と題され、その副題には扇動的表現が飛び交っている（「階級的な文学を、社会主義国建設の情熱に満ちた文学を作れ！ 日和見主義、追従、反動的気運に抵抗せよ」）。紙面で紹介された評論家の回答ではプロレタリア文学の急速な発達が指摘されている。その例として、国立芸術学アカデミー「AXH」の所長を務めたコーガンはオレーシャの長編小説『羨望』を取り上げ、旧世界と新世界の交代を描いた作品として高く評価している。<sup>336</sup>

「モスクワタ刊」紙のアンケートに回答を寄せた関係者の多くはプロレタリア文学の急速な発達を指摘したが、それに対してBc・イワノフとピリニャークは共同の声明を発表し、反論を試みた。両作家の反論は次の二点にまとめられる。

第一に、左派の評論家による同伴者文学への激しい攻撃を批判している。事実、1920年代の後半にかけてピリニャークをはじめとする同伴者作家の批判は階級闘争的な文脈に転嫁され、同伴者作家そのものが撲滅されるべき対象として論じられることが一般化した（その典型的な例がフリーチェの「階級の敵の仮面」）。そのため、両作家は創作の自由が脅かされている現状に警鐘を鳴らした。

第二に、左派の評論家によるプロレタリア文学の拡大解釈を指摘している。左派の評論家は優れた新人作家に「プロレタリア作家」のレッテルを張り、プロレタリア文学の枠組み自体を拡大することで、その意義を誇張しているとした。この点に関して両作家は次のように指摘している。

「文学の歩哨」派には数多くの才能ある作家が流れ込んだが、彼らの革命性は同伴者作家のものと大きくは変わらない。しかし、彼らがプロレタリア作家、つまり、プロレタ

---

<sup>335</sup>. Там же. С. 7.

<sup>336</sup>. Год советской литературы // Вечерняя Москва. 27. 04. 1929.

リアートの歌い手かといえば、それは怪しい。<sup>337</sup>

イワノフとピリニャークは文壇の左派に反論を試みたが、「モスクワタ刊」紙の編集部は同伴者作家の作品を排斥されるべき「小市民的」要素として結論づけた。以下、引用である。

- 1). 肯定的な要素として、若いマルクス主義文芸論の萌芽と、プロレタリア文学の創造的発達が広く認められる。
- 2). こうした一般的な現象の背景には右傾化し、バランスを失った古株の同伴者作家（バーベリ、レオーノフ、ピリニャーク、イワノフ）の姿があり、彼らの創作では小市民的、ブルジョア的要素がますます活性化し、部分的には攻撃的になっている。<sup>338</sup>

このように、同伴者作家と左派の間で始まった論争は後者に有利な形で進行した。しかし、左派による攻撃はこれで終わりではなく、「ピリニャーク事件」という同伴者作家の全国的な追放運動を引き起こすこととなった。まずはこの事件の概要を俯瞰し、その上でこの全国的な社会現象とピリニャーク作品の連動性に焦点を当てていく。

1929年1月、ピリニャーク創作の中で重要な位置を占める風刺小説『マホガニー』がベルリンの出版社「ペトロポリス」から世に出た。それを契機としてピリニャークとその盟友ザミャーチンに対する全国的な追放運動の火ぶたが切っておろされた。この現象は「ピリニャーク事件」と題され、1929年の夏から数か月にわたって主要メディアで大々的に報道されている。この追放運動は左派の評論家B・ヴォーリンの記事「許しえぬ現象」（『文学新聞』、8月26日）で始まった。ピリニャークとザミャーチンはソ連国内で出版が困難だった『マホガニー』と『われら』を海外の出版社から刊行したが、ヴォーリンは両作家の行為を「許しえぬ現象」、つまり反ソ行為として告発し、ソ連社会に裁可を仰いだのである。

「ピリニャーク事件」は凄まじい勢いで社会を巻き込んでいった。この関係で興味深いのは『文学新聞』（9月2日付け）に発表された記事「全露作家同盟に加盟するすべての会員へ」である。この記事で左派の評論家らは「E・ザミャーチンとB・ピリニャークの振る舞

---

<sup>337</sup>. Там же.

<sup>338</sup>. Там же.

いに対する自らの態度を決定する」ことを提案した。<sup>339</sup>左派の主張は威圧的で、記事には「ピリニャークとその仲間を守るか、あるいは反抗するか、第三の選択肢はない」と記されている。<sup>340</sup>この主張に賛同する形で数多くの作家や文学集団がピリニャークの「反ソ活動」を批判した（「構成主義文学センター」、「鍛冶場」派、「峠」派、「革命前線」、В・П・カタエフ等）。両作家の擁護に回ったのは、Вс・イワノフ、В・シクロフスキイ、Вяч・ポロンスキイなど、ごく一部の文人に限られた。

ピリニャークとザミャーチンの追放運動は例を見ない激しさで進められた。そのため、パステルナーク、アフマートワ、ブルガーコフらは全露作家同盟を脱退し、追放運動に対する抗議の意を表した。ゴーリキイは両作家のモダニズム文学を否定的に評価していたが、その弾圧の深刻さを知るや否や擁護に乗り出し、「ブラウダ」紙から評論「労力の無駄」を発表し、追放運動に待ったをかけた。しかし、ゴーリキイによる擁護は火に油を注ぐ形となり、ピリニャークに続いてゴーリキイ批判が始まった。その例として、ノヴォシビルスクの文芸誌「真実」で編集長を務めたА・クールスはゴーリキイを「階級闘争の舞台で如才なく仮面をつけ外しする敵」と評し、大きな波紋を呼んだ。<sup>341</sup>

ピリニャークとザミャーチンの「反ソ活動」をめぐる議論は激しさを増し、公開討論会まで開催されるようになった。その例として 1929 年 10 月 7 日にはモスクワの革命劇場（今日のマヤコフスキイ劇場）で「作家と政治教程」をテーマに討論会が催された。<sup>342</sup>この討論会は「ピリニャーク事件」をたきつけた張本人ヴォーリンの基調報告で始まった。報告の中でヴォーリンはピリニャークの作品『マホガニー』から抜粋を聴衆に提示し、その「反社会性」を聴衆の裁きにゆだねた。続けてヴォーリンは潜在的な「反動作家」の名前を挙げている。

我々は明らかな反動作品を前にしている。その作者とはセルゲーエフ＝ツェンスキイ、

---

<sup>339</sup>. Секретариат РАПП. Ко всем членам Всероссийского союза писателей // Литературная газета. 02. 09. 1929.

<sup>340</sup>. Там же.

<sup>341</sup>. Курс А.П. Редакционный блок-нот // Настоящее. 1929. № 8-9. С. 3.

<sup>342</sup>. その様子は「文学の歩哨」誌（1929 年、第 20 号）と「モスクワタ刊」紙（10 月 8 日）に掲載された。



ザミャーチン、ブルガーコフである。これらの作品が示す通り、社会主義国建設の困難な時期において右翼の要素が影響力を強化しているのである。<sup>343</sup>

ヴォーリンによる「階級の敵」批判に続き、作家の E・ゾズリと IO・オレーシャが登壇し、それぞれ報告を行っている。中でも興味深いのがオレーシャの報告である。左派の評論家は威圧的なスローガンを「階級の敵」に投げつけたのに対し、オレーシャは同伴者文学の後進性を指摘した。以下、オレーシャの報告文から引用する。

知識人たる作家の使命はソビエトに散文をもたらし努力を惜しまないことである。我々にはソビエト文学の新たなドン・キホーテ、セルバンテスを生む使命がある。羊に口を授けたところでメエと鳴くのが関の山とはよくいったものだが、ボリス・ピリニャークはメエと鳴いて見せた。ソビエトの国のおかげで、私は父よりもより優れ、大胆になった。お国が私に自由を与えてくれたのだ。確認するが、仮に真実を描くのであれば、それが我々の国に関する目も伏せたくないような真実だとしても、それが創造的事業と建設に対する真心で育まれているならば、その作品はどこでも掲載されるだろう。自由に大胆に、刮目してあたりを見渡し、実際に周囲で起こっていることを見ることをボリス・ピリニャークに助言したい。<sup>344</sup>

オレーシャは左派の評論家とは異なり、「ソビエト文学」を創造する必要性を主張し、現代的なテーマに対する悲観的態度にピリニャークの非を認めている。まさにそうした態度のためにピリニャークの『マホガニー』はソ連で出版されなかったとオレーシャは考えた。

討論会ではオレーシャに続いてイワノフ、シクロフスキイ、ポロンスキイが登壇している。イワノフは非共産党員の作家（つまり、同伴者作家）が置かれた困難な状況を説明すると同時に、文学が階級闘争の武器と化している状況に懸念を表した。イワノフは次のように発言している。

---

<sup>343</sup>. Писатель и политграмота (Вечер в театре Революции) // На литературном посту. 1929. № 20. С. 86.

<sup>344</sup>. Там же.

同伴者作家の不幸は党員でないために、仕事をするのが信じられないほど困難な点である。私の考えでは、彼ら（同伴者作家——筆者注）とソビエト世論の対立は続くだろうし、どんな結末を迎えるか分かったものではない。<sup>345</sup>

続いて壇上に上がったのはシクロフスキイである。イワノフとは違い、シクロフスキイは討論会の論点を巧みに避け、自身にも火の粉が降り注ぐのを防いだ。報告者は討論会そのものの不毛性に問題を転嫁し、次のように発言している。

現代性が今日の作家に求めているのは政治教程よりも、芸術教程である。同志ヴォーリンの報告に関していえば、彼はピリニャーク「事件」で自分や「文学新聞」が成し遂げた功績に万歳するが、実際それは戦略上の過ちで、ピリニャークはかつてない名声を手にした。<sup>346</sup>

このようにシクロフスキイは「政治」から「芸術」に論点をすり替えることで「ピリニャーク事件」の火消しに奔走した。最後に登壇したのは「新世界」誌の編集長ポロンスキイであった。周知の通り、ポロンスキイはピリニャークが政治的過失を犯した後に評論「キングのいないチェス（ピリニャークについて）」を発表し、その巧みな二枚舌で四面楚歌の作家を支えた経歴がある。そうした振る舞いの結果、ピリニャークがポロンスキイの庇護下にあるのは誰の目にも明らかであった。そのポロンスキイは壇上で次のように発言している。

「文学新聞」はピリニャーク事件で出過ぎた真似をしている。ピリニャークが亡命ロシアに取り入る作品を意図的に書いて、ソビエト社会との断絶を選ぶはずがない。ピリニャークがソビエト文学にもたらした貢献は大きい。オストラシズムに身をゆだねてはならない。その逆に、この作家をソビエト文学のために何としても引き止める必要がある。<sup>347</sup>

---

<sup>345</sup>. Там же.

<sup>346</sup>. Там же.

<sup>347</sup>. Там же.

このようにポロンスキイは左派の言動を封じ込もうとしたが、会場からは次々と野次の声が上がった。「モスクワタ刊」に掲載されたクロニクルでは会場の雰囲気は以下のように伝えられている。

聴衆の大半には一つの確信が浮かんた。それはつまり、「新世界」誌の編集長はあの手  
この手でピリニャークの罪を和らげようとしたのだ。<sup>348</sup>

ポロンスキイによる擁護は功をなすどころか、自ら火の粉を浴びる羽目になった。討論会後の「モスクワタ刊」紙にはK・オルジェイニコフの評論「Вяч・ポロンスキイの煙幕」が発表され、その中で「新時代」誌の編集長は「有害な協調主義的態度を維持している」と名指しで批判、沈黙を強いられた。<sup>349</sup>

「ピリニャーク事件」は当事者のみならず、交流の深かった作家にも波及した。その例として、プラトーノフの名が挙げられる。ピリニャークは評論「社会的注文について作家は語る」(1929)で、プラトーノフの作品世界を高く評価すると同時に、「共作」の形でルポルタージュと戯曲を発表していた。<sup>350</sup>そしてこの経歴が災いとなり、プラトーノフは「ピリニャーク事件」に連座する形となった。1929年9月28日に「モスクワタ刊」紙から「社会主義の《中傷者》」と題されたB・ストレリニコワの評論が発表され、その中でプラトーノフは「ピリニャークの垂流」として定義され、厳しい批判が加えられた。<sup>351</sup>ストレリニコワが批判した作品の中には、ピリニャークと共作活動を開始する以前のものも含まれていることから、左派の評論家らは「ピリニャーク事件」を好機としてプラトーノフを政治的に教育しようとしたことが分かる。反ピリニャーク運動は文壇に限らず、広く芸術界にも波及した。その例として、「出版と革命」誌には評論「映画界におけるピリニャーク主義」が発表され、

---

<sup>348</sup>. Кут. А. Писатели и политграмота // Вечерняя Москва. 08. 10. 1929.

<sup>349</sup>. Оружейников К. Дымовая завеса Вяч. Полонского // Вечерняя Москва. 30. 11. 1929.

<sup>350</sup>. Пильняк Б.А. Писатели о социальном заказе // Печать и революция. 1929. Кн. 1. С. 70-71.

<sup>351</sup>. Стрельникова В. «Разоблачители социализма» — О подпильнячниках // Вечерняя Москва. 28. 09. 1929.

文化統制の波はソ連社会を飲み込んでいった。<sup>352</sup>

ピリニャークが事態の深刻さに震撼したのは想像に難くない。ピリニャークは「文学新聞」の編集部に公開書簡（9月2日）を送り付け、火消しに奔走した<sup>353</sup>。作家の主張によれば、ベルリンの出版社「ペトロポリス」からはソビエト文学を代表するK・フェージンやA・H・トルストイらの作品集が刊行されており、「ペトロポリス」との連携自体は「反ソ活動」に直結しない。また、『マホガニー』は未完成の作品で、当初から出版する意思はなく、『マホガニー』を書き換えて長編小説『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』としてソ連国内で出版する予定だったとも主張している。公開書簡によれば、作家は『マホガニー』の原稿を対外文化協会BOKCに送ったが、その後、出版するには未熟と判断し、対外文化協会に原稿の返却を求めた。しかし、対外文化協会は作者に確認をとることなく「ペトロポリス」に原稿を転送し、出版の運びになった。つまり、ピリニャークは『マホガニー』をベルリンで出版する意思はなかったということになる。しかし、ピリニャークが対外文化協会に送ったとされる原稿返却依頼の手紙は見つかっていないため、この主張にアーカイブ上の根拠はない。

この公開書簡には不明な点も多いが、ピリニャークは『マホガニー』に大幅な加筆を加え、長編小説『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』としてモスクワの出版社から1930年に出版した。『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』の執筆経緯は不明な点が多いが、一つ興味深い資料がある。それは「ピリニャーク事件」が始まる直前の「モスクワタ刊」紙（7月20日）に掲載された作家の動向記録である。この紙面では文壇を代表する作家たちへの取材結果が紹介されており、その欄には「ピリニャークが新しい長編の執筆を終えた」という記述がある。<sup>354</sup>つまり、この取材内容が正しければ、作家は『マホガニー』を執筆後にすぐさまその改作に取り掛かり、その作業を「ピリニャーク事件」が勃発する以前に終えていたことになる。さらに小説の脱稿した時期をピリニャークは1929年8月と記しており、「モスクワタ刊」が行った取材結果とほぼ合致する。そのため、『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』は「ピリニャーク事件」の勃発前に執筆が終了していたことになる。ここで浮上する疑問は、「ピリニャーク事件」後に作者は手元にあった『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』の原稿に修正を加えたかどうか

---

<sup>352</sup>. Пильняковщина в кинематографии // Печать и революция. 1929. Кн. 10. С. 124.

<sup>353</sup>. Пильняк Б.А. Письмо в редакцию // Литературная газета. 02. 09. 1929.

<sup>354</sup>. Среди писателей. Борис Пильняк закончил новый роман // Вечерняя Москва. 20. 07. 1929.

かである。スターリン宛の手紙（1931年1月）で詳述している通り、悪名高い作家との提携を嫌う出版社が多く、その原稿は長期間にわたって作者の手元に眠っていた。そのため、修正を加える余地は大いにあったと推測される。

興味深いことに『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』にはオリジナルと修正版の二つが存在する。オリジナルは海外で保管され、ソ連で初めて日の目を見たのは1989年（作品集『消されない月の物語』に収録）のことである。1930年にソ連で出版された版は削除・書き換えが施されたものである。この版は数十ページも削除されているほか、主人公の人物設定が部分的に書き換えられている。1930年版で主人公の息子は第一次世界大戦の前線でチフスにかかって命を落としたという記述があるが、オリジナルによれば、主人公の息子は内戦で白軍に殺害されたとある。こうした書き換えは、小説の原稿がピリニャークの手元に眠っていた際に生じたのではないかと考えられる。本論では1989年に発表されたオリジナルをもとに分析を進めていく。

『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』は十月革命から「偉大なる転換」までの間にピリニャークが取り組んできた様々な問題意識を総括する作品である。この長編小説は「ピリニャーク事件」という社会現象に対する作家の文学的応答であり、また「同伴者作家ピリニャーク」の活動を清算する書として編まれている。第一次五か年計画を取り扱ったこの長編小説は『裸の年』、『機械と狼』同様、それ以前の作品（『赤のソルモヴォ』、『中央黒土地帯』、『マホガニー』など）が部分的に切り貼りされた形で執筆されている。ただし、それまでの実験作品とは違い、『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』にはシナリオと呼べるものがあり、この作品は『裸の年』や『機械と狼』に代表されるアンチ・テキストから古典的な小説への回帰として読むことができる。

作品の中で重要な位置を占めるのは共産主義者と反革命分子の対立で、物語はこの対立を軸にして展開していく。こうした対立の根底には、ピリニャークが革命以降に葛藤を強いられてきた無数の対立項が流れている（モスクワとペテルブルグ、文化と文明、ナショナリズムとインターナショナル、始原力と機械、東洋と西洋、本能と理性など）。ピリニャークの心情が前者の東洋的なモスクワにあることは明らかだが、第一次五か年計画という「偉大なる転換」を迎えたソ連にあって、作家の世界観は革命に次ぐ大きな変容を強いられる。

物語は1929年のコロムナ市（モスクワ南部）を舞台に進行する。主人公はポレチカという共産主義者の技師で、その課題は始原力を克服し、社会主義国建設を成就に導くことである。技師は中央アジアから迫りくる砂漠化の脅威を前に、河川工事でオカ川とモスクワ川の

流れを変えて、モスクワを砂漠化から救うという壮大な計画を抱いている。ポレチカは工事計画の目的を次のように語る。

ロシアは常に西欧の前線基地、守護者だった。紀元三世紀から十五世紀までの歴史を振り返るといい。アジアから騎馬民族が襲撃してきただろう。それはアラン族、ゴート族、フン族など、あまたの騎馬民族だった〔中略〕我々はロシアの平原で彼らを自らの血肉で食い止めた〔中略〕そして我々は砂漠も食い止め、西欧を救済しよう。しかし、今度は血肉ではなく、知識でもって西欧を守るのだ。(IV:445)

引用から明らかな通り、中央アジアからモスクワへと押し寄せる砂漠化の波は大草原に群雄割拠した数々の騎馬民族を象徴している。そして共産主義者の技師たちが進める河川工事は、ヨーロッパ・ロシア（とりわけペテルブルグ）が中央アジアの騎馬民族に対して行ってきた抵抗と同義である。作品には、ポレチカとピョートル大帝を比較する場面があるが、こうした描写を通して作家は 1929 年の河川工事と十八世紀の西欧化を重ね合わせようとしている。工事計画を推し進めるポレチカの姿は次のように提示されている。

古いロシアと戦い、新たなロシアを建設する元帥然としてポレチカとサディコフは立ち尽くしていたが、その姿はピョートルがペテルブルグを闊歩するセローフ<sup>355</sup>の絵には似ていなかった。(IV:263)

ピリニャークはここでセローフの有名な作品を持ち出すことで、ポレチカの壮大な理念がピョートル大帝の始めた西欧化の延長線上にあることを仄めかしていると考えられる。

興味深いことに、『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』の文脈で「偉大なる転換」以前のモスクワとコロムナは西洋ではなく東洋として理解されており、作品の中でモスクワはアジア的な都市空間として描かれる傾向にある。以下、モスクワ市街地の描写である。

ジボジョルカは曲がりくねった細い通りで、袋小路や抜け道だらけ、耳をつんざく荷馬車が四六時中行き交い、ほこりっぽく、典型的なアジア的モスクワの通りだった。

---

<sup>355</sup> B・A・セローフ（1865-1911）はロシアの画家、数多くの肖像画を残した。

(IV:269)

作品の中で「直線的」なペテルブルグに対し、「曲がりくねった」モスクワはアジア的な都市として提示されている。そして、技師ポレチカの河川事業を通して「アジア的モスクワ」は合理化され、直線的で西欧的な都市空間へ変容していく。

モスクワ公国はモスクワ川の周囲に発達し、ルーシの大地を集めた封建領主、ツァーリ、<sup>スムータ</sup> <sup>インペラートル</sup> 皇 帝 のロシア史はモスクワ川とともにあったが、今やこのモスクワ川は逆方向に流れ出し、新生ロシアの国体を象徴していた〔中略〕このロシアは再創造し、〔中略〕モスクワ川の流れが折り曲げられ、オカ川がその流れを新しくしたように、古いロシアをへし折った。(IV:353)

ここでは新旧のロシアが印象的に描かれている。一方のロシアはピョートル大帝による西欧化以前のアジア的なロシアであり、その対極に位置するのが「偉大なる転換」を迎えたロシアである。後者のロシアは新たな国体を獲得し、モスクワ川が流れを変えたように、新たな歴史を歩み始める。そしてロシアを再編する大事業の中心に位置するのが技師ポレチカである。ではここからその人物像に迫っていこう。

ポレチカは帝政ロシアの時代から革命活動に身を投じたオールド・ボリシェビキで、社会主義国建設の理念に貫かれている。以下、ポレチカの描写である。

ピーメン・ポレチカ教授は自らの努力と知識によって、そして社会主義へと突き進む革命の意思を胸に、労働者のエネルギーと努力によってこの若い川の工事を推し進めていた。そしてそれは社会主義を実現するための戦いだった。というのも、人間の労働が自らの意志で川を作り替え、それらの川によって農奴制の残滓を洗い流し、友好と労働の新しい人間関係を建設することを社会主義とポレチカ教授は考えていたからである。

(IV:252)

アンチ・テキストを基本の創作手法とするピリニャーク作品には主人公がいいることが多いが、この作品には実に古典的な主人公が登場する。作品内でポレチカ教授の社会主義建設は極めて肯定的に描かれており、れっきとした「主人公」である。そして、その主人公の

人物像を追うほどに、作品の行間からはスターリンの影がにじみ出てくるのである。

つぶさに分析すると、ポレチカとスターリンの経歴は極めて類似していることに気づかれる。ポレチカ教授のファーストネームであるピーメンはギリシャ語で「牧童」を意味する言葉から生まれた名前であり、聖職者に与えられることが多いが、スターリンはグルジア政教の神学校に学んだ宗教的人間であった（その後、無神論者に転向）。そして両者ともオールド・ボリシェビキで、第一次ロシア革命前に共産党に入党、十月革命後には息子を前線で亡くしている。1930年版でポレチカの息子はチフスで命を落としたという設定に書き換えられているが、それはスターリンの姿をカモフラージュするために作家が試行錯誤した結果に違いない。作品に潜むスターリンの影は、こうした人物設定上の類似だけではない。作品中では「鋼鉄のロシア」という表現が頻繁に登場するが、こうしたレトリックで作家は「鋼鉄の男」を意味するスターリンの姿を行間に縫い込んでいったといえる。つまり、作品中で登場する「鋼鉄のロシア」は「スターリンのロシア」として読まれるべきものである。その典型的な例として、次のような描写を引用できる。

モスクワは一つのポスターに染まり、単一のスローガンを掲げ、幕僚と軍隊の号令で灰色がかった負け知らずな鋼鉄のロシアが突き進んでいた。(IV:458)

作品の中ではレーニンやトロツキイの名前は登場するが（1930年版でトロツキイに関する言及は削除）、スターリンの名前は認められない上に、温厚なポレチカと「鋼鉄の男」の間には性格上の類似性も認められない。しかし、ピリニャークは『消されない月の物語』の関連で政治的迫害を受けた経験があるため、スターリンの姿は慎重に描き込む必要に迫られていたと推測される。

このように、『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』は五か年計画を推し進める「鋼鉄の男」スターリンを主人公とした歴史小説として読むことができる。作品にはポレチカのほか、複数のオールド・ボリシェビキが登場する。彼らもまた「偉大なる転換」に伴うピリニャーク作品の変化を明らかにするうえで重要な役割を担っている。それがオーグネフ、オジョゴフ、ポドジョーゴフという革命家たちだが、その名前から明らかなおり、それぞれの苗字には「火」、「火傷」、「放火」を意味する「オゴーニ」、「オジョグ」、「ポドジョグ」が語幹にあり、いずれもピリニャークのスキタイ主義的革命観を体現している。スキタイ主義の中心にいたベールイの詩「祖国」（1917）もまた炎の始原力を革命の神髄として讃えた作品である。



鳴け、嵐の始原力

雷炎のなかで！

ロシア、ロシア、ロシア

狂え、そして私を焼き払え！<sup>356</sup>

共産主義者のポレチカとは違い、オールド・ポリシェビキはロシアの民衆文化に伝統的な「<sup>ユロージヴィ</sup>聖痴愚」として描かれているが、その口から放たれる奇天烈な台詞を通して作家は冷遇されてきた革命家たちの姿を読者に印象付ける。オールド・ポリシェビキは自分たちこそが「本当の共産主義者」だったと自負するが、ネップ期のロシアで冷遇され、地下室で乞食同然の生活を強いられる。彼らは戦時共産主義時代を次のように回想している。

俺は町で執行委員会の首席議長をやっていたんだ。21 年にはすべてがおじゃん、党から追放されてしまった。本当の共産主義者たちは町の中でも俺たちだけだったが、今はごらんのとおり、地下に潜伏する日々だ。(IV:342)

革命の嵐が過ぎ去ると、オールド・ポリシェビキは共産党から追放される。彼らは地下室で潜伏の日々を耐え忍ぶが、作品の最後ではダムが完成し、オールド・ポリシェビキはスターリンの新しい川に飲み込まれてしまう。この文脈でオールド・ポリシェビキの中にトロツキイの姿が認められるのは偶然ではない。作品の中でオールド・ポリシェビキが撲滅されるのは 1929 年と設定されているが、トロツキイがソ連から追放処分を受けたのは 1929 年 1 月で、ピリニャークが『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』を執筆していた時期に当たる。また、作品に登場するオールド・ポリシェビキはパルチザン部隊を指揮した経歴を持つが、トロツキイは周知のとおり赤軍の創始者である。さらに 1930 年版からはトロツキズムに関する言及が削除されている。実際に削除されているのは、次の台詞である。

聖書に登場する同志モーセを覚えているか。彼はユダヤ人をエジプトから連れ出した。彼はなかなか頭の切れる男だった。海の底を歩き、何もいないところからマナ<sup>357</sup>を作り、

---

<sup>356</sup>. Цит. по: Белый. Сочинения. Т. 1. С. 215.

<sup>357</sup>. マナは旧約聖書中の出エジプト記で描かれる食べ物。イスラエルの民が荒野で飢えた際、神

我々がトロツキズムに染まったように砂漠をさまよい、ソビエト会議を開き、シナイ山で十戒を受けた。40 年間、彼は自分の住居面積<sup>ジル・ブロシヤジ</sup>を探し求め、そのために戦った。そして約束の地にはたどり着かず、太陽を止める役はヨシュアに託した。(IV:375)

この台詞では旧約聖書のテキストとソ連の歴史が交差するように編まれている。エジプトとは帝政ロシアのことで、出エジプトからは革命であり、戦時共産主義からネップ期、そして「偉大なる転換」へと続く 1920 年代のソ連時代は「約束の地」を求めるユダヤ人の放浪と重なり合う。ピリニャークが旧約聖書を引用しているのは、トロツキイがユダヤ系ロシア人であったからであろう（トロツキイの本姓はブロンシュテイン）。『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』に落ちたトロツキイの影は評論家の目にもとまった。その例として、「ピリニャーク事件」の火付け役となった B・ヴォーリンは評論「文学における階級の敵が反撃する」で、オールド・ボリシェビキの中にトロツキイの姿を見ている。

共産主義者、本当の意味での共産主義者はこの「乞食」で、彼らは脱階級化されたのん兵衛で、地下室に巢食ったトロツキストで、「失われた共産主義」を嘆き悲しむ。<sup>358</sup>

文学者としても目覚ましい業績を残したトロツキイとピリニャークの親交は深く、革命直後の混乱したロシアでピリニャークが初期作品を次々と出版することができたのはトロツキイの援助があつてのことである。ピリニャークはトロツキイの冷遇に無関心ではいられなかったに違いない。その姿を「聖痴愚」にカモフラージュして、作品に登場させている。

では次に作者のピリニャークがモデルとなった登場人物の技師ポルトラクに目を転じた。この人物像は『赤のソルモヴォ』で描かれた作者ピリニャークがモデルになっている。先に見た通り、このルポルタージュでピリニャークは社会主義建設の機運が高揚するさまを強調すると同時に、難解な作品を執筆してきたことを謝罪した（「労働者階級には難しい作品を書きますな、同志ピリニャーク！——そして私は自分の罪を自覚する」）。そして『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』では社会主義への道を疾走するスターリンのロシアで孤立したピリニャークの姿が描かれている。ポルトラクの人物像からは革命後のピリニャークが経

---

がモーゼの祈りに応えて天から降らせた。

<sup>358</sup>. Книга и революция. 1929. № 18. С. 6.

験した葛藤が明らかになってくる。

ポルトラクは太古の歴史に関心を持ち、古えの民族が残した古墳や石器などを調査し、その文化保全を使命と考えている。作品の中でポルトラクの眼は「大草原で敵を注視していた騎馬民族の先祖から彼が受け継いだものだった」(IV:385)と描かれていることから、スキタイの末裔であることが読者に暗示される。<sup>359</sup>しかし、ポレチカが主導する河川工事計画では、ポルトラクが調査する地域一帯にはダム建設が予定されている。そこでポルトラクは騎馬民族の遺産を守るため、ダムの爆破を計画し、反革命の道を突き進む。しかし、そのダムとは、ロシアに生きる労働者の手で建設されたものである。スキタイという原初的なものを探求するあまり、労働者の築いたダムを爆破するという「反ソ活動」を前に、ポルトラクは苦悩する。

いつからだろう、彼はロシア的なものすべてに反抗していた。彼はロシアの労働者らが建造したダムを爆破しようとしているのだ。(IV:434)

ポルトラクはロシアの原初的な姿を追い求めるあまり、「現代性」から取り残され、反社会的存在と化していく。同様の自問自答をピリニャークもまた経験したのかもしれない。この台詞は、ピリニャークが『赤のソルモヴォ』で描いた生産者会議の個人的な体験が土台になっていると考えられる。ポルトラクはプロレタリアートのソ連に居場所を見出すことができず、「歴史の船」から追放されてしまう。

労働者に言われたよ。俺は必要ない存在だと。歴史の船から追い出されたんだ。血を流

---

<sup>359</sup> 作品に登場するスキタイの表象には同時代の評論家も着目していた。しかし、革命期のペトログラードに開花したスキタイ主義の歴史はスターリン時代前夜のソ連において遠い過去と化していた。その例として、B・アイヘンワリドは評論「B・ピリニャークの長編小説『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』について」で次のような疑問を提示する。「スキタイの石女を描いて、ピリニャークは何をいわんとするのか。共産主義者のリュボフィ・ピーメノヴァ（主人公ポレチカの娘——筆者注）はこうした石女を過ぎ去った時代とともに掘り返すのだが、その石女たちは実に表現豊かに描かれている」。Цит. по: Айхенвальд Б. О романе Б. Пильняка «Волга впадает в Каспийское море» // Красная Новь. 1931. №4. С. 184.

すことなくね！〔中略〕お前にはわからないか、ナデージダ、俺はあまりにロシア的人間で、ナショナリストで、ソロヴィヨフ<sup>360</sup>の弟子で、俺は自分のロシアのためなら命も惜しくないんだよ。（IV:335-336）

ポルトラクの探求心とは裏腹に、作品の中では「鋼鉄のロシア」を象徴する新しい川の誕生に伴い、ロシア的人間の日常と心理が書き換えられていく。その例として、ポレチカ主導の作業現場に集まった農民がプロレタリアートに成長していく描写が興味深い。

一枚岩の周りには季節労働者が数年間も生活しており、エドガー・イワーノヴィチ・ラスロ（反革命分子の一人——筆者注）は観察の中で、出稼ぎ労働者の日常と心理が熟練の労働者、プロレタリアートの日常と心理に変化していくのが分かった。〔中略〕彼らは赤の祭壇<sup>361</sup>や図書館、集会、映画館に集まり、仕事が終わると、ロシアのルバーシカ・シャツやポニョーワ・スカートを脱いで、西欧のワンピースに着替え、ベッドにはシーツを敷くようになった。（IV:393）

引用が示す通り、工事の進展とともにロシアの農民は西欧的なプロレタリアートに生まれ変わり、その生活様式も文明化されていく。しかし、その文明の母体となるのは精神性豊かなロシア文化ではなく、西欧から借用されたものに他ならない。「鋼鉄のロシア」の言語もまた根本的に変容するが、そこに「ピョートル以前のルーシ」の面影は全くない。以下、西欧化された都市の描写である。

映画館で映写機が急いで回されているかのように、ポルトラクの目には数百、数千のポスターが飛び込んできて、彼のロシアは視界から遠ざかった。「酒は飲むな」、「握手は禁止」、「要件は手短かに」、「どうぞを待たずに座れ」、「タバコを吸うな、唾を吐くな」、「十人以上は並ぶな」、「泥棒に気を付けろ」、「市民よ！ 代理店から罰金明細書をもらった際は、罰金の額が罰金手帳にも記載されているかどうかを確認したまえ！」

---

<sup>360</sup> 十九世紀末に絶大な影響を誇った宗教哲学者 Вл・ソロヴィヨフ。汎モンゴル主義をロシアで提唱し、ブロークやベールイなどのシンボリストに多大な影響を与えた。

<sup>361</sup> レーニンやスターリンの肖像画が置かれる部屋の隅のこと。

(IV:434-435)

このテキストは『裸の年』に登場するグレブ・オルディーニンの西欧批判と重なり合う。『裸の年』でグレブは西欧の機械文化を批判していたが、それによれば「西欧の芸術は絵画ではポスター、あるいは反抗的なヒステリー、文学では探偵物語、あるいは野蛮人の間を冒険する物語」(I:74)であった。

ポルトラクの生きるロシアもまた機械化していく。その結果、ポルトラクは自分のロシアを見失う(「ロシアはどこに行った? 我々はどこに来てしまった?」)。さらに『機械と狼』で描かれた「美しいマリア」が再び登場するが、その姿にかつての精彩は無い。マリアは技師にもてあそばれた挙句の果てに自殺する。その葬儀を目にしたポルトラクは母なるロシアの喪失に慟哭する。

あの女たち(葬儀の列席者——筆者注)が何を葬ったか、君にはわかるかい。彼女らが葬ったのはだな、我々だよ。君さ、僕さ、私たちの文化を葬っているんだよ!(IV:330)

このように「偉大なる転換」を迎えた「鋼鉄のロシア」はスキタイ文化を葬る。まさにピリニャークの逆行した革命観はここに破たんする。スキタイ主義は旧世界を破壊し、新世界の誕生を促進させる革命のロマンチズムであった。しかし、『飛翔するロシア』で見たとおり、同伴者作家ピリニャークもまた旧世界の存在であり、「新しい人間」ではなかった。革命はピオネールという「新しい人間」をロシアに生み落したが、新世界に同伴者作家ピリニャークの居場所は見当たらない。作中の言葉を借りれば、「ソドムを知る人間にイスラエルに居場所はない——約束の地に生きる資格は彼らにない」。(IV:375) 作品に登場する女性にはピリニャークの挫折感を生理的に表現している。

今は昔でいえば大齋期でしょう。冷凍の氷下魚<sup>こまゐ</sup>が売られていたの。市場からの帰り道、スミレの香りがふと鼻先をかすめたわ。とても素敵な香りだった。そこで香りのもとを探し始めたの。通りには誰もいなくて、凍えるほどの寒さよ。それに私は香水をつけてなかったし。財布のほうに顔を近づければ氷下魚のにおい、でも顔を上げるとスミレの香りがするの。ようやく香りのもとがわかったわ。露店に並ぶ氷下魚はスミレの香りに似てるのよ。氷下魚ってスミレの香りと同じなの。そういうことがよくあるものね。氷

下魚の臭いが春の香りにかわるの。でも、おうちについてわかったんだけど、魚は腐ってたわ。(IV:377)

これは作品に登場する女性の実にたわいない台詞だが、この生理的感覚こそピリニャークの革命観が遂げた変化の真骨頂と言えるに違いない。「真にロシア的な文化」を追い求めたピリニャークにとって十月革命はかぐわしいスミレのようだったが、その探求の果てにあったのは官僚主義と文化統制の迷路であり、ピリニャークの歴史哲学は欺かれた。そしてピリニャークはスキタイ主義のロマンチズムと決別する。その決別は遺書のように凝縮された言葉でつづられている。

歴史がありました。愛がありました。あとに残されたのは石でした。(IV:390)

スキタイという、ロシアの東洋を追い求めるピリニャークのロマン主義的な歴史哲学は「石」という無機質な表象にたどり着いた。ここにはもはや「文明の嘘」から解放されて歓喜する『裸の年』の登場人物たちの言葉は木霊しない。また、イワン・カラマーゾフが愛した「春先の粘っこい若葉」が生い茂ることもない。この作品に転がった石は、豊かな精神世界がかつて存在したことを示す歴史の残滓であり、また「貴重な人たちが眠る」文化の墓場でもある。「偉大なる転換」は同伴者作家ピリニャークにとってロシア文化の死とソビエト文明の誕生を意味した。ロシア文化の始原力は過ぎ去り、文明の時代が訪れたが、ピリニャークの言葉を借りれば、「ロシア的人間はロシアの始原力なしに生きることにはかなわない」(書簡集 I:405)。そして始原力にあふれるスキタイの文化を追い求めるポルトラクは作品の最後に射殺される。ピリニャークが「偉大なる転換」の前夜に用意した文学的自殺は、ロシアの民族文化を探求し続けたロマン主義者の不可避的な帰結だったといえるに違いない。第一次五か年計画を取り扱った大長編小説をピリニャークは文学的自殺という手段で締めくくった。現実には作家を待ち受けていた射殺はその8年後のことであった。

## 結論

本研究ではピリニャークが散文作家として本格的に活動を開始する 1915 年からスターリンの全体主義時代に突入する 1930 年の「偉大なる転換」までを取り扱い、ロシアの精神的再生を夢見た同伴者作家ピリニャークの挑戦と葛藤を分析した。

第一章で確認した通り、ピリニャークの作家人生は十月革命の歴史と密接に関連している。ピリニャークは十月革命、ならびに革命によって生まれた新たなロシア文化と世論を「生物的現象」と認識し、十月革命における共産主義の影響を否定し、「民衆の反乱」として十月革命を理解した。十月革命によって滅んだのはあくまで帝政ロシアの国体であり、ピリニャークはロシアの大地に生きることの重要性を亡命ロシアの作家たちに説いた。ピリニャークの革命観は作家が創作活動の初期から抱いていた大地信仰に根付いているが、有機的なものこそがピリニャークにとってはすべてであり、それは善悪の彼岸にある。

ピリニャークにとっての革命はロシアの原初的な文化を復権することであり、西欧文明に対する抵抗がその作品世界を特徴づけている。第一章第二節で確認した通り、革命後のソ連社会では『西洋の没落』が広く人口に膾炙し、シュペングラーの文明論は文壇にも大きな影響を与えたが、「西洋の没落」は同時に「東洋の夜明け」を引き起こすであろうと考えられていた。民族の原点を探ろうとするピリニャークの創作的探求心は、文化と文明の興亡を論じたシュペングラーの歴史哲学に支えられ、文壇の中で一つの大きな流れを為していった。

そうした中で革命期のペトログラードで興ったスキタイ主義がピリニャークに与えた影響は決定的であった。第二章で確認した通り、ピリニャークはペトログラードの「スキタイ人」に倣って独自の無政府主義的な作品世界をはぐくみ、アンチ・ペテルブルグ・テキストとも呼ばれる数々の作品を発表した。その中ではピョートル大帝による西欧化と中世ロシアの美学が対置され、前者をロシア史の過ちとして提示している。ピリニャークは革命を契機として西欧的ではないロシア、アジア的なロシアの探求に乗り出し、文壇で大きな波紋を呼んだ。

ただし、ピリニャークの革命観はネップというロシア史の新たな段階を迎えて大きく変化した。作家は「ピョートル以前のルーシ」が鋼鉄のロシアに生まれ変わる歴史の動きを感じ、プロレタリアートの誕生をロシア史が迎えるべき必然の過程と考えた。作家の歴史哲学は過去を志向する逆行的な運動から、未来と過去、ソ連と中世ロシア、西洋と東洋の間を揺

らぐ振り子の運動へと移行していく。まさにこの振り子のような運動が結晶したものこそ葛藤の文学『機械と狼』である。第三章で確認した通り、ネップ期のピリニャークにとって、革命は脱西欧化を通したロシアの新たな民族文化ではなく、ソビエト文明の始まりとして受容され始め、それは同時に左翼芸術への接近にもつながった。ピリニャークはスキタイ主義の文明破壊賛美から身を引いて「共産主義」的視座の獲得へ向けて歩みだし、その運動は『飛翔するロシア』というルポルタージュに結晶した。『機械と狼』から『飛翔するロシア』への移行は、同伴者作家からプロレタリア作家への着実な転向に他ならない。さらに、ソ連社会に誕生したピオネールという「新しい人間」との接触を通してピリニャークには旧世界の人間としての自意識が芽生えたことは重要である。スキタイ主義は旧世界の破壊を賛美したが、自らもまた旧世界の人間であることに思い当たるのである。そしてこの意識はその後も作家の脳裏にあり続け、その後の大長編小説『ヴォルガはカスピ海に注ぐ』に受け継がれた。

しかし、ピリニャークの中で機械のロマンチズムは長続きしなかった。第三章第二節で確認した通り、作家は再び「機械」と「狼」の間を振り子のように揺れ動き、十月革命が辿る運命の探究を自らの使命として課す。まさにその探求の過程でピリニャークのまなざしは「日出づる国」日本に向けられた。ピリニャークは民族の歴史において決定的な役割を果たすのは物質文化ではなく、精神文化であることを日本で確認し、その文化は始原力の非合理的な原理から生じるというスキタイ主義の文化論に回帰していった。地震という始原力を出発点とした日本文化論は、その源流をたどれば第二章第二節で確認したブロークの評論「文化と始原力」にたどり着くものであり、ピリニャークの「機械」と「狼」の間を揺れ動く振り子の運動は『日本印象記』などの紀行文にも継承されたことがわかる。

作家は日本の近代化を通して始原力の重要性にソ連読者の目を向けさせようとしたが、来日中に祖国で発表された『消されない月の物語』はソ連社会を揺るがす事態となった。1928年にピリニャークが発表したルポルタージュ『赤のソルモヴォ』は政治的過ちを償うために執筆された感は否めない。『赤のソルモヴォ』では労働者とピリニャークの会話が数多く取り入れられているが、ピリニャークはプロレタリアートの活躍を描くと同時に、インテリゲンツィヤの孤独を浮き彫りにした。ピリニャークは体制賛美のルポルタージュを執筆し、ソビエト社会を前に謝罪したが、それは「偉大なる転換」に伴う一大論争の序曲であった。



「偉大なる転換」前夜のモスクワではピリニャークをはじめとする同伴者文学と、文壇の左派が熾烈な論争を繰り広げた。国家的な文化統制の波が文壇に押し寄せ、ピリニャークを始めとする同伴者作家には「階級の敵」というレッテルが用意された。ピリニャークの歴史観は時代の流れに逆行し、それは社会全体を巻き込んだ論争へとつながっていった。

そしてこの論争を通して、ピリニャークは『ヴォルガ川はカスピ海にそそぐ』という大長編小説を執筆し、ソビエト社会に対する態度を明示するが、それは文学的自殺という道だった。ピリニャークの民族的な「ロシア」はスターリンによって文明化され、ロシア文化は葬られてしまった。ロシア文化の始原力は過ぎ去り、文明の時代が訪れたが、ピリニャークの言葉を借りれば、「ロシア的人間はロシアの始原力なしに生きることがかなわない」（書簡Ⅰ:405）。ピリニャークが「偉大なる転換」の前夜に用意した文学的自殺は、ロシアの民族文化を探究し続けたロマン主義者の不可避的な帰結だったといえるに違いない。

## 参考文献

1. *Абдуразакова Е.* Тема Востока в творчестве Бориса Пильняка. дис. ... канд. филол. наук (спец. 10.01.01). Владивосток, 2005.
2. *Авербах Л.* О современной литературе // На литературном посту. 1928. № 11-12. С. 5-19.
3. *Агурский М.С.* Идеология национал-большевизма. М., 2003.
4. *Айхенвальд Б.* О романе Б. Пильняка «Волга впадает в Каспийское море» // Красная Новь. 1931. №4. С. 177-186.
5. *Андроникашвили-Пильняк Б.Б.* О моем отце: Послесловие // Дружба народов. 1989. №1. С. 147-155
6. *Андроникашвили-Пильняк Б.Б.* Два изгоя, два мученика: Борис Пильняк и Евгений Замятин // Знамя. 1994. № 9. С. 123-153.
7. *Андроникашвили-Пильняк Б.Б.* «Детские годы... оставляют на всю жизнь отпечатки...» // Литературное обозрение. 1996. № 5-6. С. 117-127.
8. *Анисимов И.* Горький и советские писатели: неизданная переписка. М., 1963.
9. *Аннинский Л.А.* Запад и Восток в творчестве Андрея Платонова // Народ Азии и Африки. 1967. № 4. С. 103-115.
10. *Артамошин С. О.* Шпенглер и «консервативная революция» в Германии // Вопросы истории. 2009. № 6. С. 148-154.
11. *Артюхин Н.* «Волга впадает в Каспийское море» // На литературном посту. 1930. № 13-14. С. 103-108.
12. *Асеев Н.* Ключ сюжета // Печать и революция. 1925. Кн. 7. С. 67-88.
13. *Ауэр А.П.* С.Есенин и Б.Пильняк (К истории творческих взаимоотношений) // С.А.Есенин: проблемы творчества, связи. Рязань, 1995. С. 59-65.
14. *Ауэр А.П.* Русская литература XIX века: Традиция и поэтика. Коломна, 2008.

15. *Ашукин Н.* Заметки о виденном и слышанном // НЛО. № 32. С. 173-196.
16. *Ашукин Н.* Заметки о виденном и слышанном // НЛО. № 33. С. 223-262.
17. *Базаров В. О.* Шпенглер и его критики // Красная Новь. 1922. № 2. С. 212-231.
18. *Беккер М.* Проблема художественного очерка // На литературном посту. 1929. № 13. С. 53-59.
19. *Белая Г. и др.* (сост.) Воспоминания об Илье Эренбурге. М., 1975.
20. *Белая Г.* Закономерности стилевого развития советской прозы двадцатых годов. М., 1977.
21. *Гелая Г.* Литература в зеркале критики. М., 1986.
22. *Белая Г.* Опыт неосознанного поражения: модели революционной культуры 20-х годов. М., 2001.
23. *Белая Г.* Дон-Кихоты 20-х годов: «Перевал» и судьба его идей. М., 1989.
24. *Белая Г.А.* Дон Кихоты революции – опыт побед и поражений. 2-е изд., доп. М., 2004.
25. *Белоус В.Г.* Вольфила [Петроградская Вольная Философская Ассоциация]: 1919-1924. Кн. 1. М., 2005.
26. *Белоус В.Г.* Вольфила [Петроградская Вольная Философская Ассоциация]: 1919-1924. Кн. 2. М., 2005.
27. *Белоус В.Г.* Вольфила, или Кризис культуры в зеркале общественного самосознания. СПб., 2007.
28. *Белоус В.Г.* Иванов-Разумник: Личность, творчество, роль в культуре. СПб., 1996.
29. *Белоус В.Г.* (ред.) Иванов-Разумник: Личность, творчество, роль в культуре. Вып. II. СПб., 1998.
30. *Белый А.* Сочинения в 2 т. М., 1990.
31. *Белый А.* Собрание сочинений. Воспоминания о Блоке. М., 1995.
32. *Берберова Н.Н.* Курсив мой: Автобиография. М., 2011.

33. *Бердяев Н.А.* Судьба России. М., 1990.
34. *Бердяев Н.А.* Смысл истории: Опыт философии человеческой судьбы. Париж, 1969.
35. *Блок А.А.* Дневник. М., 1989.
36. *Блок А.А.* Собрание сочинений в 6 т. М.-Л., 1983.
37. *Бодрова А.А.* Горький и Восточная коллегия «Всемирной литературы» // Советское востоковедение. 1958. № 5. С. 124-127.
38. *Браун Я.* Нигилисты и циники (О творчестве Бориса Пильняка) // Сибирские огни. 1923. Кн. 1-2. С. 225-233.
39. *Быков Л.П. (сост.)* Мой Есенин: Воспоминания современников. Екатеринбург, 2008.
40. *Варидн И.* Воронщину необходимо ликвидировать: О политике и литературе // На посту. 1924. № 4. С. 9-36.
41. *Вельмтан С.Л.* Литературные отклики (Восток в изображении Б. Пильняка, С. Третьякова и др.) // Новый Восток. 1927. № 19. С. 214-221.
42. *Вельмтан С.Л.* Литературные отклики. Экзотика и быт // Новый Восток. 1928. № 22. С. 240-248.
43. *Вешнев В.* Товарищ Сосновский и гражданин Пильняк // Молодая гвардия. 1924. № 9. С. 175-180.
44. *Виноградов В.* О теории литературных стилей // О языке художественной прозы. М., 1980.
45. *Владиславлев И.* Литература великого десятилетия 1917-1927. М.-Л., 1928.
46. *Водопьянова З.К. (отв. сост.)* Между молотом и наковальней. Союз советских писателей СССР. Документы и комментарии. Т. 1. 1925 – июнь 1941 гг. М., 2011.
47. *Воронская Г.* Воспоминания // Время и мы. № 116. 1992. С. 235-266.
48. *Воронский А.* Искусство видеть мир: Портреты. Статьи. М., 1987.

49. *Воронский А.* О том, чего у нас нет // Красная Новь. 1925. Кн. 10. С. 254-265.
50. *Воронский А.* Встречи и беседы с Максим Горьким // Новый мир. 1966. №6. С. 215-219.
51. *Вышеславцев Б.П.* Закат Европы (Об Освальде Шпенглере) // Социология. 2007. №1. С. 227-234.
52. *Вышеславцев Б.П.* Русская стихия у Достоевского // Ф.М. Достоевский. Бесы. Роман в трех частях; «Бесы»: Антология русской критики. М., 1996. С. 587-606.
53. *Галушкин А.Ю. (отв. ред.)* Литературная жизнь России 1920-х годов. События. Отзывы современников. Библиография. Т. 1. Ч. 1-2. Москва и Петроград. 1917-1920 гг. М., 2006.
54. *Гари Керн.* Л.Лунц и Серапионовы братья // Новый журнал. 1966. №82. С. 137-193.
55. *Геллер М.* Мнимое счастье в мнимой Москве // Поиски в инаком. Фантастика и русская литература XX века. М., 1994.
56. *Горбачев Г.* На переломе (эволюция русской литературы за 1924 – 1925 г.) // Звезда. 1926. № 1. С. 211-240.
57. *Горький М.* Материалы и исследования: Публицистика М. Горького в контексте истории. Вып. 8. М., 2007.
58. *Григорьев Я.* Кризис «старых» попутчиков // На литературном посту. 1927. № 20. С. 27-32.
59. *Григорьева Л.П.* Возвращенная классика (Из истории советской прозы 20-30-х годов). Л., 1990. С. 21-27.
60. *Грознова Н.А.* Ранняя советская проза 1917-1925. Л., 1976.
61. *Прокушев Ю.Л. (ред.)* Воспоминания о Сергее Есенине. М., 1965.
62. *Громова-Опульская Л.Д. (отв. ред.)* Восток в русской литературе XVIII – начала XX века. Знакомство. Переводы. Восприятие. М., 2004.
63. *Грякалова Н.Ю.* Человек модерна: Биография – рефлексия – письмо. СПб., 2008.

64. *Грякалова Н.Ю.* Борис Пильняк: Антиномии мира и творчества // Пути и миражи русской культуры / Под ред. В.Е. Банга. СПб., 1994. С. 264-282.
65. *Грякалова Н.Ю.* Бессюжетная проза Бориса Пильняка 1910-х – начала 1920-х годов (генезис и повествовательные особенности) // Русская литература. 1998. №4. С. 14-38.
66. *Губер П.К.* Борис Пильняк // Летопись Дома литераторов. 1921. № 4. С. 3-5.
67. *Гура В.* Роман и революция: Пути советского романа 1917-1929. М., 1973.
68. *Дикушина Н., и др.* «Может быть, позже многое станет более очевидным и ясным» (Из документов «Партийного дела А.К.Воронского») // Вопросы литературы. 1995. № 3. С. 269-292.
69. *Динерштейн Е.А.* Политбюро в роли верховного цензора // НЛО. 1998. № 32. С. 391-397.
70. *Динерштейн Е.А.* А.К. Воронский: В поисках живой воды. М., 2001.
71. *Жирмунский В.* О ритмической прозе // Русская литература. 1966. №4. С. 107-114.
72. *Зайдельсон Е.* По следам письма Бориса Пильняка // Таллинн. 1989. № 5. С. 113-118.
73. *Замятин Е.* Сочинения. М., 1988.
74. *Зонин А.* Надо перепахать (О литературном отделе “Красной Нови”) // На посту. 1923. № 2. С. 213-224.
75. *Иванова И.* Александр Блок: последние годы жизни. СПб., 2012.
76. *Исаева Т.И.* Если в сердце посылают пулю // Исторический архив. 1997. № 1. С. 69-114.
77. *Исаев И.А.* Пути Евразии: Русская интеллигенция и судьбы России. М., 1992.
78. *Казанский Б.В. и др. (ред.)* Борис Пильняк: Мастера современной литературы. Л., 1928.

79. *Казнина О.А. (отв. ред.) В поисках новой идеологии: Социокультурные аспекты русского литературного процесса 1920-1930-х годов.* М., 2010.
80. *Казнина О.А. Русские в Англии: Русская эмиграция в контексте русско-английских литературных связей в первой половине XX века.* М., 1997.
81. *Карохин Л. Сергей Есенин и Иванов-Разумник: «Человек, перед которым я не лгал...».* СПб., 1998.
82. *Кёко Нумано. Пильняк и Япония // Русская литература и Восточная Азия / Под ред. Мицуюэси Нумано и др. Токио-Сеул-Гонконг-Москва, 2011. С. 25-35.*
83. *Коган П.С. Борис Пильняк // Новый мир. 1925. № 11. С. 108-119.*
84. *Коган П. Литература этих лет: 1917-1923 гг. Иваново-Вознесенск, 1925.*
85. *Коган П. Литература великого десятилетия.* М., 1927.
86. *Кожевникова Н.А. Из наблюдений над неклассической («орнаментальной») прозой // Известия: серия литературы и языка. Т. 35. №1. 1976. С. 55-66.*
87. *Кресина Л.М. и др. (сост.) Издание художественной литературы в РСФСР в 1919-1924 гг.: Путеводитель по Фонду Госиздата.* М., 2009.
88. *Кригер В. Рейн – Волга – Иртыш: из истории немцев Центральной Азии.* Алматы, 2006.
89. *Крючков В.П. Почему луна «погашенная»? (о символике «Повести непогашенной луны» Б.Пильняка) // Русская литература. 1993. № 3. С. 121-127.*
90. *Крюкова А.М. (сост.) Переписка А.Н. Толстого в 2 т.* М., 1989.
91. *Кузнецов М. Социалистический реализм и модернизм // Новый мир. 1963. № 8. С. 220-245.*
92. *Кузьмич Л. Борис Пильняк и его роман «Голый год» // Грани. 1970. № 76. С. 115-127.*
93. *Кушлина О. Заслуженно незабытый // Памир. 1990. № 8. С. 174-185.*

94. *Исаев И.А. (сост.) Пути Евразии. Русская интеллигенция и судьбы России.* М., 1992.
95. *Лавров А.В. Этюды о Блоке.* СПб., 2000.
96. *Лавров В.А. Петербургский текст: Из истории русской литературы 20-30-х годов XX века.* СПб., 1996.
97. *Латынина А. «Я уже отдал приказ...»: «Повесть непогашенной луны» Бориса Пильняка как явление социальной прогностики // Литературное обозрение.* 1988. № 5. С. 13-15.
98. *Лапшин И. Умирание искусства // Воля России.* 1924. № 16-17. С. 140-150.
99. *Лекманов О. и др. Сергей Есенин: биография.* М., 2011.
100. *Леонтьев Я.В. «Скифы» русской революции. Партия левых эсеров и ее литературные попутчики.* М., 2007.
101. *Лерс Я. Творчество Бор. Пильняка, как зарождение художественной идеологии новой буржуазии // На посту.* 1926. № 7-8. С. 21-28.
102. *Лунц Л.Н. Литературное наследие.* М., 2007.
103. *Львов-Рогачевский В. Новейшая русская литература.* 1924. Изд. 3-е. М.-Л., 1924.
104. *Мазаев А.И. Искусство и большевизм (1920-1930-е гг.): Проблемно-тематические очерки и портреты.* Изд. 2-е. М., 2007.
105. *Макаров В.Г. и др. Высылка вместо расстрела. Депортация интеллигенции в жлкументах ВЧК – ГПУ. 1921-1923.* М., 2005.
106. *Минц З.Г. Александр Блок и русские писатели.* СПб., 2000.
107. *Михеева М. ««Дураки на периферии»: Платонов / Пильняк – насколько % ? (Подход к теме взаимопроницаемости идиостилей)» // «Страна философов» Андрея Платонова: Проблемы творчества. Вып. 7.* М., 2011. С. 26-36.
108. *Молодяков В. В поисках «корней солнца» // Проблемы Дальнего Востока.* 1989. № 6. С. 201-207.



109. *Мочульский К.* Александр Блок. Париж, 1948.
110. *Немчинов В.* Эстетическая теория общества // Сибирские огни. 1923. Кн. 1-2. С. 148-168.
111. *Павлова О.А.* Русская литературная утопия 1900 – 19200-х гг. в контексте отечественной культуры. Волгоград., 2005.
112. *Палей А.Р.* Литературные портреты. М., 1928. С. 33-36.
113. *Палиевский П.* Литература и теория. Изд. 2-е, доп. М., 1978.
114. *Панфилов А.Ю.* Неизвестные страницы творческой биографии М.А. Булгакова 1920-х годов. М., 2009.
115. *Петелин В.* Художник и диктат времени // Михаил Булгаков. Собрание сочинений в 10 т. М., 1999. Т. 8. С. 5-56.
116. *Пильняк Б.А.* Былье. München, 1970.
117. *Пильняк Б.А.* Исследования и материалы / Под ред. Г.В. Красинова. Вып. 1. Коломна, 1991.
118. *Пильняк Б.А.* Исследования и материалы / Под ред. А.П. Ауэра. Вып. 2. Коломна, 1997.
119. *Пильняк Б.А.* Исследования и материалы / Под ред. А.П. Ауэра. Вып. 3-4. Коломна, 2001.
120. *Пильняк Б.А.* Исследования и материалы / Под ред. А.П. Ауэра. Вып. 5. Коломна, 2007.
121. *Пильняк Б.А.* Исследования и материалы / Под ред. А.П. Ауэра. Вып. 6. Коломна, 2011.
122. *Пильняк Б.А.* Собрание сочинений в 6 т. М., 2003.
123. *Пильняк Б.А.* Расплеснутое время: Романы, повести, рассказы. М., 1990.
124. *Пильняк Б.А.* Романы. М., 1990.
125. *Пильняк Б.А.* Третья столица: Повести и рассказы. М., 1992.

126. *Пильняк Б.А.* Целая жизнь: Избранная проза. Минск, 1988.
127. *Пильняк Б.А.* Борис Пильняк: Опыт сегодняшнего прочтения. М., 1995.
128. *Пильняк Б.А.* Б. А. Пильняк. Исследования и материал. Коломна, 1991.
129. *Платонов А.* (сост. Корниенко Н.В., и др.) Воспоминания современников: Материалы к биографии. М., 1994.
130. *Плужникова Т.И.* Выражение художественного времени языковыми средствами в романе А.Н. Толстого «Аэлита» // Вопросы русской литературы. 1985. Вып. 46. С. 67-73.
131. *Полонский Вяч.* О современной литературе. Изд. 2-е, испр. и доп. Гаага, 1967.
132. *Полонский Вяч.* О литературе. М., 1988.
133. *Правдухин В.П.* Пафос современности и молодые писатели // Сибирские огни. 1922. Кн. 4. С. 147-160.
134. *Правдухин В.П.* Литература о революции и революционная литература // Сибирские огни. 1923. Кн. 1-2. С. 203-224.
135. *Правдухин В.П.* Художественная литература за семь лет (Проза 1918 – 1924 г.г.) // Сибирские огни. 1924. Кн. 5. С. 213-227.
136. *Примочкина Н.Н.* Горький и писатели русского зарубежья. М., 2003.
137. *Примочкина Н.Н.* Писатель и власть. М., 1998.
138. *Ройзман М.Д.* «Вольнодумец» Есенина // Воспоминания о Сергее Есенине / Под ред. Ю.Л. Прокушева. М., 1965. С. 254-267.
139. *Пятаков Г.* Философия современного империализма (этюды о Шпенглере) // Красная Новь. 1922. № 6. С. 182-197.
140. *Свиридова Г.Г. (ред.)* Японские писатели о Стране Советов. Л., 1987.
141. *Сергеев В.* О «нашевашенцах» // Воля России. 1922. № 21. С. 19-22.

142. *Ситникова Е.П.* О романе А.Н. Толстого «Аэлиа» (Идеологический резонанс в критике после выхода книги) // Вопросы русской литературы. 1972. Вып. 19. С. 16-22.
143. *Слоним М.* Литература и Революция // Воля России. 1922. № 16. С. 9-11.
144. *Слонимский М.* Завтра. Проза. Воспоминания. Л., 1987.
145. *Степун Ф.А. и др.* Освальд Шпенглер и Закат Европы. М., 1922.
146. *Соболев Б.* О птицах мертвых и живых // Журналист. 1922. № 1. С. 36-40.
147. *Солженицын А.* "Голый год" Бориса Пильняка // Новый мир. 1997. №1. С. 195-203.
148. *Сорокин П.А.* Российская шпенглериана: Начало великой ревизии // Социология. 2007. №1. С. 211-226.
149. *Сорокина В.В.* Русский Берлин. М., 2003.
150. *Спиридонова Л.А.* М. Горький: Диалог с историей. М., 1994.
151. *Спиридонова Л.А. (отв. ред.)* Концепция мира и человека в творчестве М. Горького. Вып. 9. М., 2009. С. 43-44.
152. *Струве Г.* Русская литература в изгнании: Опыт исторического обзора зарубежной литературы. Париж-М., 1996.
153. *Тиме Г.А.* Путешествие Москва – Берлин – Москва. Русский взгляд Другого (1919-1939). М., 2011.
154. *Толстая Е.* Мирпослеконца: работы о русской литературе XX века. М., 2002.
155. *Толстой А.Н.* Собрание сочинений в 10 т. М., 1958.
156. *Томашевский Б.* Русское стихосложение. Wilhelm Fink Verlag, 1971.
157. *Тревес К.* Закат Европы // Воля России. 1923. № 4. С. 52-59.
158. *Трифонов Н. А.В.* Луначарский и советская литература. М., 1974.
159. *Троцкий Л. Д.* Литература и революция. М., 1991.
160. *Трубецкой Н.С.* История. Культура. Язык. М., 1995.
161. *Тынянов Ю.* Поэтика. История литературы. Кино. М., 1977.

162. *Чугунова Е.Е.* «Океан – мое сердце...» (к вопросу о триаде «Блок – Вагнер – Ницше») // Александр Блок: Исследования и материалы / Под ред. Н.Ю. Грякаловой. СПб., 2011. С. 163-193.
163. *Чудакова М.* Жизнеописание Михаила Булгакова. М., 1988.
164. *Чуковский К.* Собрание сочинений в 15 т. М., 2001.
165. *Фарбер Л.* Два Советская литература первых лет революции: 1917-1920гг. М., 1966.
166. *Флейшман Л. и др.* Русский Берлин 1921-1923. Париж, 1983.
167. *Фельдман Д.М.* Салон-предприятие: Писательское объединение и кооперативное издательство «Никитинские субботники» в контексте литературного процесса 1920-1930-х годов. М., 1998.
168. *Фрезинский Б.* Литературная почта Карла Радека // Вопросы литературы. 1998. № 3. С. 278-316.
169. *Шайтанов И.О.* Метафоры Бориса Пильняка, или История в лунном свете // Пильняк Б.А. Повести и рассказы. 1915-1929. М., 1991. С. 5-36.
170. *Шайтанов И.О.* О двух именах и об одном десятилетии // Литературное обозрение. 1991. № 6. С. 19-25.
171. *Шайтанов И.О.* О двух именах и об одном десятилетии // Литературное обозрение. 1991. № 7. С. 4-11.
172. *Шапошников Л.Е. и др.* Русская историософия: избранные школы и персоналии. СПб., 2014.
173. *Шкловский В.Б.* Гамбургский счет: Статьи – воспоминания – эссе (1914-1933). М., 1990.
174. *Штейнберг А.* Друзья моих ранних лет (1911-1928). Париж, 1991.
175. *Шпенглер О.* Политические произведения / Пер. с нем. В.В.Афанасьева. М., 2009.
176. *Шпенглер О.* Пруссачество и социализм / Пер. с нем. Г.Д. Гурвича. М., 2002.

- 177.Шубникова-Гусева Н.И. (сост. и общ. ред.) Сергей Есенин в стихах и жизни: Воспоминания современников. М., 1995.
- 178.Щербина В. Из истории советской литературы 1920-1930-х годов: новые материалы и исследования. М, 1983.
- 179.Эйхенбаум Б. О литературе. М., 1987.
- 180.Эльсберг Ж. Настроения современной интеллигенции в отражении художественной литературы // На литературном посту. 1929. №. 2. С. 19-31.
- 181.Эльсберг Ж. Настроения современной интеллигенции в отражении художественной литературы // На литературном посту. 1929. №. 3. С. 36-46.
- 182.Энеева Н.Т. (отв. ред.) Проблемы истории Русского зарубежья: материалы и исследования. Вып. 1. М., 2005.
- 183.Эренбург И.Г. Люди, годы, жизнь: Воспоминания в 3 т. Изд. исп. и допол. М., 1990.
- 184.Эренбург И.Г. Собрание сочинений в 8 т. М., 1990.
- 185.Browning G, *Russian Literature*. XVI. 1984.
- 186.Edward J. Brown, *Russian literature since the revolution* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1982).
- 187.Jensen P, *Nature as Code: The achievement of Boris Pilnyak 1915-1924* (Copenhagen, 1979).
- 188.Kuzmich L, *Language and stylistic characteristics of Boris Pilnyak's novel "Naked year"* (Michigan, 1967).
- 189.Mary A. Nicholas, "Pil'niak on Writing", *The Slavonic and East European Review*, 1993, Vol. 71, №. 2, pp. 217-233.
- 190.Philip Maloney, "Anarchism and Bolshevism In the Works of Boris Pilnyak", *The Russian Review*, 1973, Vol. 32, №. 1, pp. 43-53.
- 191.アルカージー・ゲルマン、その他（鈴木健夫、半谷史郎訳）『ヴォルガ・ドイツ人——知られざるロシアの歴史』彩流社、2008 年。

- 192.エドワード・バールィシェフ「第一次世界大戦期における日露接近の背景：文明論を中心として」『スラヴ研究』2005年、52号、205-240頁。
- 193.大石雅彦「カオスモスあるいはコーラとしての『裸の年』」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第9集、1982年。
- 194.オスワルド・シュペングラー（村松正俊訳）『西洋の没落：世界史の形態学の素描』林書店、1967年。
- 195.栗生沢猛夫『タタールのくびき——ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会、2007年。
- 196.郡伸哉「ロシア語の СТИХИЯ(始原力)——ロシア人の人間観・言語観をのぞく窓——」『類型学研究』2005年、第1号、135-166頁。
- 197.白石治朗『ロシアの神々と民間信仰：ロシア宗教社会史序説』彩流社、1997年。
- 198.セルゲイ・レヴィーツキイ（高野雅之訳）『ロシア精神史』早稲田大学出版部、1994年。
- 199.土肥恒之『ピョートル大帝とその時代』中公新書、1992年。
- 200.中村喜和、トマス・ライマー（編）『ロシア文化と日本』彩流社、1995年。
- 201.中村喜和『ロシアの風——日露交流二百年を旅する』風行社、2001年。
- 202.沼野恭子『夢のありか：「未来の後」のロシア文学』作品社、2007年。
- 203.昇曙夢『革命後のロシア文学』改造社、1928年。
- 204.坂内徳明『ロシア文化の基層』日本エディタースクール出版部、1991年。
- 205.廣岡正久『ソヴィエト政治と宗教——呪縛された社会主義——』未来社、1988年。
- 206.ボリス・ソコロフ（齊藤紘一訳）『スターリンと芸術家たち』鳥影社、2007年。
- 207.マーク・スローニム（池田健太郎、中村喜和訳）『ソビエト文学史』新潮社、1976年。
- 208.山本俊朗（編）『スラヴ世界とその周辺』ナウカ、1992年。
- 209.米川正夫「日本へ来たピリニヤークの印象」『現代随筆全集』金星堂、第六巻、1936年、336-341頁。
- 210.米川正夫『鈍・根・才 米川正夫自伝』日本図書センター、1997年。

211.米川文子「ピリニヤークの家庭」『月刊ロシヤ』日蘇通信社、創刊号、1935 年、81-90 頁。